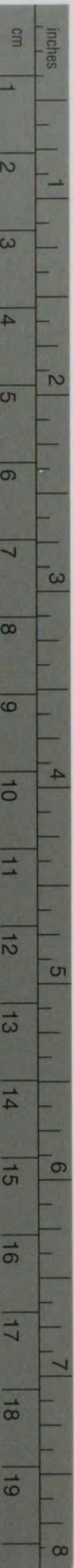


# Kodak Gray Scale



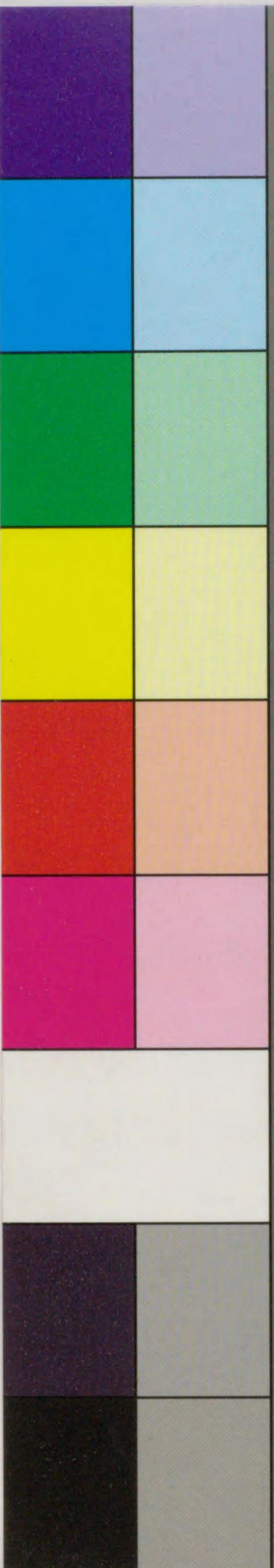
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

202  
420

202-420  
\*1200901407670\*

Handwritten text in a rectangular frame on the left side of the book cover, including characters like '天', '地', '火'.





202  
420

天

中

圍

會

棋

圍棋神髓

火



名人本因坊秀哉博選

圍棋神髓

布石法

十四子局  
十五局

大正  
5. 8. 17  
丙寅



名人本因坊秀哉講述

圍棋神髓

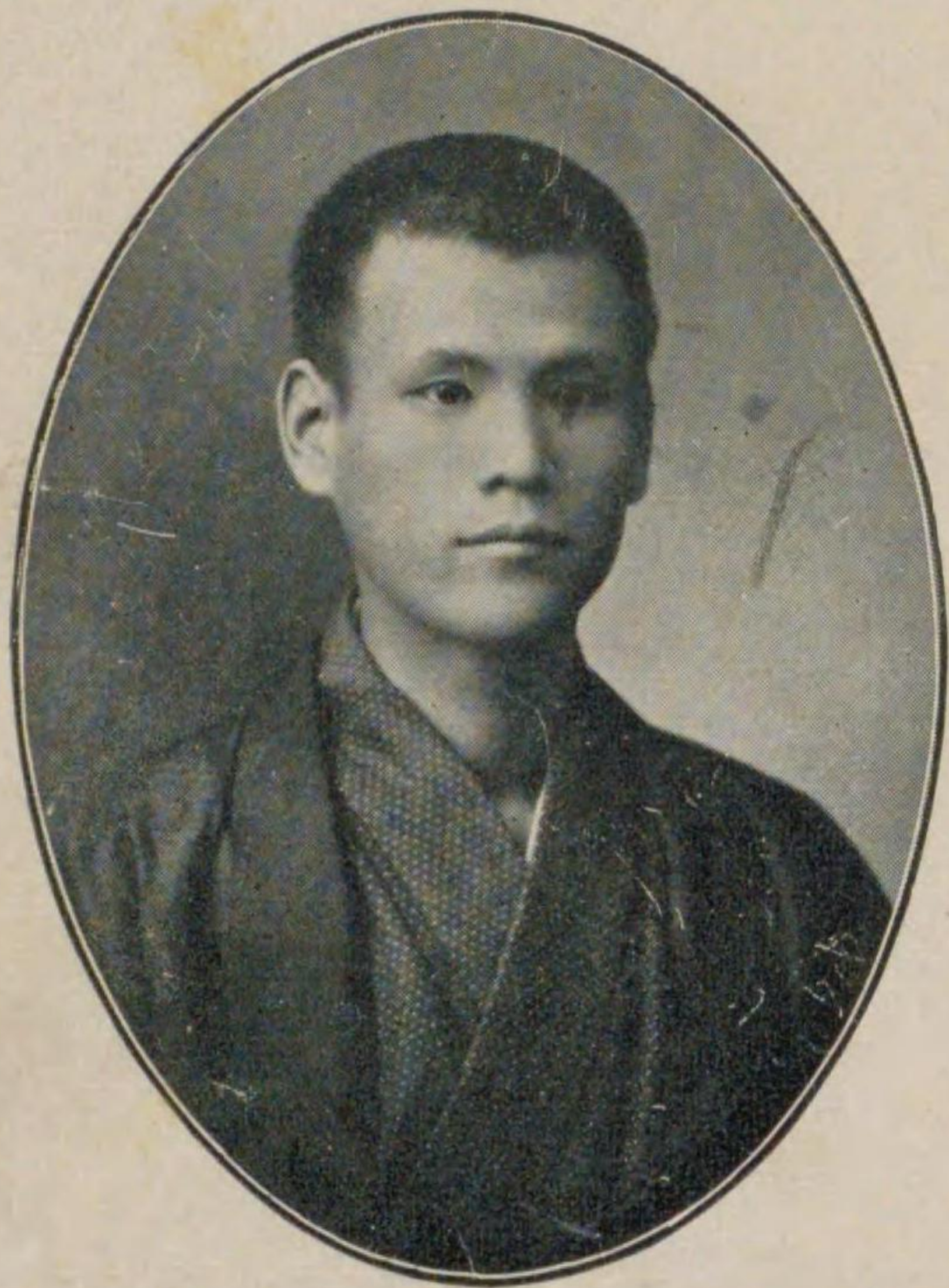


火  
5. 3. 17  
内交

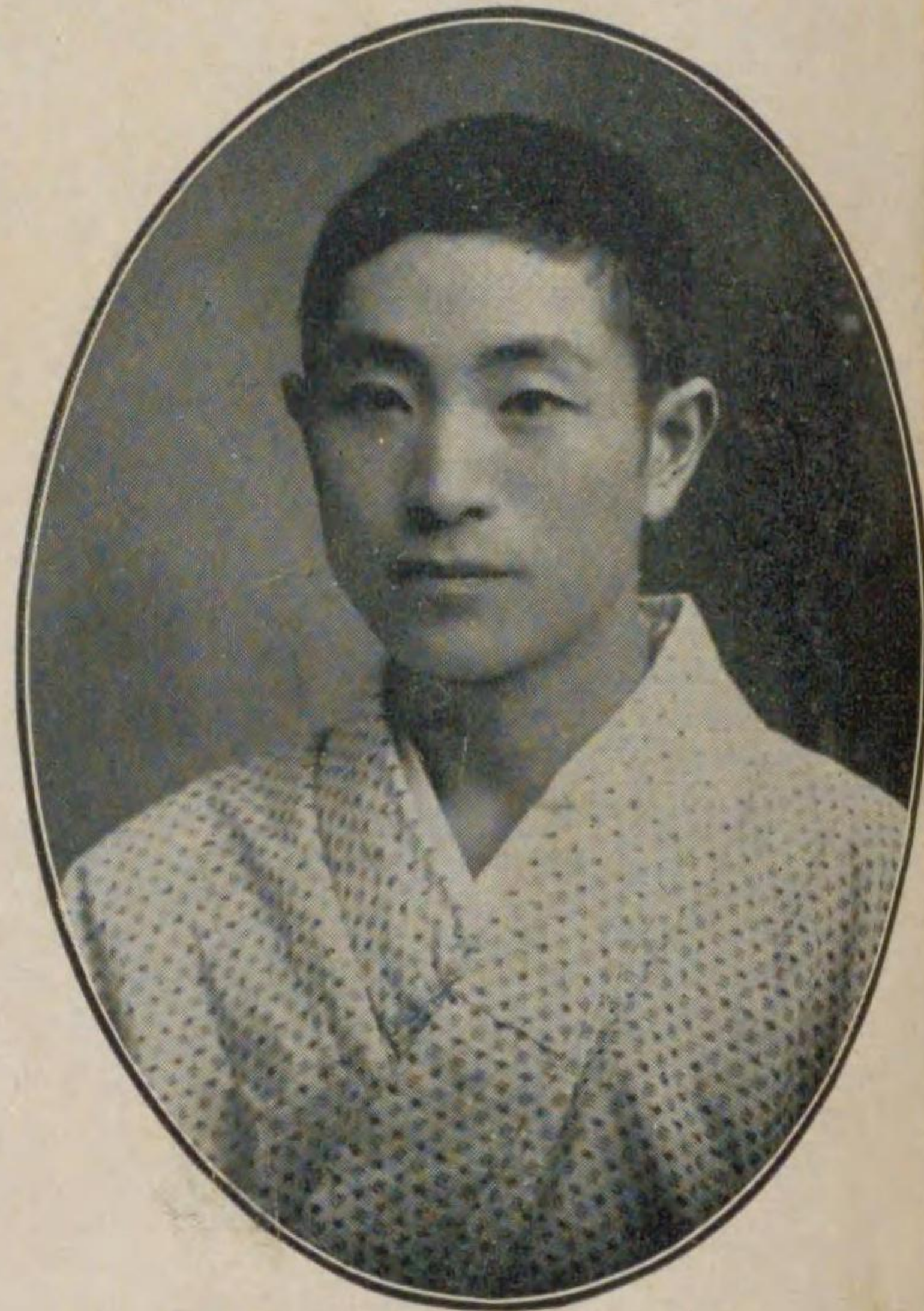
布石法

十四番子棋局  
十五局





鈴木三段



宮阪初段格



鈴木宮阪両士十番棋對局 中央は廣月絶軒



布石法四子局

目次

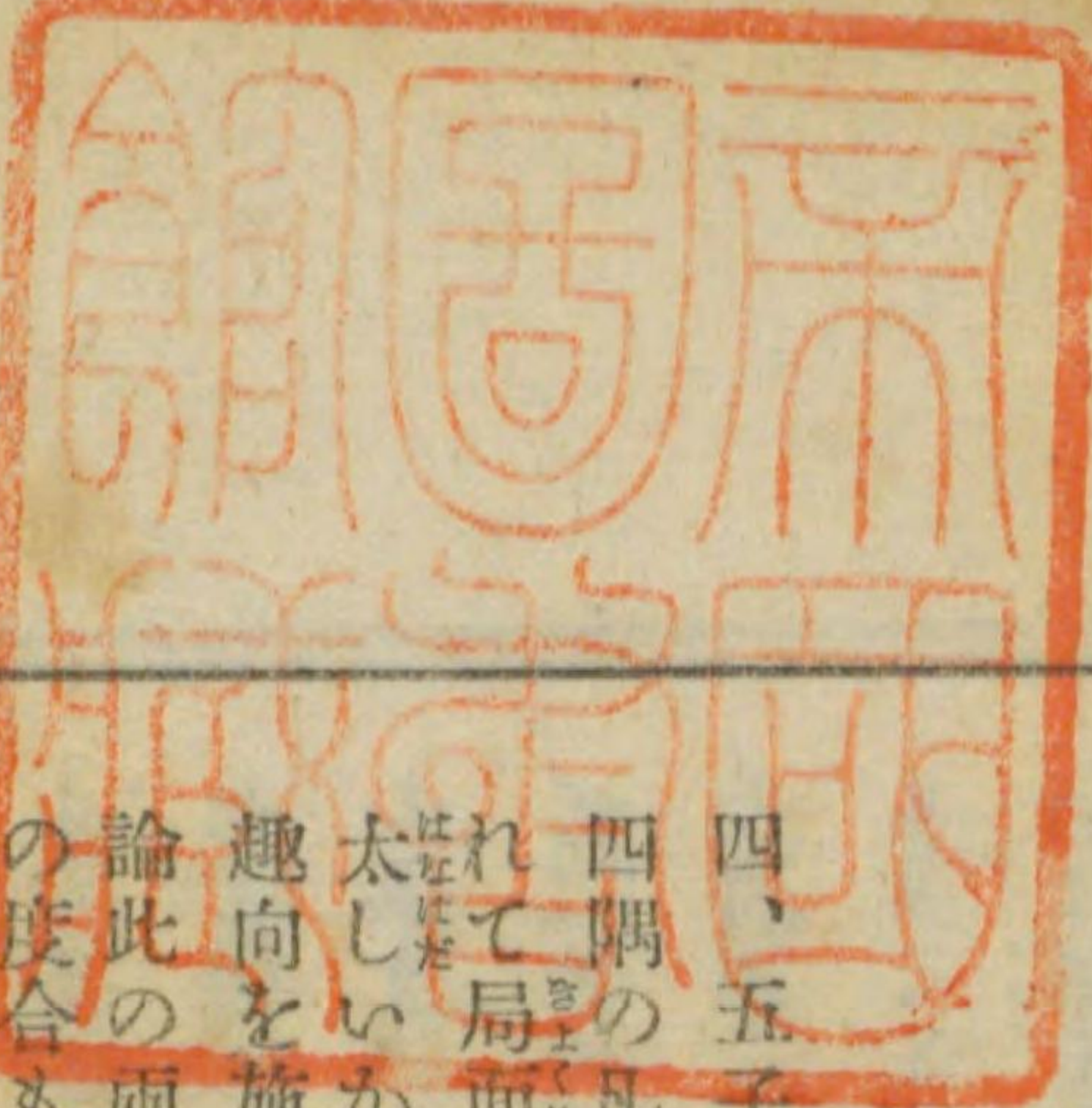
自頁

至頁

第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局	第拾局
壹	貳	參	肆	伍	陸	柒	捌	玖	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	
局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	局	
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....		
(五圖)	(三圖)	(一圖)	(四圖)	(二圖)	(四圖)	(二圖)	(四圖)	(二圖)	(四圖)	(二圖)	(四圖)	(三圖)	(一圖)	(四圖)	(二圖)	(三圖)	(二圖)	(二圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)	(三圖)		
一	二	一	二	三	四	二	三	四	二	三	四	三	二	四	二	三	四	二	三	四	三	二	四	三	二	四	三	二	三	四	二	三	四	二	三	四	二	三	四	二	
七	六	六	六	六	五	四	四	三	二	二	二	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	







# 布石法詳解

## 四子の部

概論

第二十一世  
八段 本因秀哉講述  
初段 廣月絶軒編輯

四、五子局は純然たる置棋であると同時に、又置棋の極點である、何故なれば戦の根據地とす可き四隅の凡てに黒の勢子があつて、白に優先の利を占める事を容さぬ、のみならず此の勢子に制限されて局面は非常に狹隘なものになつて居る、六子以上の棋になると、黒から言へば餘り力量の差が太しから容易くと思ひつゝイ棋を悪くして終ふ様になる、又白から言ふと局面が狭くて何等趣向を施す餘地がない、唯黒の失着(緩手、悪手)に乗じて漸次利を占めて行くといふ位に過ぎぬ(勿論此の兩者の感は二子以上は悉く左様で、唯程度の問題である、勢子の増加する程此の兩者の感じの度合も太だしくなる)其て白が何れの點から迫つて來た處で、黒は置棋定石の指定した通りに四隅の度合も太だしくなる、棋の大體が決まるかと言ふと、實戦は却々さうは行かぬ、之を獨立した定石として見ると、甲隅、乙隅各々申ぶんなく出來て居つても、之を配石上から見ると右左上下の關係上利害相反したり、策戦に矛盾を生じたりする事は屢々である、之等の關係を明かにして利害得失の由る所を研究するのが此の布石法の主眼である、乃て黒としては、何處迄も解り易い變化の少い形にして、先づ己を治めて然る後に敵の缺點を衝き弱所に乘じやうと考へねばならぬ、が白から言ふと成る可く局面を廣く、變化の多い形にして知らず／＼の間に勢子の効力を消して其の間に利を占めやうと打つのである。

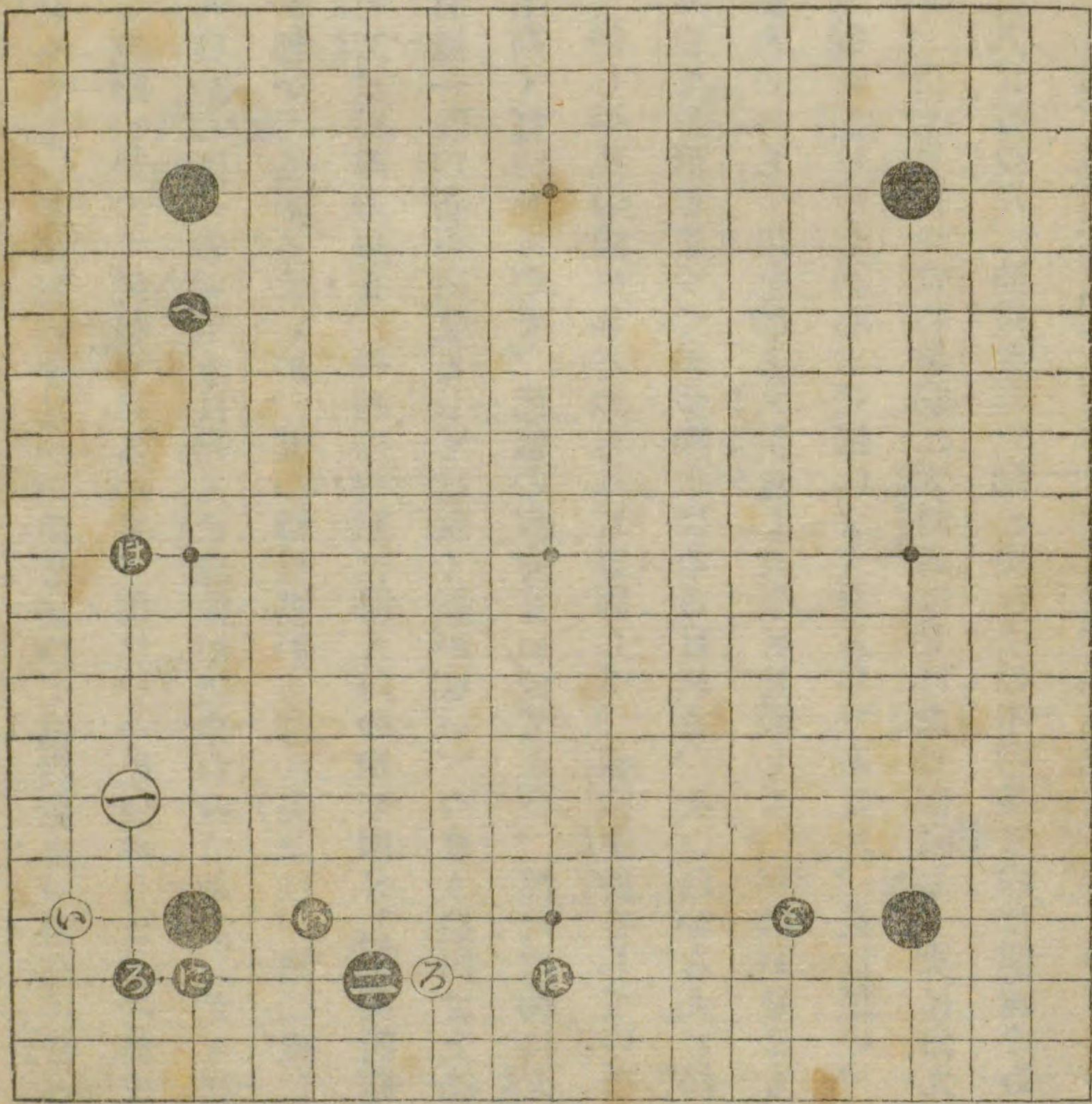


四子第一局

白一の掛りに對し黒二の着點を想像して見るに、何も二の點に限つた事は無い、星下へ打たうと他の隅に打たうと其は勝手であるが、星下(●)に打つ意味は次の手で(●)に單關するか、或は(●)に單關して、隅勢子を利用して壯大な形勢を造らうといふに在る、又白に對して(●)と三間に夾んで打つ手は一方白一の拓きを妨げると同時に一方(●)に打つて、前述(●)と同様の計畫に出やうといふのであるから、是亦敢て悪いといふ譯はないが抑々一と掛つた白の目的が此隅の攻撃にあるとすれば、其に應じて備へを立てるのは尋常の手で、敵の居無い方面に備へて、敵の攻めて來た方面を手拔するといふ事は、時に或は策として許す事があつても普通道理としては無い事であるから、先づ白一に應じて二と大斜走するが普通である、(是は互先定石の初めに詳説してあるが、要を摘んで再説すると)此時黒二の手を圖の様に大斜走するか、或は(●)に單關するかについては、各一理あつて何れが是とも非ともいふ事は出來んが、只後の着手の捌き方がいろ／＼違ふ即ち黒二と大斜走した時、次に白(●)に斜走して、この隅を侵すものとすれば、黒は(●)に應じて治まりを付ける事が出來るが、若し(●)に單關した場合、白同じく(●)に斜走し黒(●)に其侵入を防いだものとすれば、次に白から(●)に掛られた時、此隅を守らうとするには黒は又二の點に尖み付けて防がねばならん、が其では黒の形が凝る事となつて面白くないから、白が(●)に斜走した時、黒は(●)と星下に轉じ白が(●)の點に尖んだ時、黒

(●)に押へる手順を取つた方が可い、此單關の意味は隅には餘り重きを措かず、中原の發展を主とするのであるから、黒が(●)と尖んで此隅を守らうとするのは多少此趣意に矛盾するもので、従つて不結果を來すのは餘義ない次第である、再言すれば白一の時、黒が大斜走するか、或は單關するかは、後々の布石に大關係があるから、よく此の意味を了解した上で無くては擲つた子の意味の連絡を缺く事となつて、非常な不利を招くのである。

(置棋定石第一圖の説明參看)

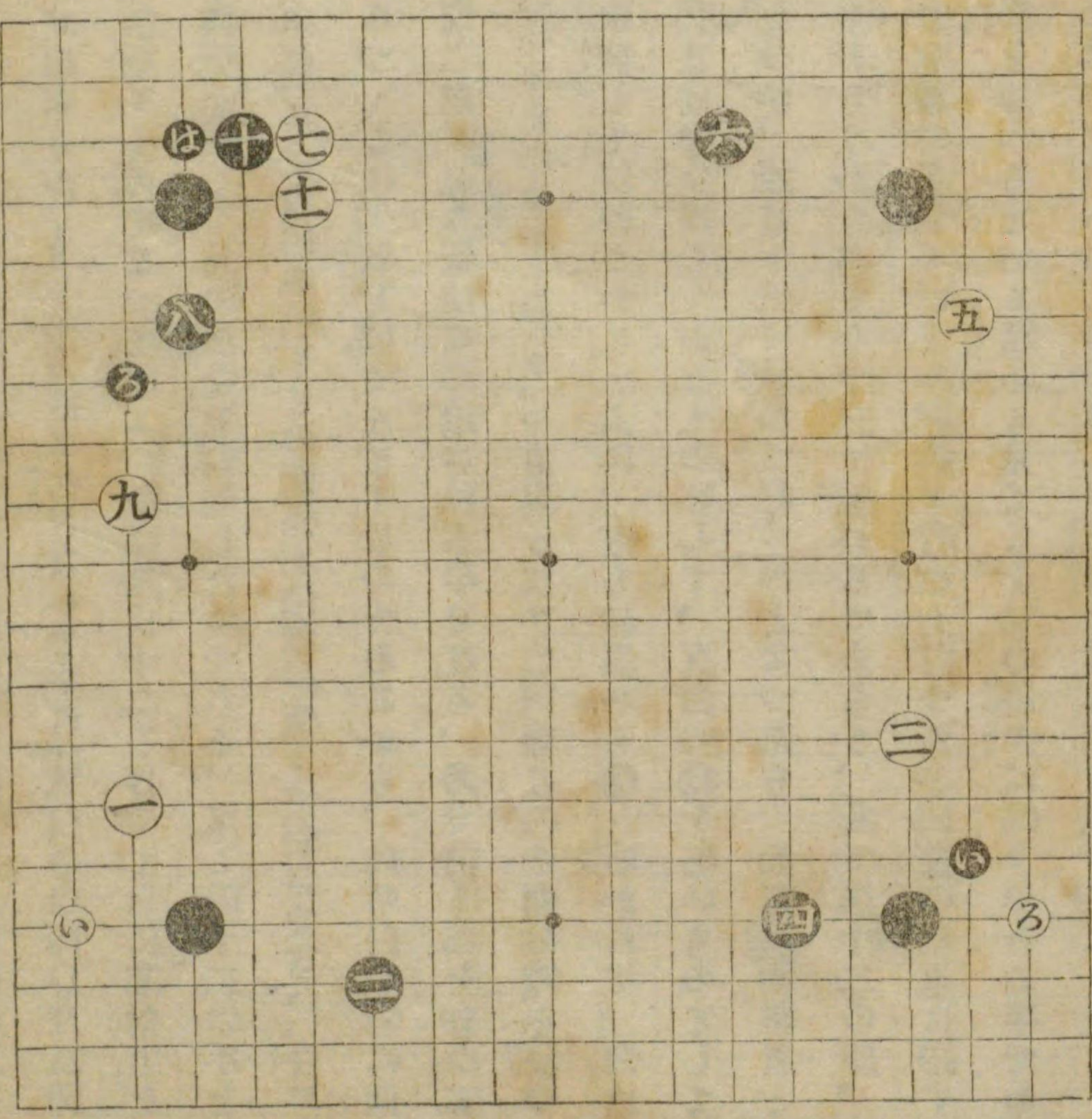


~~~~~(局子四法石布)~~~~~



白三の掛りに對し黒四と單關した意味は既に三子局の場合にも説いた通り、黒二の子との關係もあるが一方には又白三の一子との關係にもよる、是の三の手は一の手と違つて第四線に一路高く置石と二間の距離にあつて隅の黒に對する攻撃が至つて緩慢であるから、假に、一の白からは⑥の斜走を想像する事が出来るとしても、三の白から隅へ⑥の走りは殆んど想像が出来ぬのである、(尤も稀に此の三を犠牲として⑥に打つ手段が無いでもあるまいが、其の時は黒から⑥に尖まれ、第二線を這はされる結果となるから、斯かる打方は特殊の場合、特殊の策戦に基く時の出来事として別問題として講究せねばならぬから、茲に普通一般の布石研究としては説く要がない) つまり黒四は上述の様な譯で黒二と白三の子との關係上斯く打つたもので、適當の打方といつてよい、黒八は⑧に大斜走するのが普通で又安全であるが、併し平凡の嫌があるから八と單關して、多少手段としての手に出たのである、此手は七の白を攻め立てる形となつて多少働きはあるけれど、次に白から九と掛られた場合、隅の根據を侵される憂があるから、之を⑧と大斜走した手と比較して、何れが是とも非とも言ふ事は出来ぬ、又黒十の手で⑩に尖むのを初心者の間によく見るのであるが、是は悪い、今此の形を手順を換へて考へて見ると、白七と掛つた時黒⑩に大斜走に受けたと假定し、次に白九に詰めた時黒は當然⑩に締る可き手で八に打つたと同様な譯で⑩と尖む手の不利益なのは明瞭である、黒十と尖み頂けた手は決して隅を守る考へではない、前にも言つた通り、此處は裾明きの形とい

つて、一方を防げば一方から侵入される事となつて、地域といふ程のものは出来ないものであるから、決して白の侵入を防禦するが主ではなく、反對に白七の發展地域を奪つて攻め立て様といふ意味なのである、若し此の十の手を隅の地域を氣遣うて下したものとすれば、失着と評さねばならぬ。  
此の點は置棋定石緒論及概論を參看せらるればよい。

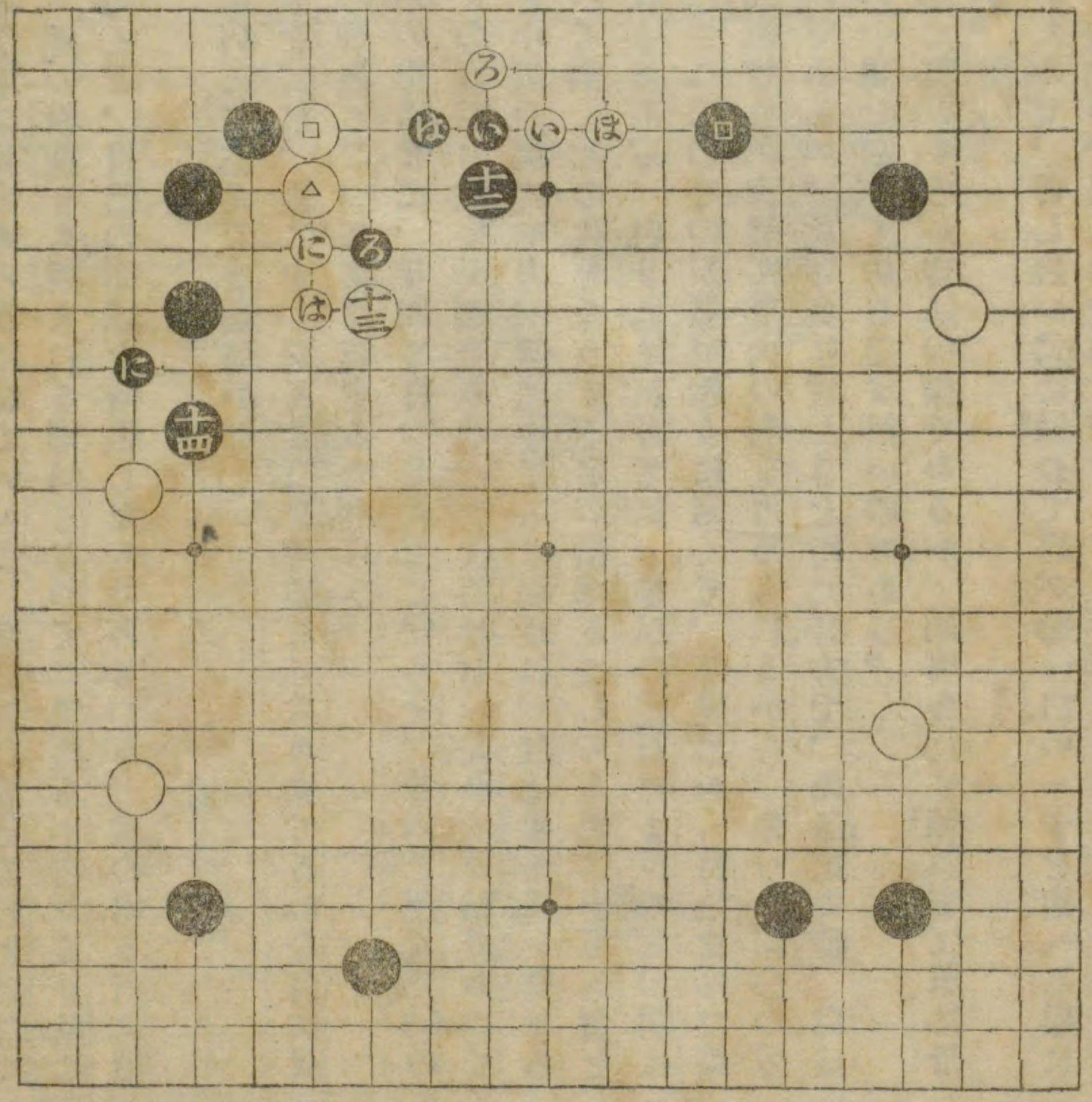


~~~~~(局子四法石布)~~~~~



黒十二は注意を要する肝要な手で、今若し黒の十二を無いものとすれば白は□印○及△印○の二子の勢力を以て少くも星下⑤に拓く事が出来るが、もし此方面に拓けないとすれば、白の□印○及△印○の二子の勢力といふものは極めて微弱なものとなつて終ふ、故に黒は十二と打つて白に其効力を發揮する邊を與へず、直ちに彼が機先を制して其の活動を制限したのである、又この十二の手を一路低く⑥に打つたらば如何かといふに、是は□印○の子との關係上位置が低くて利益でない、今黒の趣向は□印○及△印○の二子を虐めつゝ、茲に大勢を制せんとするのであるから、此時白が⑦に低く走つて来るのは、寧ろ黒から願ふ所で、白は忽ち低地に壓迫される事となる、乃で白も其を知つて十三と中原に頭角を顯して、前圖九の一子との連絡を計り、一方黒十二と□印○との中間の隙を狙つたのであるが、此の十三の手を⑧に單關しては何うかといふに、直ちに黒から⑨に覗かれて、白は⑩に粘がねばならぬ、で今假に⑪と⑫とは相交換してあるものとして、又白の⑬を無いものとして考へて見ると、次に白は⑭に行びて打つか、或は十三に縛ねて打つかと言つたら、如何に初學者と雖ども⑮に行びる手の愚な事は解るであらうから必ずや十三に縛ねて打つかであらう、其で黒十二の時、白⑯と單關するは即ち其の縛ね得る利益の手を下さず不利な行びを打つたと同様の結果に歸するのである、また十二方面の黒に威壓を加へるといふ點から見ても十三の斜走は働きのある手である、黒十四は⑰に打つて十二の一子に勢力を加へ以て□印○との連絡に備へ、且⑱の截れを含んで

白の根據を奪ふの策に出ても良い、又一方から言へば隅の防禦ともなつてゐる譯である、若し此の十四の手を以て⑲に守らば如何といふに、白から忽ち⑳に打込まれて幾多の混亂を醸す事となつて黒の爲めに太だ不利である、故に黒は飽迄攻撃の態度を取つて、十四と白九の肩を衝き、前圖一及九の白を攻むる其影響を以て□印○、△印○及十三の白の三子に壓迫を加へ、十二方面の黒の領域を擴張する手段に出たのである。



(局子四法石布)



前圖黒十四の手から本圖白十九に至る迄單に此方面のみに就ていへば、黒は白の散漫な形を疆固にした計りでなく、白に十九と走られ、隅の根據をも侵される形勢となつて、黒頗る不利たるを免れぬ、が黒は其の報酬として、二十と飛んで、自己の領域を擴張したのであるから、其の得る所は損失を償うて尙餘りある譯である。

(問) 然らば白十九の手を以て直ちに(19)に打込んで如何か。

(答) 黒は(19)に尖み頂けて先づ其盤りを防ぎ、後二十と飛んで白を兩断して攻め立てるから白は双方同時に救ふ事が出来ず、兩絡みの状態となつて甚だ窮するであらう。

黒廿は(20)に尖んで置いても可いが、圖の様に廿二、廿四と打つて廿五と守らせ、廿六と運んで(20)の打込を防いだ後、徐ろに廿八と締つたのは頗る宜い手順である、次に白廿七の尖みは要點であつて若し此點を黒から奪はれる事になると中原の黒の勢力が強固となると同時に、白は致命傷を受けるのである、假に白は、(20)或は(21)に打つて漸く其の生を全うする事が出来るとしても黒に中原方面を封鎖される事となつては大事既に去れりである、白廿九と頂けて切り違ひの定石によつて此の隅に黒の應手を問うた意味は、白の(20)印○と△印○との距離が餘りに遠くて、早晚黒から打込まれた場合、白が困しめられる事になると、其影響で一方黒に莫大の利を占められるから、先づ△印○の面に眼形を造つて黒の打込に備へたのであるが、攻守共に宜しきを得た打方で、此急忙の時、白は普通の手段を以て(20)印○と△印○との中間を圍つて居る違は無いのである。

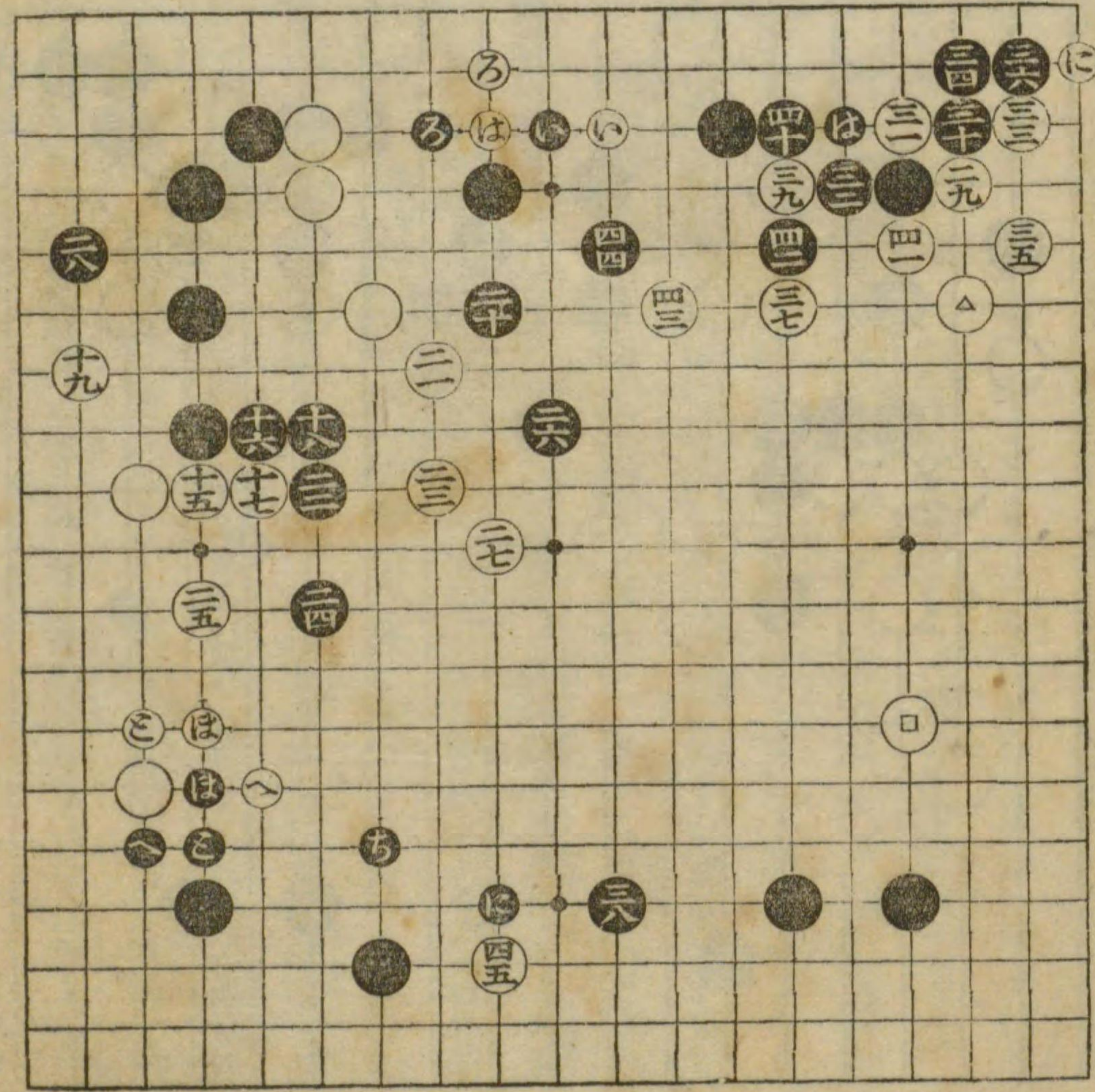
(問) 白廿七の手を(27)に締ねて黒に(27)と打たすのが普通の様であるが、此場合(27)と締ねずに單に廿七と飛んだのは如何なる譯であるか。

(答) 次に卅九の頂け味を残して置いたので、若し白が(27)に締ねて黒が(27)に白の一子を抱へる事になると、卅九の味は消えて終つて白は先手で自己の缺點を防ぐことは出来ない、單に卅七に

飛んだればこそ、次に卅九、四十一、四十三と打つて敵を攻むると同時に、先手を以て自己を守り得たのである、

(問) 白四十五と打込んだ際黒は何う打つて可いか。

(答) (27)に頂けて烈しく攻め、中腹の白を狙ふのも一策、又(27)と頂け白が(27)に締ねた時に(27)に押へ白(27)黒(27)白(27)となつて徐ろに(27)に飛び、白の四十五に迫りつゝ中腹の白を狙つたならば其影響として、十分右側の白の模様を削る事も出来やう、以上二者何れの方針を執るも任意である。

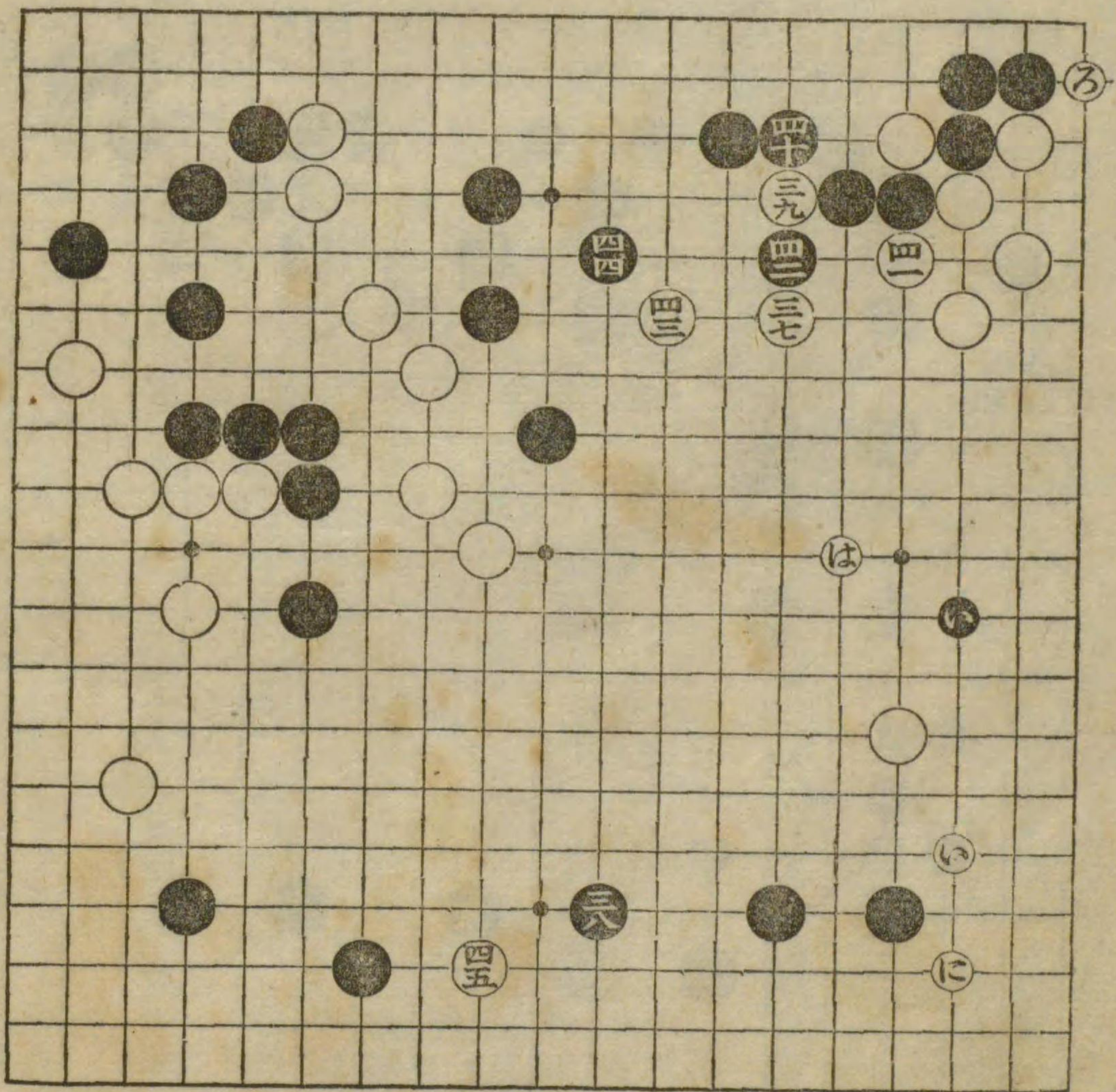


——(局子四法石布)——



(問) 右側方面の打着の前途を豫想するに、若黒から此方面へ打込むとすれば何の點であらうか。

(答) ③の點である、又手順の都合で白から④に侵分て來る事になれば自然⑤(三々)の打込みも消えて終ふが假に白から⑥に打込んで來れば其影響として右側の白の模様は消される譯であるから、黒にも打込まれる缺點はあるが白も一寸打込み難い所で、即ち双方に缺點があるのであるから、斯ういふ所は御互に睨み合つて、戦期の熟するを待つて居て、白が領域を圍へば黒も亦隅を守つて居ればよい。



(問答の便宜上前圖三十七以下再掲)

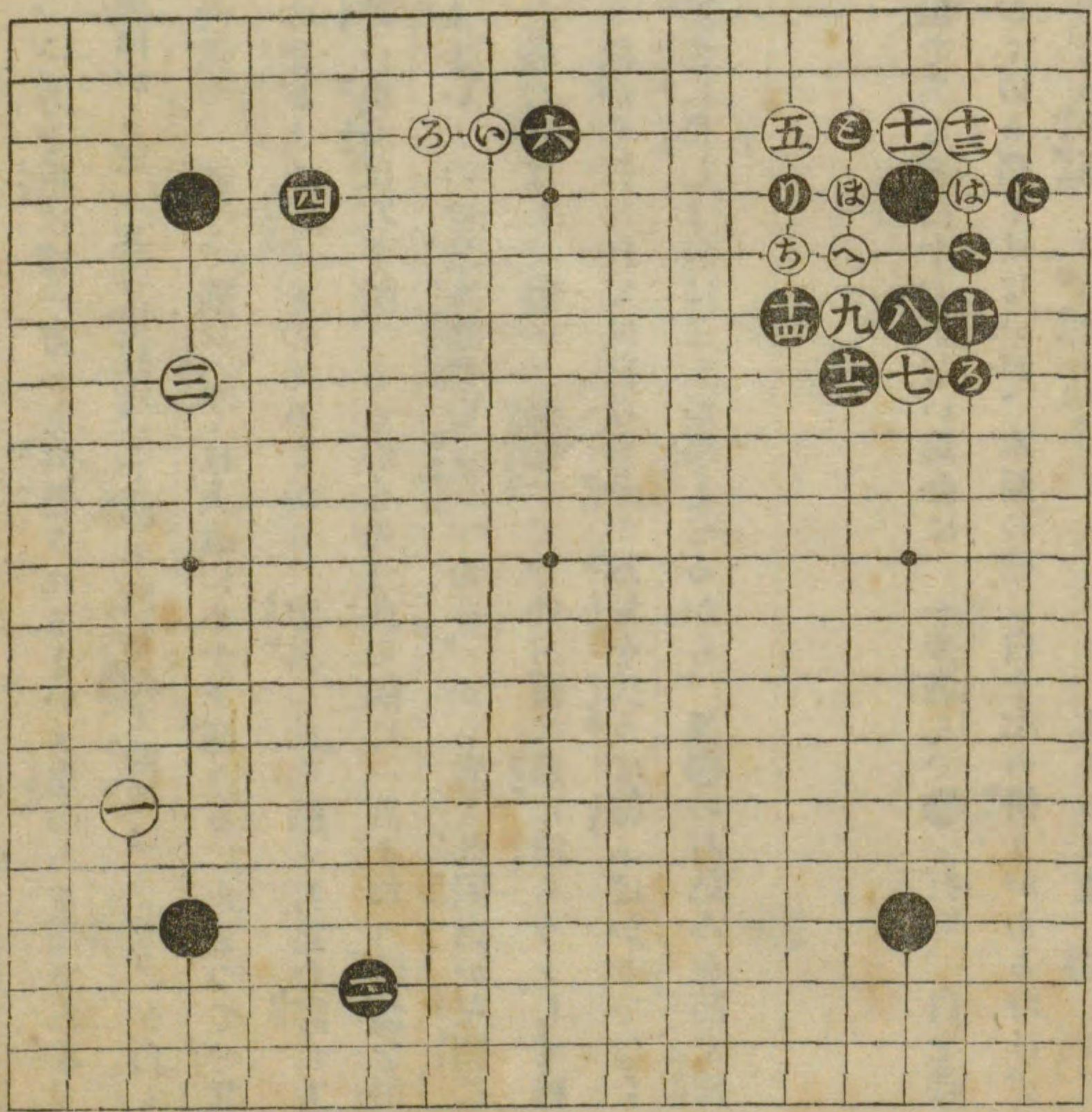
「絶日」本局卅七の時に緯なる尋常の手を保留して置いて卅七に飛び卅九、四十一、四十三と此方面を先手で結末する手際は、初心者の容易に運び得ぬ所である、次で白が四十五の一子をばまだ下さぬ際に當つて諸君試みに局勢を觀望し玉へ、白の位置に立つても、黒の位置に代つても、我々素人の尤も氣になるのは、右側一帯の白模様即⑩印方面であらう。其で白としては③方面から黒の地を侵しつゝ、自分の地域を擴めやうとか、若は⑫の方面に防禦を施したいとか思ふであらう又黒としても⑬の邊に打込んで茲に劍尖火を發し舷々相摩する底の活劇が始まる様な事が多い處で専門家の目から見ると、此ういふ大模様も大した地とは思つて居ない、彼から打込んで來れば彼の地も削れる、彼を犯せば我亦犯されるといふ所を見越して居る、殊に我々と専門家との着眼の著しく違ふ點は、我々素人間では兎角地といふものが氣になる、専門家は主として石の勢力といふ事に着眼してゐる、そして絶えず大局の形勢から打算して兵を練つてゐる、本局の如き四子を賦いて居るから黒優勢で危い石のないのは當然であるが、此局勢の時黑白共に注意を拂つてゐるのは、中央に横はつて居る六子一帯の白であつて白四十五の打込も要するに黒の領域を削る傍ら此の未成熟の白を援けるにあるので、黒の次に下さうとする石も亦必ず此白を攻めて利を占めやうと策せねばならぬ筈である、此ういふ點が我々素人碁殊に初心者にあつては最も留意研究す可き問題である。



四子第二局

黒六の手を以て普通に⑥に大斜走若くば八に單關するのも決して悪くはないが然し、茲で圖の通り六と打つたのは四と高く打つて次に大規模の地を造らうとした着手の意味を實現したのと同時に一方白五に對しては三間夾となつて極めてよい着手である、  
 此手で若しも黒が八とか⑧とかに應じたならば、白は直に⑨若くは⑩と廣く拓くがよい、  
 黒八の手は味方の子のない方から頂けるといふ原則を應用したのである  
 白が十一と頂けたのは、黒に十三の點に抑へさせて、⑭に截り黒が⑮に當てた時⑯に當て⑰の一子  
 を⑱に提らしめて黒の形を愚にしやうといふ手段なのである、乃で黒は直ちに十一に應じれば白の  
 手段に陥るから其を避けて十二と打つて白の七、九、の二子を截つた、白が十三と行びたのは隅の  
 根據即ち三々の要所を占領した手で決して小サイ着點ではない  
 黒十四を⑳の點からあてるのは筋違ひといふ着である何故なれば黒から㉑の點に來られると㉒に出  
 截る味が出来から白は大抵の場合辛抱して㉓の點に捧粘きに粘いでおかねばならぬ、して見ると  
 黒は何時でも㉔の點に黒一子のあるものと思つて居て差支はない、  
 乃で其の黒に向つて白九の一子を十四から提るといふ事は道理に合うて居るが、若此の十四の手を

①からあてるとすると②若くは  
 ③の二子の黒の何れか一子は愚  
 に歸して終ふばかりでなく必然  
 提れる九の一子を中央へ追出す  
 といふ結果にもなる、  
 其處で黒は十四と本筋に攻めた  
 のであるが、若しも白が九の一  
 子を④に遁げ出したならば黒は  
 ⑤の點に押し、白⑥と曲つた時  
 黒⑦に押せば白は此の三子を捨  
 てるか⑧に出截らるか、何れ  
 か其の一は免がれる事の出来な  
 い結果となるのである、



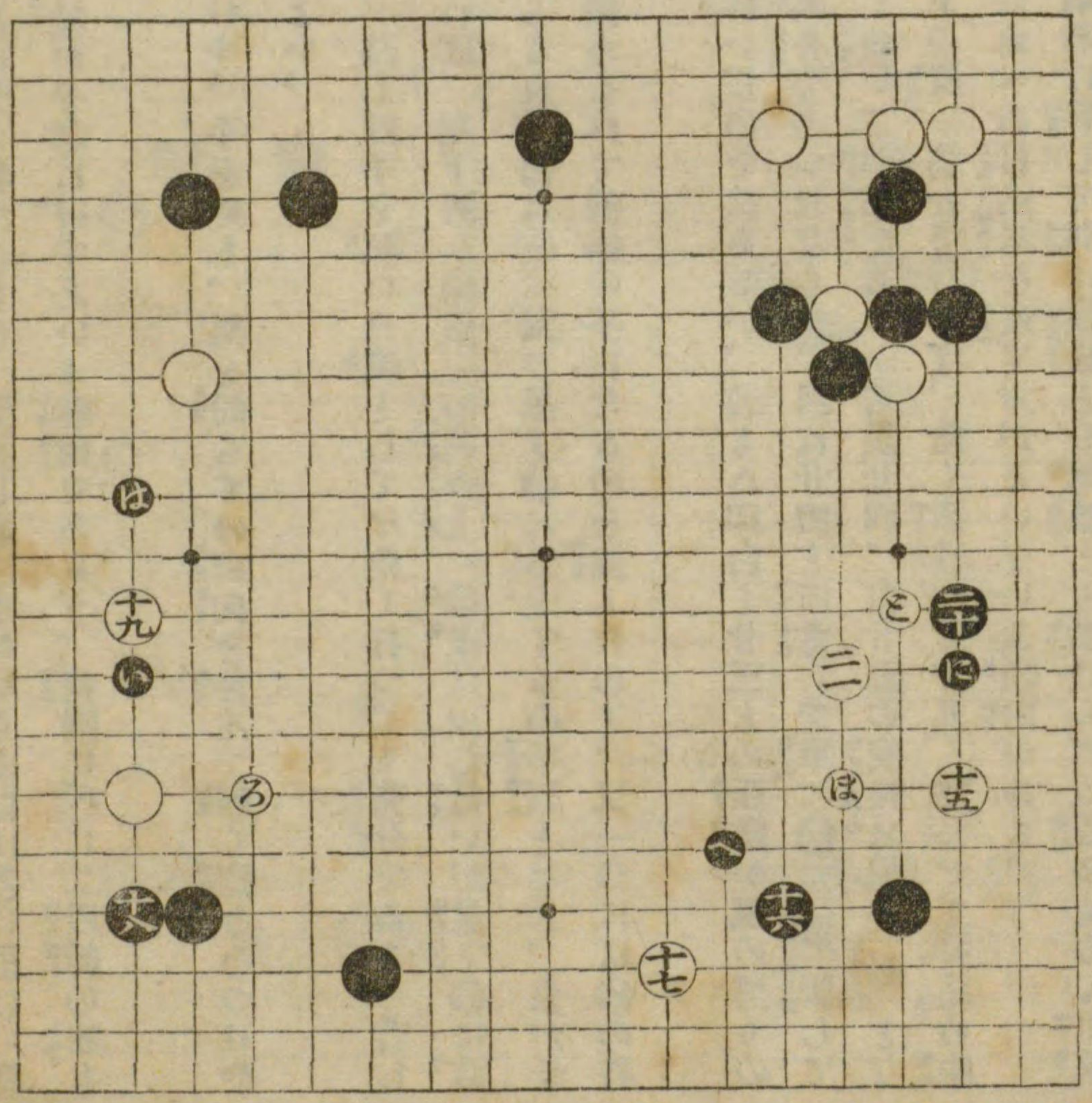
(局子四法石布)



黒十八は此の場合に於ける要點である、其の理由は今此の局面を見渡すと右上隅は已に白の有となつて居る右下隅は所謂兩裾明の形で、一方を拒げば一方から侵蝕されるといふ患のある所である、左上隅は尨大なる形をして居る(勿論白から三々其の他打込などの手段を施す餘地はあらう)が白も今急に此の黒の大領域へ打込んで見た處で、後手で隅に若くは上邊に小サク活きるに止まつて、其の結果却つて左側の白を分割されるの患がある位のものであるから、容易に此の隅へ打込む譯にも行かぬ、して見ると黒として第一手薄い場所は左下隅であるから先づ此の隅に一着を加へ防備を嚴重にしておいて徐ろに⑩の打込を覗ふといふのは最も適當の考である、から若も此際白が左側に備へず手抜したならば⑩に打つて白を⑨に飛ばして⑩に二間拓して、此方面に將に造らうとして居る白の大領域を蹂躪するがよい、此く黒から打たれては白は自分の地域を失うて終ふばかりでなく上下に隔られた白は根據を奪はれて非常に苦しまねばならぬ事となるから、黒⑩の打込みを防ぐ傍ら自己の地域を定めるために白は十九と打つたのである、

黒廿は白十七との關係上撰んだ地點である若白十七がない場合は、一步進んで⑪と打ち、白を⑫に飛ばせて黒も亦廿一の點に飛んでおくのも悪くはないが、本圖の様に白十七の掛りがある時は、黒⑬、白⑭、の時一手で⑮の點を白のため中原への出途を閉ざされるから、黒は必然⑯に尖まねば

ならぬ手順となる、此ういふ際に黒が⑮にあるがよいか、二十にあるがよいかと言へば無論白に接近して⑮に在るは面白くない、(且つ肩側⑮から壓迫を加へられるといふ味も残つて居る)、白廿一の手は少し講解の出來難い手であるが、強て言へば紛ら加すといふ意味の手である此ういふ場合白としては太だ打ち場



(局子四法石布)



白二十一の時黒が此の所に打つとすれば先づ●であらう、黒若し●に来たならば白は○に頂け、黒●に抑へた時●に膨んで黒を廿八に粘がせ●に押すといふ趣向であらう、尙隅に○に二段綽の味も残つて居る、

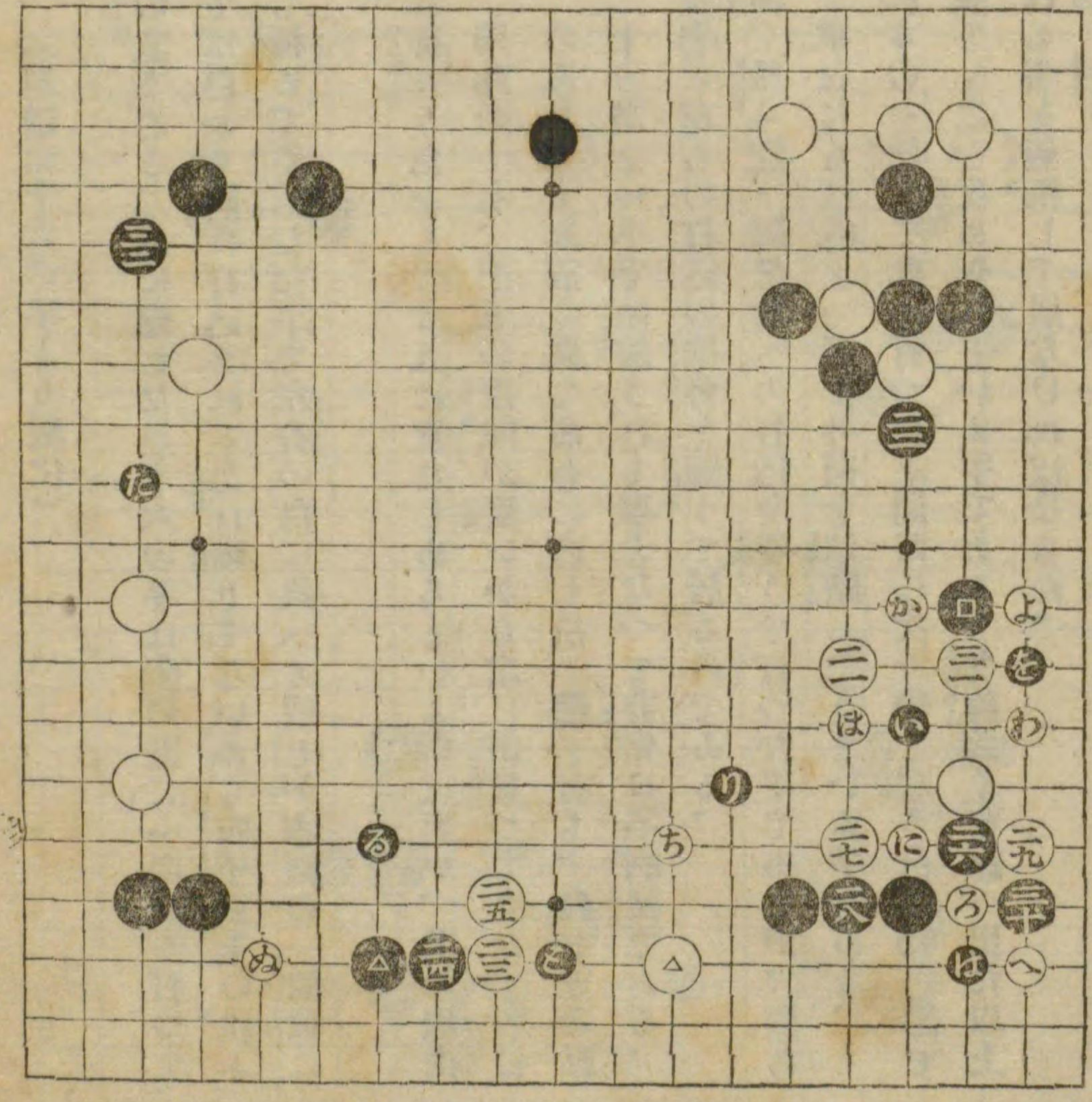
要するに此の處成る可くキマリをつけず、手を残し、黒を紛らすの趣向を含んで軽く捌きをつけやうといふのが白廿一の趣向と見ればよい、

黒廿二は少し堅過ぎるの嫌はあるが、然し四子を賦いた棋としては此く打つても充分である、若し此の點を外にして打場所を擇ぶとすれば、左下隅△印黒との釣合上、位置は少し低い星下●に詰めて打つがよい、若黒から●に詰められるれば白は○に飛び黒又●に斜走するの手順となる、白が廿三と詰めて打つたのは、黒から●に詰められて前述の手になるのを嫌ふたのと、又一つには●の打込を覗うたのである、

黒廿四の衝當りは先手で●の打込を防いだのではあるが、若も△印白と廿三との距離が圖の通りの二間拓でなく三間若くは四間等廣い場合であつたならば、黒は廿四と衝當らず單に●に單關しておくがよい、何故なれば此の所が此く狭い二間拓であるから黒廿四、白廿五の交換は黒の働となつてゐるが若も此の白の拓が三間以上の廣い場合であれば、此く衝當つて廿五と立たせて打込の味を消すよりは單に●に飛んで飽迄も白地への打込味を残す方がよいといふ理由がある、要するに白が右側に五子を狭隘なる場所に費して別に根據とも地域とも名けられる程のものゝ出来

て居らぬのは口印黒即二十の一着が働いて居るものと言はねばならぬ。

「註」即口印黒から●と綽ねるのは悪手である、即白に●と押へさせて、彼の要所に一子を加へさせ白を利するの外何の得る所もないからである若反對に白から●に或は●に綽て來たならば、來るに一任しておくがよい、口印の黒は十分任務を盡して居る之を逃出すなどは眼光が狭い強て此の一子の勢力を加へるといふならば●の點に行る位のもの然し其も事が小サイ、矢張り此場合は廿二と尖んで此の隅を守り併せて●の打込を覗つて居るがよい、



(局子四法石布)



四子第三局

(前譜第十六の手より變化)

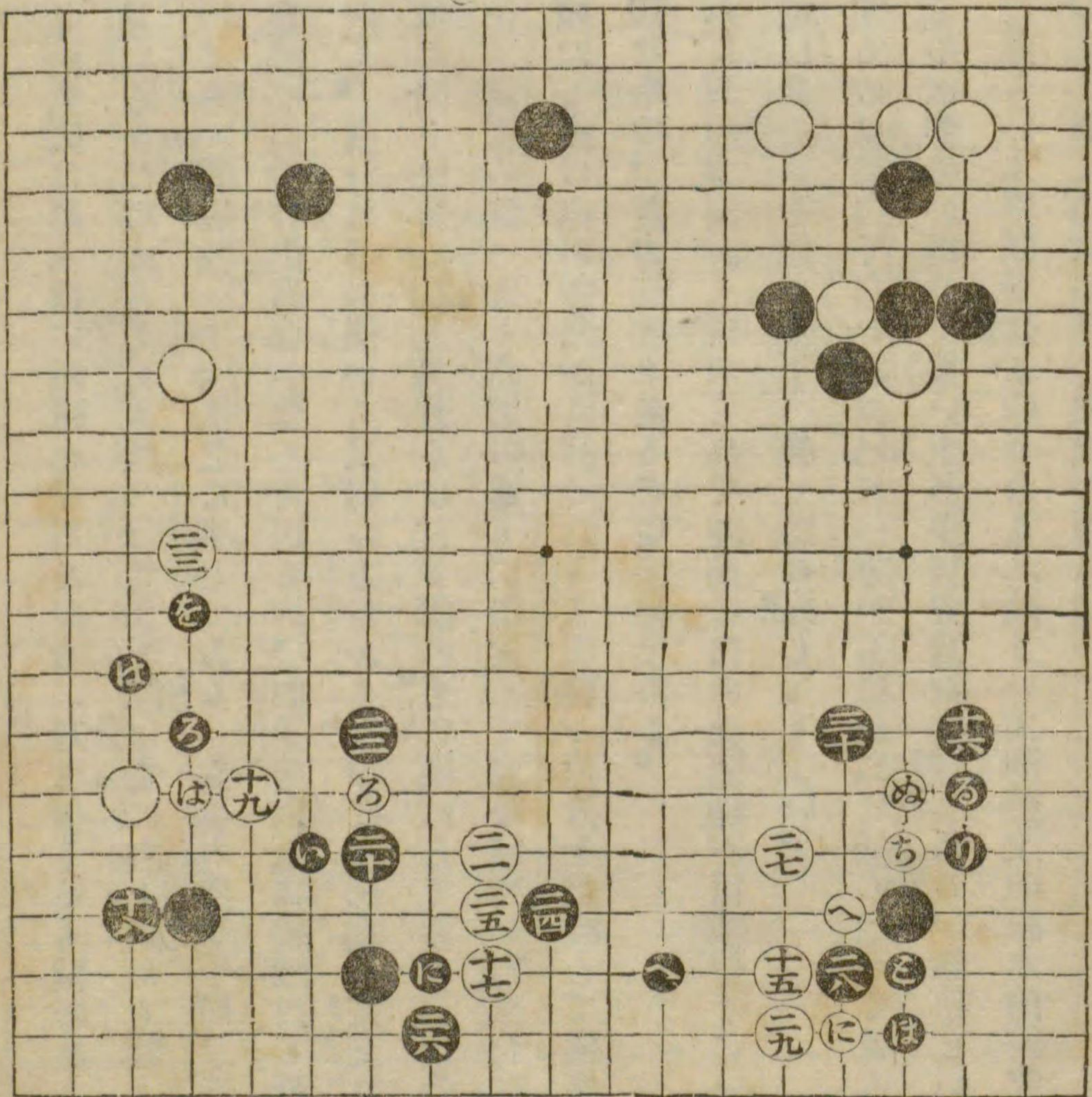
白十五は下側一帯に地域を造らうとの意である、之に應じた黒十六の点は④の點に一間高く打つておくのも良い、黒二十の手で⑤に打てば白から隅に打込まれる恐は断じてないから四子以上の棋としては決して悪いとも言へぬが、然し極めて萎縮した手で左右の白に與へる感じが本圖の一間飛に比して緩い、

又此の手を以つて⑥と打つて白十七に衝當り白をして廿五に立たしめるといふ事は悪い、其の理由は前圖二十四の手で説明した通りで、即此の十七、十五の距離が廣いから之に衝當つて立たすのは徒らに白に利を與へるばかりである、のみならず本圖の場合に若し黒が⑦と打ち、白廿五の點に立つた時手抜きすれば、忽ち白に二十の點を一手で閉鎖される事となつて非常に不利である、乃で黒は尋常に二十と單關して⑧及⑨の左右の打込の機會を窺うて居るのである、

白廿一は黒から⑩に打込まれるのを防ぐ傍ら左下隅黒地への打込を覗うて打つた手であるが、黒若し打込を防ぐため二十六の點へ尖んで來たならば⑪と一手で外面を遮断しやうといふ手である、黒廿二は白から中原への出路を遮られるのを嫌うて此く打つたと同時に次で⑫と覗き白に⑬と應じさせて、⑭と飛び三子の白を上下に隔て、之を攻めやうといふ手である、勿論此く中原へ出た以上は隅の黒地は白から打込まれ蹂躪される事を覺悟して居なければならぬ、白二十三は黒の打込に備へて此の地域を守つたのである、

第十五手より三十手止

(二十九、布四子)



黒が二十四と窺いて白に二十五と粘がせたのは、白を重くする手段で、次に二十六と尖んだのは隅への打込を拒いだ手である事は言ふ迄もない、

白二十七は下側への打込を防ぐ傍ら右下隅に迫つたので黒二十八は先手で隅に幾分の備へをしたのである、次に三十と打つたのは大勢を制する手である、白二十九の手で⑮と綽ね、黒⑯白⑰黒⑱白⑲と運ぶ手順も無いではないが、其では全く隅の味を消して終ふ譯であるから、單に二十九と下つたのである、黒三十は前述した通り右側に大規模の地域を割じやうといふ手である。



四子第四局

「絶日」今迄にも已に述べた通り此の研究録は黒本位に編輯してあるから（乃ち少くとも圖の造り方だけは黒を持つた方の位置から見た通りに編成してある故）「互先定石」は常に右上隅から始まり「置棋定石」は多く左下隅を第一とし「布石法」も大抵之に準じてある、置棋の内二子局、三子局は明隅といふものがあるから自然に白の打出處は一定して居るが、四子局以上は純然たる置棋であつて四隅とも同状態であるから、白一は何の隅から又何の方角から掛つても決して差支はない、乃で講修者は假令此の研究録の圖では常に右上隅若くは左下隅の形に現はしてある「互先」及「置棋定石」其他「布石法」等をも講修の際一通り原圖の通りに布置して充分領得が出来たならば、次には之を他の隅へ持つて來たり或は他の方角から打つたりして屢々位置を變換して縦横無碍に研究するといふ事は最も大切な事で、實力養成上最も必要條件である。

黒四は普通六と飛ぶ所であるが次で白に四の方面から掛かれて左側に白の大模様が出来やうといふのを嫌つて此く四と拓いたので、或は此の手を以て星下へ」と詰め返してもよい。

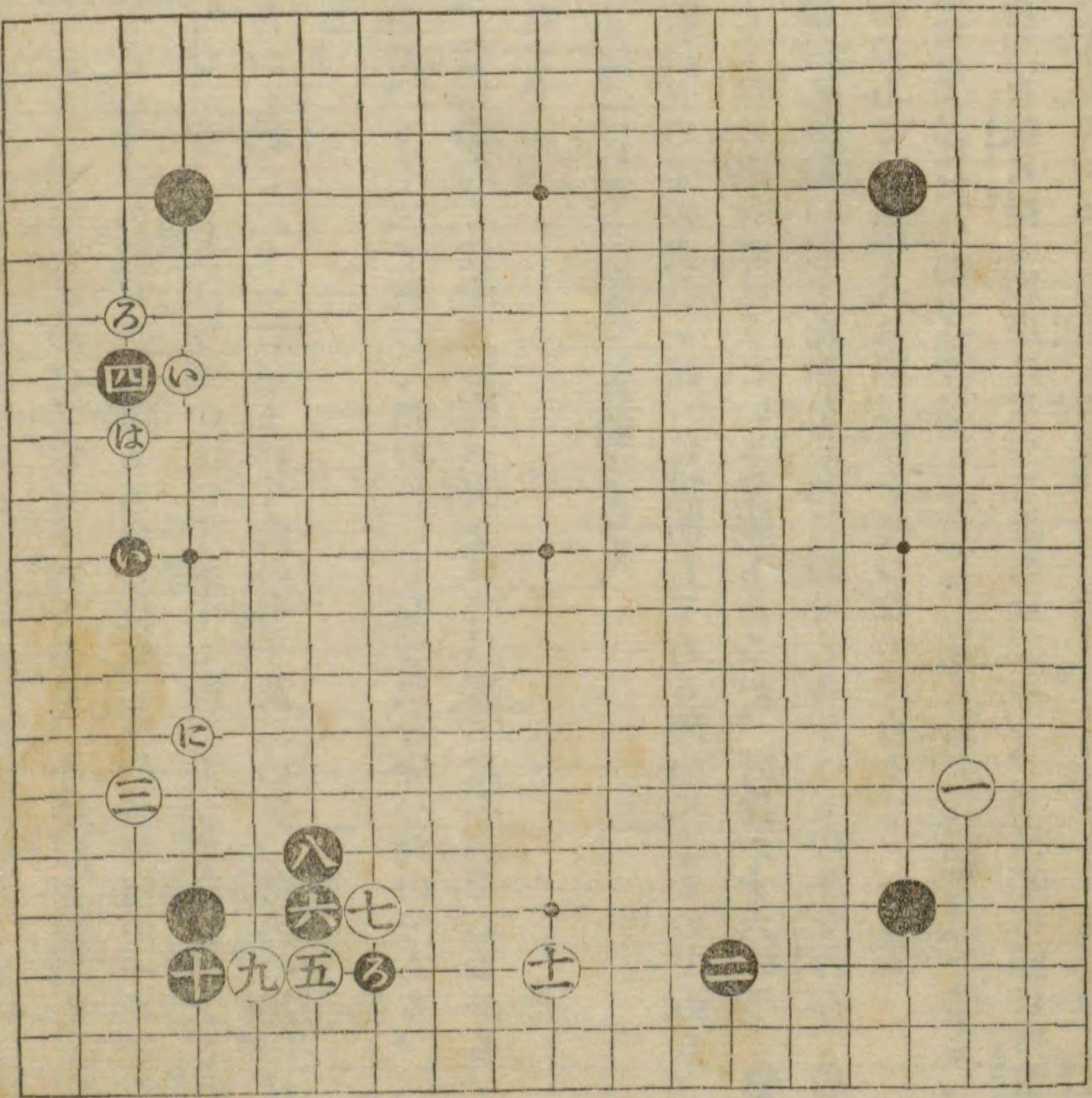
「註」白三に應じて黒四を斜走するのは面白くない其は已に一方から黒が二と低く走つて居る此の二との關係上今又と低く走るのは姿勢が極めて拙い上多少勢力重複の嫌もある、悪手といふ程の大した手ではないが棋として此ういふ單調を嫌ふのである（此ういふ姿勢上の根本的研究は他日に譲る）黒四を星下に打つ意は第二局六の手と同説である、

黒若四の手で六と左下隅を一間飛したならば、白は左上隅へ①の「一間高掛」か②の「小斜走掛」か或は③の「大々斜走掛」に打つ手であらう。

白五は右上隅へ掛るもよし。

「註」白七以下黒十迄の應接は普通である、白十一の手で④へ尖む打方に出たならば如何かといふに四の方面に白の勢力がないから其の結果はツマラヌといふ譯で、白は其の手段を取らぬのである（白が⑤と尖むと假定すると其手からの後の應接及び理由は二子第五局及三子第五局参照）

第一手より第十一手迄



(局子四法石布)



白十一を此く星下に打つたのは左方④の缺點に備へると同時に右下隅の三々を⑤と犯さうといふ工夫である、此際右下隅の黒は白に⑥と三々を犯されるのは非常な不利である、今手順を變更して之を説明すると、白一黒二に先き立つて此の十一の點に白があるものと假定して、さて白が一と掛つた時黒は茲を如何打つ可きかといふと⑦と高く一間飛するか或は手抜する所であつて決して二と斜走する所でない、若斜走すれば忽ち白から⑧と三々へ打込まれて此の勢子及二の黒の勢力の過半はダメになつて終ふ懼があるからである、

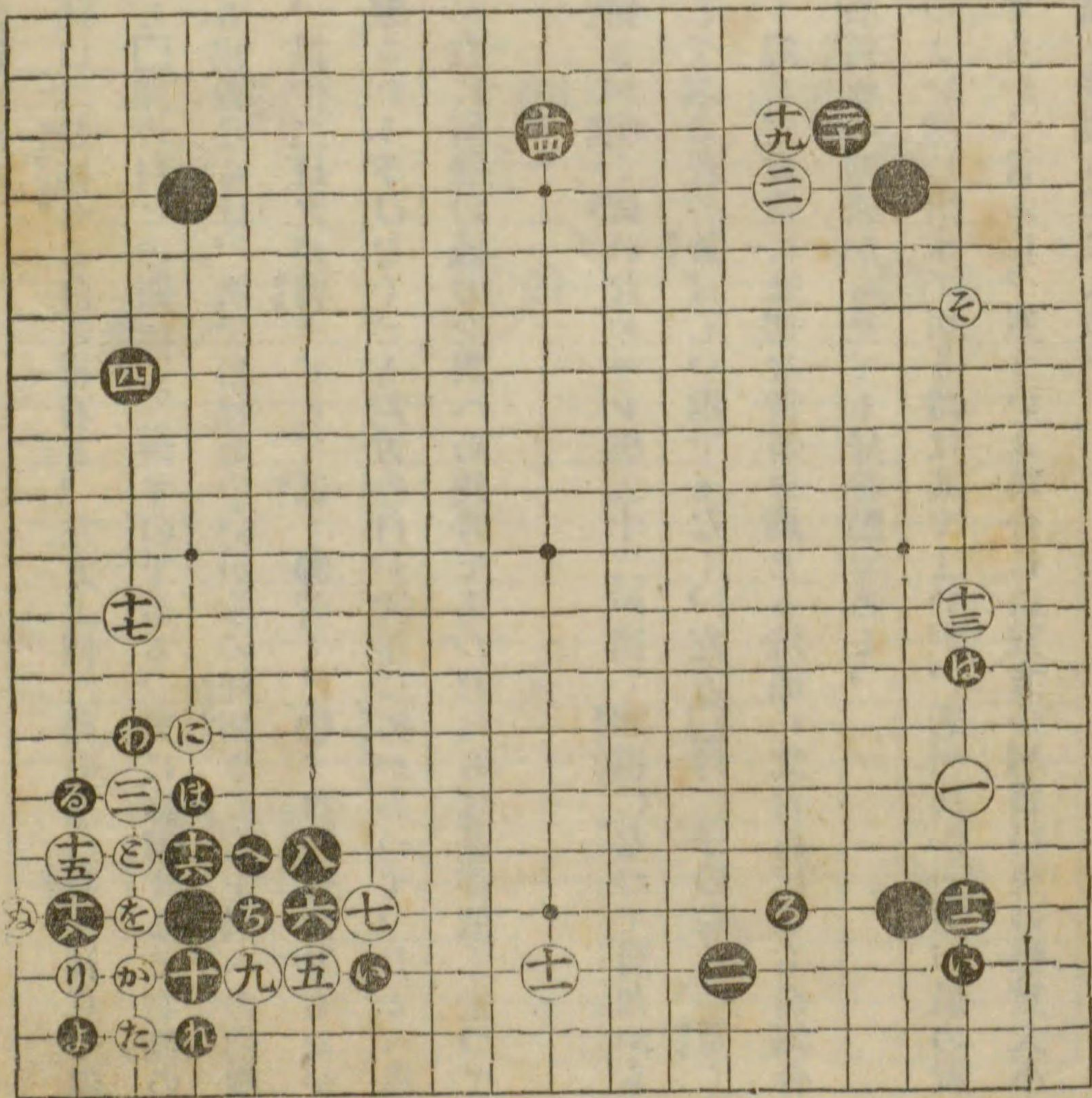
乃で此の場合黒は手抜する譯には行かぬ、で十二と打つて白の打込を拒ぎ隅を守つたのである、白十三は一見小サイ手の様であるが、黒に⑨若くは十三の點へ夾まれては非常な不利であるから、此く拓いて黒の夾撃を豫防したのである。

「註」黒十四常例の大塲で三子第二局十二の手と同意の着點である、

白十五を⑩と尖む手に打たぬのは前白五の手の次の「註」に説明してある理由によるのである。白十五を此く低く尖んだのは隅を犯して黒の眼を奪はうといふ意味もあるが、若黒が十六の手で⑪と頂けて來たならば十六へ縛込み黒⑫白⑬と此黒を愚形に歸せしめやうこの手を含んで居る、乃で黒も亦堅く十六と双關したのである、黒十八は隅に眼を持つたのである。

「註」白若十九の手で⑭と夾んで來たならば黒は⑮の點に衝き當り白が⑯に盤れば黒は⑰とアテ、白⑱黒⑲白⑳と隅の白を活かして白㉑を征に提る順序になつて黒萬歳である、初黒㉒の點に衝當つた時白若㉓の點を粘がは黒は㉔に下りキツて白の盤を拒ぎ、白が㉕へ行びて來た時黒は㉖と夾

第一手より第二十一手迄



む例の常用の妙手になるのである(黒⑮の時白⑯へ曲れば黒は⑰と附いて行びて居る即ち隅の白は逃れる事も黒を截る事も不可能である。

白十九は普通十四の一着ある故面白くない所なれど、此場合右側には一、十三の堅固な拓きあるを以て更に此方面より⑳と進むは些か勢力重複の嫌あり、且つ㉑より迫るとすれば黒に二十一と飛ばして十四の大塲を完成さす悞もある故、二十と尖頂られる苦痛は覺悟の上にて此く十九と打つたのである。

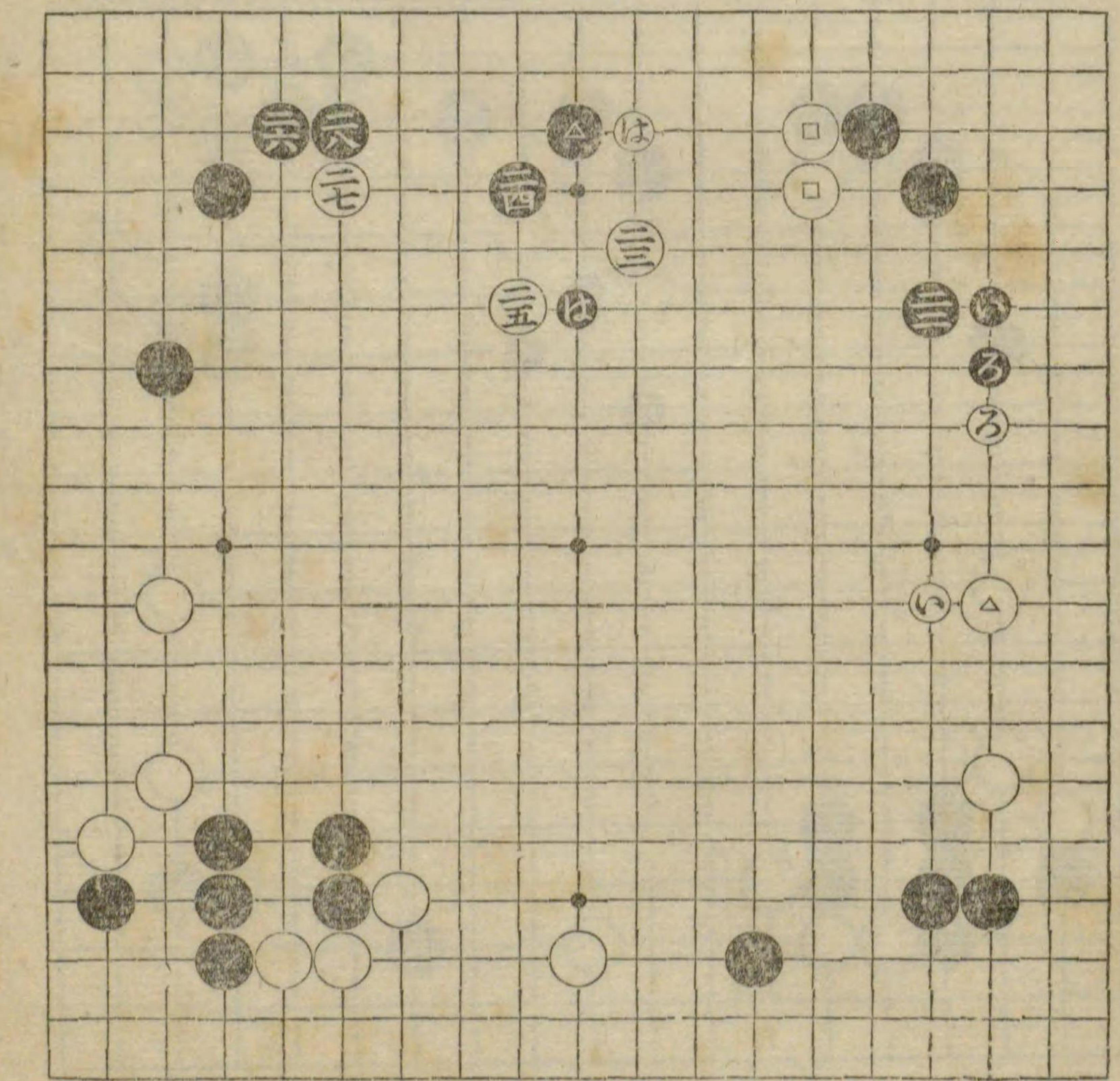


黒二十二は左右布石の關係上打つた良着である。

「註」左右布石の關係とは、右側△印に二間拓せる白の布石と、左方上側△印の黒に夾まれ且つ隅から尖頂けられて二子連立つて居る□印の白との關係を指すのである、更に詳解すると右側の△印白が若も一路高く○にでも在る場合ならば、次で白は此の○からの好拓きと右上隅への進撃とを兼ねて○と來る手があるから、黒十二は之が備へて低く○若くは○と打たねばならぬかも知れぬ、又右側で白から急に進撃される手はなくとも左方の白が○邊に拓があつて、たとへ黒が二十二と高く臨んだとしても別に白に何等の感じを與へぬ場合であつたならば是亦低く走つておく方がよい、

然し本圖の場合は右方は△印白の拓きが堅く低いためヨシ黒二十二が高く裾明になつて居たからと云うて白から急に○方面へ侵撃して來る程の芳ばしい處でもなく、左方□印二子の白は手重くなつて居て、黒が二十二と一路高く臨めば非常に痛切な苦痛を感じる境遇に立たねばならぬ場合であるから此の黒の一間高飛は左右何れの關係から見ても好着點である、  
本圖の様に左右共黒の着手に都合のよい様に出來て居る時は其でよいが、若何れか一方が黒の着手に不利に出來て居た場合は如何するかと言ふに、然ういふ場合には双方の利害得失の輕重大小を能く比較觀察して然る後其の着點を撰ばねばならぬ。

第二十二手より第二十八手迄

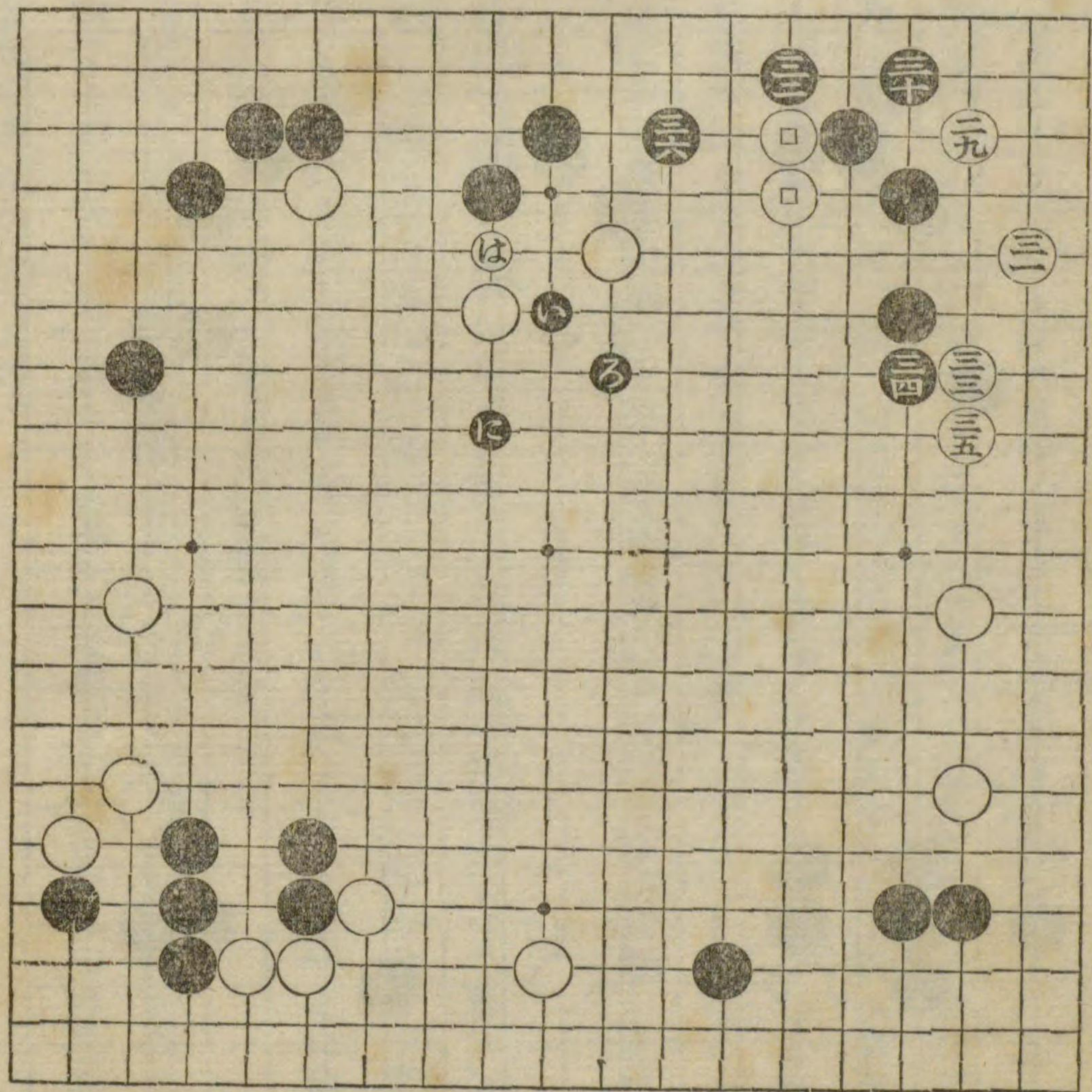


~~~~~(局子四法石布)~~~~~

黒二十四は左隅の黒地を厚壯にするに共し若し白が手抜したならば○から煽つて三子の白に迫つて益々自己の封域を大ならしめやうとの策である、白二十五は黒○の煽りを防いで、兼ねて左上黒地を消さうとの手である、黒が先づ二十四と尖んでおいてから二十六と隅を守つた手順がよい(若し二十四を打たずして單に二十六と打てば白から二十四の點に掛けられて黒の地は實に低いものになる)白二十七は軽く黒の地域を消す手段である。



「註」白が二十九と打込んだ時  
 黒三十は常用の手で白の盤を  
 拒く傍白をして容易に隅に活  
 きさせまいといふ意である、  
 白三十一と走るに至つて三十  
 二と綽ね以下白に三十三、三  
 十五と地を造らせて三十六と  
 打つた結果は右上隅及右側の  
 實利を擧げて白の領有に歸せ  
 じめた代償として上側四着の  
 白の根據を奪ひ全くダメに歸  
 せしめた振替手段が面白い。  
 三十六手以後に於て黒は⑤の斷  
 點を覗うて⑥と打ち白が⑦と衝  
 當つて之を禦いた時更に⑧と壓  
 する手もあるが然し四子を布い  
 た棋としては或は打過の誹があ  
 るかも知れぬ。  
 「註」黒に三十二、三十六と打  
 たれた後□印白はカスであ  
 る、双方の死活にも勢力の消  
 長にも何等の關係はない此ん  
 な石に執着してはならぬ。

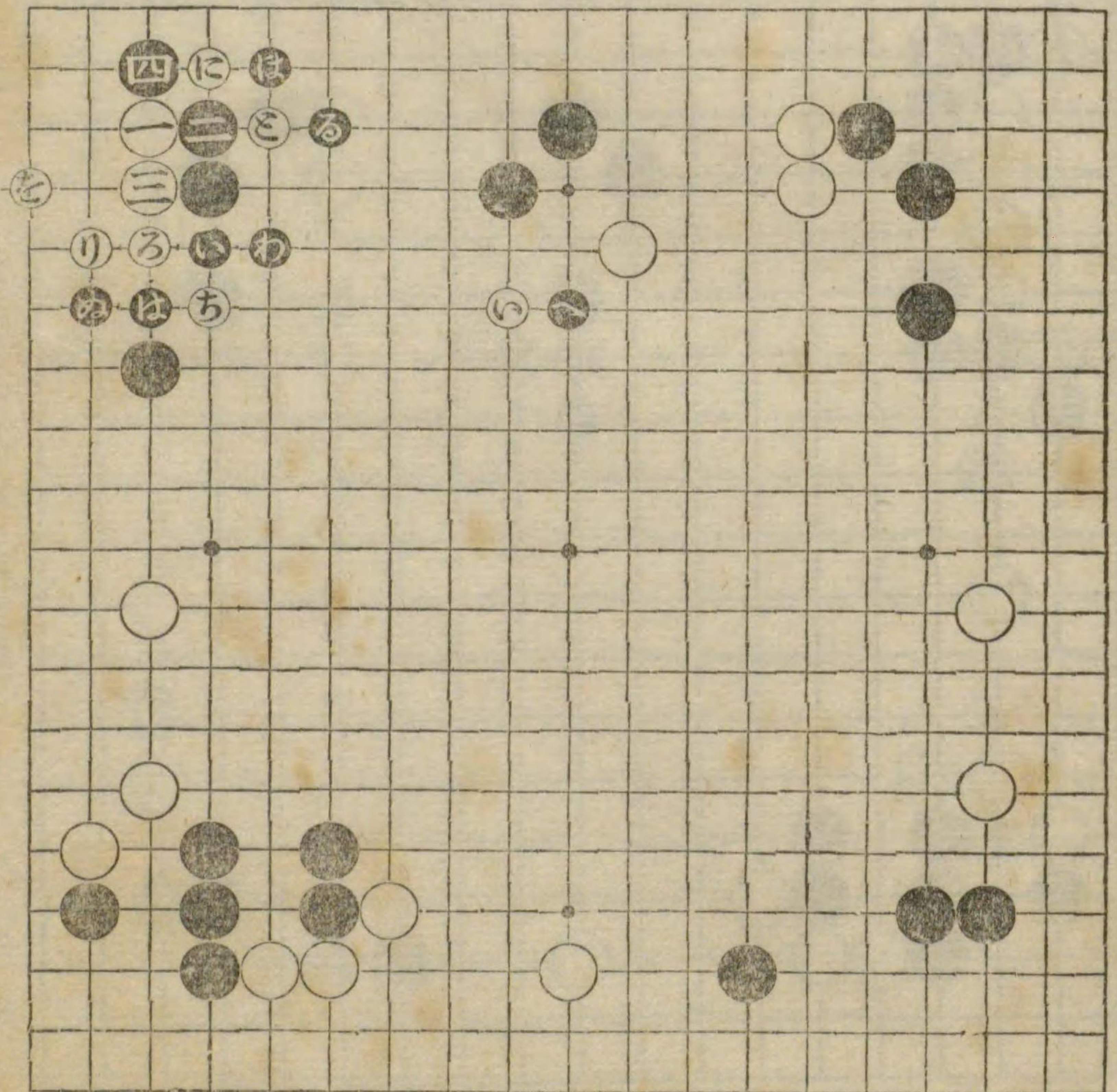


第二十九手より第三十六手止

四子第五局

(前局第二十五の手より變化)  
 白は前圖(二十五)⑤と煽る手  
 で一と三々に打込み茲に活を計  
 つて黒地を蹂躪しやうといふ手  
 である、黒四の手で⑥と行び白  
 ⑦の時黒⑧とキメツク白⑨と綽  
 ね黒⑩と抑へ白四の點を粘ぎ、  
 黒⑪と煽るといふ手順に出ても  
 悪いといふ譯はないが⑫及⑬に  
 斷點があつて味が悪い、  
 又⑭と行びる手で⑮の點に酷し  
 く抑へ白⑯の時黒⑰へ二段に抑  
 へ白⑱の點を截り黒⑲に粘ぎ、  
 白⑳黒㉑白四黒㉒と掛粘ぎ白㉓  
 と掛粘いで活き黒亦㉔と抱へて  
 白㉕の一子を提る手順となるが  
 此くては先手で㉖に煽るといふ  
 事が出来ぬ。

第一手より第四手迄



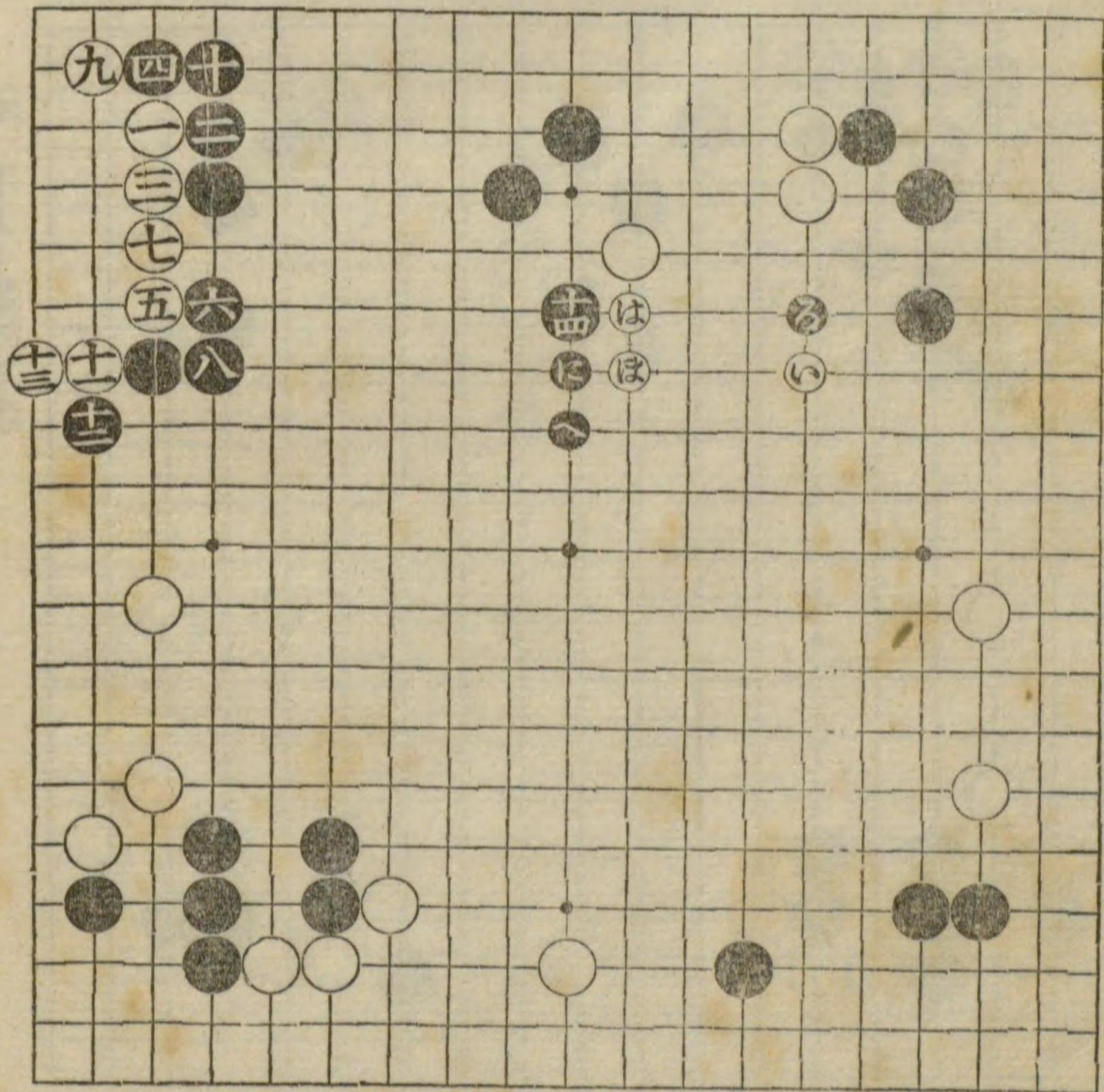
~~~~~(局子四法石布)~~~~~



乃ち前二種の黒の打方は普通の  
 應接であつて、決して悪いとい  
 ふ譯ではないが、一は味の悪い  
 手が残り一は先手を失ふので、  
 本圖の黒四は味を無くしておい  
 て先手で十四と白に迫らうとい  
 ふ手である。

「註」味即ち此の場合で言うど  
 「敵に乗せらるゝ缺點」或は「敵  
 に手段を弄せらるゝ餘地」と  
 でも言ふ可き間隙を残さぬ工  
 夫が一種の要訣である、局勢  
 の推移によつて意外の邊から  
 破綻を醸し必勝を期して居た  
 棋に敗を取る事も往々ある、  
 黒に十四と煽られた時白は⑥  
 と打つて凌いでおく可きて、  
 若手抜して⑦と黒に迫られる  
 と白⑧黒⑨白⑩黒⑪と一着一  
 着に白はダメに等しい手を打  
 ち黒は益々壮大を加へるとい  
 ふ不利に陥らねばならぬ。

第一手より第十四手止(四手迄再掲)



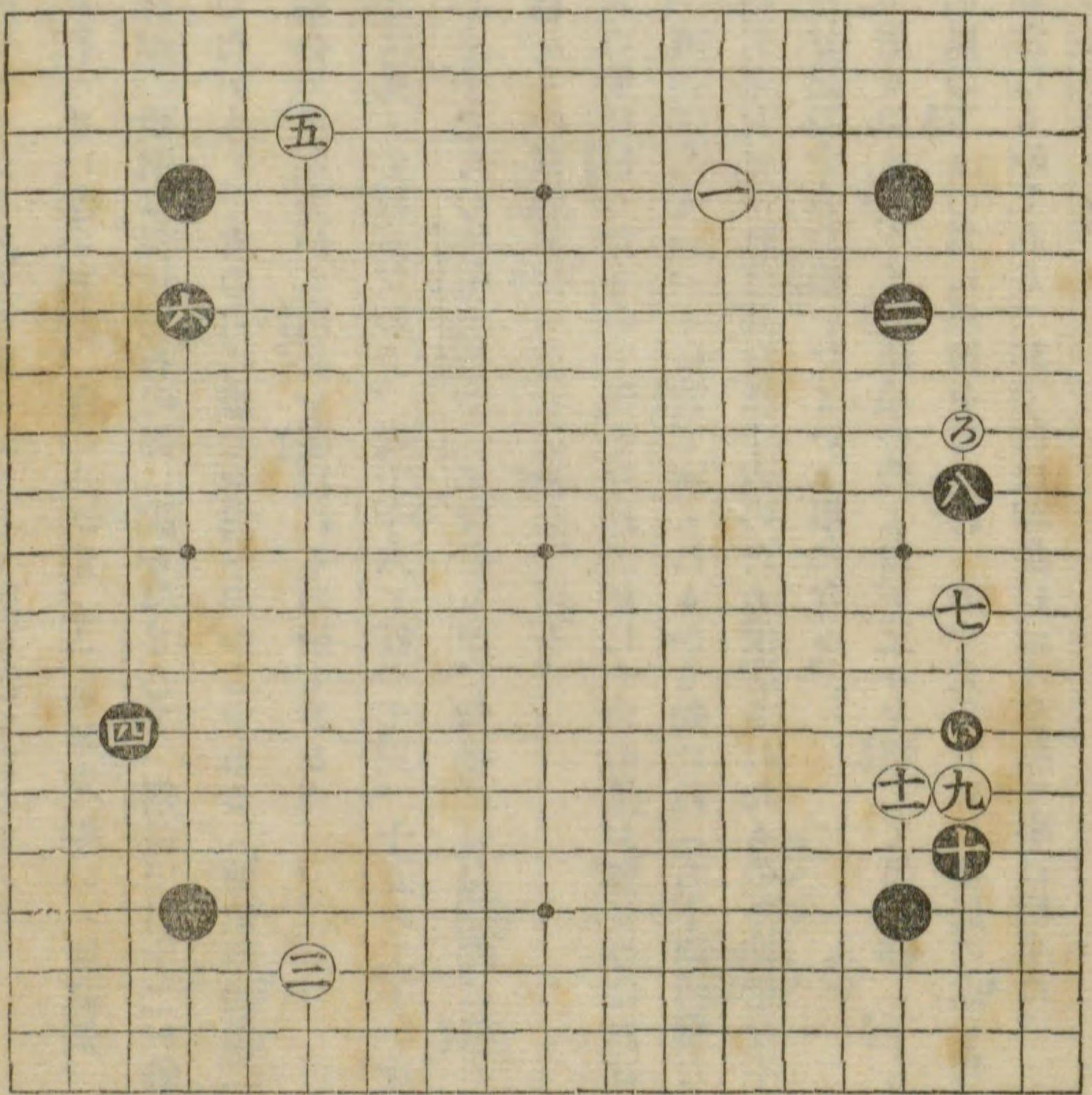
四子第六局

白七は見合の手である。

「註」右上に偏ると右下隅から  
 十分に詰られる、右下に偏れ  
 ば右上隅から廣く拓かれる、  
 即ち此の七の點は若黒が右下  
 隅から①と大斜走に來れば②  
 へ二間に拓かう、又右上隅か  
 ら八と來れば九に拓かうとい  
 ふ見合つて居る手(即任意の  
 行動の取れる手)である。  
 黒が十と尖頂けたのは七、九の  
 間が狭いからである。

「註」廣ければ尖頂はイカヌ狭  
 ければ十と十一と交換が利益  
 であるといふ理由は今迄に屢  
 々詳述した通りである。

第一手より第十一手迄



~~~~~(局子四法石布)~~~~~



黒十二は七、九、十一の白窄くて堅固であるから此く普通に斜走して隅を治つたのである。

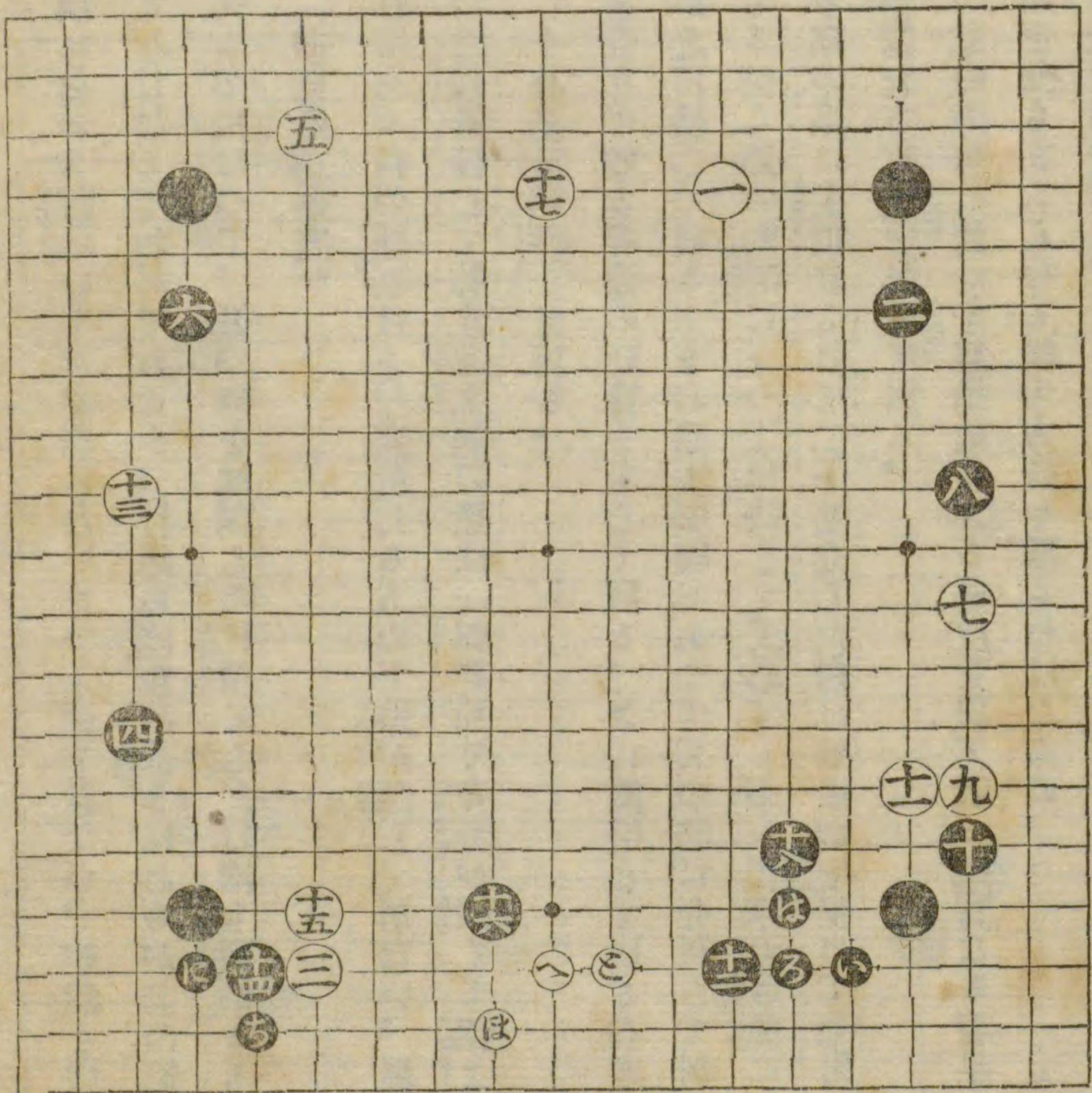
「註」小斜走掛の白に尖頂けて次に打つ手は①の雁行、②の小斜走、十二の斜走、③の一間高飛、十八の斜走煽、等色々あるが何れ詳細の説明は置棋定石の部に譲る事として、倅茲で黒十二が④の一間飛をしないのは假令高く打つたからとて右の白に感じを與へぬからである（前第四局黒十二の手の説明参照）且つ本圖の場合では左方から明裾を覗はれるの恐もある。

黒十四は單に⑤と下つて居ては緩いから此く尖頂けたので、次で十六と打つて三、十五の二子を攻めたのである、此の黒十六の着點は右方十二との均衡上打つた手であるが、尙是には白を⑥に低く誘致しやうといふ意と左下隅三々へ白からの打込を拒ぐ意とを含んで居る。

「註」白が若も③と來れば其は黒十六の策に陥つたもので何となれば茲に十六の黒が無ければ白は悠然として星下⑦に拓き得る所で、或は⑧迄も一パイに詰て來られるかも知れぬ（右下隅薄弱な關係上）然るに白が⑨と低く第二線に來たとすれば其は黒十六のため侵害されたもので非常な不利と言はなければならぬ、即ち其だけ黒の十六が働いたといふ事になる、

又此の十六が何故隅の打込を拒いで居るかと言うと、此場合若も白が三々を犯して黒に⑩と下られたとすると三、十五の二子は此の黒の下りの爲に根據を奪はれ一方十六のために發展の途を奪はれてをるから、其の蒙る慘害は非常なものである、其で白は容易に三々を犯す事は出來ぬ。白十七の着點も五と一との均衡上打つたのである、

第一手より第十八手迄（第十一手迄再掲）



（局子四法石布）

此の十七の白に對して黒が十八と打つたのは相互地域の均分から打算した着手である。

「註」白は最初一と打ち五と掛つた時の主旨を貫徹して十七と龐大な地域の圍ひをした、之に對抗して打つた黒十八は些か遜色がある様であるが能く調べると白十七に優ることも決して劣らぬ着點である其故は此の手は暗に右下隅への打込を拒ぎ兼て下側一帯の地域に勢力を加へる手で惹いては三、十五の白に感じを與へ、爲に黒の利は増大せらるゝ結果となるからである。



「前圖十八の手の残説」

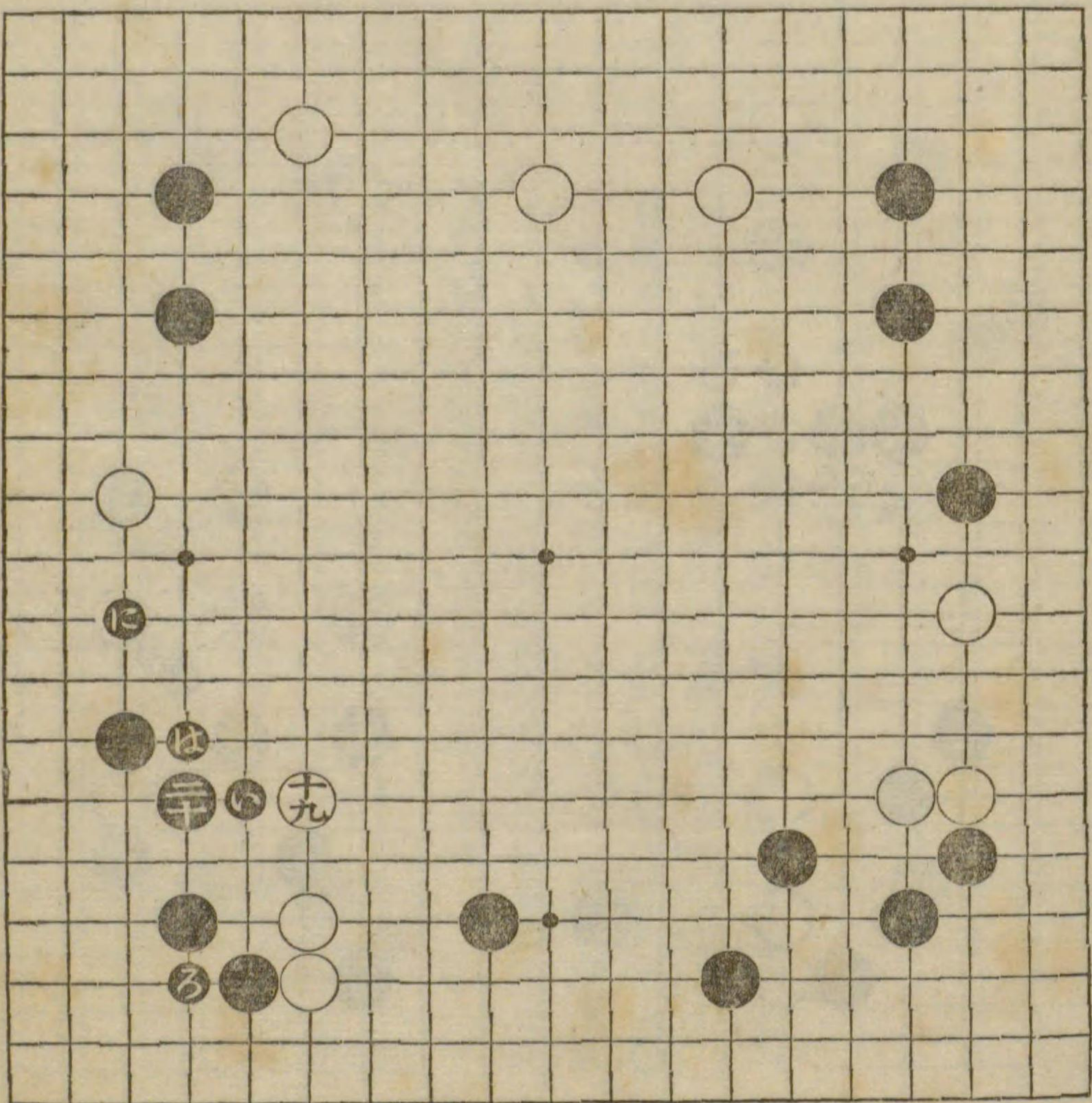
黒が此く十八と打つた後にも右下隅に白から打込む手が絶対にないといふ譯ではない、が然し假に白から今此の隅へ打込んで来たとしたならば如何であらう、打込めば無論活きはあがるが其の影響として右側の白は全く立ち場を失ふ事になつて、黒の隅を蹂躪した代償としては餘り高價なものを得た様な結果になるであらう（研究餘論参照）

尙本局上側に三子の白を以て圍はれてある白の地域はまだ漠然たるもので形が熟して居ない、黒から乗ず可き缺陷は少くない、且つ之に隣接して居る左上隅の黒は一問高飛で姿勢が軽く捌き易い趣がある、右上隅はと見ると已に十分姿勢が整うて居る、

之に反して下側の黒は五子の勢力を費して頗る勢力の旺盛を示して居る、之に隣接して居る右方三子の白は一見堅固の様ではあるが之に接して居る上下の黒も堅固であつて其の間に介在して居る白の拓きたるや狹隘な二間拓であるから黒の動靜によつては決して安心する事が出来ぬ状態にある、又左方は如何かと思つると左下隅の黒に尖頂けられて二子連立した白は前後敵を受けて如何に此の難關を切り抜けんかと苦心慘憺たる有様を呈して居る、

此る優勢な側に立つて居る黒は敢て敵の虚勢に驚かず悠揚迫らざる態度を以て着々堅實なる着手を以て、自然に敵をして手の出る所を知らざらしむる様の方針を採らねばならぬ、之を以ても四子を布置した勢力の偉大な事が解る。

第十九手より第二十手迄

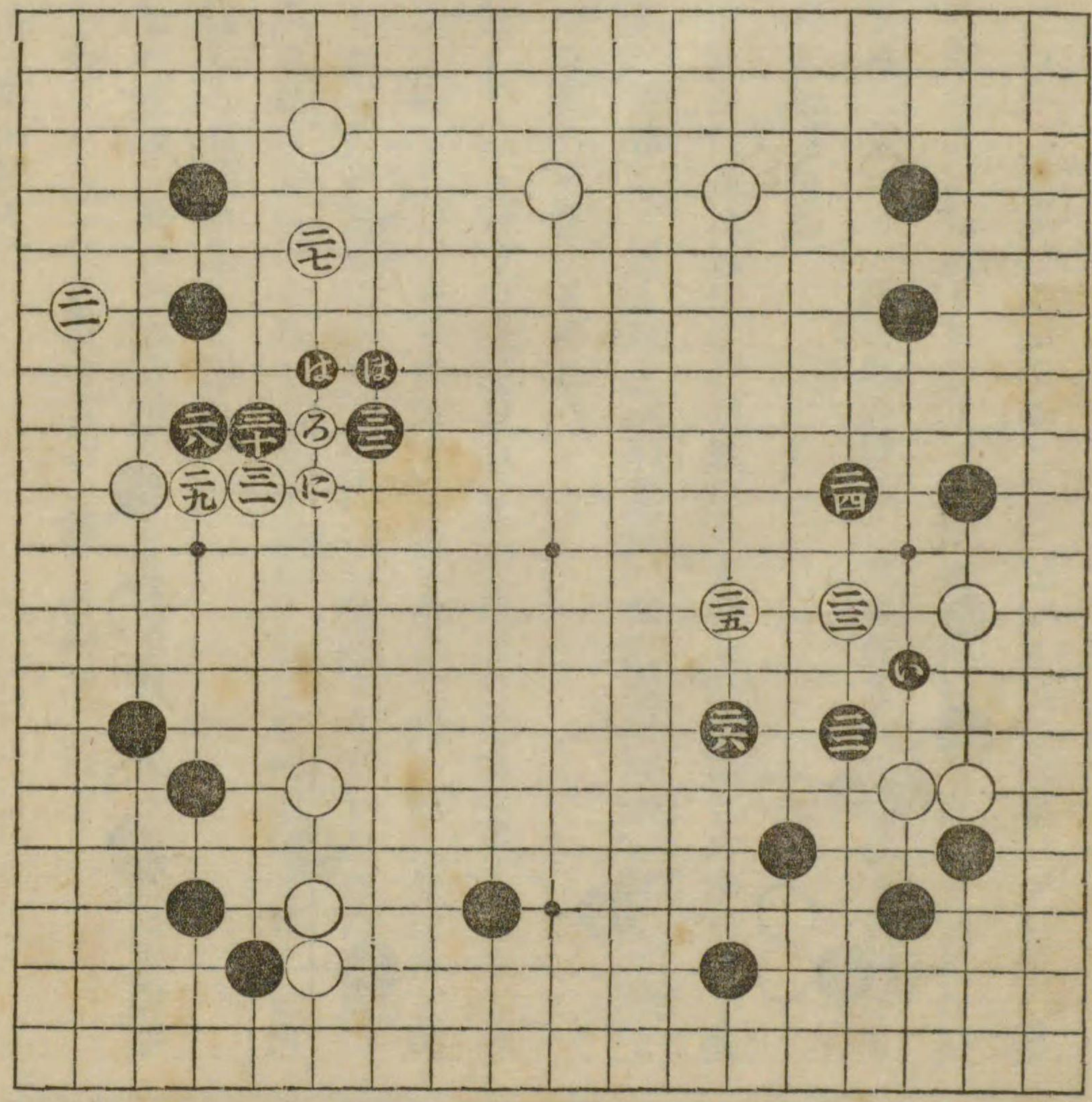


白十九は若黒からと斜走に煽られたならば非常に苦境に立たねばならぬから之を拒いで勢力を伸張したのである、  
黒二十は隅の備を立て、暗に三子の白に迫つた手である。

「註」黒二十の一手は極めて勢力の重複した萎縮した手の様に見えるが、此の場合致し方がない、即最初尖頂の手のため此ういふ姿勢になつたのであるから、若此の尖頂の一手をに下つたものとし一路控へると、今茲で打つ二十の一手が若くはに一路伸びる事になるから要するに同じ割り合である。



第二十一手より第三十二手止



(四十四、布四子)

白二十一は左上隅黒の眼を奪う  
て兼て左側の我一子に勢力を加  
へたのである、

黒二十二は此の白を攻め暗に牽  
制して右上及右下への打込を拒  
ぐ策である、

黒二十六は暗に尖みを利か  
し兼て右上右下への打込を拒ぎ  
併せて下側の地域を堅實にした  
手である。

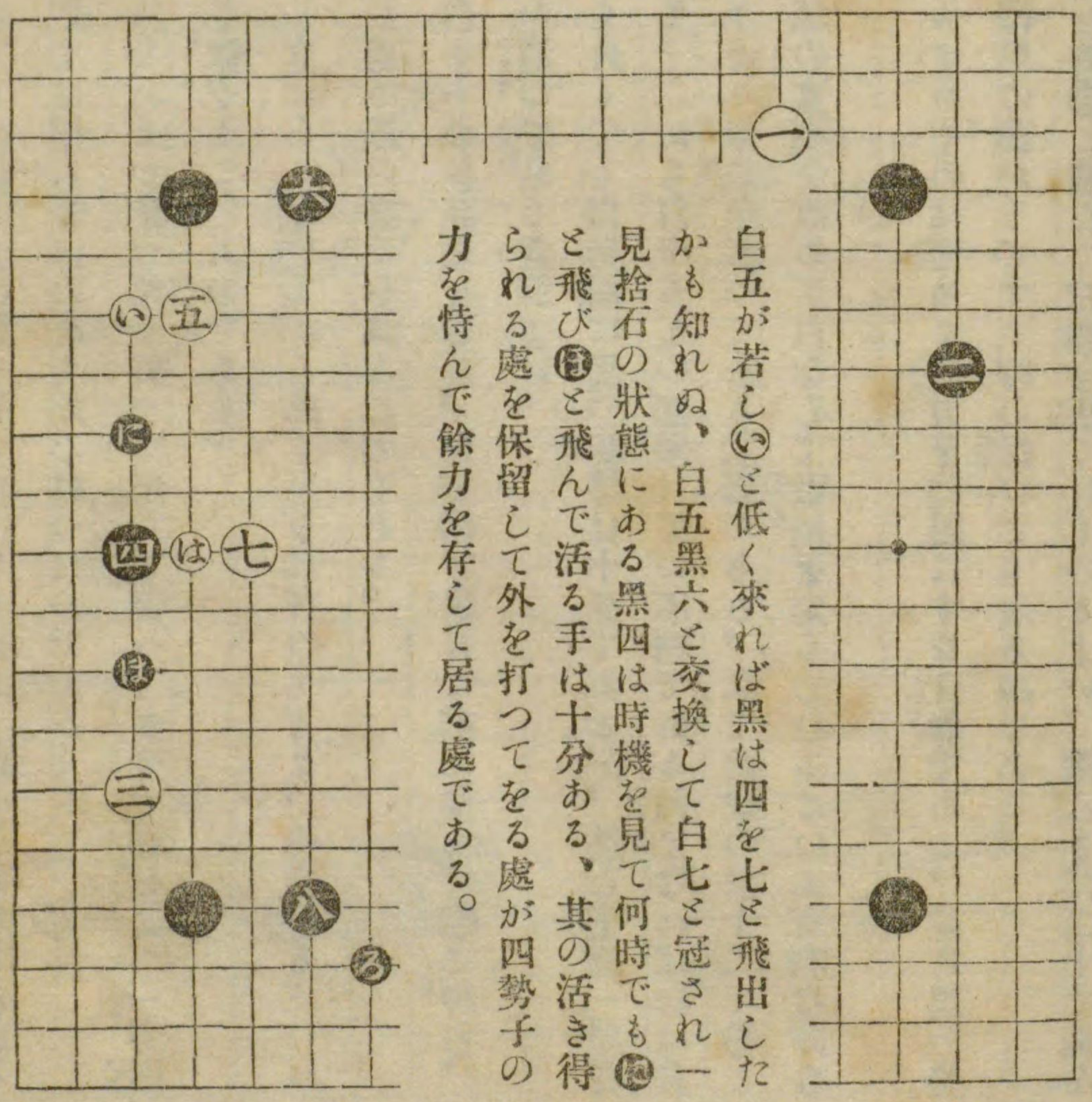
「註」白若るに縛込ばとアテ  
白と粘いだ時黒亦と粘ぐ  
がよい、白若るに縛込ます單  
にと出れば黒亦の點に粘  
ぐがよい。

四子 第七局

黒四は八若くはと普通に應じ  
てもよいが、其を此く反對に目  
下から詰返したのは白若し三の  
一子を動けば五の點に打つて左  
上に大地域を劃さうとの意も含  
んでをる、但し變通自在を主と  
して必しも拘泥せぬのが佳い、  
白が五と打つたのは黒四の一策  
を破つた手とも言へる、此の手  
は黒若手抜すれば七と冠しやう  
との意も含んでをる。

「註」要するに此の處は、白  
三、黒八、白、黒六、白  
となつたものと見てよい、然  
るに黒が四と一子を投じに  
在る可き白が七と一間高く在  
る状態となつただけである、  
即ち單に三子の白のみで圍う  
て居るよりは四の一子の捨石  
があるだけ黒の利益である、

白五が若しと低く來れば黒は四を七と飛出した  
かも知れぬ、白五黒六と交換して白七と冠され一  
見捨石の状態にある黒四は時機を見て何時でも  
と飛びと飛んで活る手は十分ある、其の活き得  
られる處を保留して外を打つてをる處が四勢子の  
力を持つて餘力を存して居る處である。



第八手迄



白九の手は若し△印黒を捕虜とする考ならば⑨と手数を費さねばならぬが、四子を置かした此の局では然う一局部分に勢力を勞して居ては間に合はぬから此く打つたのである。

「註」 白九は一見不得要領の手の様であるが先づ此く打つて暗に下側へも多少の響を與へ一方圍うた□印白の連絡にも備へて時機を觀やうといふのである。

黒十は、先づ十八と尖頂け白を十九と立たしておいてから此く星下に打つてもよいのである。

白十一は九の一子と相待つて左下隅に迫り黒の應手を試みたのである。

黒十二は右下隅から⑫と走つて茲に白十一の發展地を奪ひ、白が⑬と掛けて來たならば⑭と押し、

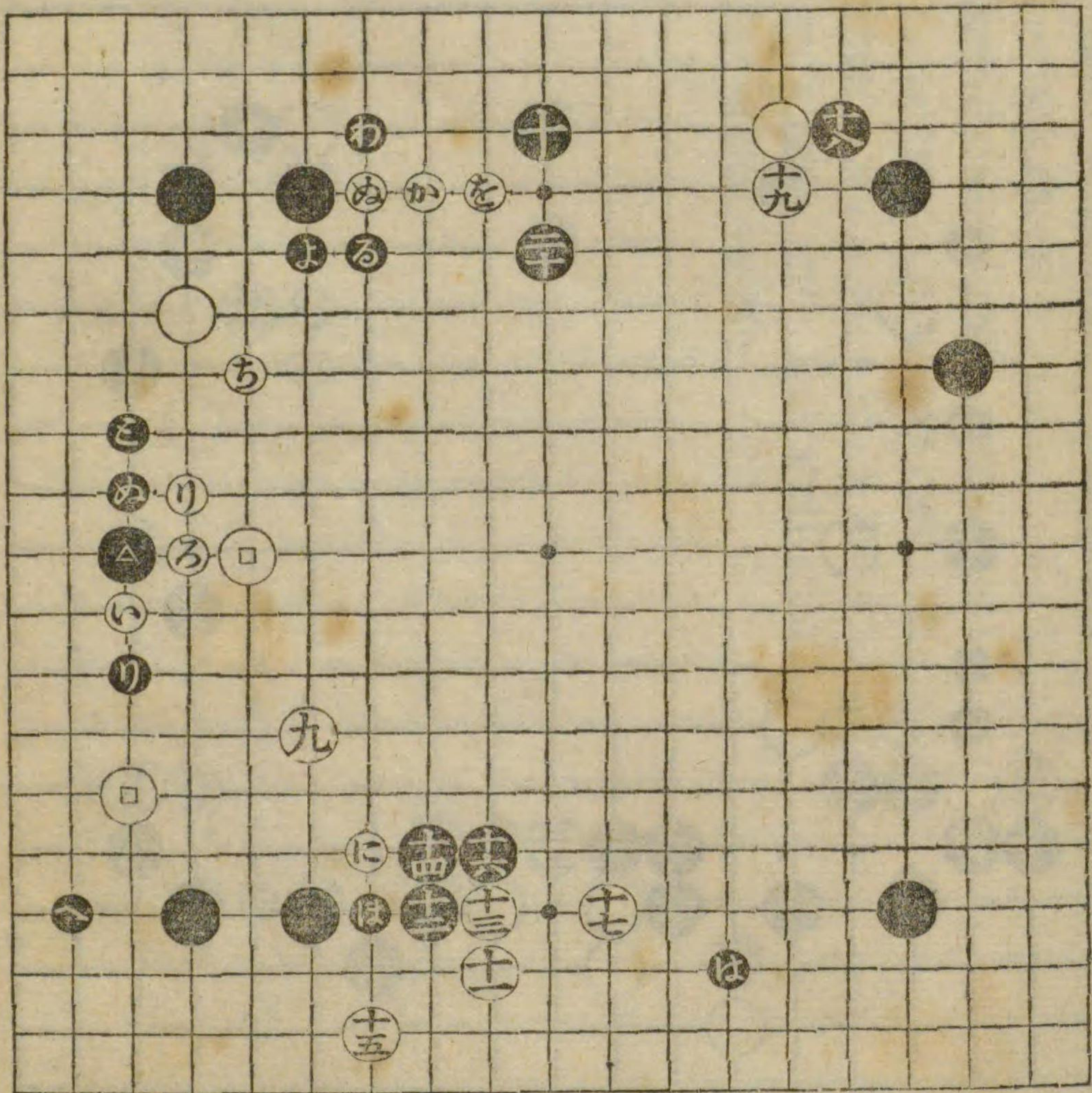
白十四と應じた時⑮と飛んで左下隅を治つておく方がよい。

「註」 本局は四子の勢力があるから此くても尙局面に黒の勝勢は十分であるが、然し下側一局部の上に就て言ふと白十一に應じた黒十二から白十五迄の應接は黒の不利である何となれば白は着々實利を占め行くに反し、黒は一手々々散地を打つてをる状態である、其で前説の黒十二で⑮と打つ手順に出れば、黒は左右に地域の實利を收めて白をして散地を走らしむるといふ有利な譯合になる。

黒が十六と曲つて白十三の頭を止めておくのは極めて勢力を強固にする良着である、茲に黒の勢力を加へるのは、暗に他日左側△印黒の動かうとする時の援けともなる譯である。

黒十八の手で⑱と打ち、白⑲と尖んだ時⑳と飛んで左側を活ておくのもよい、然しまだ二十と飛ん

第二十手迄



(局子四法石布)

でない前であるから白に㊦と尖まれた影響として白から㊧と頂けられ策を廻らされる事は覺悟をしておかねばならぬ、黒が十八と尖頂けて十九と立たせ二十と飛んで左上の地域を確かにしたのは常用の良着である。

○問 黒十八の手で㊨と打ち、

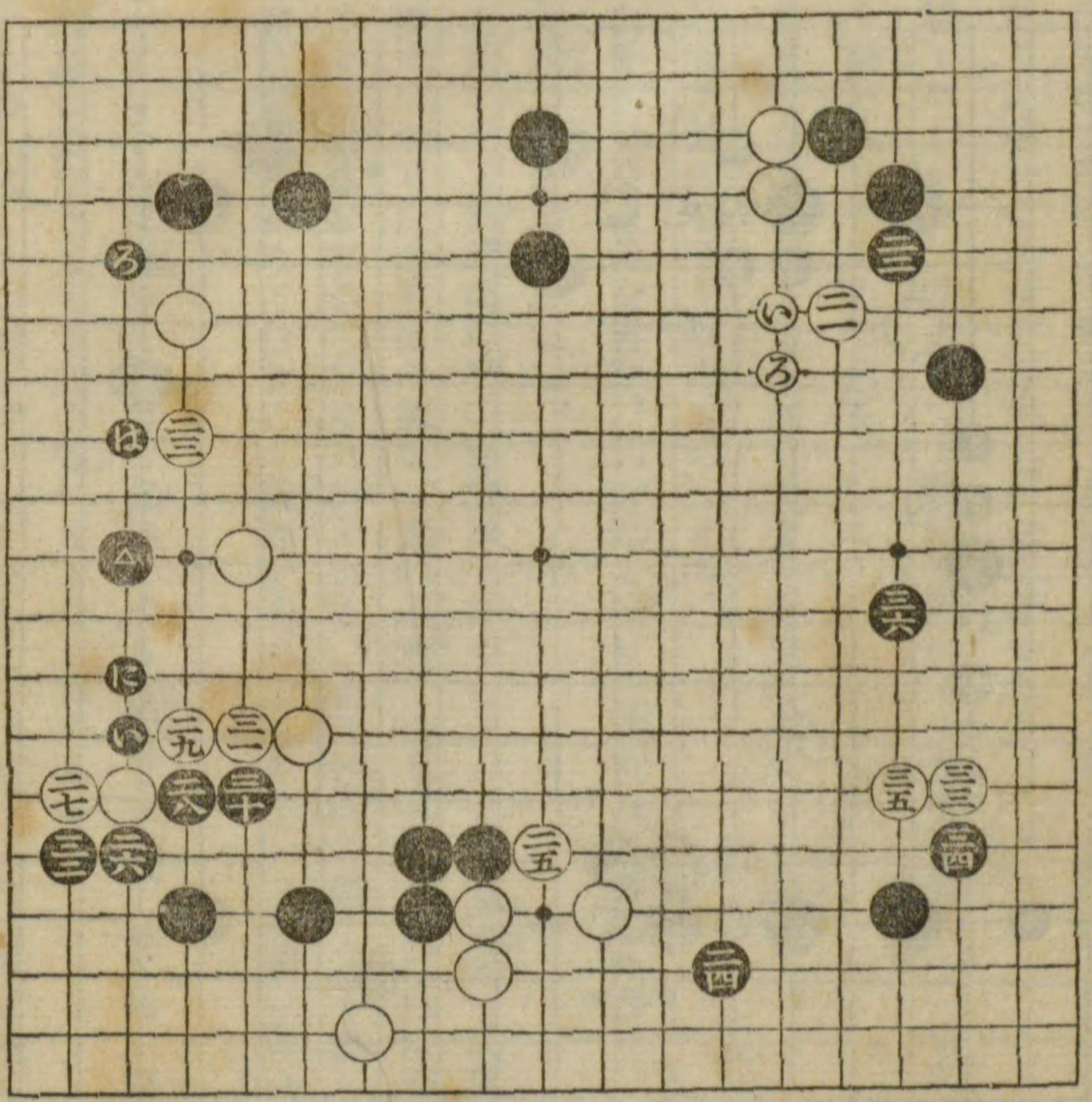
白㊩の黒の後白が㊪と頂けて來た時は黒は如何に應接す可きか

△答 白は㊫と覗き㊬と粘がした上㊭と頂ける黒の時白㊮と打てば黒㊯とアテる若又白㊰と飛ばす㊱と行ければ黒㊲と粘ぐ其の結果如何に變じても結果は黒の利である。



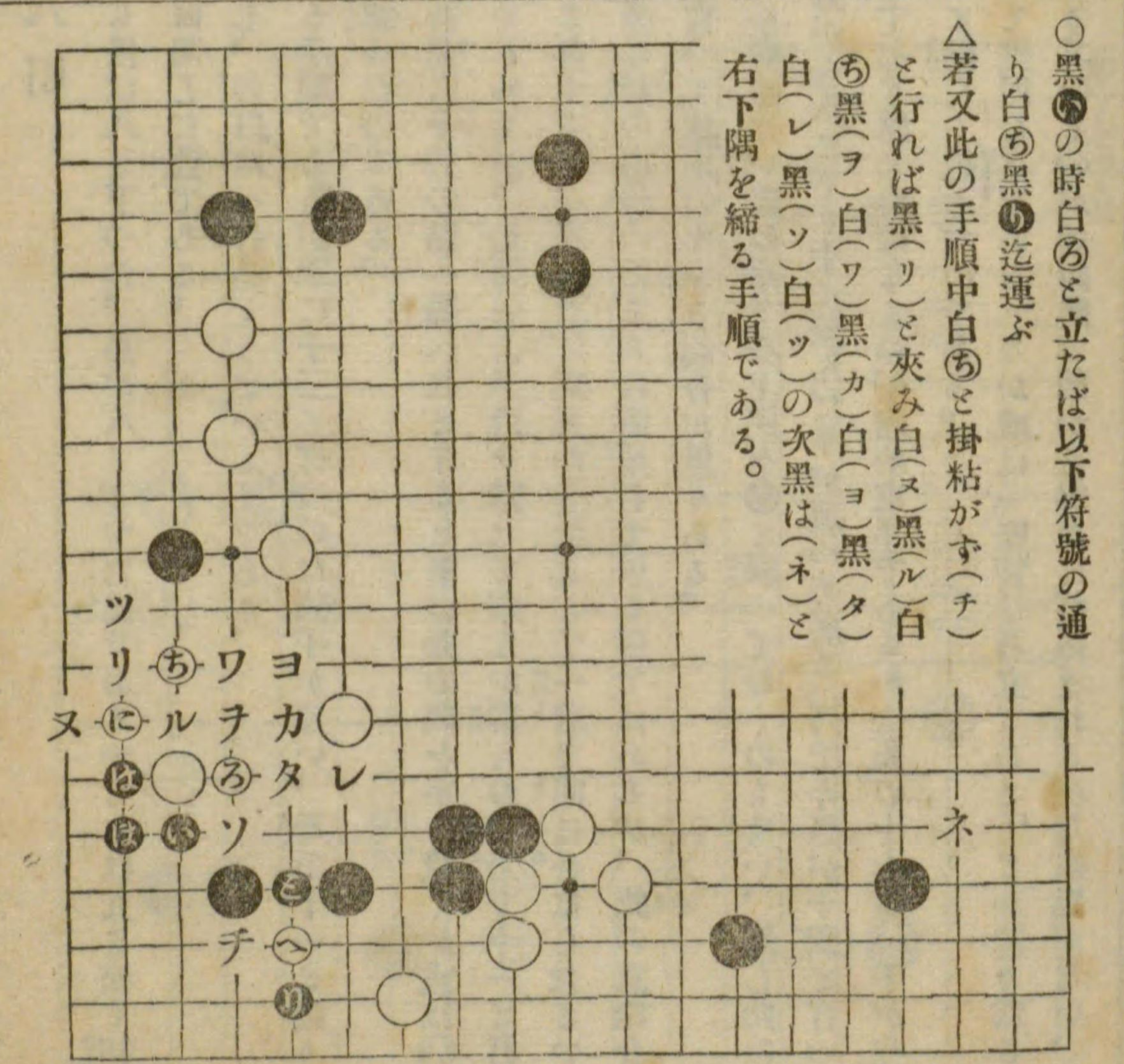
白若し二十一の手で⑤若くは⑥と緩慢なる點に下せば忽ち黒に⑦、⑧と活きられ左側一帯黒の蹂躪に任せ白は非常の敗勢を醸さなければならぬ。

「註」白は二十三と打つて左側△印黒の生路を扼して來た乃で黒は全局の中でまだ一手も備への施してない右下隅に二十四と打ち下側の白に迫つて二十五と膨らませ、自然の調子を以て二十六と尖頂け此隅の治りをつけたのである、白二十三の手の來ぬ前は黒は容易に二十六以下の手順は履めぬ、何故なれば黒は何時でも⑨と打ち⑩と飛んで先手で



第三十六手迄

活る理があるからで、然し白二十三が來てからでも尙黒は活る手も無いではなからうが、強いて茲を活きやうとすると(白二十三のある後は)周圍の白に堅壁を造らしめ其の影響として上下兩隅の黒は少からの損害を招く事になる即ち一を得て二を失ふの結果になる、其よりは本圖の通り運んでおけば⑪の截提もあり⑫の尖も利いてをるから、一を興へて二を得るの利益を収める事が出来る。



○黒⑬の時白⑭と立たば以下符號の通り白⑮黒⑯迄運ぶ  
△若又此の手中白⑰と掛粘がす(チ)と行れば黒(リ)と夾み白(ヌ)黒(ル)白⑱黒(ヲ)白(ワ)黒(カ)白(ヨ)黒(タ)白(レ)黒(ソ)白(ツ)の次黒は(ネ)と右下隅を締る手順である。

ツ  
リ  
ヌ  
⑮  
⑯  
⑰  
⑱  
⑲  
⑳  
㉑  
㉒  
㉓  
㉔  
㉕  
㉖  
㉗  
㉘  
㉙  
㉚  
㉛  
㉜  
㉝  
㉞  
㉟  
㊱  
㊲  
㊳  
㊴  
㊵  
㊶  
㊷  
㊸  
㊹  
㊺  
㊻  
㊼  
㊽  
㊾  
㊿  
ネ  
チ  
ソ  
ル  
カ  
タ  
レ  
ヲ  
チ  
ヲ  
チ  
ヲ  
チ

(局子四法石布)



四子 第八局

「註」 白の九がない前であるから黒は八と下つた、黒が八と下つた後であるから白は九と狭く拓いた、此巧妙な策戦は從來屢々説明した通である。

黒十は我が隅への打込を拒ぎ三、七、の白地へ打込まうといふ手である、

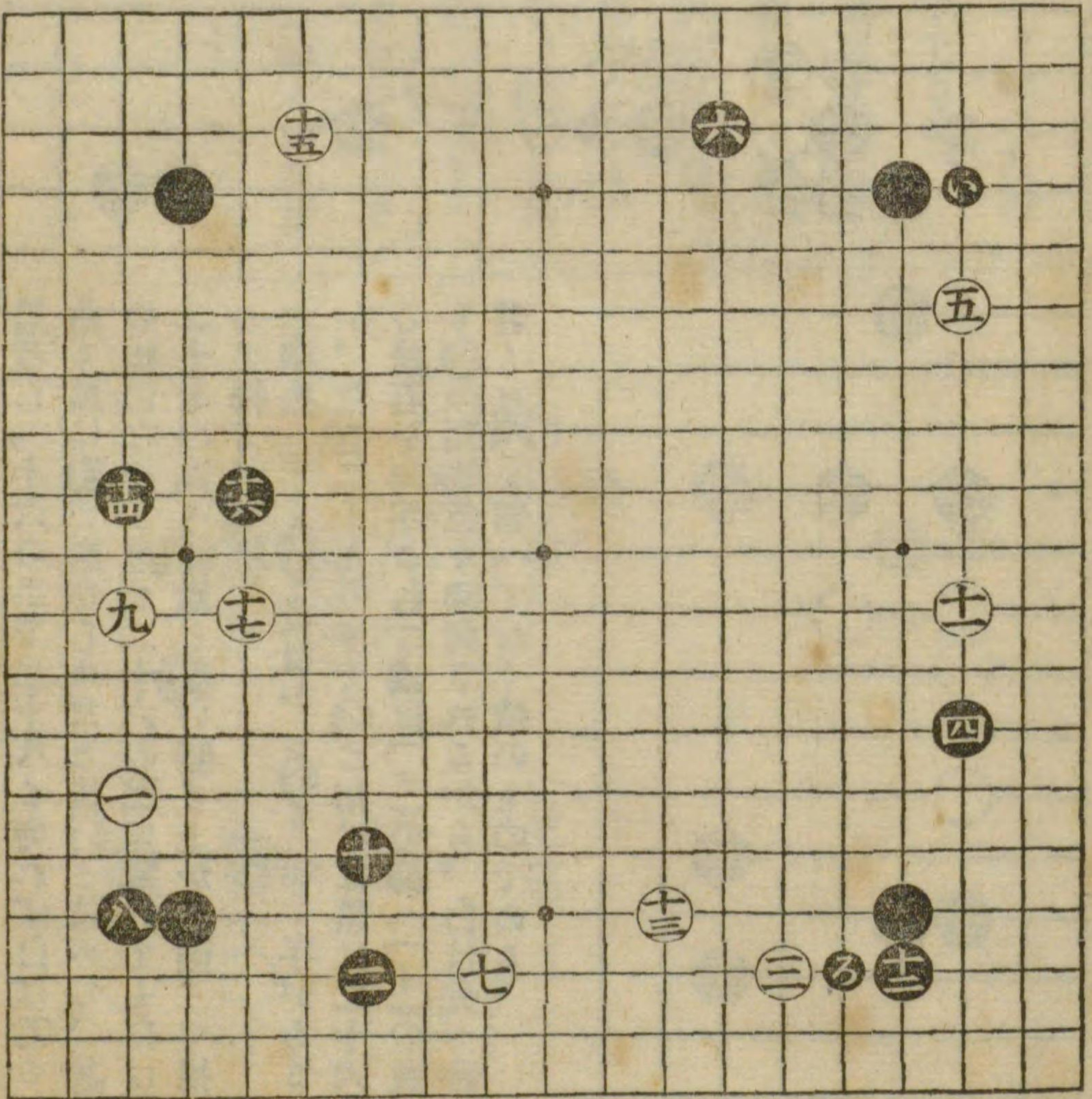
白は此の打込を防いで十三と備へる手順であるが單に十三と打つのは調子が悪い、乃で十一と迫り黒に十二と下らせて然る後十三と圍うたのである。

「註」 白が若し十一、十二の交換前に十三の點へ備へたとすると黒は此の隅を手を抜くか或はと尖頂け十三の一子を愚形に歸せしめるか、如何いふ手段を講じて來るか解らぬ、乃で十一と打ち黒に十二と打たせた上であると白十三の一子は黒に双方から迫らして一着で間に合はしたといふ様な趣もある、此ういふ處は少し棋の心得のある人は慣用して居る形ではあるが、此の意味合をよく會得しておく、實戦に當つて應用の出来る場合が屢々ある。

黒十四は必しも此く打たねばならぬ事はない此の手で右上隅を縮つておくのも良い、然し此の白一、九の拓きに對しては已に下方から八と下り十と飛んだ手が迫つて居る、乃で今黒が十四と打つたのは次に十六と飛べば白は必ず十七と應じねばならぬ所謂約束手であるから此の十六の一手が先手で利くといふ事を見越して十四と酷しく迫つたのである。

「註」 元來此の二間拓は「極めて堅固な拓である」とか或は「堅實な石立である」とか屢々稱されてをるのであるが、其は唯拓き其のものが短距離で敵から容易に打込まれる様な缺點がない、

第十七手迄

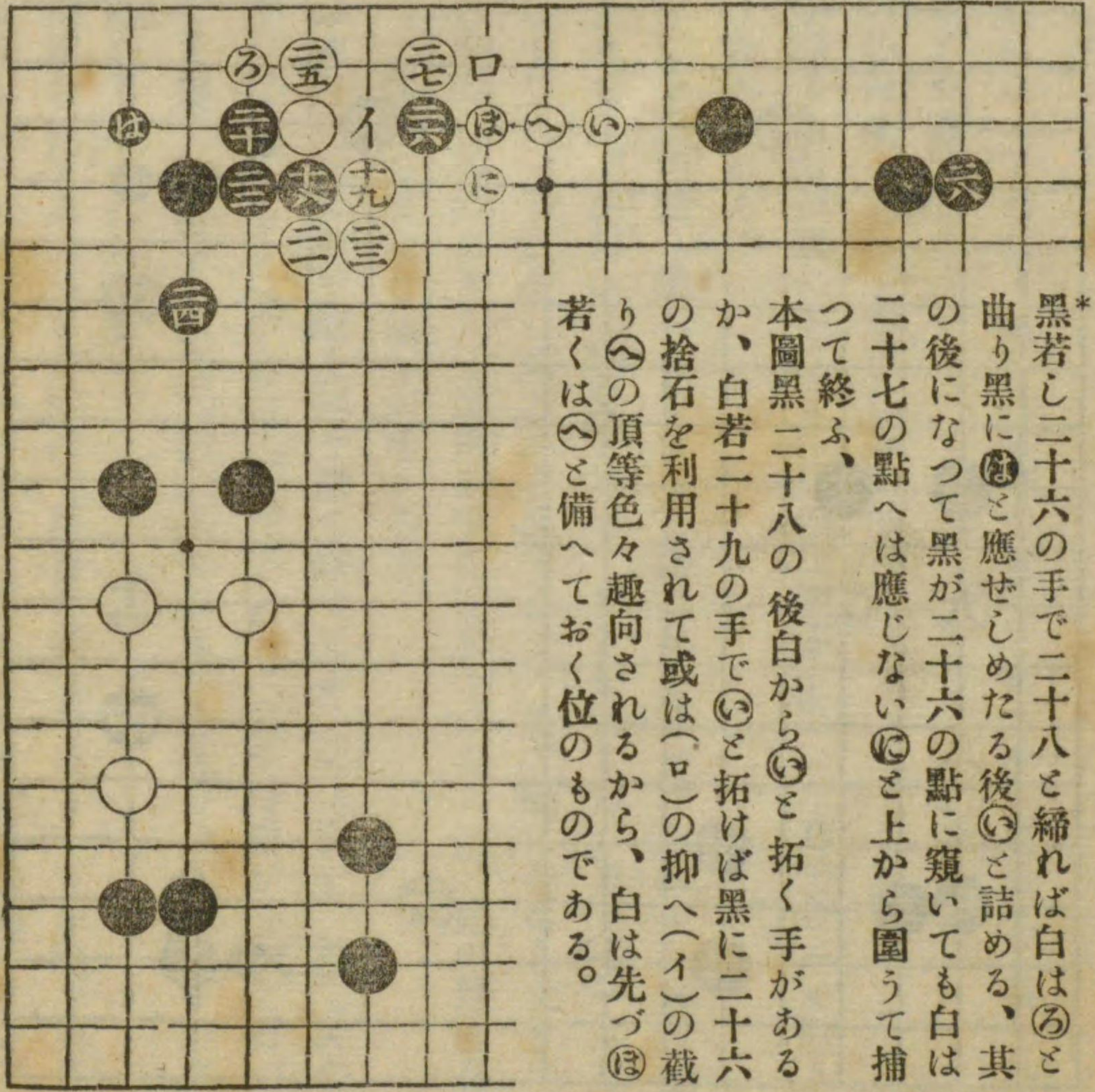


といふ事を意味した迄であつて、如何なる場合如何なる處でも絶対に堅固であるといふ譯ではない、其で若も附近の敵が堅固に打つて來た時は決して油断は出來ぬ、是即黒十六と白十七の交換を約束手と稱する譯である、此等は他の深妙な布石の意義とは違つて極めて明白な且つ平凡な事柄ではあるが、此の機微を利用する實地の策戦に至つては攻める方も攻めらるゝ方も共に細心の工夫を要するのであるから極初心者のため、婆心茲に一言を附記しておく。



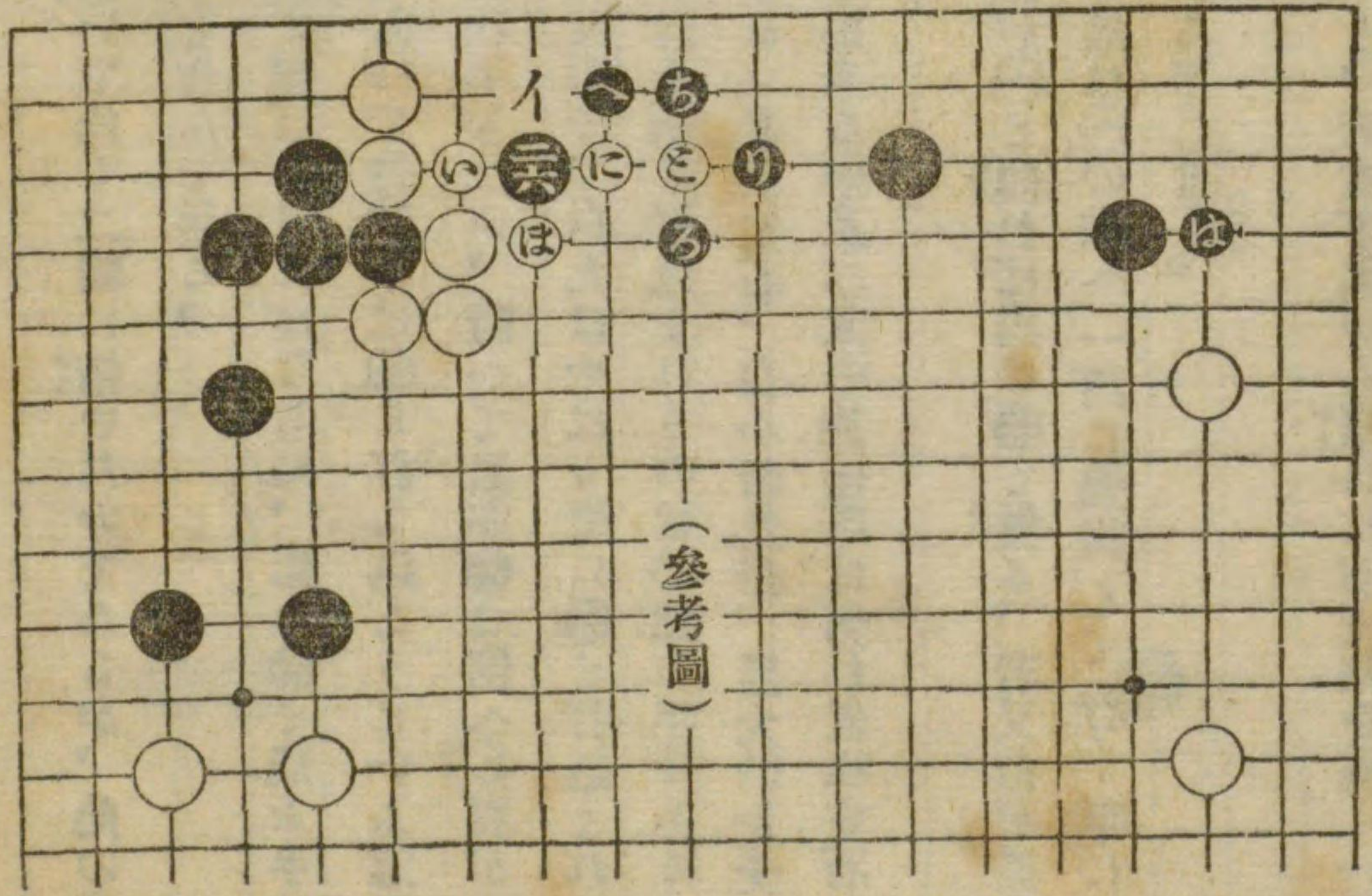
黒十八、二十の頂抑へは二十の  
 點の尖頂を働かした手である。  
 「註」 何故此の頂抑への手が  
 尖頂よりハタライて居るかど  
 いふと、若此の十八の手で黒  
 が二十と尖頂けたものとする  
 と、白十八の點に立ち黒二十  
 四と飛んだ、時白に㊦と詰め  
 られる手順になる、然るに此  
 の頂抑へた十八、二十、二十  
 二の結果は二十三、若くは  
 (イ)の點に白の缺點を残す手  
 であるから、黒が二十四と飛  
 んだ後白若二十五と下らず㊦  
 に詰れば、後に黒から(イ)と  
 一子を截り提られて白の根據  
 は薄弱になる(此の二十五と  
 白が下ると、黒に(イ)と一  
 子を截提られるとの得失は  
 二十目以上の差がある)其で  
 大抵の場合白は二十五と下ら  
 ずには居られぬ。  
 黒二十六は白を牽制して㊦の詰  
 を妨げる手である。何となれば

第二十八手迄



黒若し二十六の手で二十八と縮れば白は㊦と  
 曲り黒に㊦と應せしめたる後㊦と詰める、其  
 の後になつて黒が二十六の點に窺いても白は  
 二十七の點へは應じない㊦と上から圍うて捕  
 つて終ふ、  
 本圖黒二十八の後白から㊦と拓く手がある  
 か、白若二十九の手で㊦と拓けば黒に二十六  
 の捨石を利用して或は(ロ)の抑へ(イ)の截  
 り㊦の頂等色々趣向されるから、白は先づ㊦  
 若くは㊦と備へておく位のものである。

○参考圖 黒二十六と覗いた時白若し二十七の手  
 で㊦と粘げば、黒は㊦と斜走しておく、其は白若  
 し手抜をすれば(イ)と下らうといふ手である、  
 黒に(イ)と下られては管黒に十分な地域を造らせ  
 るといふばかりでなく、白自身の根據を失ふ譯で  
 あるから白は是非共(イ)と緯ねなければならぬ、  
 其時黒は㊦と右上隅の「縮り」をする手順になる、  
 若又白が二十七の手を(イ)とも頂けず、㊦とも粘  
 がす㊦と腹に頂けて來たならば、黒は(イ)と下つ  
 て、白に㊦と上から抑へさせて㊦と下を遊ぶので  
 ある、次で白㊦、黒㊦となつた時白が㊦と出れば  
 黒は㊦の點を截つて白二子を捕とする、若又白  
 ㊦と出す㊦と粘げば、黒は㊦と緯ねておく、  
 以上何れになつても黒二十六の一子が十分に活動  
 してをる事は確である。



(局子四法石布)



四子 第九局

白七は、黒六の下りと相待つて夾攻められる急な手を凌いで此く二間に拓いたのであるが、此の手で⑦と單關してもよい、其は次で⑧と打込まうといふ手を含んで居る、

若白が七の手を⑧と飛べば、黒は白⑧の打込を拒いで⑨と飛ばなければならぬ、此の⑨と飛ぶ手は自ら左上隅に防備を施すと同時に、左側一、五の白地に向つて⑩と打ち込まうといふ意である、然るに本圖は白が七と拓いたから、急に⑪と打込む手もない、随つて黒亦⑫と備へる要がないから八と左下隅に防備して、暗に⑬と打込まうと覗つたので、白九はやはり黒に⑭と打込まれるに備へた手である、白若し此の手で⑮と飛べば、黒から忽ち⑯と打込まれるのは必然の手である。

「註」 白一、黒二、白三、黒四、白五、黒六迄の應接は「置棋定石、白小斜走掛、黒大斜走受」の手順である、白七の手を⑧と立つた後、⑨と打込の出来る事及び其の應接等は何れ置棋定石の部で委曲説明する事である、

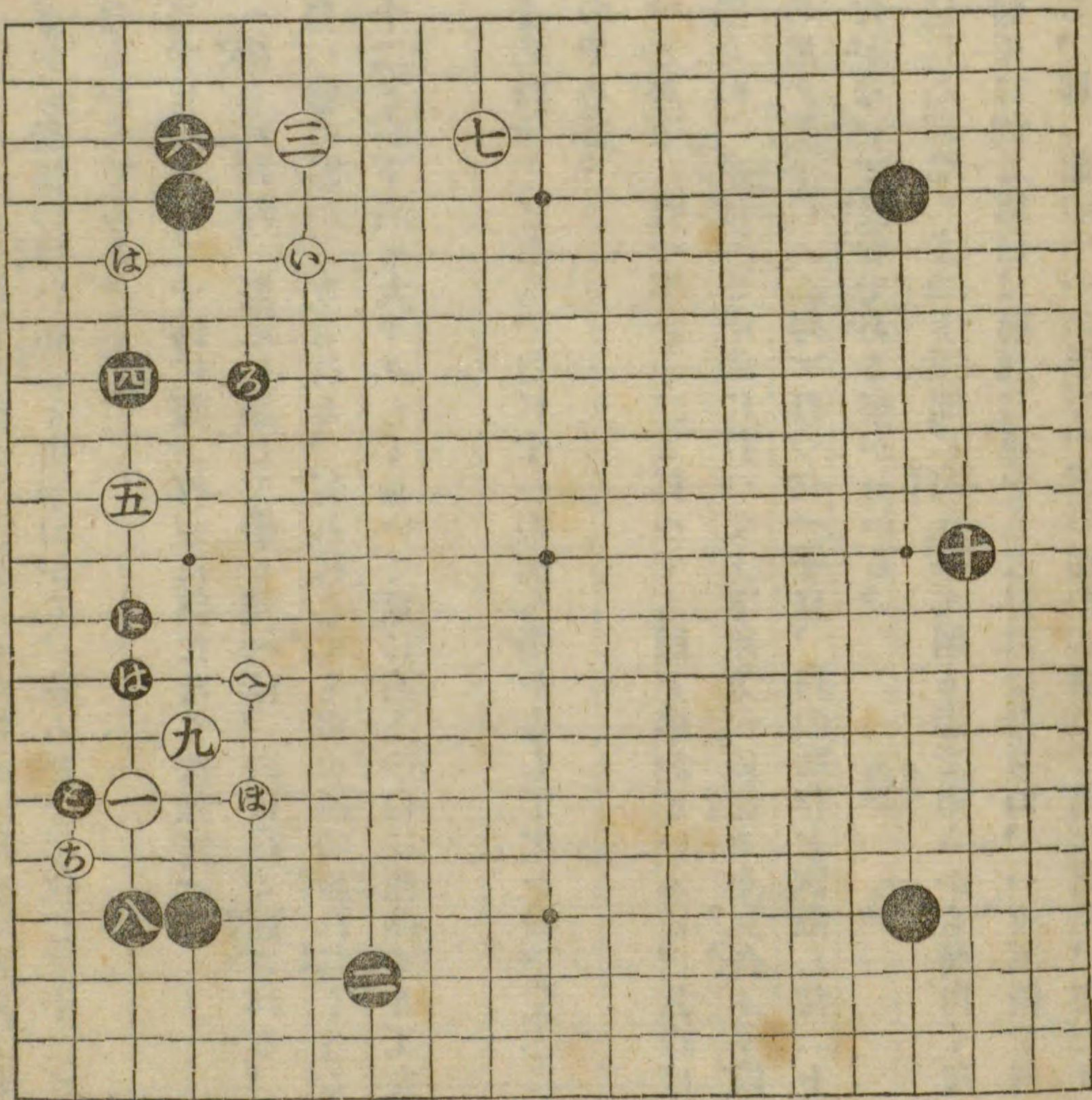
若白が九の手を⑮と飛び、黒に⑯と打込まれた時、白が⑰と曲れば黒は⑱と盤る、若又白が黒⑲の盤りを防ぎつ、左下隅を犯す意を兼ねて⑳と尖めば黒は㉑の點へ一間に飛出して行く事になる、何れにしても白一、及五の間の地は全く蹂躪される事になる。

黒十は例の大場である。

「註」 此の手は白が右上隅へ掛れば右下隅を高飛しやう、若右下隅から掛れば右上隅を高く一間

飛しやうといふ意を含んでをる、が然し決して拘泥す可らざる手で、白が右上隅へ掛れば其に應じて右上隅を一間に飛び、次で右下隅へ掛れば又右下隅を一間に應じておく、其の時右側に白の大模様が出来やうといふ處を、黒十の一子が中腹に居て白地の破壊者ともなり、白の勢力の分割者ともなつて居るといふ道理になる、

乃で此の黒十の後白は右上若くは右下へ掛るより手段はないが、黒は此の十を如何に働かして打たうかといふ事に就ては臨機策戦の自由を持つて居るのである。



（局子四法石布）



黒十二は單に十四と飛んでおくのも悪くはないが次で其の飛から上側への發展が△印白に制限され星下迄拓く事が出来ぬ、即ち十四の手から④迄の狭い拓より出来ぬから、寧ろ茲を手抜して十二と打つ方が雄大な地域を劃するに便利なるからである。

△問 黒十二の手で⑤と尖頂け白を二十と立たせて十四に飛ぶ打方に出たならば如何。

○答 然すれば次で白に⑥と右下隅へ掛られた時、黒之に應じて⑦と飛べば、白に⑧と冠される、若し又黒⑨と飛ぶ手で⑩と飛べは白に⑪の點から攻られる、何れにしても多少棋の紛れ易くなる恐があるから、やはり本圖の通り十二と右下隅を大キクしておいて更に右上の白に應接する工夫を廻らすがい。

要するに本圖は、黒が十(△印黒)の手の時十二と打ち、白に十一の處へ掛からして之を星下(十)に詰返したと同様の結果に歸して居るのである。

「註」 然らば初から黒が十(△印)と星下に打つ手を十二と打つても同じ事かといふと、其時は白が必ずしも十一の點に掛るとは限らぬ、或は⑫と中側に打つて上下兩方への拓きを見合ふ手段に出るかも知れぬ、して見ると此の黒が星下に(△印)打つた一子は、白の動作を制限した(上下兩隅の何れかへ掛るより外しかたがない)良着である事がわかる、

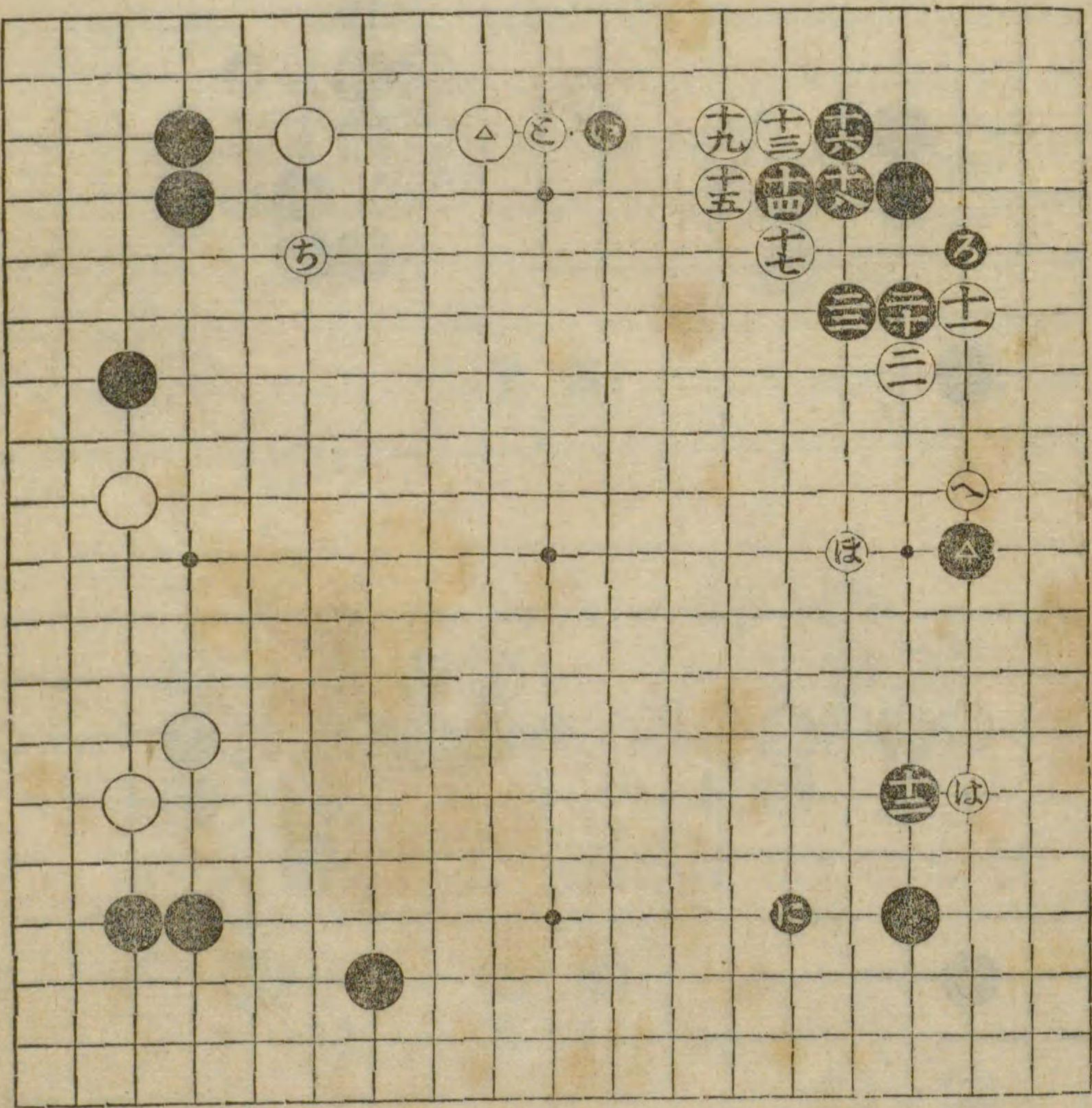
白十一の手は此く打つたと同時に已に△印黒によつて三間に夾まれて居る形であるから面白くない感があるが、然し四子以上の局面では到る處白は窮屈な思をしなければならぬ、一々不便を言ひ立て、居ては打ち場所がなくなる、即ち此の十一の手で十三の點から掛つて見た處で、左上方

面に二間拓して居る白との關係上十三と打つて黒に二十と好點を占めさす事はただ面白くない。

黒十六の抑へは或は十七の點に行びて居てもよい若し△印白が一路近く⑬の點にあれば、無論十六と抑へるのであるが、此く一路遠いだけ、黒十六の抑へは考へものである。

「註」 本圖の様に十三、十五十九、と茲が堅固になつた結果△印白の距離が遠いだけ働いてをる、若此の△印白が⑭と一問飛にでもあれは尙更申分はない。

黒十六を十七と行びた時の變化を別圖として次に示さう。



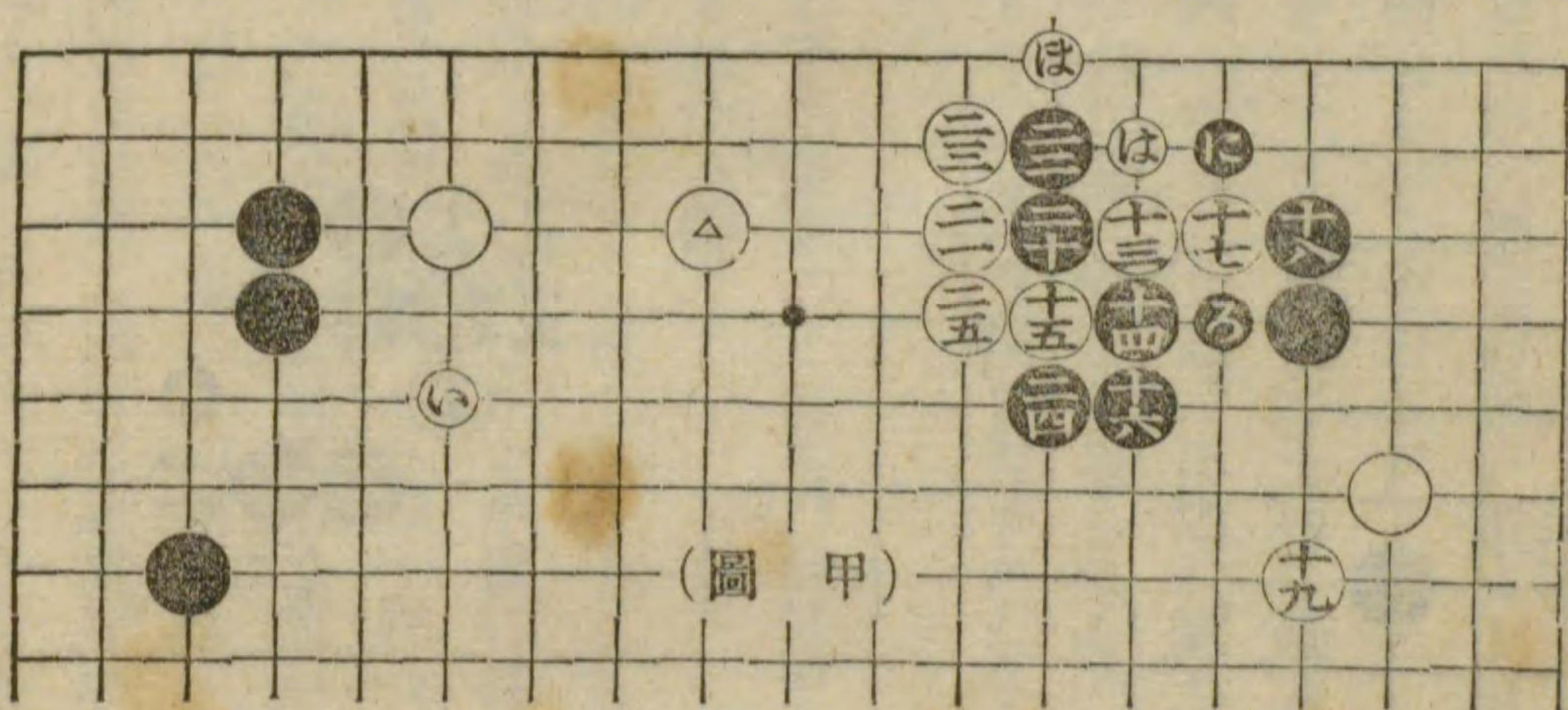
(局子四法石布)



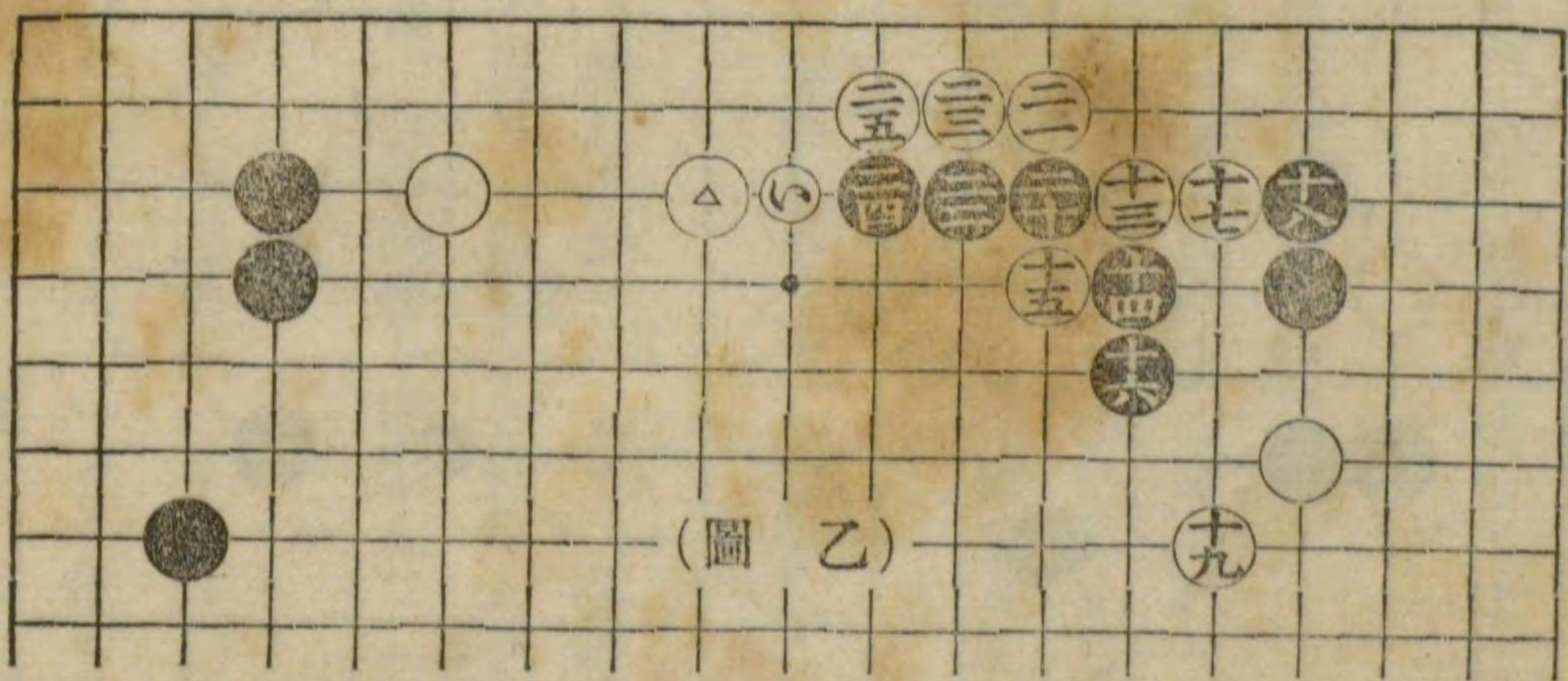
△黒が十六の手を「頂行」に打つた後の相互の應接の利害得失を示さば、

○(甲圖) 白十七、黒十八と普通の頂行定石に運び、白が十九と他へ轉じた時、黒は二十と截るのが良い、白が之を二十一から抑へた結果は二十四の曲りも利き、●の截も拒げて居る、結局黒●白●黒●となつて白が此の二子を③と提つて堅牢無比の形になつた時△印の白の働がなくなる、

○(乙圖) サリとて二十一を下からスタウた結果は(若△印白が一路近く④にあれば黒もダメヅマリになるから二十四の行は出来ぬが)本圖は二十四の行迄も利されるから白ただ面白くない。



(圖 甲)

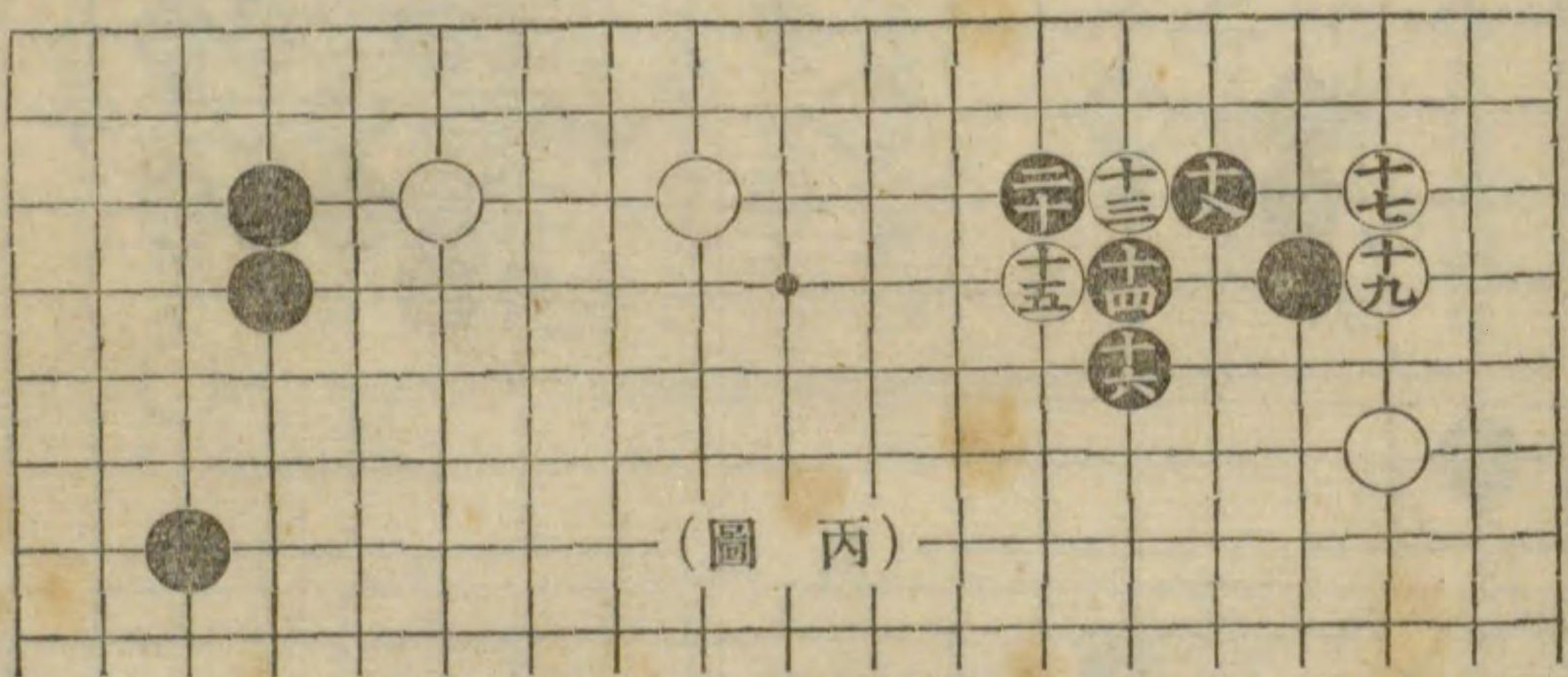


(圖 乙)

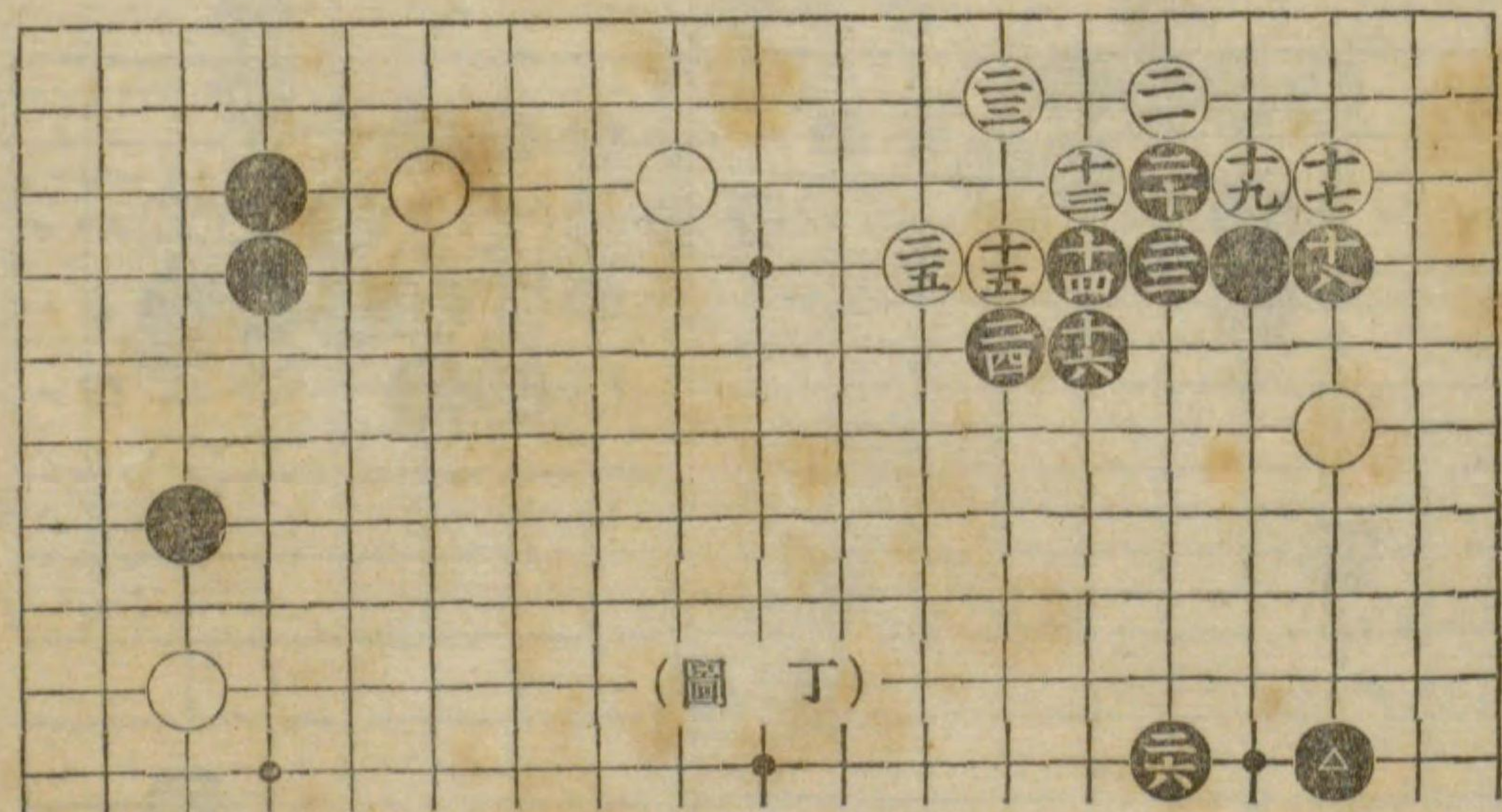
○(丙圖) 前二圖の結果の通り

普通頂行定石では面白くないため白は十七と三々打込の定石に来るかも知れぬ、本圖黒十八より二十迄は是又定石ではあるが此の場合隅の實利は全く白に奪はれ、二十と打つた方面は二間拓の治つた白があるため黒不利である。

○(丁圖) 乃で黒は十八と押へた、是は定石ではない、普通の場合なれば悪手であるが、此の場合は△印の夾があるから最も適應した良着である、此の結果は二十四の先手曲りを利かしておいて、二十六と大場の利を完成するのが申ぶんのない手順である。



(圖 丙)

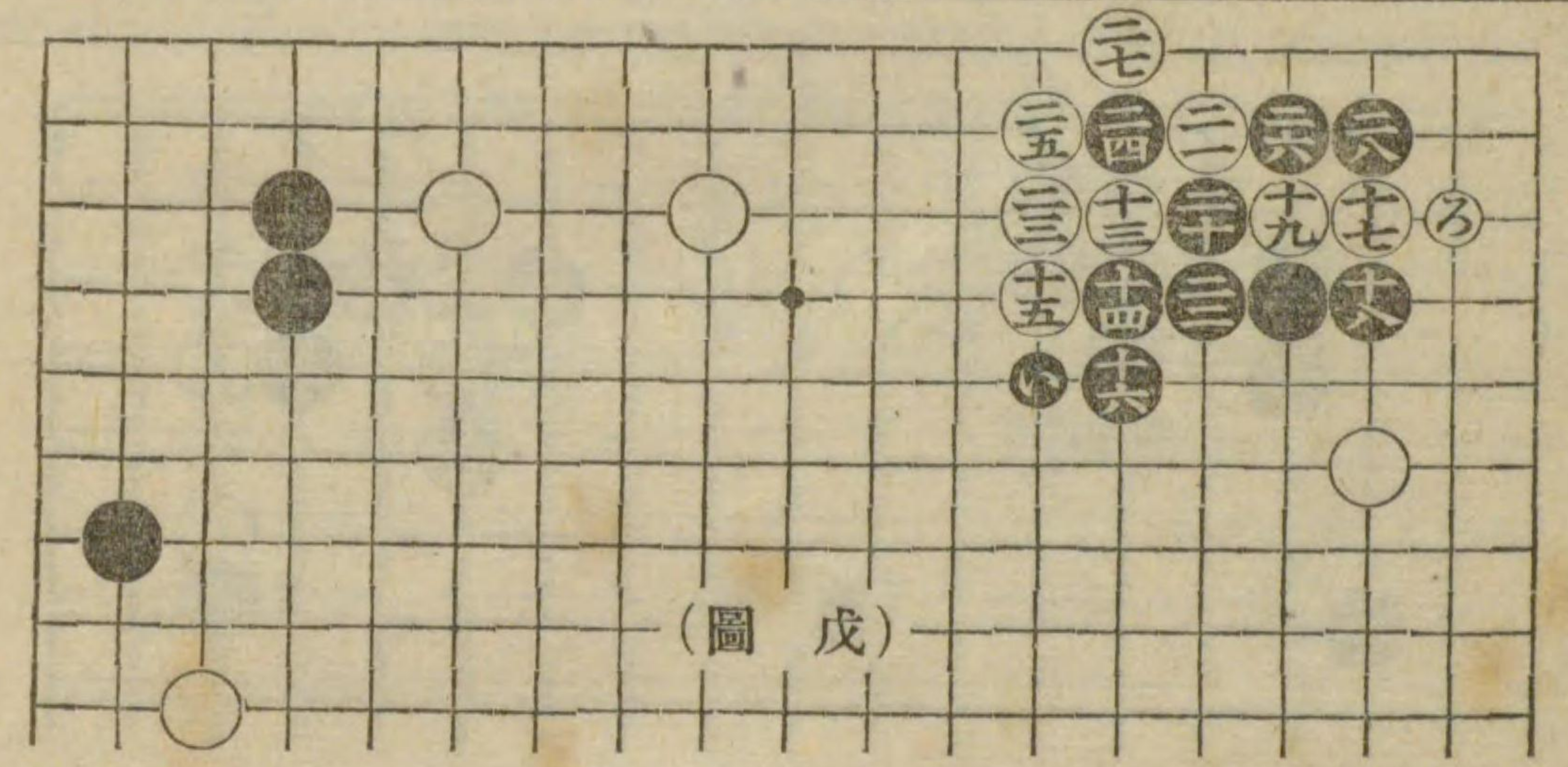


(圖 丁)

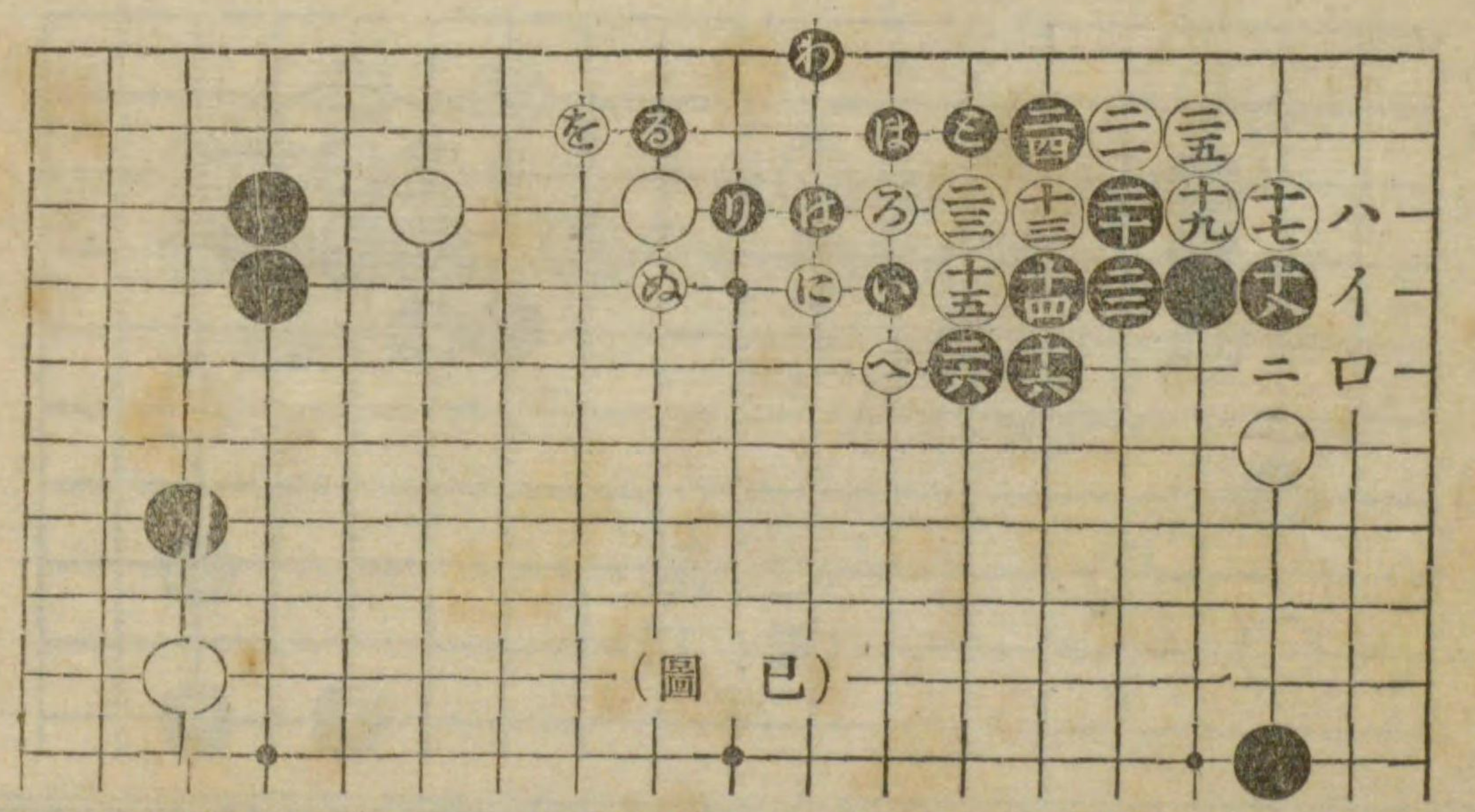


○(戊圖) 白は黒から先手で壓せられるのを嫌ひ、廿五の點の掛粘を變じて本圖の通り二十三と堅く粘ぐ事がある、其時黒が●と曲れば白に○と隅へ下られて後手になるから、此際黒は二十四と一子截を入れるのが要點である、次で白が二十五から提れば圖の如く廿六、廿八と打つて隅二子を屠り黒は實利と勢力とを十分に占める事になる。

○(己圖) 白若し隅の二子を惜んで二十五と粘がば二十六と曲る是亦先手である、



(圖 戊)

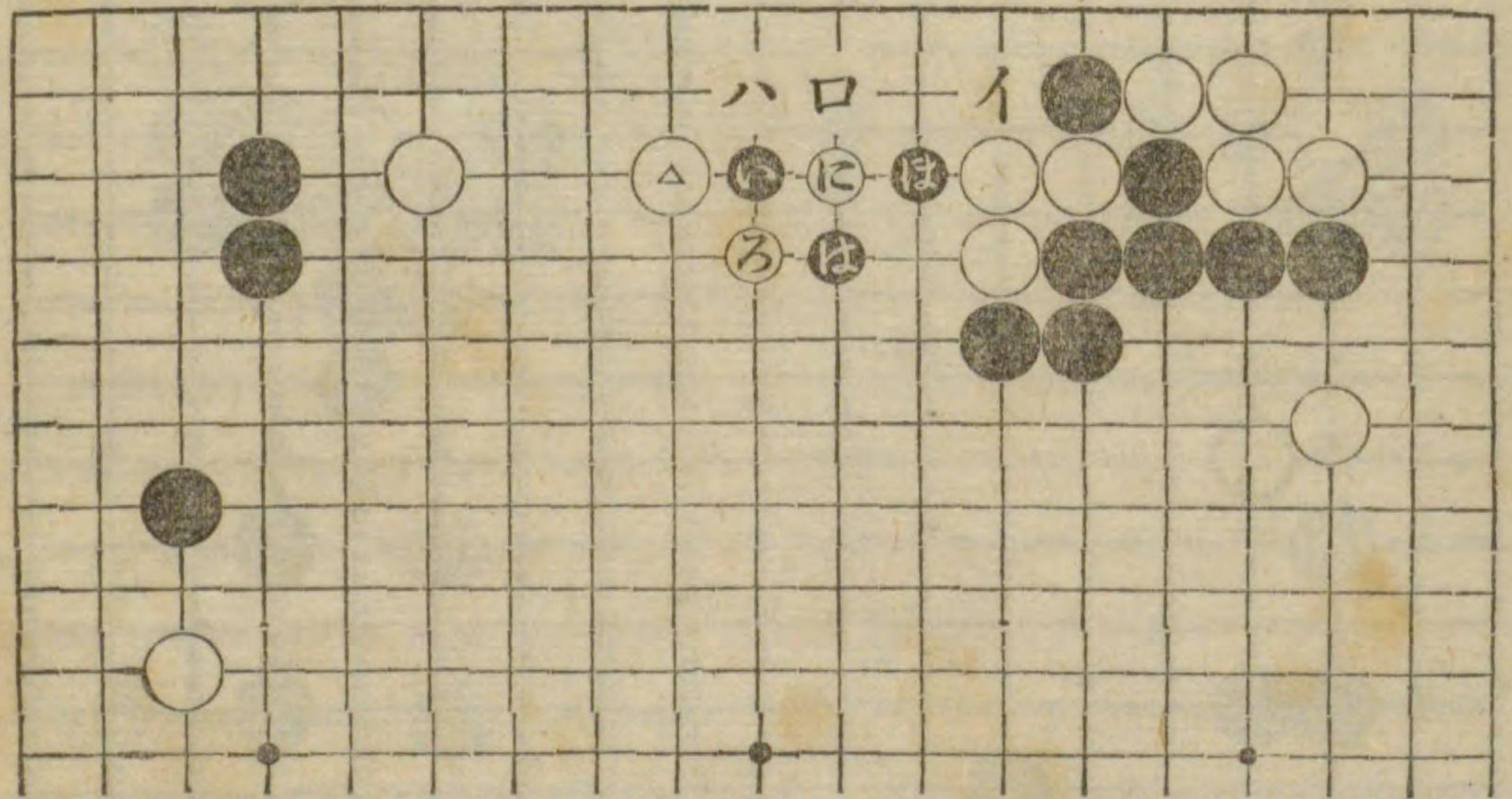


(圖 己)

何故なれば、白若手抜すれば黒は●と縛ね以下  
 白●黒●白●黒●白●黒●白●黒●白●黒●白●黒●白●  
 ●黒●迄の手順に運んで黒は活き白は浮く、且  
 右上隅も白(イ)黒(ロ)白(ハ)黒(ニ)と綽粘ぎの  
 手順を運ばねば黒に(イ)と下られては死滅する  
 の外はない。

○(庚圖) 尙本圖の通り△印白に●と頂けて打つ  
 手段もある、其の時白●、黒●、白●、黒●とな  
 つて白は(イ)と打てば黒は(ロ)と抜く又白が  
 (ハ)と黒●の一子をどれば黒は(イ)と掬うて三  
 子の白を抜く何れにしても其の結果は白慘憺た  
 るものである。

△要するに上側一帯の布石關係から言ふと黒は頂  
 抑へよりは頂行定石の方が面白い、即ち上述七  
 個の圖を以て示した通り其の何れに歸するも黒  
 の有利なるは争ふ可らざる事實である。



(圖 庚)

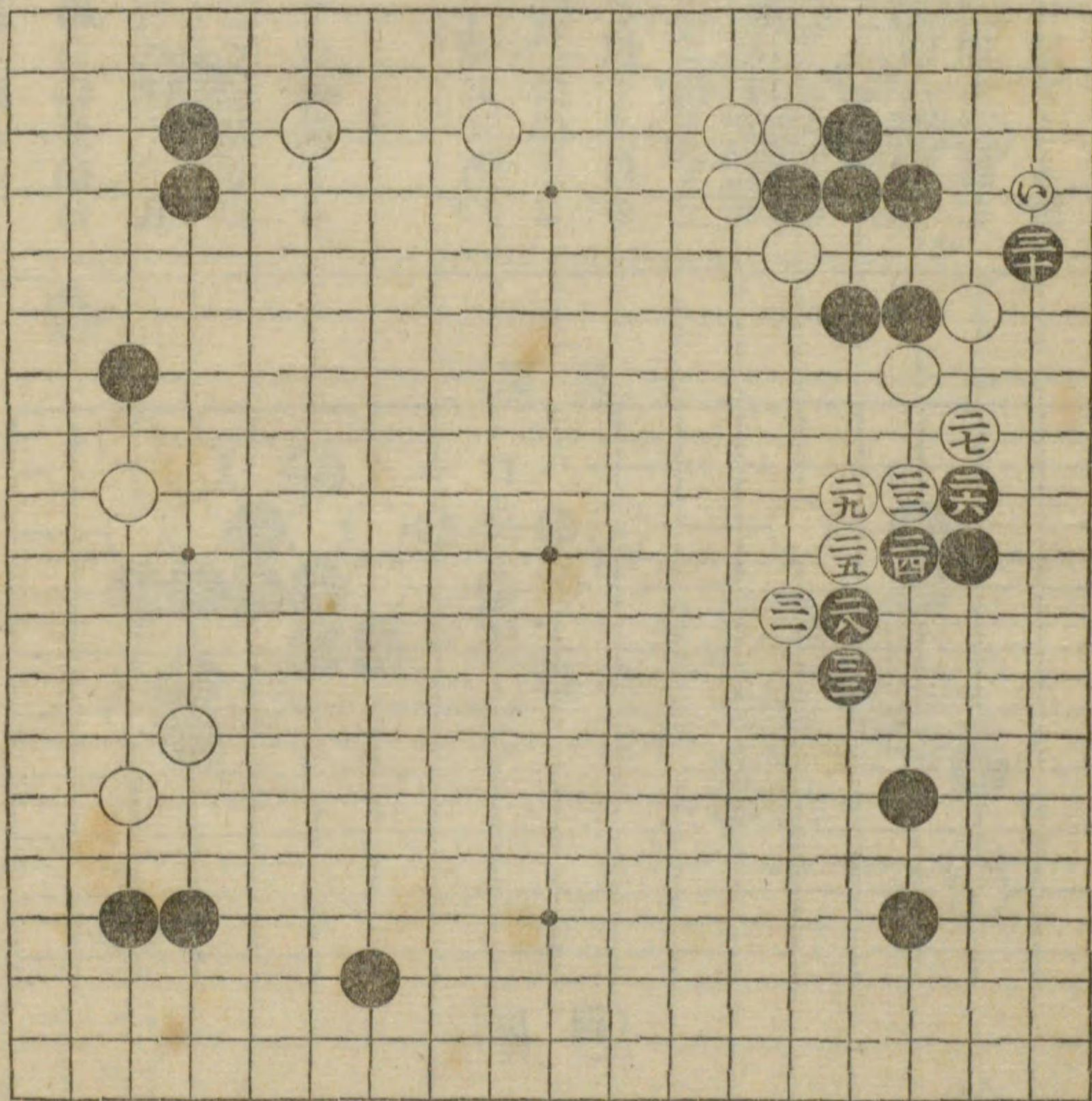


白二十三は黒に二十六と行びさせ二十七と掛粘いで、㊦と隅を犯さうといふ手である、

「註」 黒若し二十八の手で二十九の點を截らば、(辛圖)の通り運んで極めて愚形(團子石)に陥るのである。

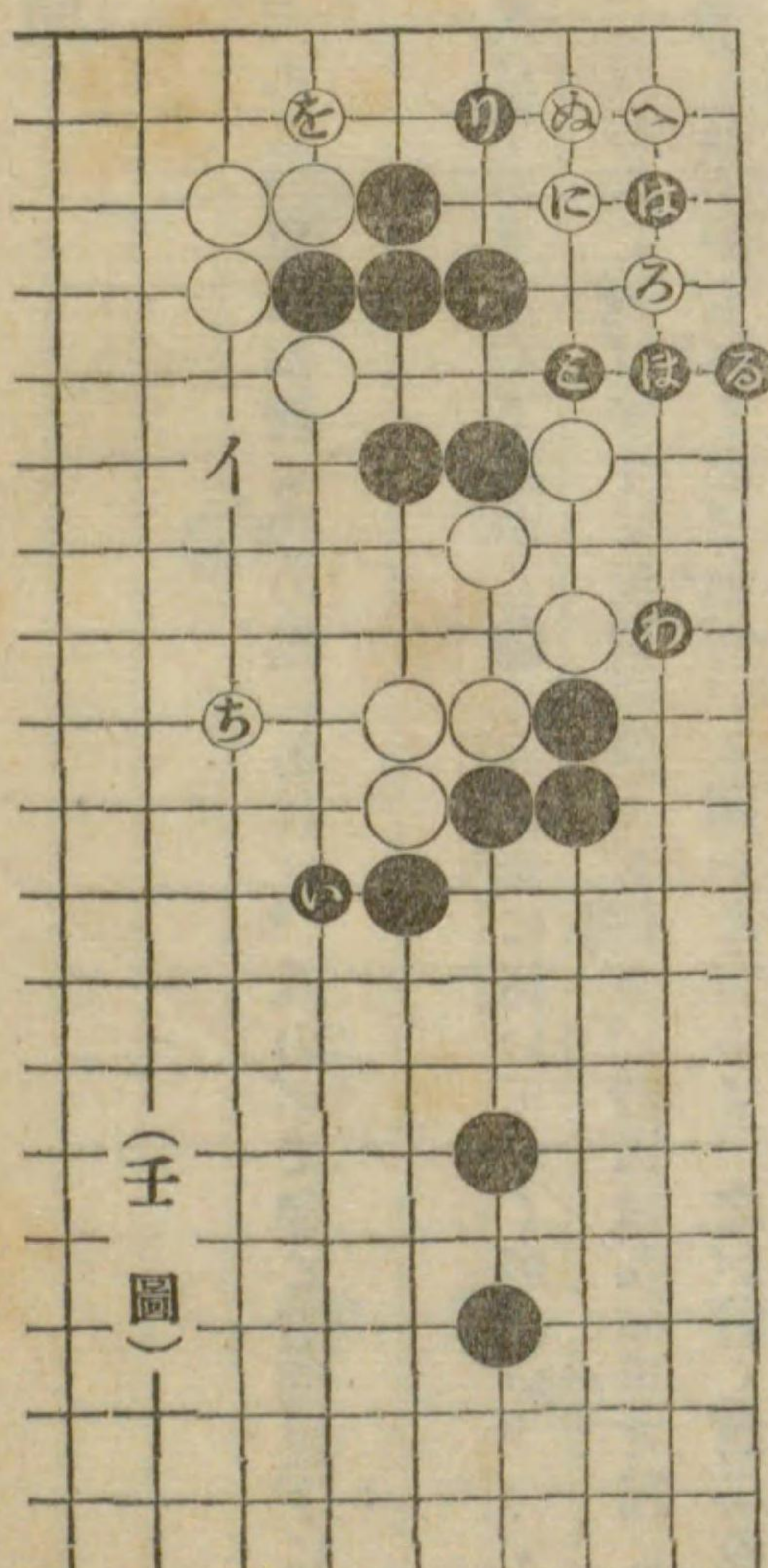
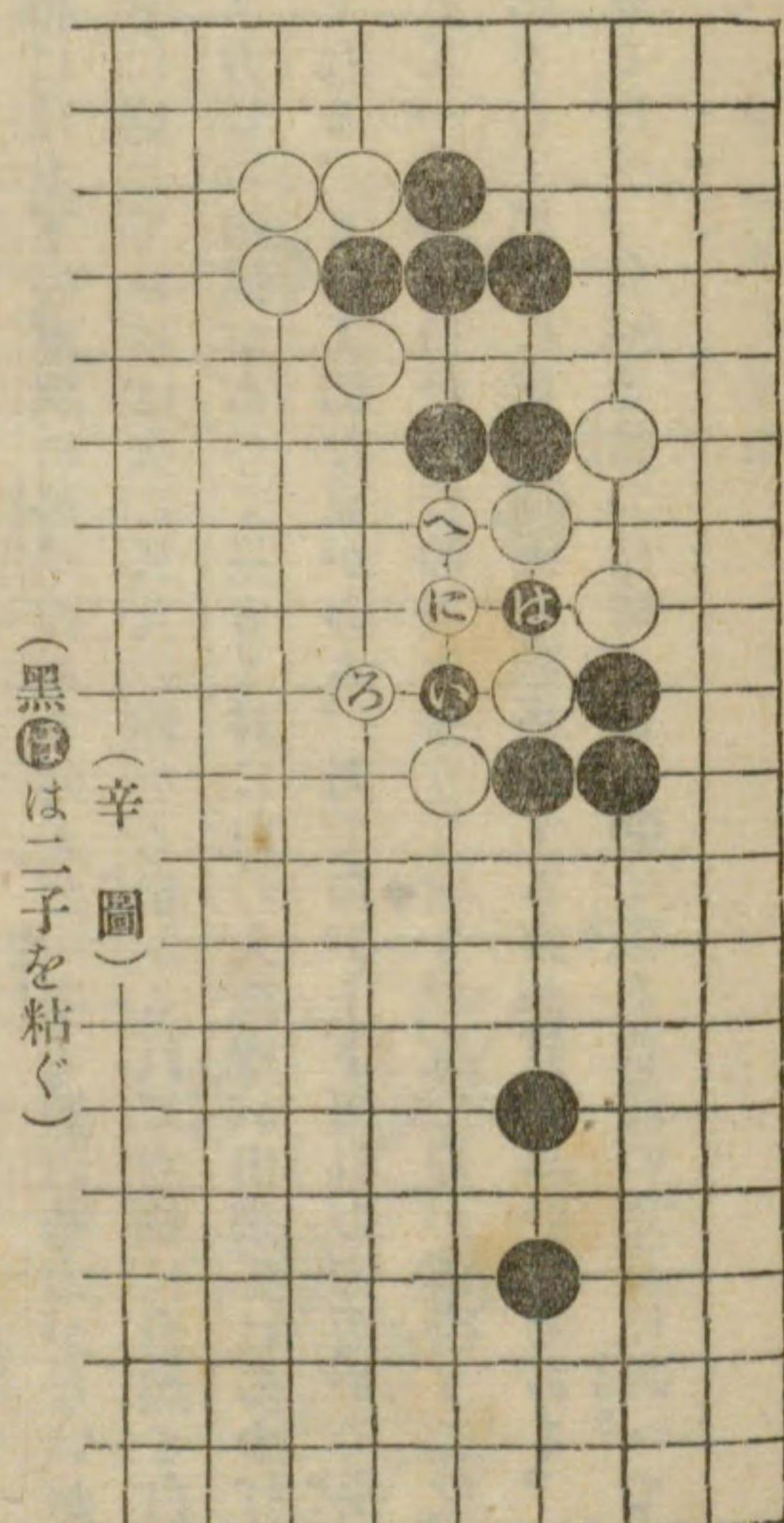
黒三十は隅を守つたのであるが此手で三十一の點に行びると右下隅方面が危然たる大地域を形成して極めて宏壯になる、其の代り右上隅の黒地は全く消滅して終ふの結果になる是亦一得一失の理で致し方はない、

○(壬圖) 前圖黒三十の手で



と行び白に㊦と隅へ走られた結果を示さば、黒は㊦と一子の犠牲を拂つて隅の白に活を與へ白に㊦黒に㊦白に㊦黒と遮斷した時白は一方の白を㊦と中原に逸出する乃で黒に㊦と白の眼を奪ひに行き、白の時に、黒は㊦と下り隅の眼形を奪はうと見せ㊦と盤つて、併せて此の白の根據を奪ひ次で(イ)と飛んで此の白を攻めやうといふ手段である、

黒の時白が㊦と下つて之に備へたのも亦一舉兩得の手である。





四子 第拾局

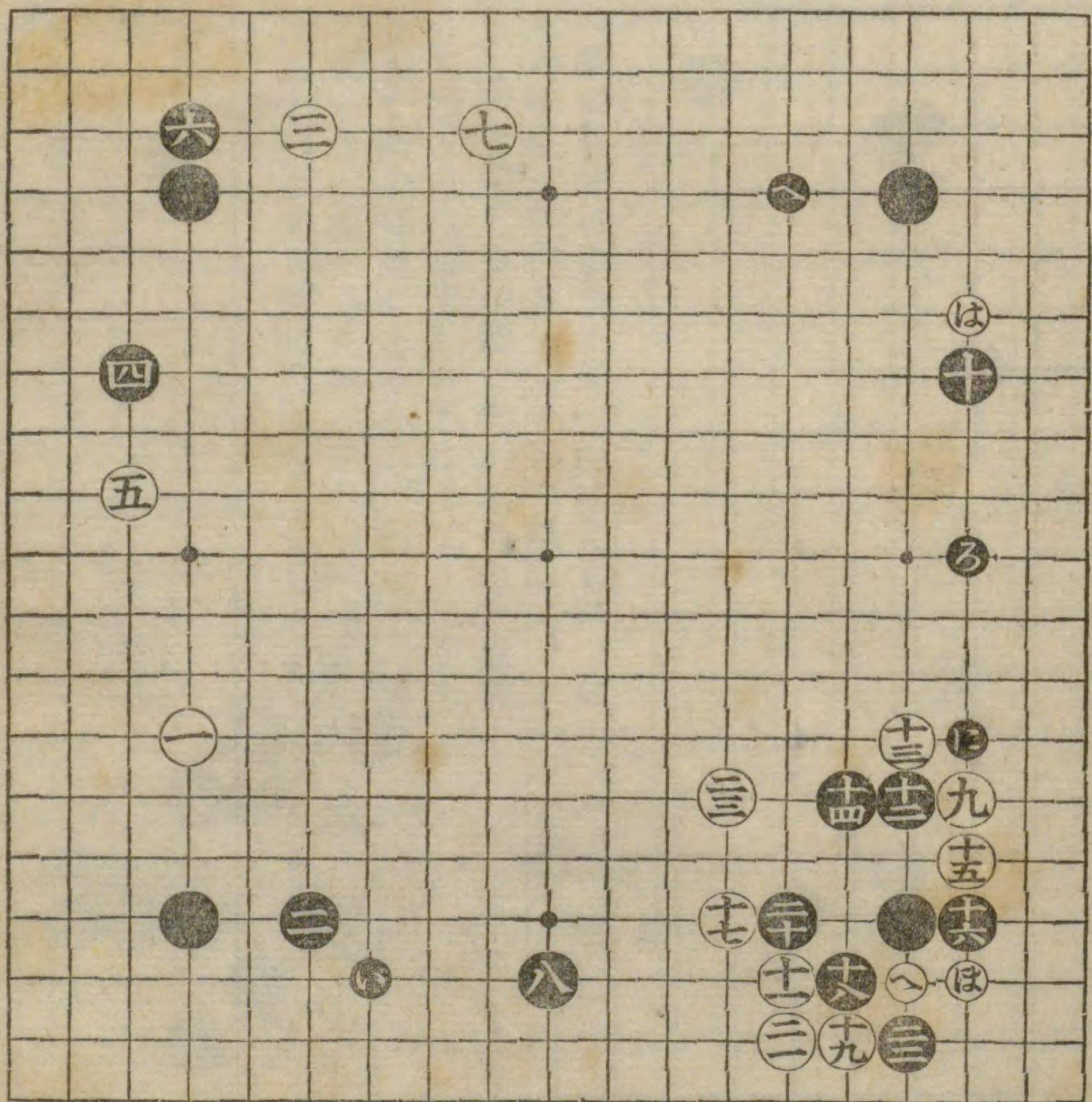
黒二は●と大斜走してもよい。

「註」 白三以下七迄は前局と同一である、黒二が若も●の點にあれば、八の手で●と右側星下に打つがよい、

白九の手を④と右上隅に掛からば、黒は十の手を右下隅から●と大斜走に拓いておくがよい。

「註」 白が圖の通り九と掛つた時二十の點に飛ばす十と反對の隅から拓き、若又白九の手で④と掛つたならば●と飛ばす、●と反對に右下から拓くのは如何いふ譯かと言ふと、之が若し前局の様である、右側星下●の點に黒の一子が先着してあつて白の大拓きを自然に制限して居るが、本圖は白が九と打つ時には右側一帯には上下の兩隅に勢子のある外まだ一子も黒の勢力がないから、白に④と來られた時黒●と尋常に應じておけば次に又九の點から掛かれて右側に自然と白の大模様が出来る、已に四子といふ力量の相違があつて見ると茲に白の大模様が出来るは多少打つて來るにもせよ、其の處は手抜して一方から白發展の餘地を奪うておき、次で白が兩掛りに攻めて來れば定石の指定する處を標準として場合に應じ臨機の應接をする方が打ち易いのである。白十五を③と三々に打てば、黒は十五と押へ、白②と盤つた時、黒は●と截る普通の定石に訴へてよいのである。

第二十三手迄



「註」 前局では白兩掛、黒頂行の定石に運んで白が三々に打込んだ時普通定石に應ずるのが面白くなく、却つて常格を破つて(本圖)②の點から押へて打つたのであるが、本圖の場合(背面星下に八の一子のあるのは前圖も本圖も同様であるが)一方右上側の關係が前圖とは大に違つて居るから、本圖は白十五の手で若も③と打込めば黒は十五と抑へる尋常手段に出て差支ないのである、  
白十七以下二十三迄の應接は是亦普通の定石である。







黒十四は下側□印(十の二子)と相待つて二間拓の白に迫つたのである、黒が白十五に應ぜずして十六と飛んだのは十四と迫つた初志を貫かうとである、白十七は若し黒から此の點に壓しられると少からぬ苦痛を感じるからである。

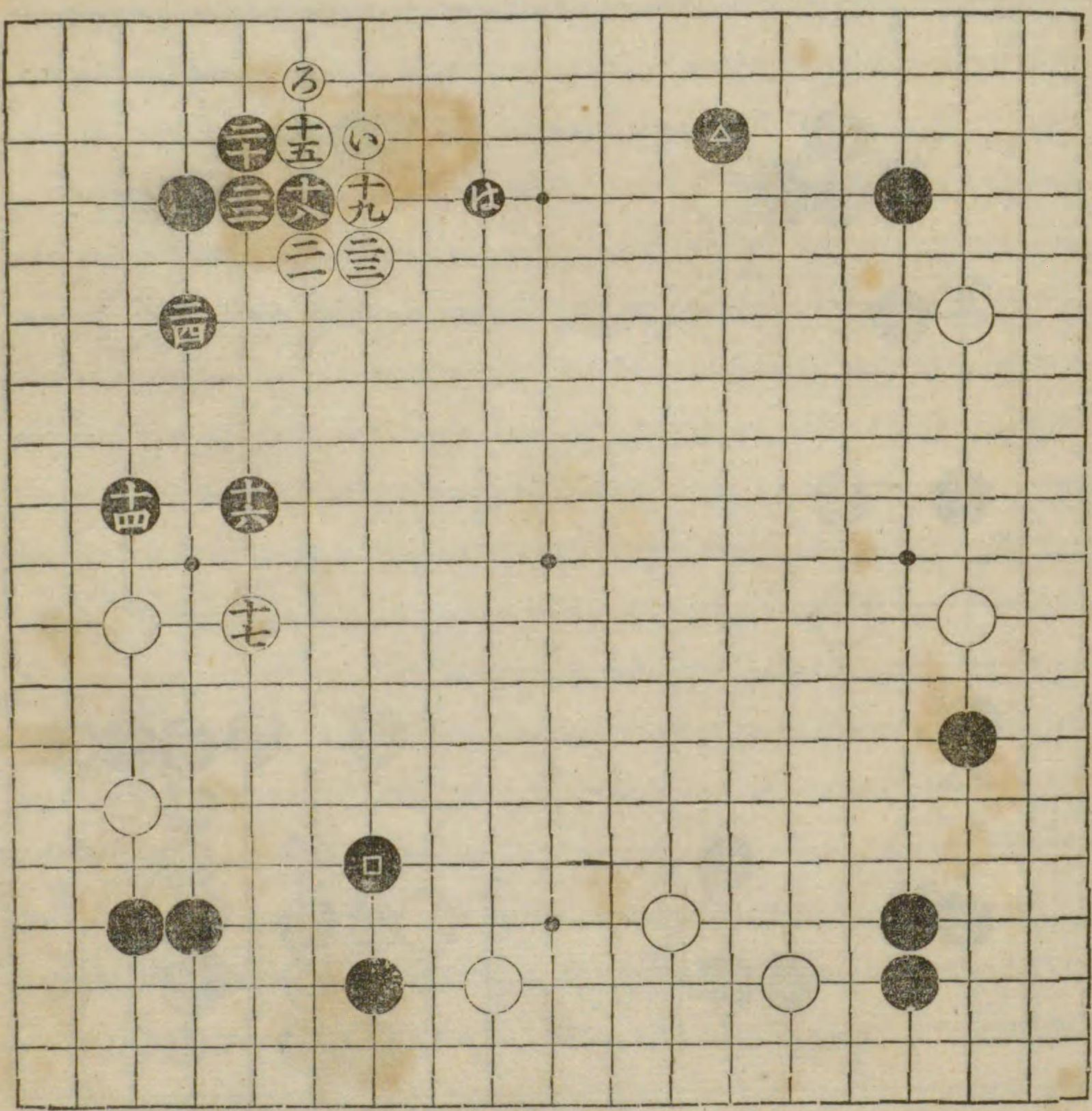
「註」二間拓は拓きとして最も狭いかはりに手堅い拓きと稱されて居る、然しながら此の堅固と否とは附近の状態から打算して言ふ事であるから本圖の様に左右から一間に詰められた其の上に十(□印)十六と敵の勢力が上から臨んでをるといふ様な場合になつては、決してジツトしては居られぬのである。

黒十八は單に二十と尖頂け、白に十八の點へ立たして置いて二十四と單關しても差支はないが、本圖の打方は一層其を働かしたのである。

「註」十八の頂手は何故單純の尖頂けを働かした事になるかといふに、單に二十と尖頂けたなら後に白から三々に打込まれる味が残る、然るに此く十八二十と頂抑へをした上は、三々の打込が無くなつた上、白が上を二十三と粘げば(○)に斷點が出来る、若又白が(○)と下を粘ぐか(○)と下るかすれば黒は二十三の點を截つて此の黒地が手厚くなる、唯茲で注意せなければならぬのは十八、二十と黒が頂抑へをした結果此の黒を手厚くさす様な患があれば考へなければならぬが、本圖は△印(黒六)の一子が低く此の方面に陣取つて居るから、白に大發展をされる惧はない。

(黒が十八と頂ける手で(○)と高く打たぬとは限らぬ、其は一路高く打つのは勿論一方に六(△印黒)と低く備へた石があるからで、此く上側に黒勢を張れば、左上の隅三々へ白に打込まれるは覺悟の上でなければならぬ、即三々へ打込んで來たならば、黒は白を隅に小さく活かして上側に宏壯無比の形勢を造る趣向である、然しながら已に四子の置棋といふ力量の相違がある棋として考へると、やはり本圖の様に十八、二十、と頂抑への安全な手段に出る方が穩健の策である。

五十九



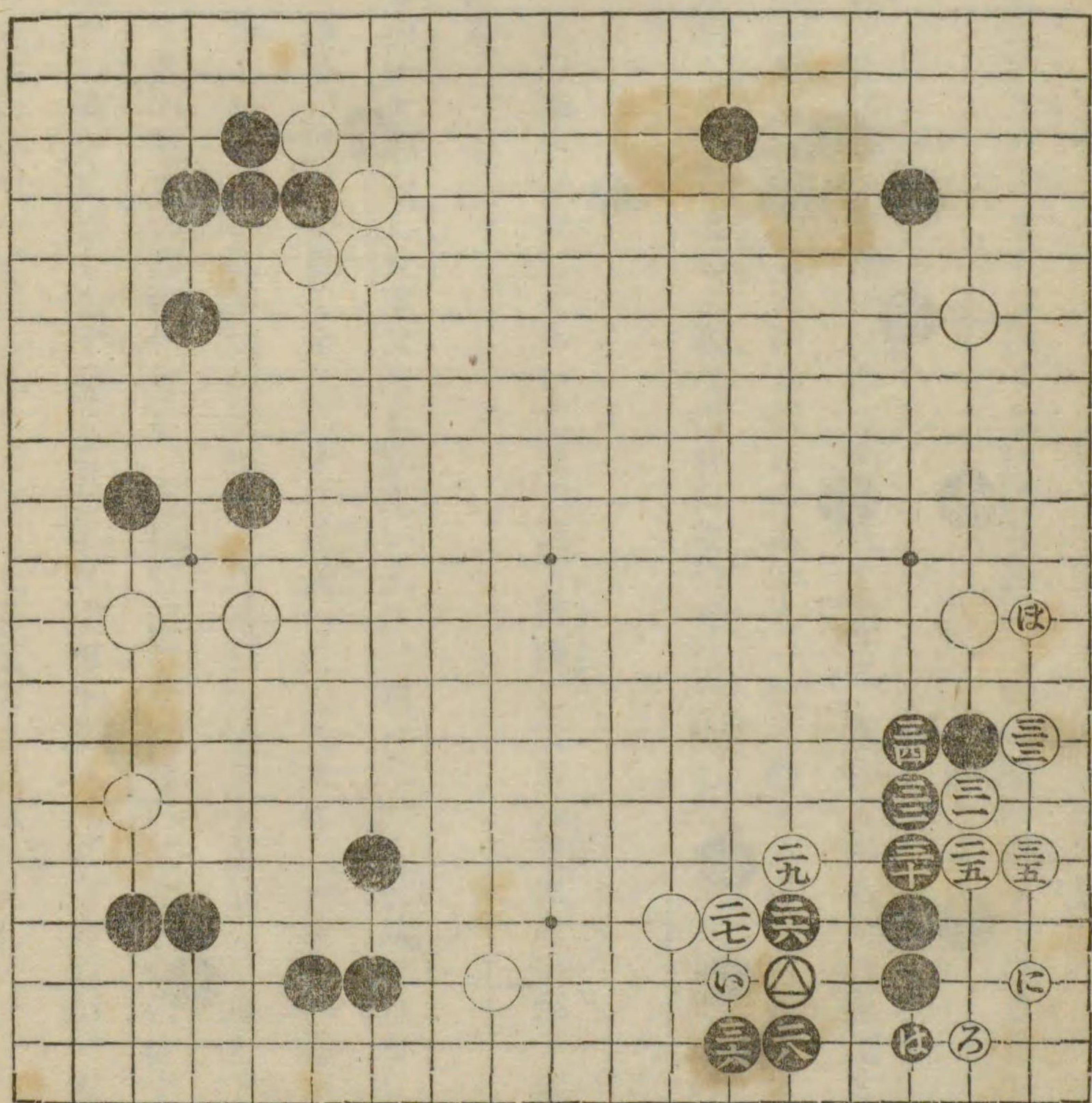
~~~~(局子四法石布)~~~~



白二十五の打込に應じ先づ側面の△印白に向つて二十六と頂け二十九迄の交換を遂げておいて三十、三十二と押した手順がよい、之を逆用して黒三十以下白三十五迄の手順を運んだ後二十六と頂けても白は單に㊦と引く位のものであつて何の効もない、本圖は白に三十三、三五と盤られては居るが、其の代り三十六と這うて此の白地を消して居るから決して損はない。

△問 黒二十六の手で三十二と尖み、白三十五、黒三十三、白㊦、黒㊧、白㊨、黒卅、白㊩と運ぶ例の手は如何。

△答 此くして左右何れかの白を酷しく攻る事が出来るならば其もよいが、本局ではやはり面白くない。

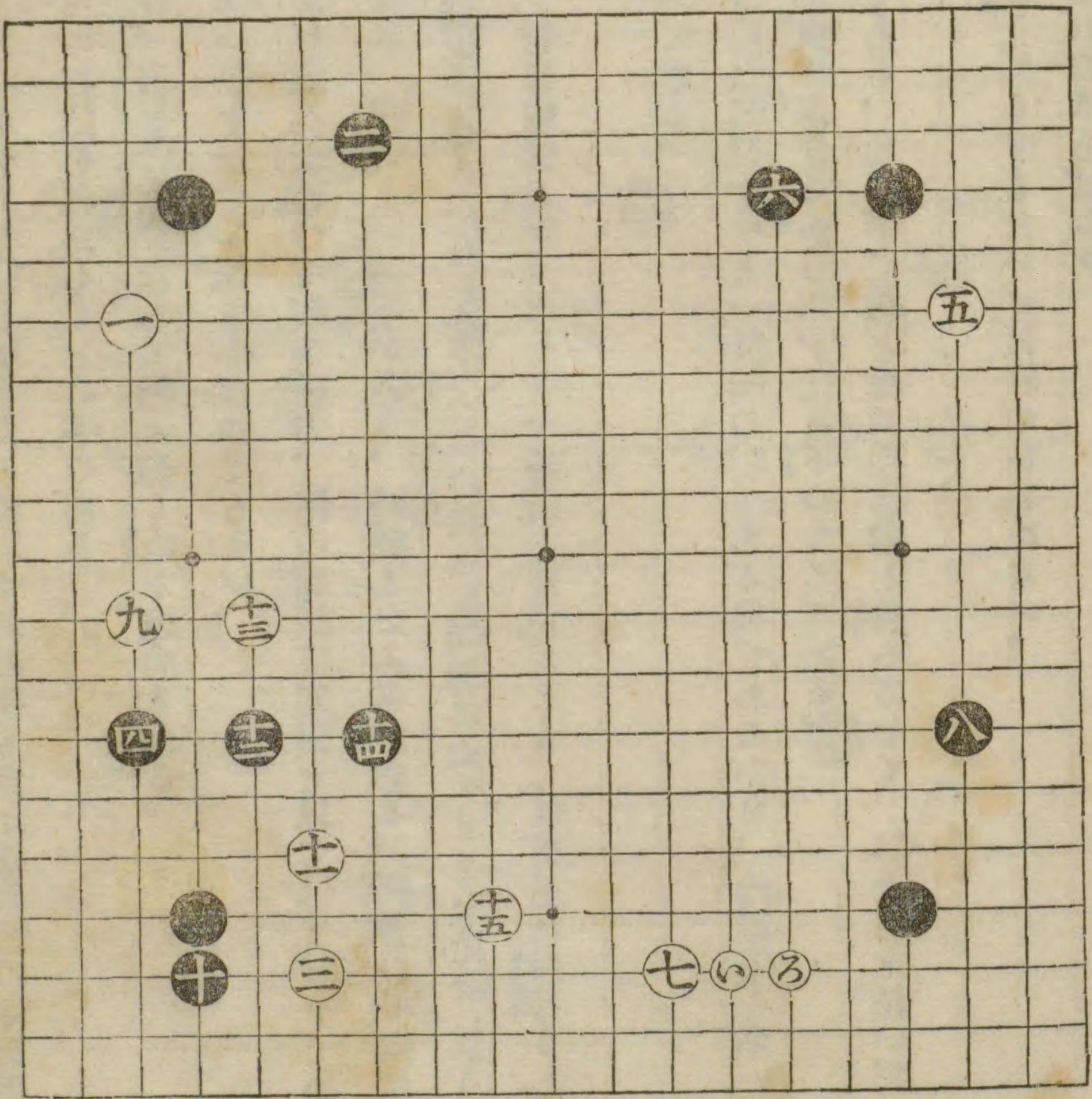


四子第拾貳局

白五に對し黒六が此く一間に高く應じたのは、左上黒二が低く走つて居るから、其と均衡を保つ爲めである。

「註」 白七を一步進め㊦と大斜走掛とし更に進んで㊧と小斜走に掛つても悪いといふ事はない何れも白の策戦次第であるが、然し若し此の七の手で㊨と打つたとすると、今度は此の三と七との間を自己の領域とするに就ては到底一手では圍ひきれヌ、即纏りのつかぬといふ患がある。

黒十四の手は白に閉塞されぬ用心を兼ねて下側への打込を覗つたので、白十五は之に備へたのである。



~~~~(局子四法石布)~~~~



黒十六は自ら隅の守備を堅くすると同時に⑤の打込を覗うたので、十八の手も亦上側自己の地を手厚くすると共に(ヤハリ⑥と)白地への打込を利かしてをる手である。

黒二十の手は二十二の點から尖頂け、白を⑧と立たして⑨と高く迫る趣向もある。

白二十一には⑩と三々に打込んで△印一子を捨て、振りかはずてもよい。

「註」 白二十一の手で⑩と三々に打込み振替つて打つ後の、隅の應接は別圖を以て示す通りであるが、此の振替りといふ事に就ては、場合といふ事があり、時機といふ事がある。振替つて隅に彼の地域を蹂躪するの大キサと、側面に自らが石を捨て、彼に與へた利益の大キサとを比較して、又其の二者から局面全體に及ぼす利害關係といふ事を十分觀測した後でなくては容易に振替りといふ事は打てるものでない。

黒二十二は白の眼形を奪ふといふ手である。

「註」 黒に二十二と尖頂けられた時已に二十一と一間飛のしてある後であるから、此際⑩と粘いては堅固に失して如何にも働さが無サ過ぎるから二十三と下つたのである。

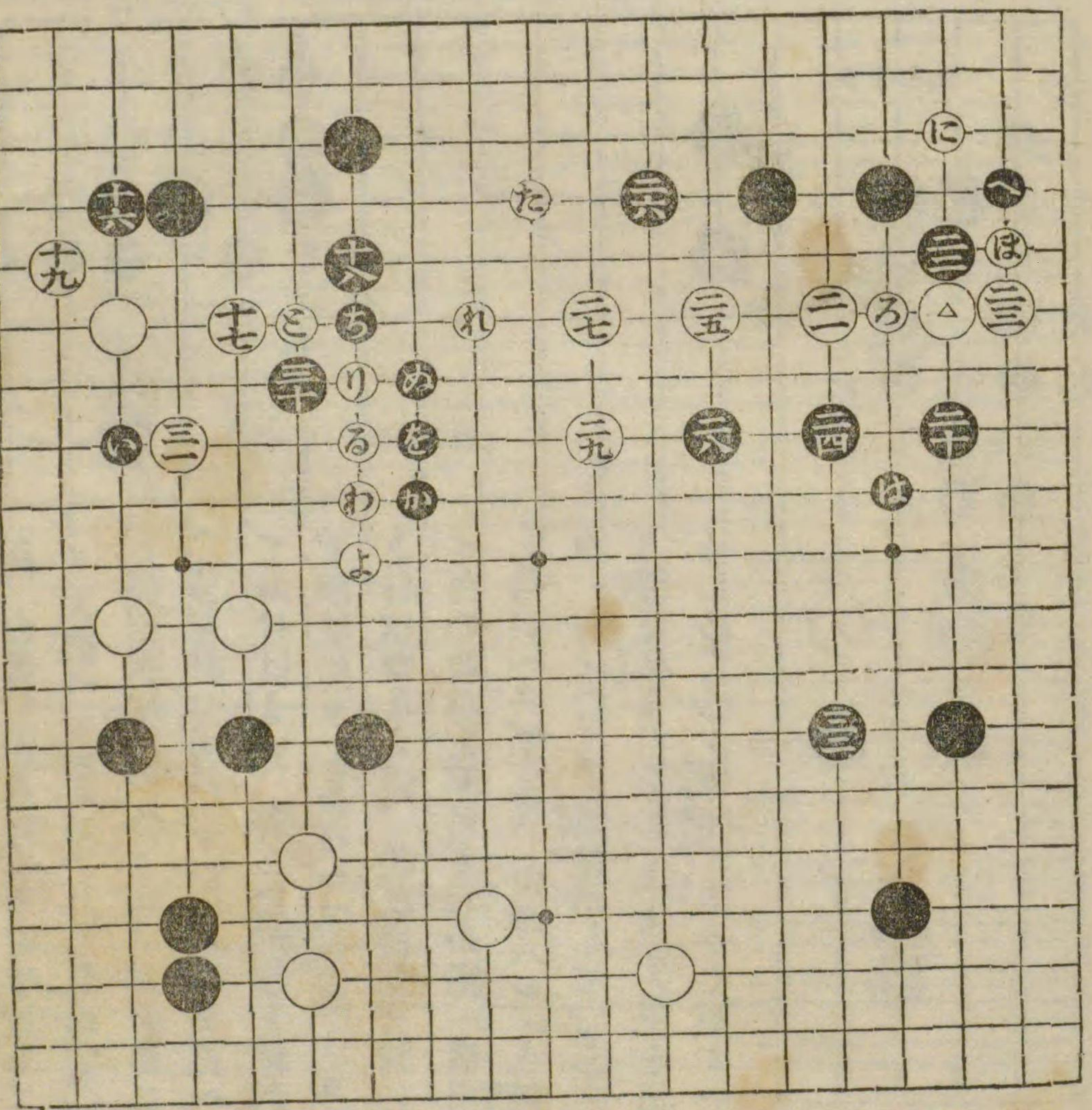
△問 白二十三は一見緩慢の様である、此の手で⑬と綽ね黒に⑭と抑へさせて、二十三と粘いだならば如何。

△答 其は白自身が隅へ打込む味を無くするだけで何等の利益はない。

△問 黒三十の時白に⑮と出截られたならば如何。

△答 黒は⑮と抑へ、白⑯と截り、黒⑰とアテ、白⑱と行び、黒⑲と押し、白⑳、黒㉑、白㉒となつて、畢竟黒は三十の一子を犠牲に供し、七八目の地を白に與へた代償として、宏壯無比の形勢を上側に造る事になるから、黒は少しも患ふるに足らぬのである。

本圖黒三十二の後、白が若も㉓と侵して來たならば、黒は㉔の點を抑へて隅の實利を確保してあげば十分である、其の時白は㉕と打つて㉖の一子の提られを要慎しておく位に止まるので黒の優勢は嚴然として少しも損する所はない。

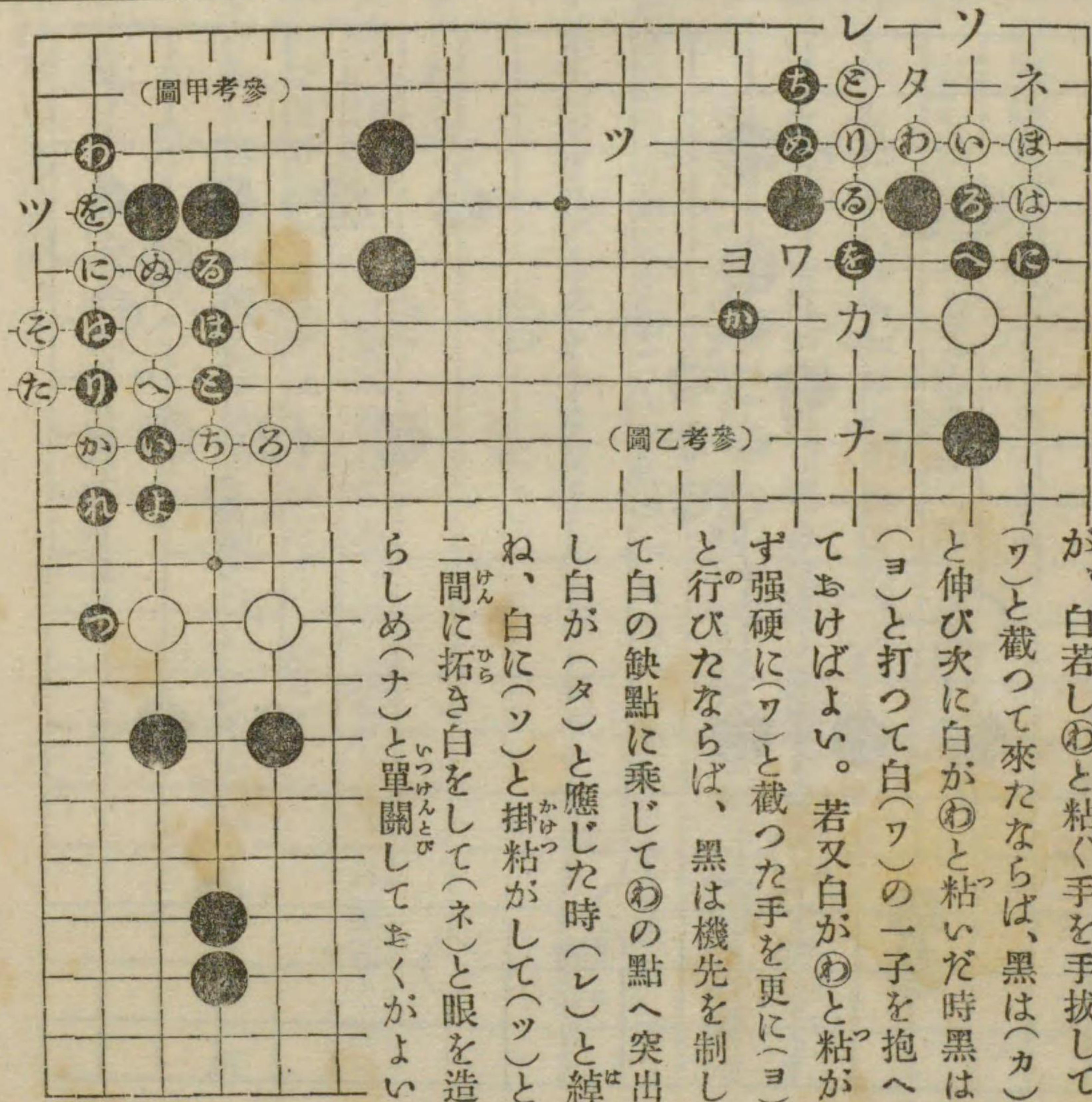


~~~~(局子四法石布)~~~~



○(参考甲圖) 前頁説明中黒十八の時白若十九の一着を手抜したならば、黒に㊸と打込まれ以下イロハ順に示す様な結果になる、本圖の結果白が㊸と黒二子を提つた時黒が酷しく㊹と打込み(ツ)と縛ねると劫になる、黒が順當に㊺と盤れば、白は(ッ)と後手活をして居なければならぬ、又最初黒㊻の時白が㊼の手を㊽の點から押へる手もあるが、其の結果は何れにしてもやはり白の不利たるは無論である。

○(参考乙圖) 前頁説明中、白二十一の手で三々に打込み振り替る手順は白㊾以下黒㊿の斜走粘迄の手順の應接で普通である

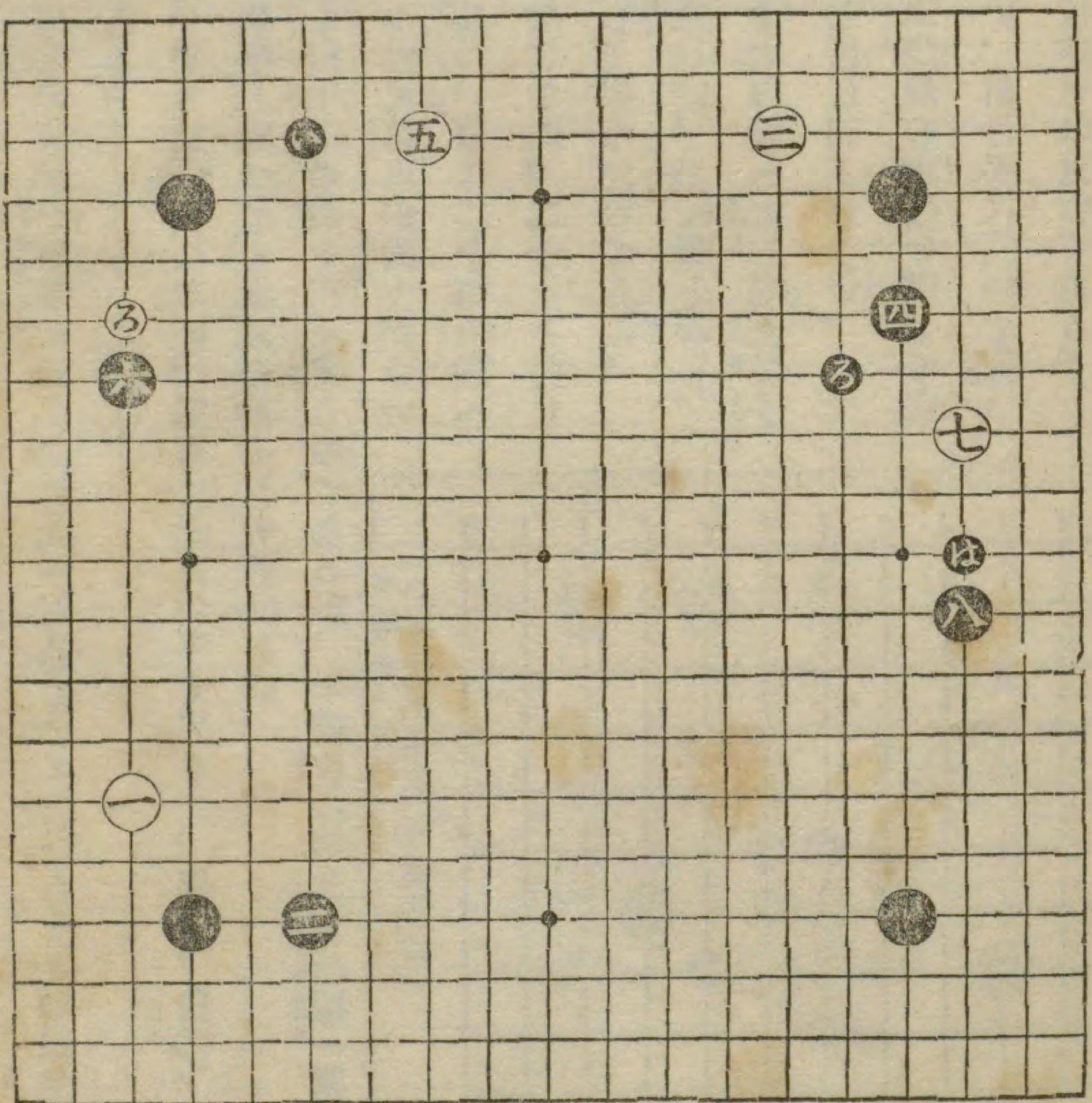


が、白若し㊸と粘ぐ手を手抜して(ッ)と截つて来たならば、黒は(カ)と伸び次に白が㊹と粘いだ時黒は(ヨ)と打つて白(ワ)の一子を抱へておけばよい。若又白が㊸と粘がず強硬に(ッ)と截つた手を更に(ヨ)と行びたならば、黒は機先を制して白の缺點に乗じて㊽の點へ突出し白が(タ)と應じた時(レ)と縛ね、白に(ッ)と掛粘がして(ツ)と二間に拓き白をして(ネ)と眼を造らしめ(ナ)と單關しておくがよい

### 四子第十三局

白五は黒が若し㊸と窄い方へ來れば㊹と小斜走に掛つて隅に萎縮させやうといふ意も含んで居る、で黒六は無論十分に發展の出来る方へ此く拓かねばならぬ黒八は更に一步進んで星下に㊺と急に迫る手もある、が然し餘りに白に接近すると、次で白七に勢力が加はつた時後顧の患があるから先づ一步緩めて此く二間に詰めるが穩當である。

「註」 白七に應じて黒八の手を往々㊽と尖むのを初心者の棋に見受けるが、是は四五子の棋としては緩い、六七子以下の棋ならば是てもよい。



(局子四法石布)



白十三は二十七の點へ、モ一着出ておくが本理である、  
黒十四は右下隅△印勢子と右側△印黒との間が一路窄い故、白に隅へ打込ませて振替らうとの豫想  
て此く十四と星下から詰返したのである。

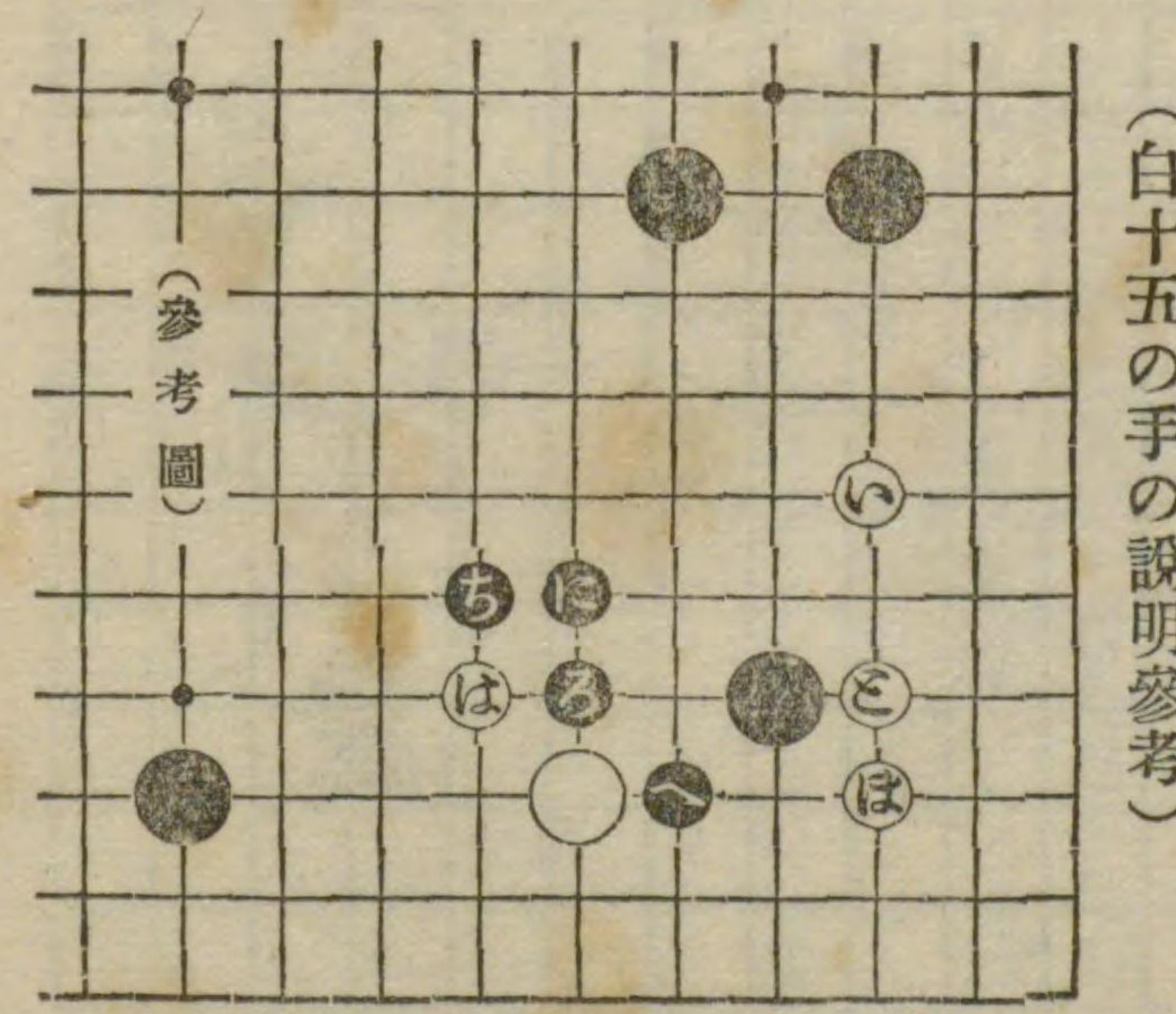
白十五は二十三の點から「兩掛」に打つ手も無いではない、即ち白十五の手で二十三、黒、白、  
黒、白十五、黒二十二、白十七、黒と成つても本圖の結果と大差はない、

黒二十四の押しは、普通はと縛ねて白十三の頭を阻止するのであるが、本圖は△印及十二即一間  
飛して居る二子との關係上此く押しつけて終ふが決りがついでよい、若し此の手で守株的にへ縛ね、白に二十四の點へ

立たれては此の處が手薄くなる、其故二十四、二十六と押し  
ておいて、次に二十八と大キク包容して捕つたのである。

白若し二十七の手で十四の肩へと來れば、黒はと押し、  
白、黒二十八、白と運んだ後二十七の點へ冠して上二子  
と下三子(と)とを絡んで攻める手段に出るがよい。

本圖の後白若し二十九の手でと右上隅黒の根據を侵して來  
たならば、黒はと中央へ出るがよい、白の手に隨いて廻つ  
て隅を窄られた上中央を封鎖されては非常の損害である。

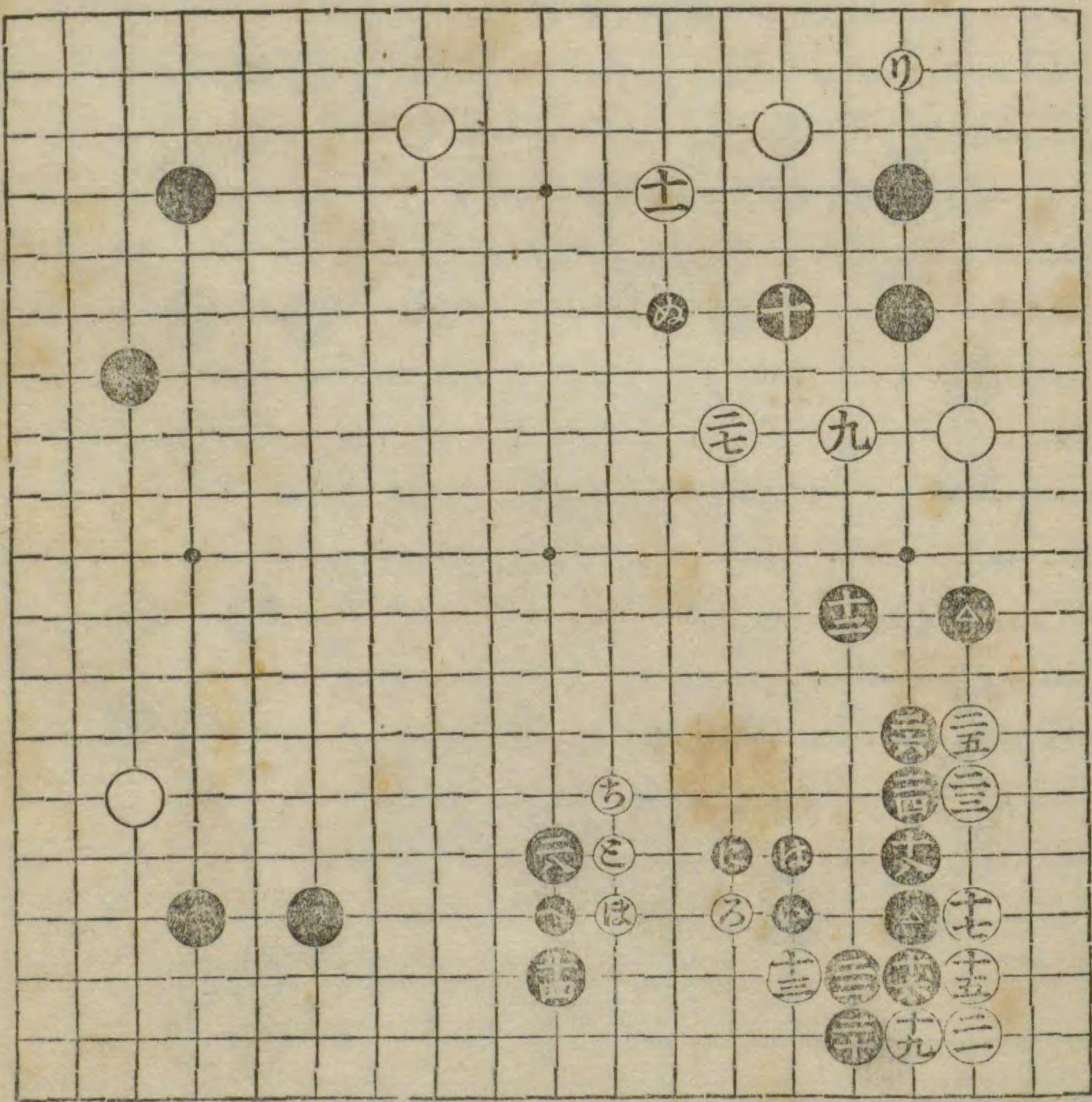


(白十五の手の説明参考)

「一間飛應手餘論」

前圖白一に對する黒二、白三に  
對する黒四、等の間飛應手は、  
古い石立の書にはアマリ見受け  
ぬ手である、近代的の手である  
近頃になつて此の手を専門家が  
獎勵する様になつた、勿論専門  
家の手合に四子以上など、いふ  
棋がないため類型を一寸見出す  
に困難な譯もあらうが國技觀光  
などの石立を見ても大抵大斜走  
である、

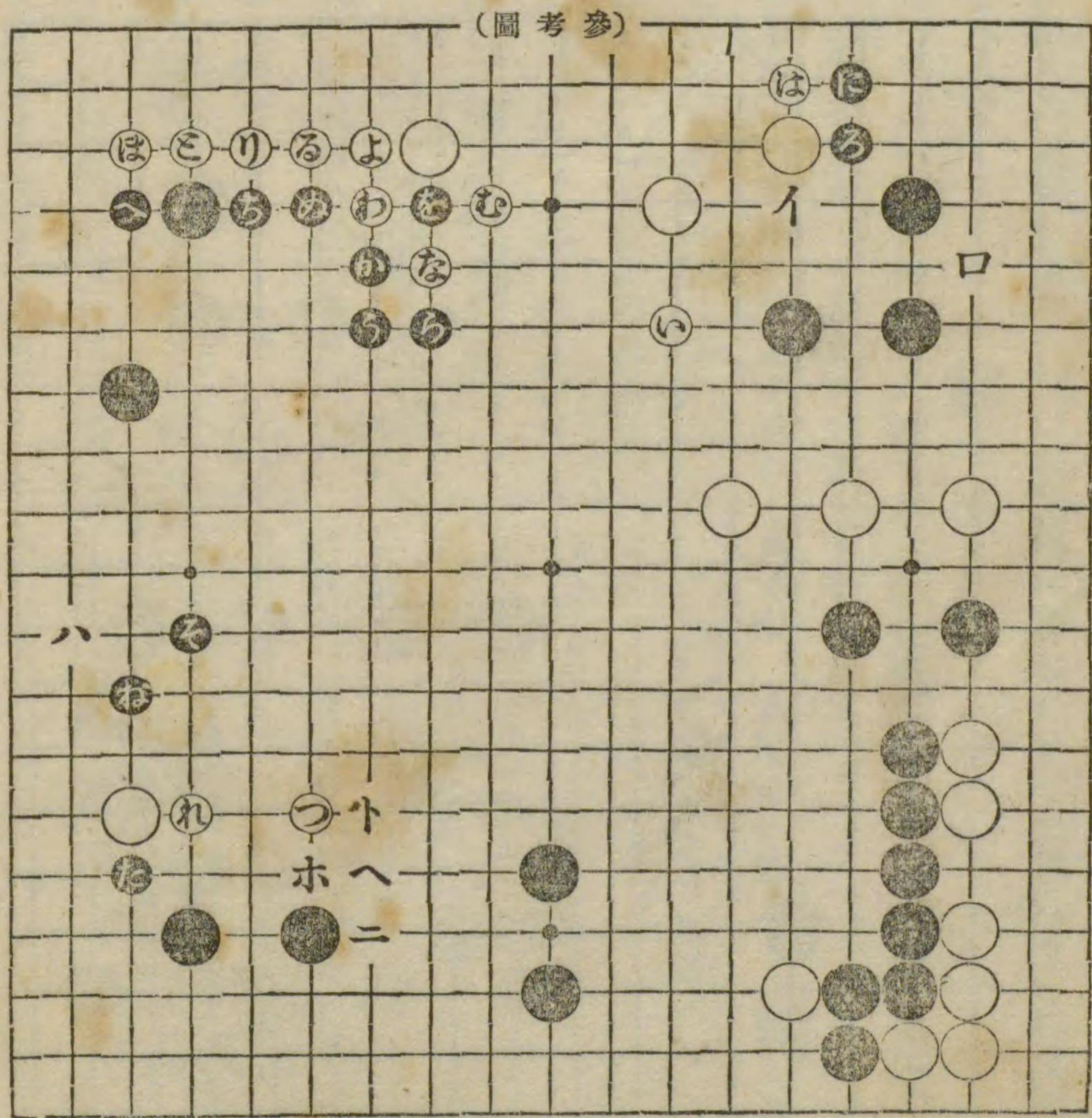
此の一間高飛が大斜走拓に比し  
て勝る點は、正面にも背面にも  
利いて居る點、敵が近く迫れば  
手抜して軽く捌かう、敵が迫ら  
ねば大構の陣立をしやう、必し  
も一隅に屑々とせない變化自在  
な、といふ様な趣を備へて居る  
點であらう。(絶軒)



(局子四法石布)



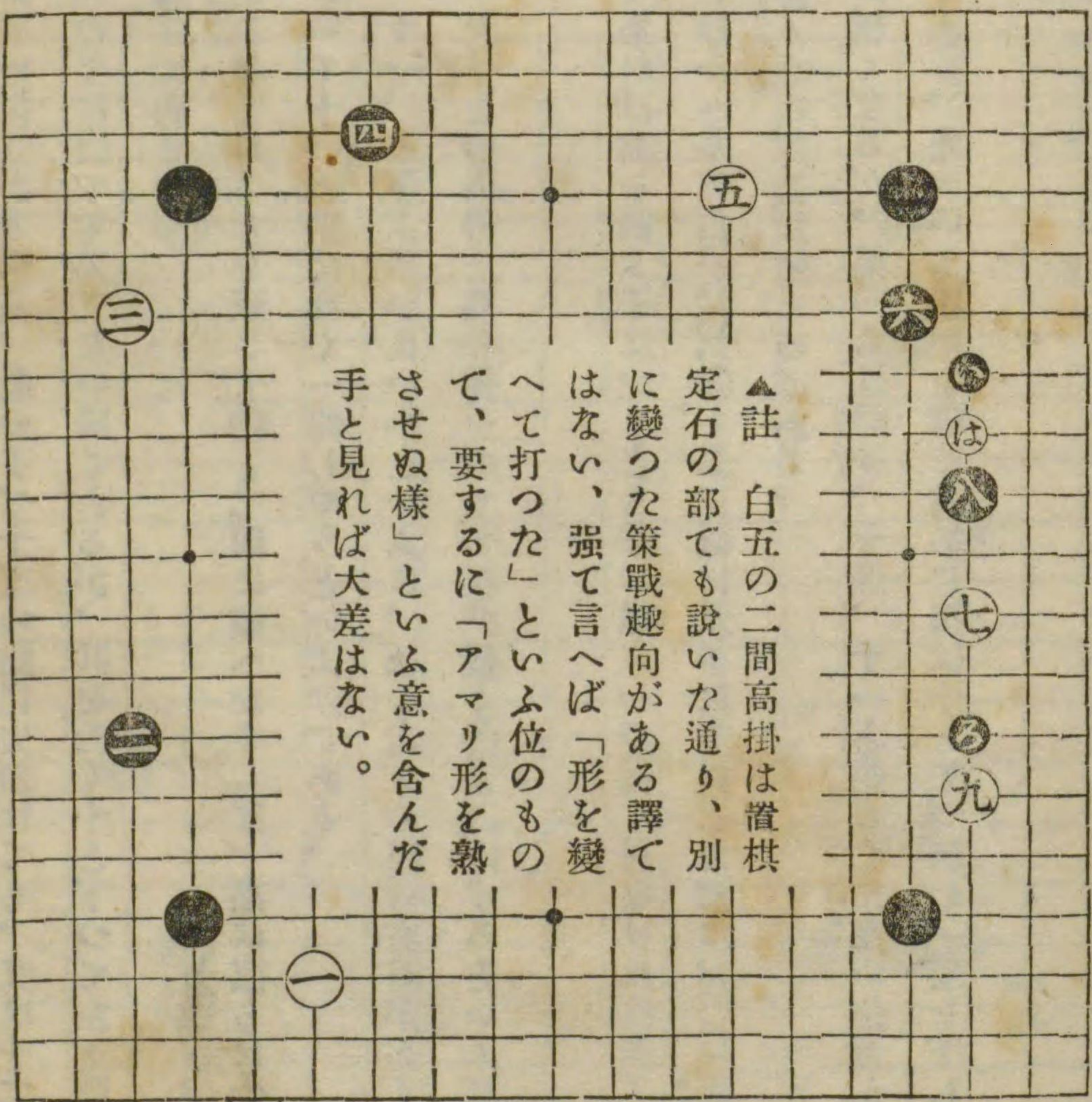
(参考圖) 前圖黒二十八で布石の大體は形づいて居るが、其以後の手で白が若し此く來たならば黒は此んな風に應じて居ても十分優勢であるといふ應接の一端を参考として示して置く、(○)は白二十九、(●)は黒三十と順序的に見る、) 若し白(イ)と下らずに(イ)と立てば黒は(ロ)と備へておくがよい、白(三)と打込んで來た時普通は己の狭い方から(ホ)と抑へる法はないが、本圖は上側の白が備が立つて居るから此く低く壓迫して先手を取るがよい、黒が(ハ)の手を平凡に(ト)の處へ行ると手拔されるから此く頂けて先手を取つて、(ニ)と左下隅へ轉じたのである、若白が(イ)の手で(ハ)と低く走れば黒は(○)の點へ飛んで居てよい、



本圖白(○)黒(●)の後、白から若も(ニ)ととも頂けて來れば黒は(ホ)と衝き當り、白(ハ)の時(ト)と截つて烈しく戦うたならば、白は應手に窮するであらう。▲尙此の形で白が(ニ)と截つて來れば黒(ハ)、白(ト)、黒(イ)、と打つて白も地が出来るが、随つて黒も手厚くなる。(終)

四子第十四局

黒六は(○)と大斜走して居ても差支はないのである、白七は黒が(ニ)から詰れば(ハ)に拓かう、八から來れば九へ行かうと兩方を見合つた手である、黒八は先づ廣い方から地歩を占たのである。



▲註 白五の二間高掛は置棋定石の部でも説いた通り、別に變つた策戦趣向がある譯ではない、強て言へば「形を變へて打つた」といふ位のもので、要するに「アマリ形を熟させぬ様」といふ意を含んだ手と見れば大差はない。

——(局子四法石布)——



黒十の手は右側の白が二間拓といふ窄い拓であるから、此の手で十五の點に尖頂けても、又は十二の點へ頂け十五の點へ抑へる頂抑への手に出ても差支ない處であるが、其を此く十と下つて左下隅を堅く締つたのは抑々理由のある着手である、

黒十の意は白が十八と一の一子を夾攻められるのを厭うて㊦と二間に備へたならば、黒は直ちに十五に尖頂け、白を十二と立たしてゐて十一の點に高く一間しやうといふのである、

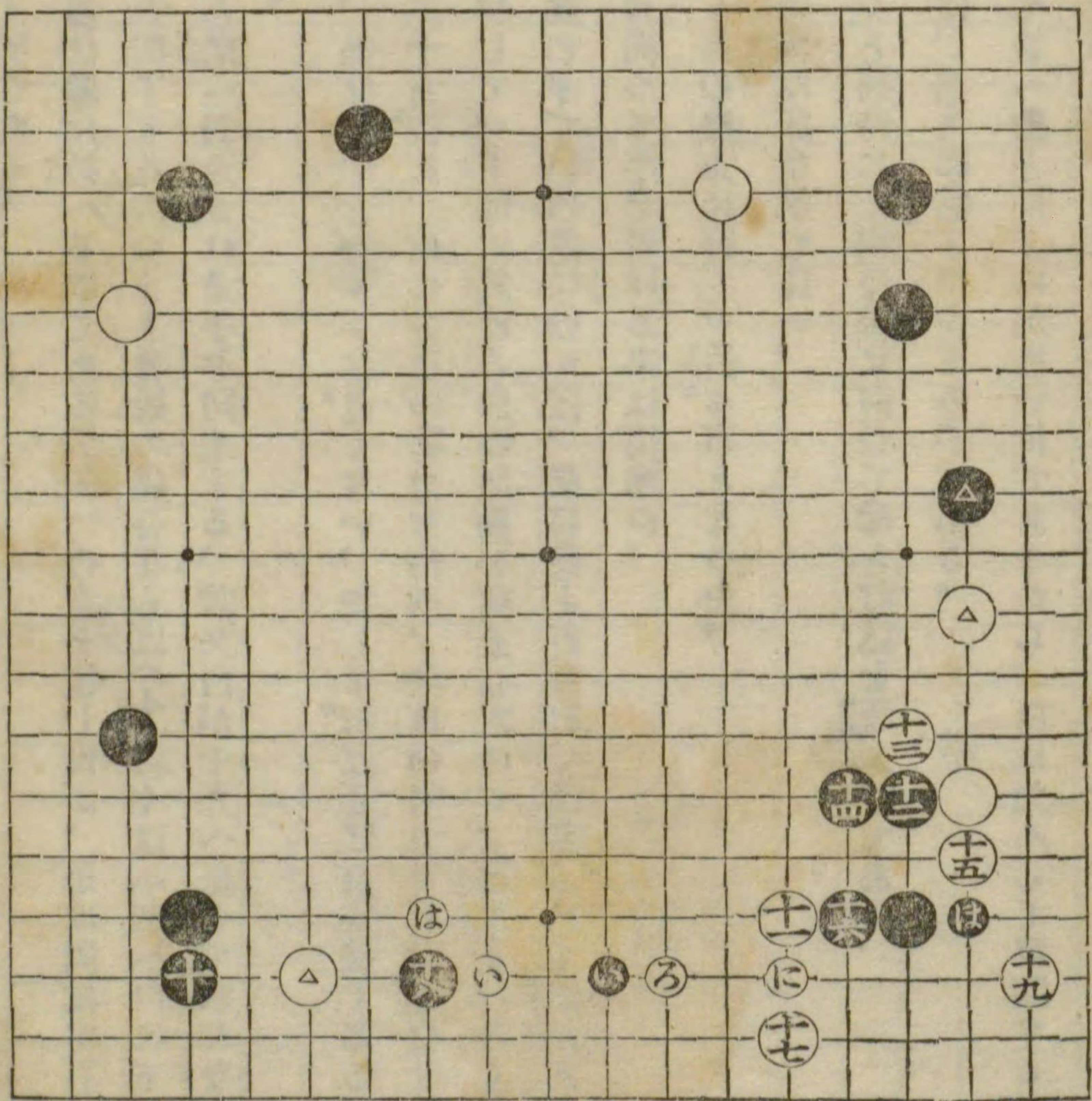
白が若し㊦と來れば、何故黒十五、十一、と運ぶ手が良いかといふに、此く右下の黒の布石が高く運んでも、白は一たん㊦と低く打つた子との均勢上黒の裾を覗うて再び低く㊦と二間するといふ事は白の姿勢が甚だ良くない。

「註」 白が一(△印)と㊦とに廣くあれば其を圍ふ子は少くとも㊦の點に一步高く居なければ調子が悪い、姿勢がよくない、更に言ひかへると白一、㊦、㊦と第三線に水平に布置した形は、俗に「雨垂れ拍子」ともいうて、低い姿勢々力の重複に陥るのである。

即ち此く白からは㊦と行けば姿勢が低くなるが、黒からは勢子、十五、十一と聯合した高い位置から低く㊦と運ぶのは極めて好姿勢である、此ういふ手順を導く爲めに黒は十と先づ締の一着を下したのである。

又黒は十の締りをせぬ前には十八の打込が利かぬ乃て黒十の手で右下に手を運んで、白に㊦と廣く

拓かれた後に十の點に下つて見ても、今度は白は㊦とは打たぬ、必ず一路高く㊦と好姿勢に圍ふ事は觀易き道理である、  
白十一は上述の黒の計に陥るのを慮つた手とも言ひ得られる、  
黒十二から十六迄は普通の手である、白十七は損得は別問題として㊦に下る手を働かして、右方の連絡を容易ならしめる手である、  
黒十八は普通此の一隅の定石として考ふれば㊦に抑へねばならぬが、茲は右側△印二子の交換の結果たとへ㊦と抑へても次に△印方面から此白を攻る事が不可能となつて居るからである。



(局子四法石布)







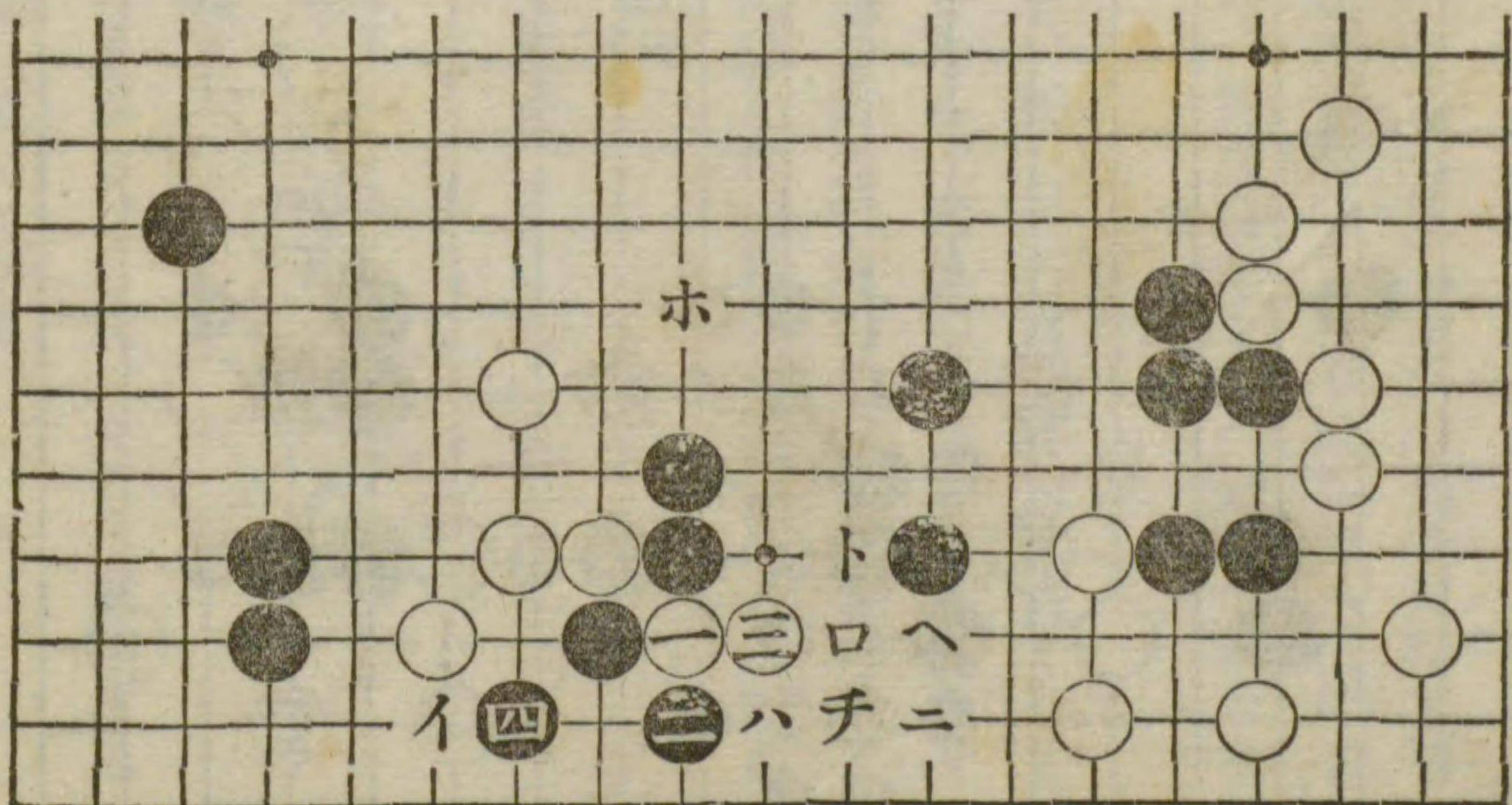
▲参考第一圖 白に一と截られた時、二と下から掬うて四と掛粘手は普通打つ可らざる手であるが、本圖の様な附近の形勢の時は、此の手段も悪くはない、乃て白五の手以下の變化を示すと

白五の手で左から(イ)と抑へれば、黒は白三の鼻へ(ロ)と頂ければよい、若又白が右から(ハ)と抑へれば黒は左へ(イ)と盤り、次で白が(ニ)と盤つた時(ホ)と中央へ單關しておくがよい。

其から之は白として極めて拙劣な手ではあるが、白五の手で(ロ)と行びて来れば、黒(ハ)と抑へ、白(ニ)と盤つた時黒亦(イ)と左へ盤る、

或は白が五の手で(ハ)と飛んで来れば、黒は(ロ)と冲じと好い、其時白が上から(ト)とアテ、黒に(チ)と下られては、一、三の二子は助らぬから白は(チ)と下から盤り、黒(ト)の時白(ハ)と粘ぎ、黒亦左へ(イ)と盤るがよい。

(圖壹第考參)



參考第貳圖

前に擧げた數種の白手は平凡であるから、之に對する黒の應手もサマデ六ヶしくはないが、茲に掲ぐる白五の尖頂けは頗る巧妙であるから、黒若し一步を誤ると少からぬ損失を招く事がある、

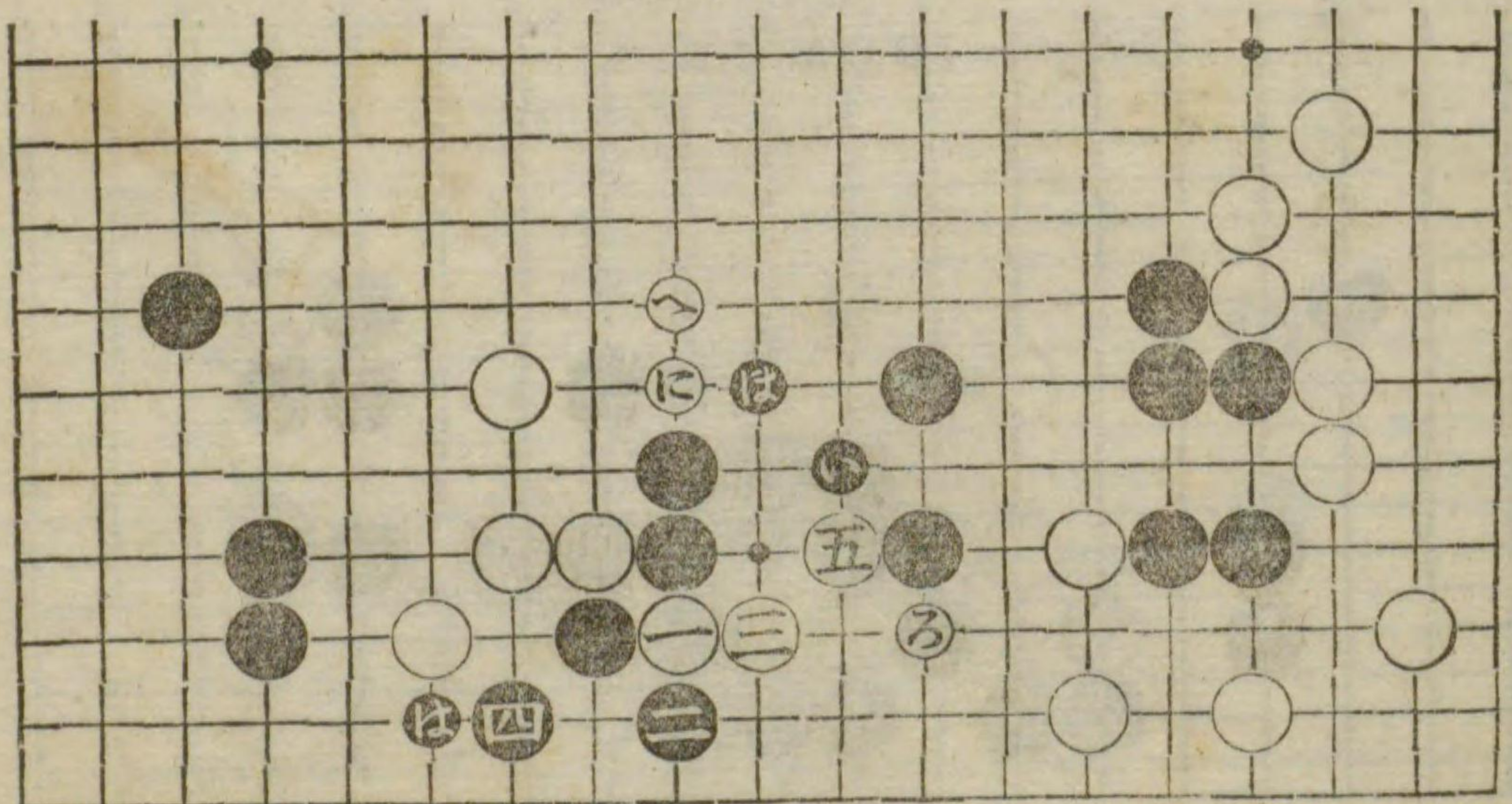
此の白五の眞意は、黒に(ニ)と抑へさせ(ロ)と盤り黒に(ト)と手を引かせて(イ)に頂け、黒(ハ)と運ばさうといふのである、

此くなつては、下の白は無事に連絡し、上の白は相當に勢力を加へ、中に挟まれた黒は形崩れの不利を犯す事となる、

サリとて白五に對し黒が(イ)の點へ下れば、白に(ロ)の點へ行びられて、手が緩むから其の結果は如何成り行くか分らぬ、乃て此く五と尖頂けられた時は、

黒は次頁に示す様に運ぶが最良の應手である。

(圖貳第考參)





参考第三圖

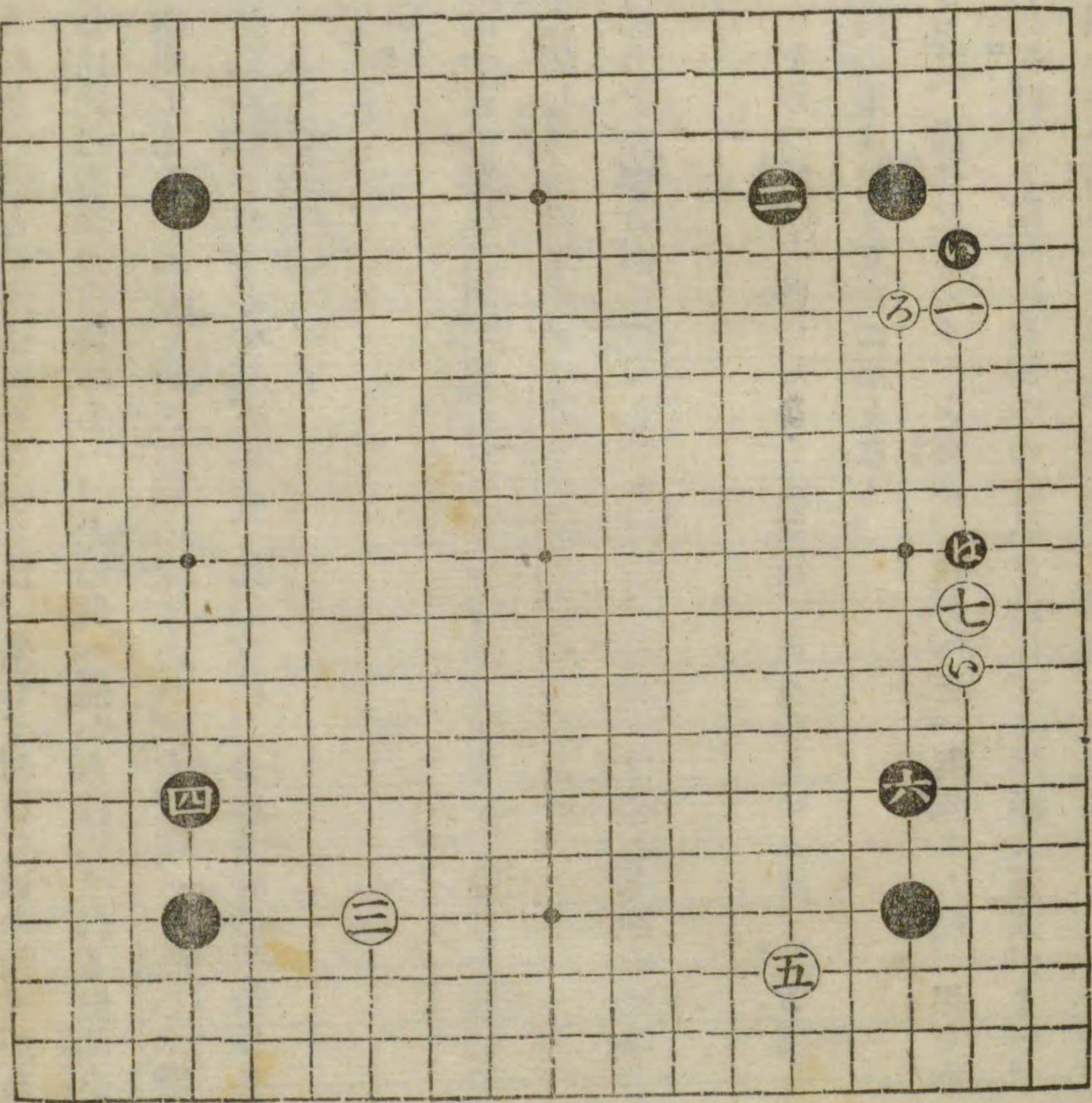
白の尖頂こすみかげに對して黒は六と「アテツケル」手が最も手速く決りしまのつく手である、乃ち本圖の様に十、十二と絞しぼりつけて終つて十四と盤わたるが上策であるが或は、黒十の手を十一に粘つぎ、白十の時十二と封鎖し、白を⑤と盤わたらして十四と打つてもよい、

若又黒六の時白が十一と截きつて來れば、黒は九と下さがり、白⑧、黒七、白八、黒⑨となれば黒の有利なる事勿論である。

茲て白の手で注意す可きは、黒六のアテの時先づ自己の缺點を七と修めて然る後應接す可き事で、誤つて七の手を以つて九と打ち、黒の缺點を十一と補はしむる様な事があれば白は全滅の悲運に陥らねばならぬ、即ち白七の手で九、黒十一、白十、黒⑥、白七、黒十二、白八、黒⑩となつて到底免れ様はないのである。

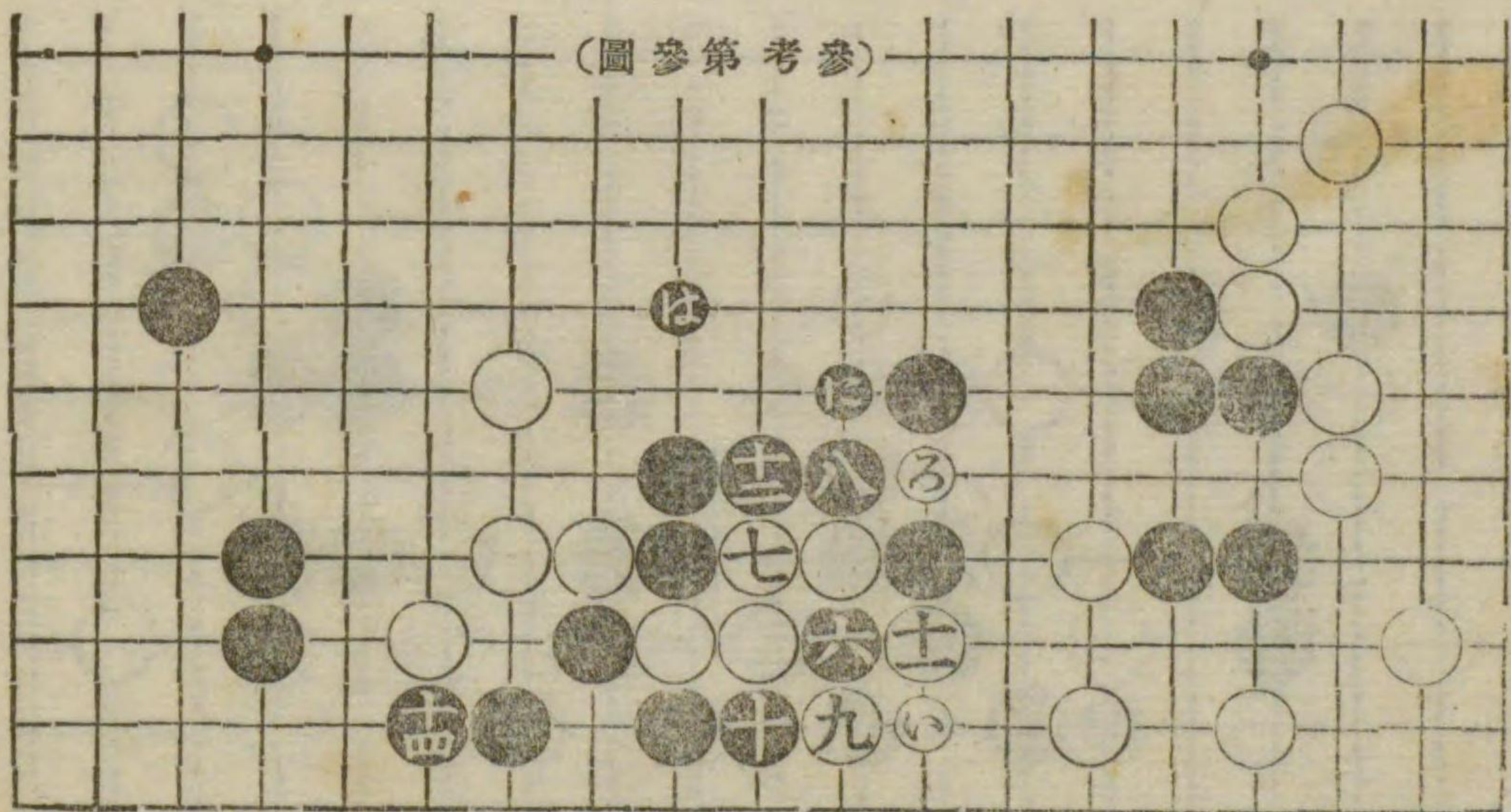
第十五局

黒六は是非共此の點に打たねばならぬ、黒が此く六と一間高く飛んだのは、白に七の手を打たさうが爲めである、元來此の黒六の手には⑥と右上の白一に尖頂けて⑦と立たせ次で⑧と星下に打つて一方六からの拓ひらきとし、一方一、⑧の白の發展を妨げやうといふ手順を含んでをる、乃て黒六の時白は斷じて手抜する譯に行かぬ、此の黒の策を破つて必ず⑨若くは七と打たねばならぬ、乃ち黒六の眞意は、此の形勢を示して、白を七に誘致して置いて他に大場の利益を占めやうといふのである。白七は一路廣く⑩と打つても差支つかへはない。



~~~~~(局子四法石布)~~~~~

(圖參第考參)





△註 白七の一子が此く四間拓であるのと、⑤と五間拓にあるのとは、果して何れだけの相違があるかといふと、本圖の如く狭い場合は此の右側の白地即ち一、七の間へ黒から打込まれる患は少い代りに、右下隅に及ぼす感じは薄弱である、此の七が若し⑤の點にあれば右下隅へは酷しく響くが其の代り自己の地域へ黒から打込まれる惧も多し譯である、此の攻防二つの意味の相消長して居る處が面白い。

黒八は上側星下十の點に打つても可い。

白九の手は十二の點に一問高掛り或は十三の點に二問高掛何れにしても差支はない、或は上側⑤の邊に打つ様な理もあらう、又は左上に對して大斜走の掛り點たる⑥に打つてもよい。

白九の意は、黒を⑥と飛ばして黒の勢力を左側方面に偏らして置いて、④若くは③と上側の要地を占めやうといふのである。

然らば白が九と打たずに、此の九の手を以つて④と打つたならば如何であるかといふに、然る場合には黒から③の點に詰められるから白の策は成り立たぬ事となる。

白が九の手で若し③と打つて來たならば、黒は之を(イ)と夾み、白が④と一問飛した時、黒も亦④と一問飛して右上隅の勢力を中原に展ばすと同時に右側への打込を急にする手順に運ぶがよい。

黒十は前述の白の策を破つて右上我隅からの拓きを兼ねて、白九を三問夾とし其發展を妨げたので

ある。白十一の手を以つて

⑤の點の一問高

⑥の二問高

⑦の大々斜走

或は十五の三々打込をなす等

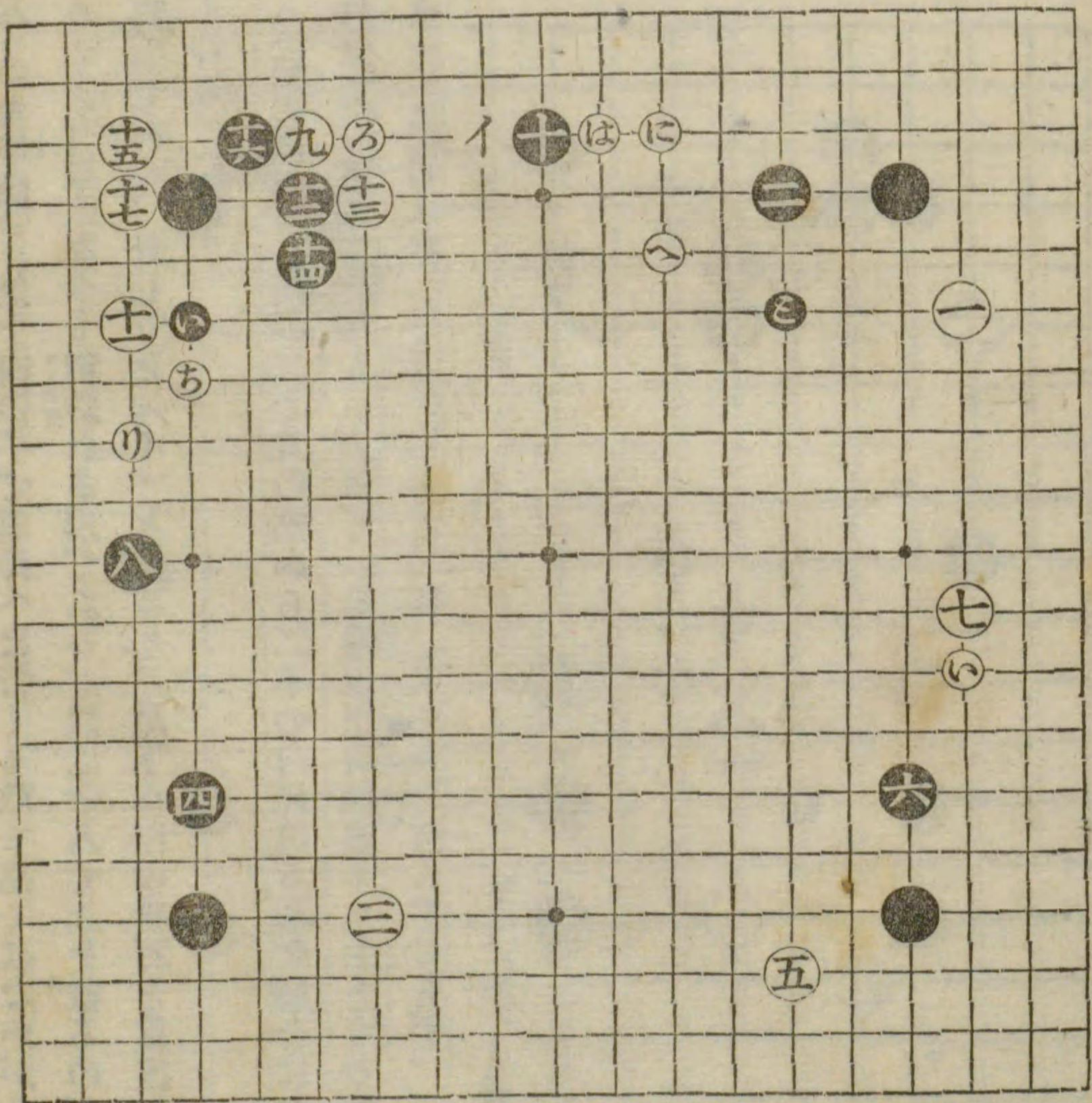
種々の趣向がある。

黒十二は左方へ⑧と頂けても同じ事である。

△問 黒十四の手を十六の點に頂抑への定石に打てば如何。

○答 敢て黒の不利といふでもないが、其の結果次頁參考圖に示す様な稍紛れる形になるから、やはり此く分り易く打つておく方が可い。

黒十二以下白十七迄は普通の定石である。



~~~~~(局子四法石布)~~~~~



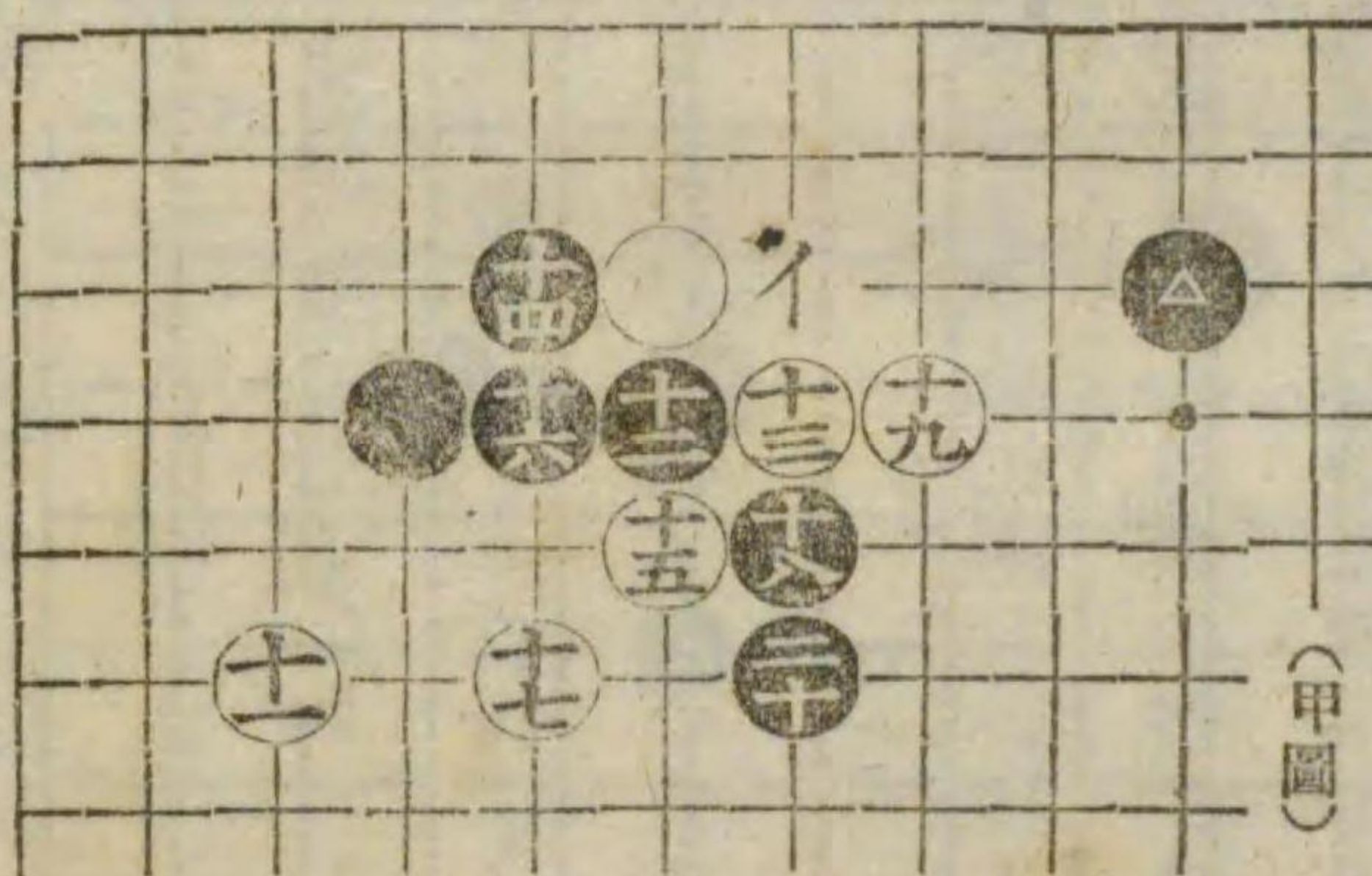
黒十八は下側白の大模様を未だ成らざるに當つて破る手である、若し此の手で上側を打つとすれば●の飛びである。

△註 上側星下に□印一子の黒が無い場合には、黒は十八の手を以つて(イ)の點を截つておかねばならぬ。又黒が十八の手で本圖の如く、下側に打たぬ場合、白が此の地を纏めるとするもやはり十八の點であらう。

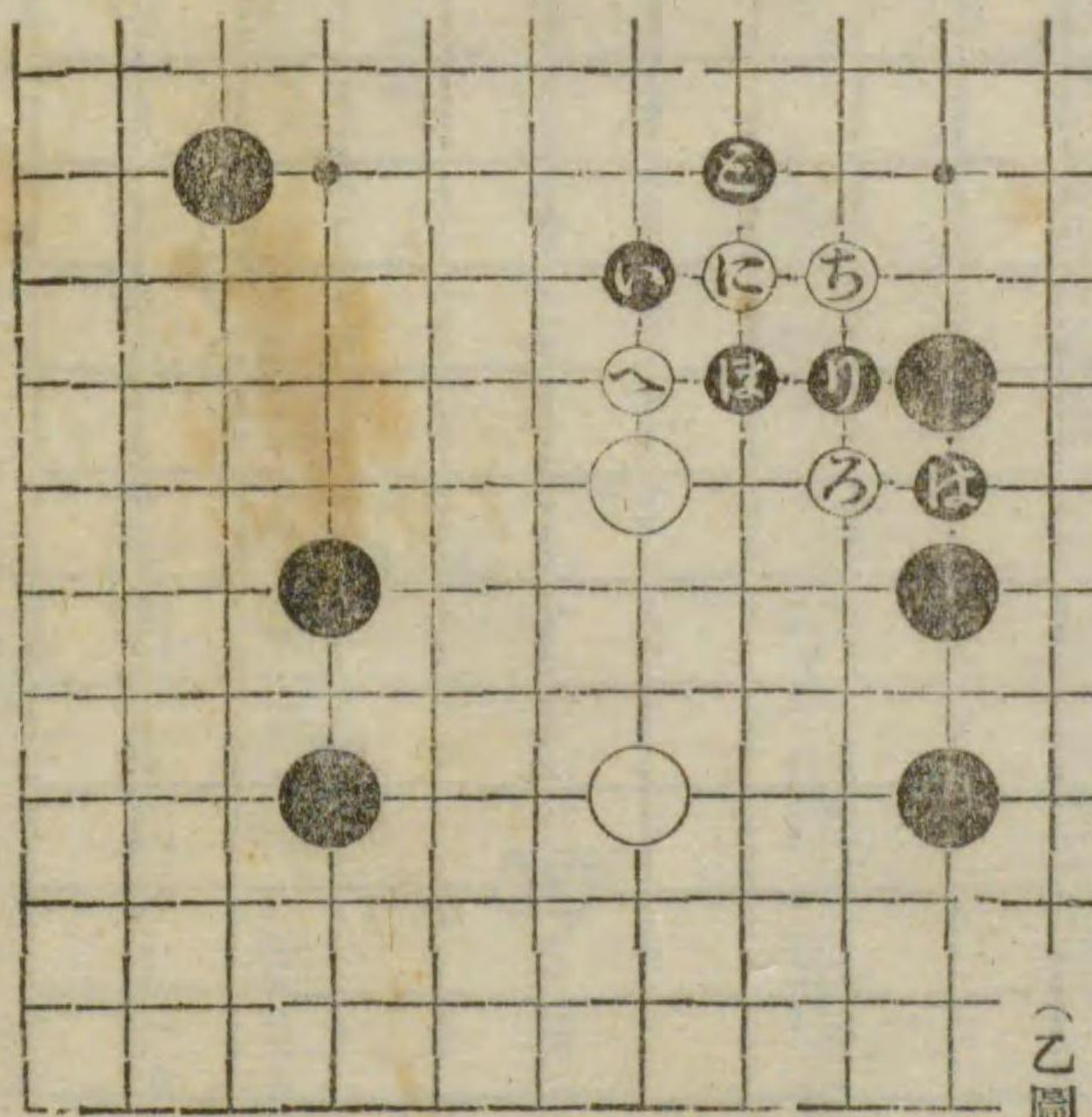
白若し十九の手で○と右下隅へでも走しらば、黒は二十の手で●と冠して白一子の中原に發展する進路を妨げるがよい。白若し二十五の手で◎と來たな

△(参考甲圖) 黒十四の手で頂抑へに行くも敢て悪くはないが此ういふ有様になつて稍紛れる形である。黒は十八で上を截るのが要點である、若し下を(イ)と截ると、星下△印の我石と重複して不利である。

△(参考乙圖) 黒が二十五の點から二子の白に迫る様な場合になれば其の應接は略此ういふ風で(黒●以下符號通り)主とする所は白を左側に壓して遁れしめよ、斷じて中央を破らす可らず。



(甲圖)

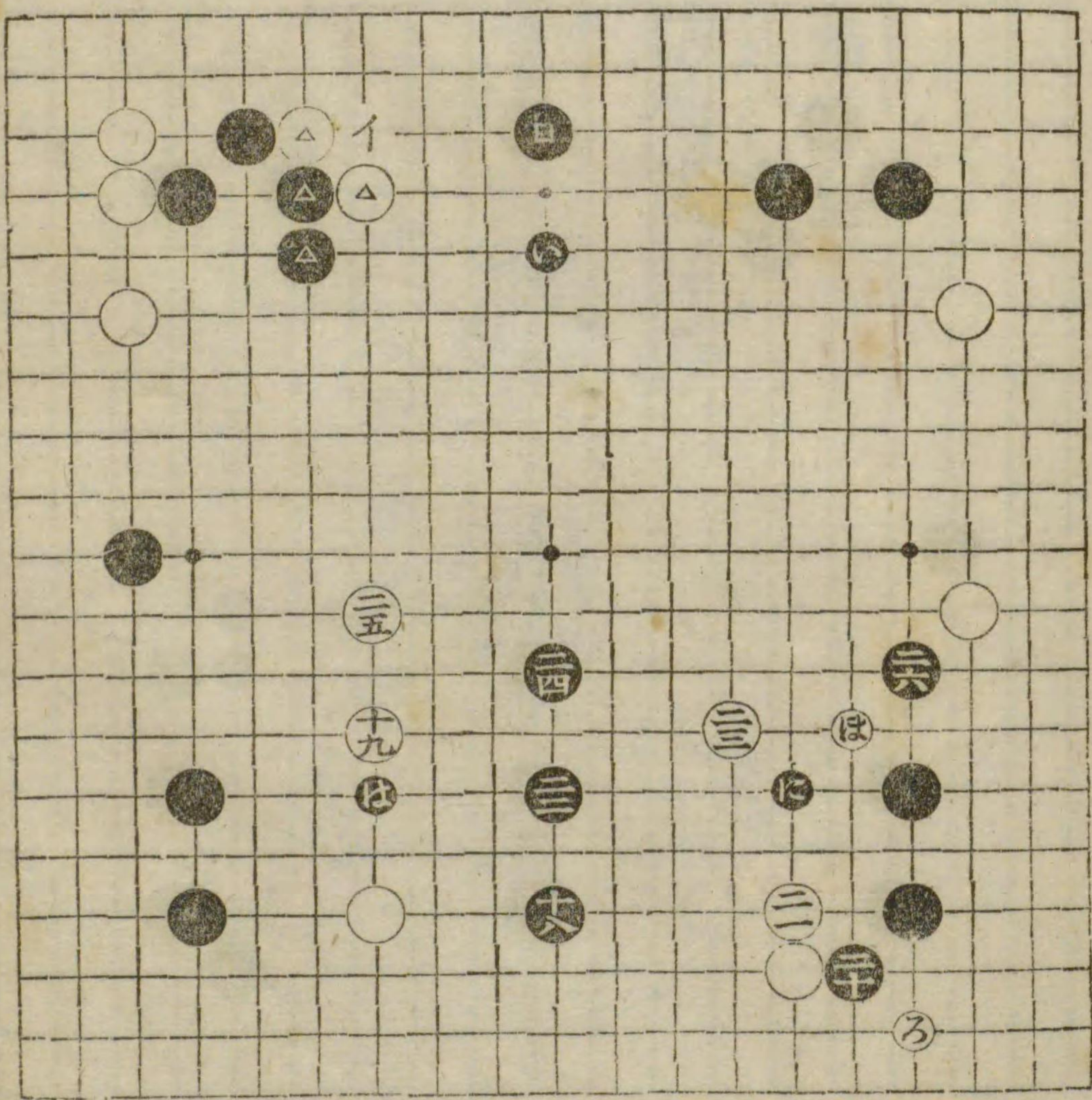


(乙圖)

らば、黒は二十五の點に冠して二子の白に迫るがよい。

黒が二十五の點から二子の白に迫る眞意は、此の二子の白を左上隅三子の白の方へ遁れしめ、其の勢を利用して我が十九、二十二、二十四、の三子と左上△印四子の黒との連絡を容易にして、勞せずして△印二子の白を捕獲せんとするのである。

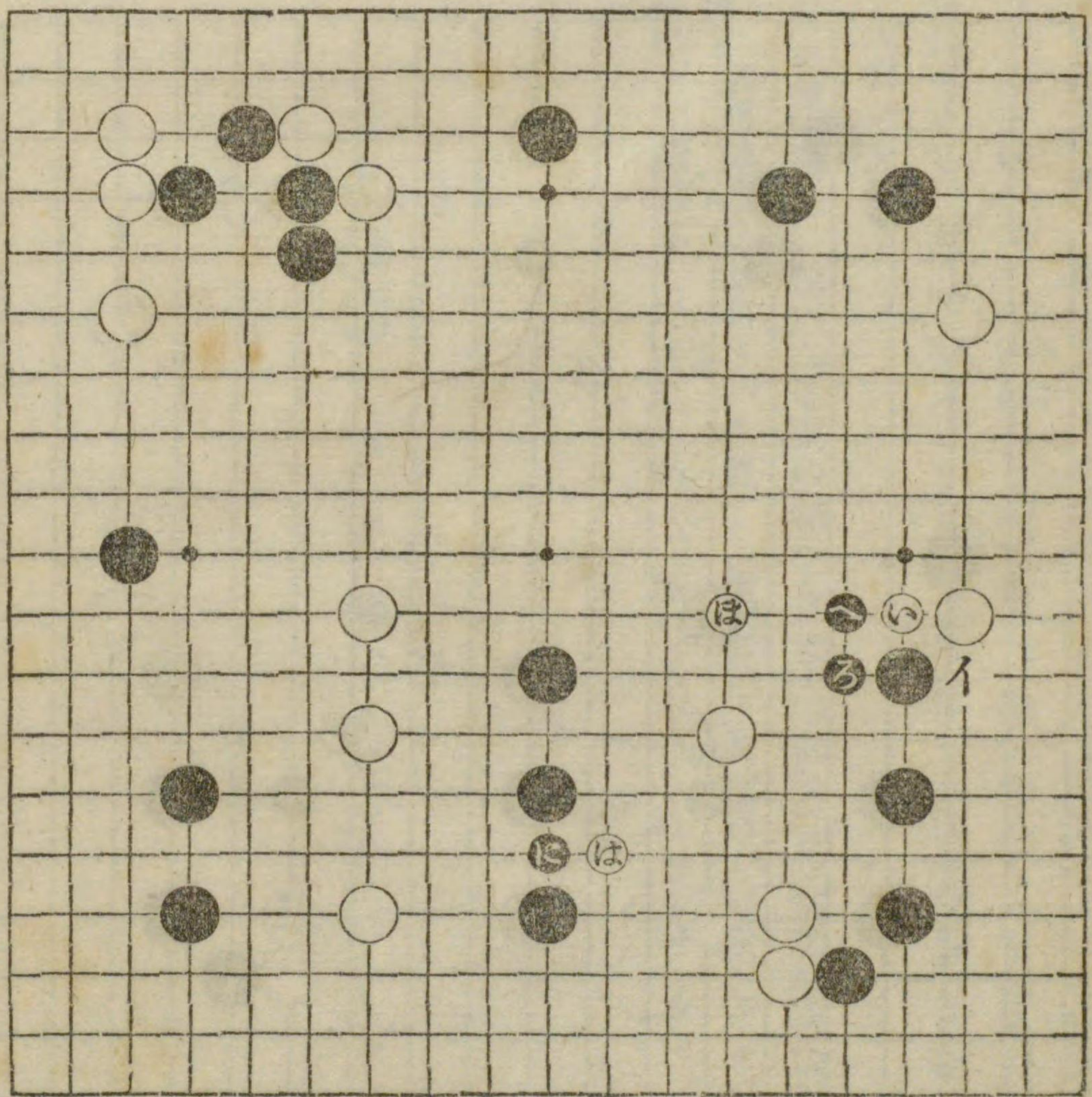
黒二十二は◎と冠してもよい。但し本圖二十二の手は絶えず白を左右に隔て、之を攻る手になつて居る。



~~~~~(局子四法石布)~~~~~



「殘説」前圖黒が二十六と打つた後、白が二十七の手で、㊦と押し来て来たならば黒は㊧と行ひて三子の白に響く事になる。次て白の手を想像すると、㊨と覗き黒に㊩と粘がせて、茲に一子の補ひをしてゐて㊪と出る位のものであらう、其の時黒は㊫と曲つて白二子の頭を抑へておくのは有利な手である。然し能ふ可くんば黒は(イ)の點を抑へたい、是は即今の實況から見て實に好良な點である、此の意味からして、黒は最初白㊬に應じて㊭と行ひる手で㊮の點に緯ね、白が㊯の點を截つた時(イ)と抑へる手段もある。



高等圍棋研究錄附錄

八段本因坊秀哉詳評  
鈴木 宮阪 十番棋

(研究練修實例)



# 十番棋

第一局

先九目勝 鈴木爲次郎 宮阪兼二

本評、黒十三は無論●に應じねばならぬ、即ち三、十一、●と此の方面の黒の備へが十分に立つて居れば、次で●と打込んで、白が六、八の間に造らうとして居る地域を蹂躪する事も酷しく利く譯である、たとへ白から●と打つて白自身の地を造ると同時に、五、九の黒の締りに向つて侵略をして來やうとも其は畢竟黒は主を以て客を迎へる位置にあるのであるから、普通の應接（研究録布石の部互先第一局第十一頁右下隅に示す手順）に従へばよいのである、

黒十七の手を以て十八の點に拓くがよい、若白の八が一路廣く●に在るならば此く十七と尖頂けねばならぬが、本圖の如き場合は白若し●の方面から迫つて來れば、黒は其時十七と尖頂ける、若又白が●と隅へ斜走すれば、黒は●に拓く此の二つを見合つて居られる所であるから急いで十七と尖頂ける必要はない、十八に拓くこそ却て要を得た打方である。

## 對局者の意見

●宮曰、黒十三は●に打つ方が善かつたかと後の考で打つたのであります。

○鈴曰、白十四は星下●に打たうかとも思ひましたが、黒から●に詰られるのがイヤでした。白十六の手で●に頂けやうかと考へましたが其では黒から●に縛られ、白●に行ひ、黒に十七と尖頂けられて●に下り、黒に十八の點に二間拓されるのがイヤでしたから此く尖みましたが、が然し此の尖みもヘンでした、

白二十の手で●にノヅキ黒に●と粘がして●と尖頂ける手はないでしたらうか。

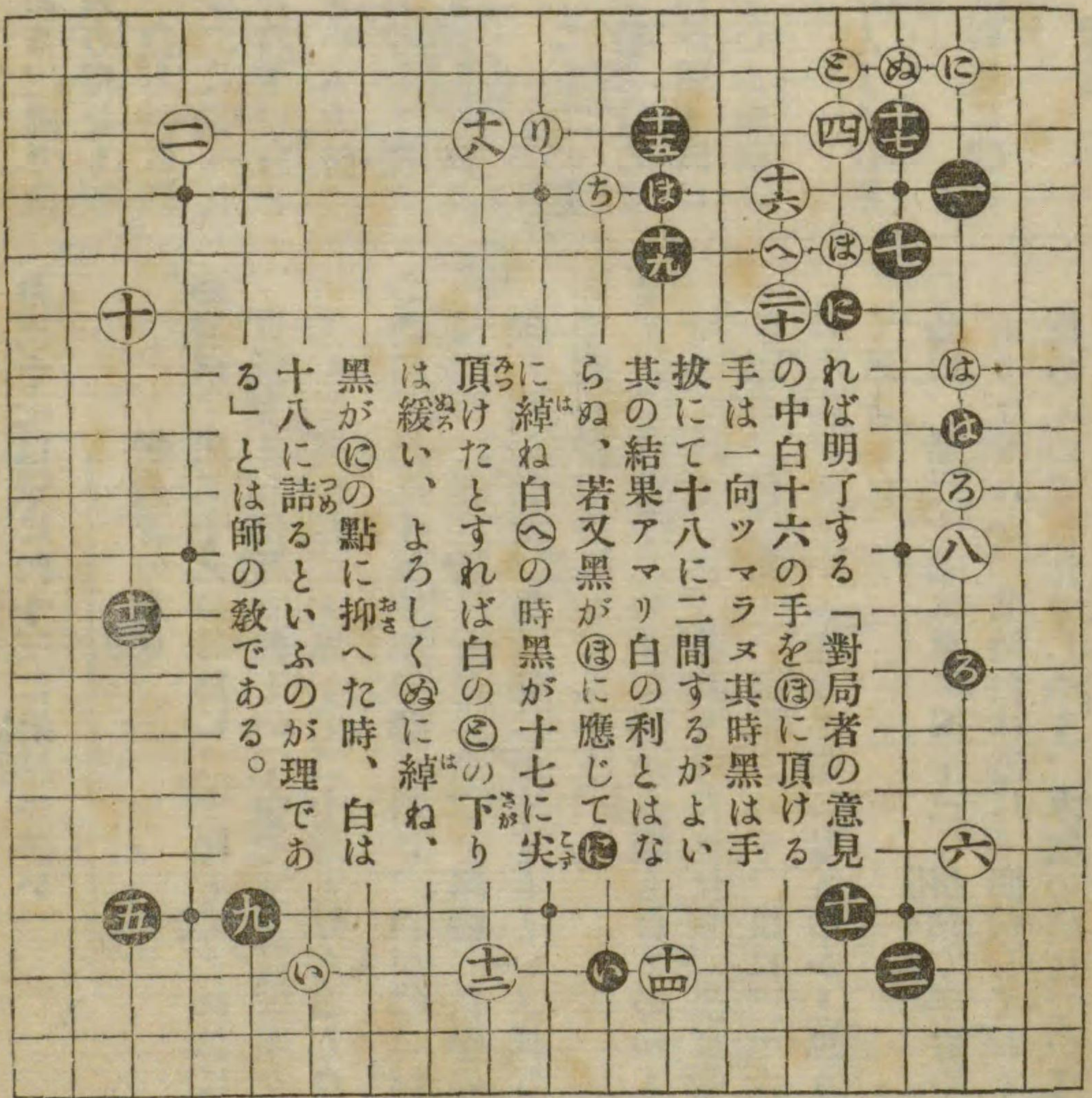
『註』黒一から五までの各着は（布石法互先第一局の初めに述べてある通り秀策流の布置である、茲で注意を要するのは、白八の手である、此の白六からの拓き場所としては本局の通り四間拓きと更に一路進んで●に拓くのとモ一つは一步退いて三間拓にするのと種々ある、此の種々の打方には其々特殊の意味がある、若是が●に五間拓の場合であると、黒に

打ち込まれぬやう若くは黒から

壓迫されて低く這ふ様な患の無いやう圍うて地域を造らうといふ最初からの策戦であるが、本局の如き四間拓若くは更に一路狭い三間拓をする主意は、當分茲には手を着けず反對に●印方面から黒を牽制して打たう、若又黒が上から壓迫して來やうとも其時は柔順に這うて居ても少しも不利でないといふ見極めをつけた打方である、勿論詳細は（研究録互先局）に此の形の出た上で判明す可きであるから茲には略する。

白が十二と打つた場合は（布石法互先第一局第九頁白十）と打つた彼の意を應用すればよい。又白十二の手の打場所としては（同第七頁上欄第四行以下）に詳示してある主意を熟讀す

## 第二十手迄



れば明了する「對局者の意見の中白十六の手を●に頂ける手は一向ツマラヌ其時黒は手抜にて十八に二間するがよい其の結果アマリ白の利とはならぬ、若又黒が●に應じて●に縛ね白●の時黒が十七に尖頂けたとすれば白の●の下りは緩い、よろしく●に縛ね、黒が●の點に抑へた時、白は十八に詰るといふのが理である」とは師の教である。



本評、黒二十一の手は面白くない、此の手なくとも白は二十二と備へたい位の所である、其で此の二十一、二十二の交換は黒として策の得たものではない、宜しく此の手で⑤に飛び、白が④に應ずれば、更に⑥に飛び、白が若し二十二に備へたならば、黒は⑦に打つて今追うて来た四子の白と右側の二子の白とを隔て、是を攻るといふ方針に出ねばならぬ、若又白が二十二に圍はずして更に⑧と飛んだならば、黒は⑨に打込んで烈しく攻るといふ手段に出ねばならぬ。

黒二十三は緩慢である、已に二十一、二十二と交換を遂げた以上は、此の二十三の手で⑩と白の肩側から打つか、或は⑪と打込んで、白が四十四に頂けて来たら、黒は四十の點に飛ぶといふ趣向に出ねばならぬ。

黒二十五以下數着の交換は無益と言はんよりは寧ろ有害な着手である、殊に二十九は悪い、此の手で⑫にあて、白が三十と提つた時更に⑬にあて白⑭の時、劫をとるの手續である。

白三十四の手は三十五に下らねば黒の眼形を奪ふ

に大變な差がある、白三十七は單に四十三に掛粘が善い。

對局者の意見

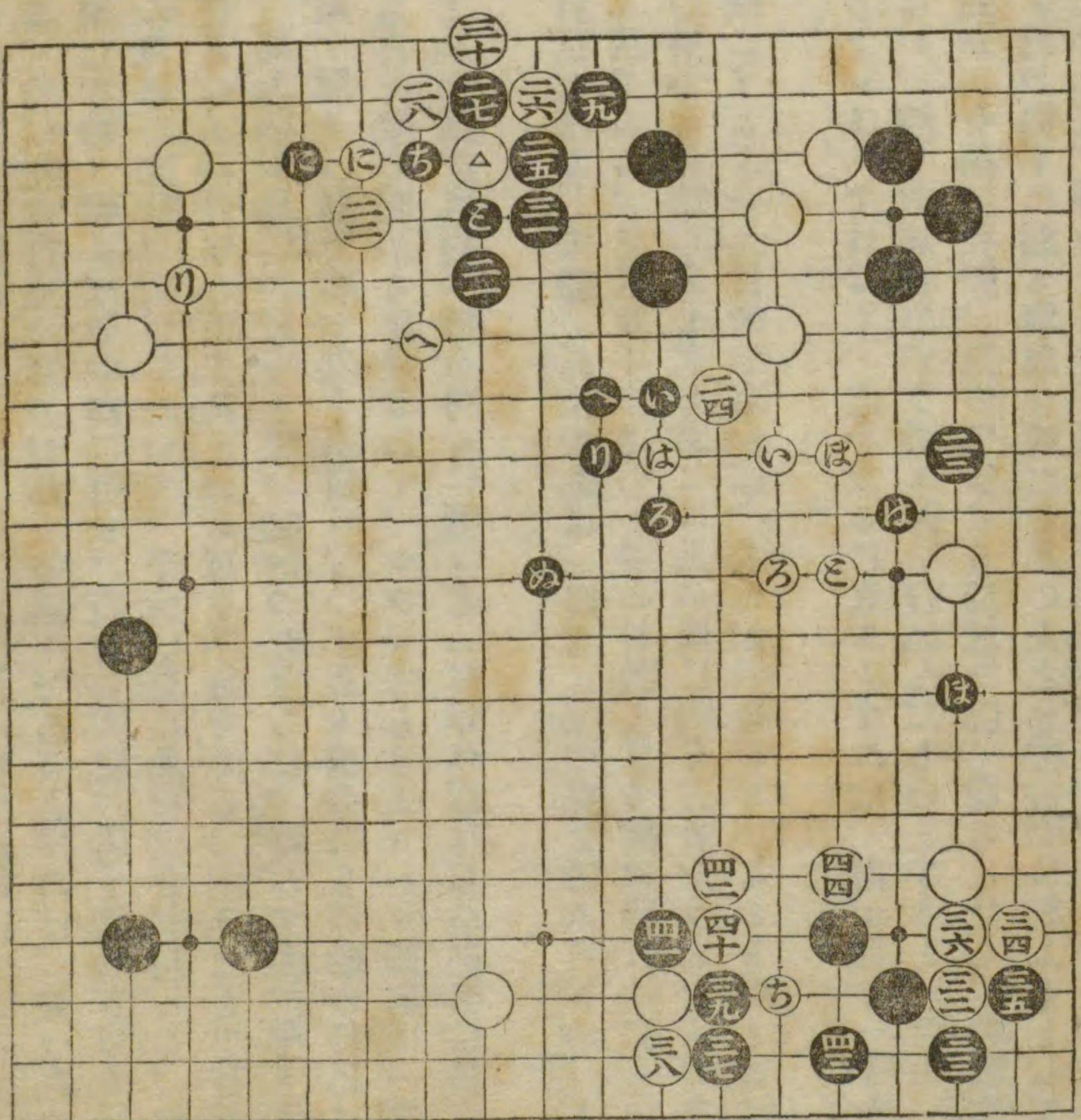
●宮曰、黒二十三の時白に二十四と尖まれたには困りました乃で何とか(上邊三子の黒)手を入れて置かねばと思つて二十五と打ちました

○鈴曰、黒二十五の手を⑮に頂け、白が⑯に緯ねた時、黒は⑰に行び、白⑱、黒⑲、白⑳の點に行びた時、黒は㉑に斜走するといふ様な手續はドンナものでしやう、

●宮曰、白三十二の手で㉒から煽られるのかと思つて居ました、若其う打たれたら、黒は㉓に應じ、白に㉔と一間飛されて、黒は三十六に尖頂けるといふ様な手續になるのかと思つて居ました、

○鈴曰、黒三十七は單に四十三に掛粘ぐ手ぢやありませんか、其時白は㉕に一間飛しておく位のものでしたでしやう、本圖の様になつては何だかイヤな形です。

第廿一手より第四十四手迄



『註』本圖で最も注意を要する

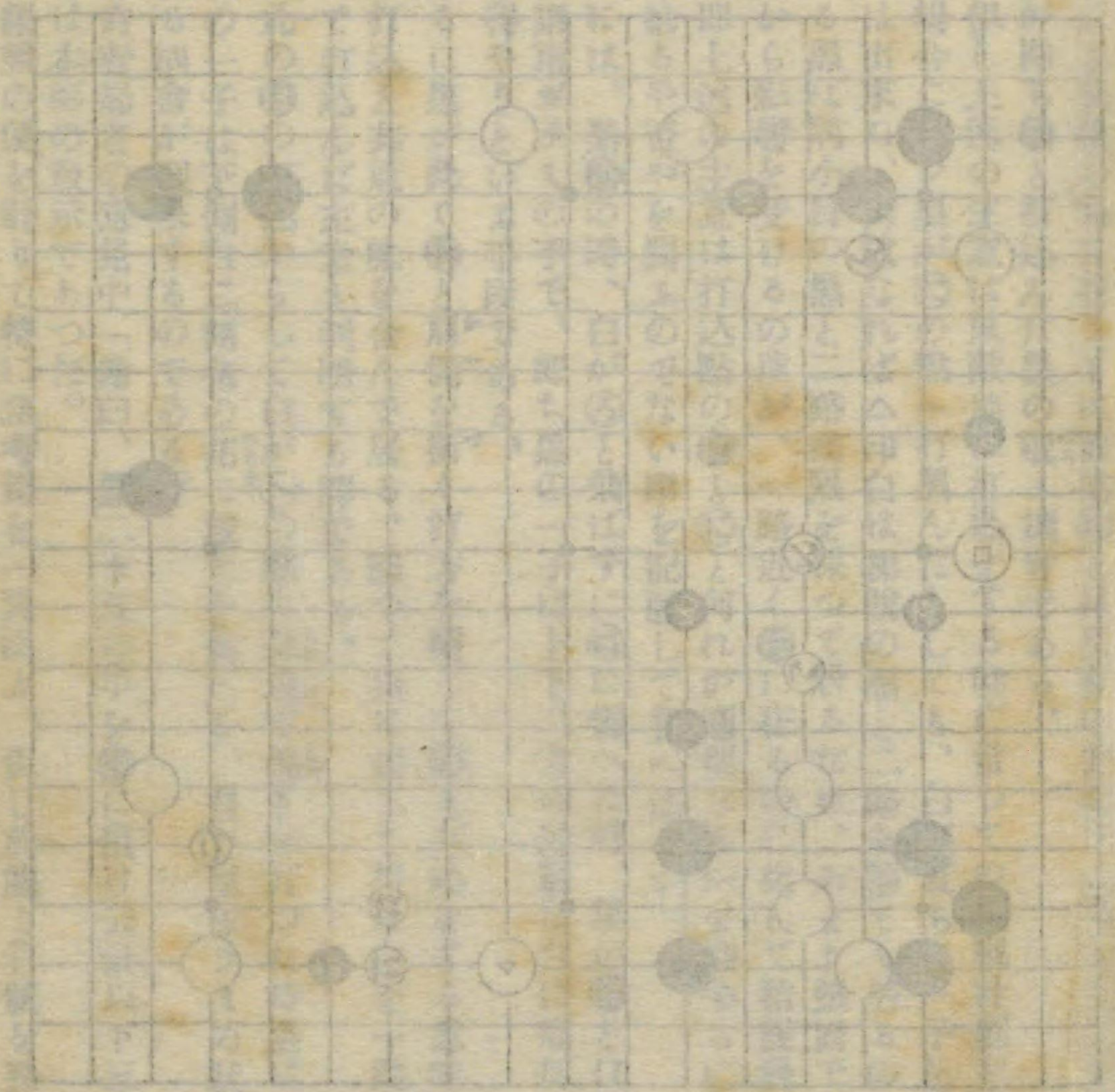
のは、黒二十一の手で④、⑤と三子の白を煽つておいて、次に白が二十二に備へたならばから捌で打たう、若又白が⑥と打つたならば⑦に打込んで(大斜走締であるだけに比較的勢力の疎な)左上隅に迫りつ、△印白を攻立て、利を占めやうといふ、此の巧妙な策戰の應用法である、此ういふ場合は深く左右及附近の自他の勢力形態を観察した上で策を立てねばならぬ、只漫然と着手する時は支離滅裂の慘境に陥るの患がある、本圖の現況を見ると右上隅には「已に師の講評にもある通り」前圖十七不急の一着によつて非常に鞏固になつて居る。



又左上隅方面は、隅の締りが大斜走であつて稍緩んで居る上に、△印白の拓きが四間であるから黒からは乗す可き隙が十分にある、已に左右自他の形勢が此くの通りであるとすれば、先づ右上隅の自己の堅固なものを飽迄も利用して、●と三子の白に迫り、白をして◎、◎と應せざるの己むを得ざる境遇に立たしめ、茲に自己の梯壁を築いておいて、今度は更に此の壁を利用して、敵の勢力の疎漫な地點に◎と打込むといふのは水も漏さぬといふ可き手段である、所でたとへ右上隅の黒が如何程堅固であつても、左上隅の白に乗す可き隙が無かつたならば、溯つて◎、◎と煽る手段からして變更せねばならぬ、例せば隅の締りが◎と高目に打つてある場合ならば◎の打込は絶対にイケない、何故なれば忽ち白に◎の點から壓迫されて、ヤラレてしまふヨシヤ萬死に一生を得るとしても、白を攻めやうとした黒が反對に活を得るに汲々としなければならぬ窮境に自ら陥る事になるからである、

次に本圖の様な形勢の時に黒の打込場所として◎を擇ぶか或は一路右に◎の點を擇ぶ可きか、といふ事は初心者の稍もすれば惑ふ所である、元來此の打込の一子の目的とする所は何れに在るかといふに、敵の地域を蹂躪し敵の勢力を分割し之を攻め立て、其の間に利を占めやうといふのであつて、若も之が只敵の一子を擒にするといふ目的であれば、其は志の極めて小なるものと言はねばならぬ、

已に打込の目的が小敵を擒にするといふのではなく、之を攻るに在るとすれば、敵が軽く一子を捨て、呉れるのは我が望む所でない、然し此場合の如き若も◎に打込んだものとすると、白の一子の運動が窮屈であると同時に白が之を捨てた際、黒の包容する地域は◎に在るに比して餘程窄くなる、之を白の立場より見ると己が動くに頗る窮屈を感じて其の上之を彼(黒)に與ふるとしても彼の得る實利は少いといふ事になれば、場合によつて軽く捨つるに吝ならぬといふ趣も出来る



に忍びぬ  
本圖の如  
推定する  
込んだと  
の打込の  
からであ  
白が一子  
つ、之は  
以て利益  
述べた  
間隔をお  
關すると  
利を占め  
出来ない  
と一致せ



又左上隅方面は、隅の締りが大斜走であつて稍緩んで居る上に、△印白の拓きが四間であるから黒からは乗す可き隙が十分にある、已に左右自他の形勢が此くの通りであるとすれば、先づ右上隅の自己の堅固なものを飽迄も利用して、●と三子の白に迫り、白をして◎、◎と應ぜざるの己むを得ざる境遇に立たしめ、茲に自己の梯壁を築いておいて、今度は更に此の壁を利用して、敵の勢力の疎漫な地點に◎と打込むといふのは水も漏さぬといふ可き手段である、所てたとへ右上隅の黒が如何程堅固であつても、左上隅の白に乗す可き隙が無かつたならば、潮つて◎、◎と煽る手段からして變更せねばならぬ、例せば隅の締りが◎と高目に打つてある場合ならば◎の打込は絶対にイケない、何故なれば忽ち白に◎の點から壓迫されて、ヤラレてしまふヨシヤ萬死に一生を得るとしても、白を攻めやうとした黒が反對に活を得るに汲々としなければならぬ窮境に自ら陥る事になるからである、

次に本圖の様な形勢の時に黒の打込場所として◎を擇ぶか或は一路右に◎の點を擇ぶ可きか、といふ事は初心者の稍もすれば惑ふ所である、元來此の打込の一子の目的とする所は何れに在るかといふに、敵の地域を蹂躪し敵の勢力を分割し之を攻め立て、其の間に利を占めやうといふのであつて、若も之が只敵の一子を擒にするといふ目的であれば、其は志の極めて小なるものと言はねばならぬ、

已に打込の目的が小敵を擒にするといふのではなく、之を攻るに在るとすれば、敵が軽く一子を捨て、呉れるのは我が望む所でない、然し此場合の如き若も◎に打込んだものとすると、白の一子の運動が窮屈であると同時に白が之を捨てた際、黒の包容する地域は◎に在るに比して餘程窄くなる、之を白の立場より見ると己が動くに頗る窮屈を感じて其の上之を彼(黒)に與ふるとして、も彼の得る實利は少いといふ事になれば、場合によつて軽く捨つるに吝ならぬといふ趣も出来る

所が本圖◎の時に在つては前述◎とは反對の意味であるから、白も大抵な場合之を捨るに忍びぬ之が即ち◎と打込んだ黒の視ふ機會である、

(但し上述の主意は只敵地に打込をする時に當つての策戦計劃を洩した迄であるから、本圖の如き場合にヨシ黒が◎の點へ打込んだとしても、白が直ちに一子を捨て、打つであらうと推定する事は出来ぬ、何故なれば△印白は梯壁の黒と二路を隔て、居るのと、又一方◎の點に打込んだとする黒は隅小目の黒と二路間隔を保つて居るため、あまり堅固でない大斜走締の隅が此の打込の黒から影響を受けるの度が、一路近く◎に在るのに比して稍緩漫であるといふ理があるからである即上述の主意は打込點の◎と◎と何れが適切なるかを論ずるに在つて、必らずしも、白が一子を捨るや否やを問ふのでない事を記憶して貰へばよい)

次には、黒◎の時、白が◎と飛ばずに◎に備へた時、黒が◎と口印白の肩側を衝いて打つ、之は所謂兩ガラミの手で、即ち黒の一子は上下二方の薄弱な白に痛切な感じを與へ、依つて以て利益を得やうといふ手段である、

然るに黒が此く◎と肩側を衝く打方を變じて◎と打込をする意味はといふと、之は前に述べた◎の打込と共通の味を含んで居る、随つて隅に接して居る白を一間夾にせず、之と二路の間隔をおいて打込んだ主意も判明する譯である、

尙此の◎の打込からして白が◎の點に飛頂て凌ぎを打つた時黒は調子を得て◎の點に單關すると此の一子は下側白二間拓の拓に感じを與へる、茲で兩ガラミの状態をも併起して、黒が利を占め得る機會が到來するのである。

○尙對局者の意見中「鈴曰、黒二十五の手を◎に頂け云云以下三行」の説は餘り感服が出来ないとは本師の教示であつた。

繙讀の便を計りて特に參考圖を一葉添ふ、但し前圖と符號を殊にせる所あり、専ら註と一致せんことを期せり、乞ふ諒せよ。(絶)







本評、白五十六の手を以て、七十二と縛ね黒七十三と抑へた時、㊦とあて黒を㊧に粘がし、更に㊨と縛ね、黒が五十七と截つた時、㊩に打込み黒が㊪と提つた時、㊫に隅の黒一子を抜くといふ手順に運ばば、白の大利たる言ふ迄もなく、勝敗の數茲に定まつたであらう。

白六十二の手は六十八の點を截る可きである、白六十六は着眼が小さい、宜しく左下隅に向つて趣向せねばならぬ、  
白七十六の劫受けは㊬に下りおく方がよい、  
黒九十九は㊭に一間飛しておくが要點である。

對局者の意見

●宮曰、黒四十七は㊮に突き當つておく方が好かつた様です、  
○鈴曰、黒四十七の覗きはイラヌ手ではありませんか、  
然し白は是から續々おかしい手を連發しました旨いと思つて打つた手が悉くダメでした、  
白五十六の手で七十二に縛ね黒に七十三と抑へ

さして㊮と當て㊯と縛ねて打つ手があつた様です、

黒五十七の時、白は單に六十と一手打つておくのであつたかも知れません。

●宮曰、黒六十一と粘ぐ手で兎に角九十一と截つておく手の様でした。

○鈴曰、白六十四は九十四に右下隅の黒を提りキツておくのでした、

●宮曰、其の時黒が㊰に詰めたなら、白に㊱と頂けられる様な味があるかと思ひました、

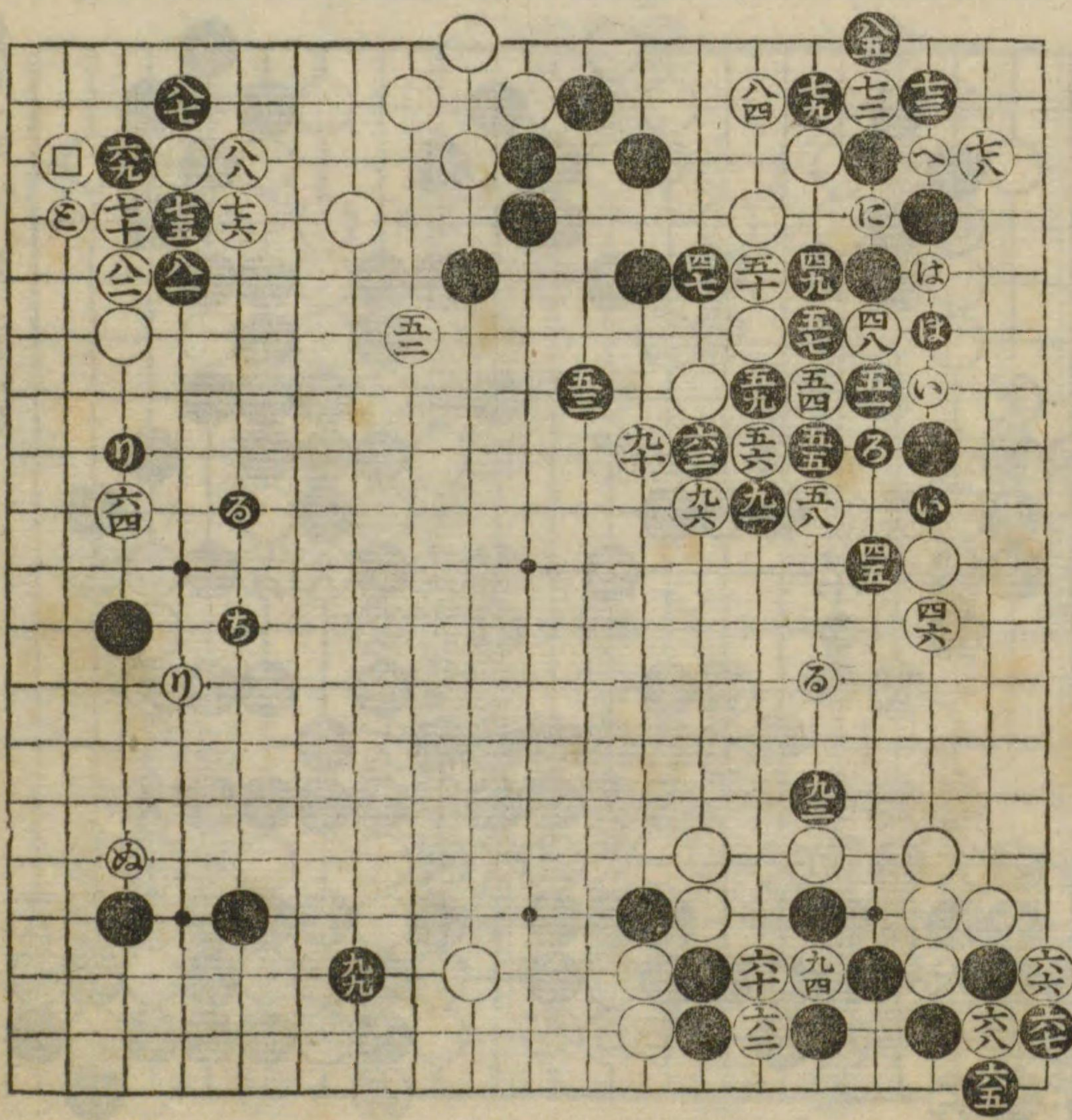
○鈴曰、黒から六十五と劫に受けられては、全く白の不利でした、

白百(口印)の手は㊲に斜走しておくのであつたと思ひます。

『註』「白五十六の手で七十二に縛ね」以下の師説の通り運べば右上隅の實利は全然白の掌中に歸する譯で、本圖の結果とは天淵の差がある、對局者も已に此手に氣付きながら實行

されなかつたのは、所謂局に當る者は迷ふといふものか白の爲め惜む可きであつた、  
白六十二で六十八を截り黒が六十五に縛ねたならば六十七に下つておくといふ打方に出たならば、他日黒から劫にされる患は無かつたのである、  
白七十六も㊬に下つておけば第百の一手を省略する事が出来たのである、  
黒九十九を㊮に打つがよいとの譯は、白に㊱と肩から地域を削られたり或は㊲と頂ける等色々白の手段を禦ぐと同時に次に次で㊳と冠して敵地を侵さうといふ良好の打着點である  
七劫トル、七西同、七北同、  
九同、九三同、九六同、九九同、  
八十同、九五同、九五六の處粘ぐ、  
九八劫トル、

第四十五手より百手迄(五十四の點粘ぐ)





本評、黒五の手は●に打つ可し  
然らば勝算たしかである、

對局者の意見

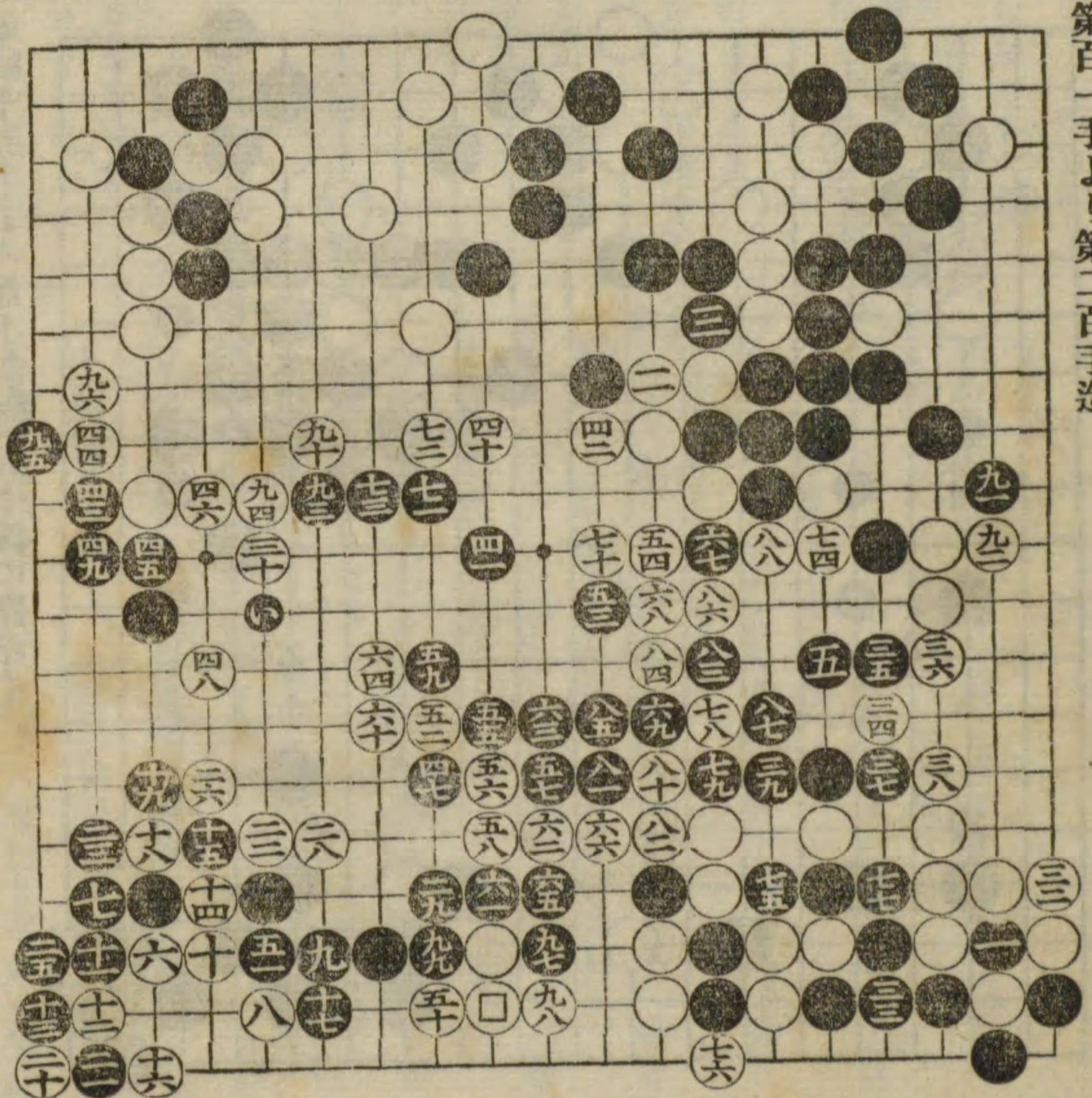
○鈴曰、六の手を十八に頂け黒  
が十五と應じた時十九の點に  
行びるといふ趣向の方が良か  
つたかも知れません、  
白は三十四に覗く手で三十七  
に打つのが理であつたかも知  
れません、

●宮曰、黒四十一の手は此の時  
何處に打てばよいか一寸見當  
がつきませんでした、

○鈴曰、白六十四に曲るよりは  
六十五と打つて黒の出路を塞  
ぐのでした、

④ 劫トル(一ヲ) ③ 劫トル(二  
十ノ處へ) ② 粘グ(十八ノ處) ①  
劫トル(一へ) ⑧ 劫粘グ(一ヲ)

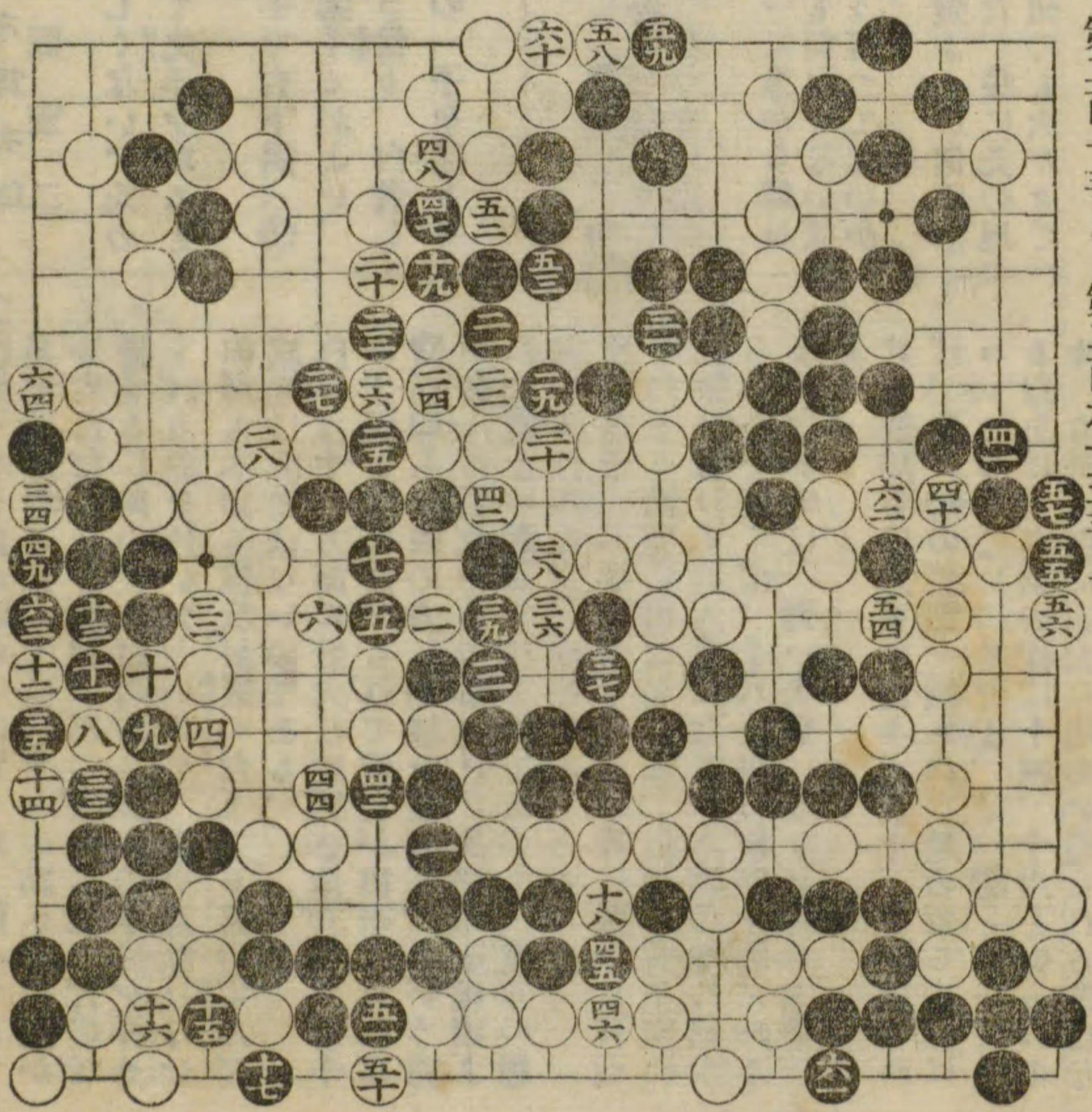
第一百一手より第二百手迄



十

④ 三十四ノ處粘グ、

第二百一手より第二百六十五手止



十一



十番棋第二局

三目勝 鈴木爲次郎  
先 宮阪 家二

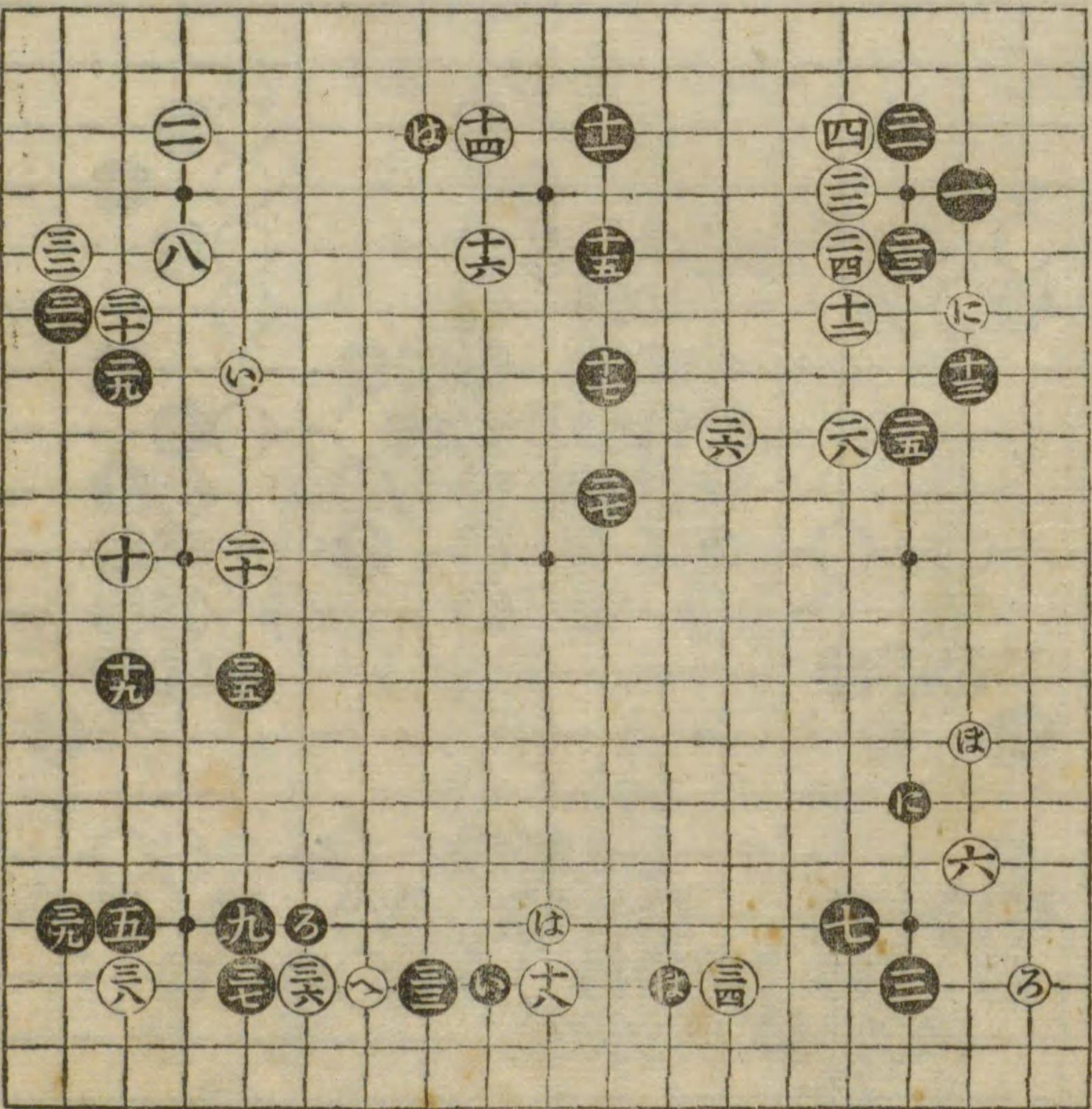
本評、白三十の尖頂は甚だよろしくない、此の手を以つて(1)に冠し、黒を活かして先手を取るといふ方針でなければならぬ。  
白三十六の打込は無理である、此手で右下隅へ(2)と斜走し黒の根據を顛すの手段を講ずるがよい、黒三十七は緩い、此の手で(3)に突き當り、白若し(4)に立たば、(5)と押して白三十六の一子を提りキツておく手順である。

對局者の意見

●宮曰、黒十三の手を手抜して(6)に二間拓し、白が(7)と打つた時(8)と六の肩側へ掛け、白を(9)に飛ばしておいて、星下十八の點に打つ方が良かったかも知れません。  
○鈴曰、白三十の尖頂、次で三十一に黒から縛ねられて三十二と抑へた手は何うも面白くない様に我ながら感じましたが、扱何う打つてよいか一寸見極めがつきませんでした。  
●宮曰、黒三十三の手で(10)の點に飛ぶとか何とか此の方面を處置しておくのでした、後に此の地域を白に十分防備されては、如何にも大キくて仕方がありませんでした。

「註」黒一から白六迄の手は第一局と同一である、黒七は前局に在つては二十三の點へ一の黒から尖んだのを、本圖は三の黒から尖んだので要するに此の尖は白六から種々の手段を弄せられるのを防いだといふ外、深い意味はない、前局も本圖も位置が更つたまで、其の尖んだ意味に大差はないのである。  
白八は十の方面に壯大な地域を造らう、若十の方面を敵に妨げられて發展が出来なければ背面即ち十四の方に地域を造らう、という意を含んだ石立である事は已に研究録を繕讀された諸士の熟知される所であつて、黒九の趣向も亦白八の意と同轍なのである。  
所で黒十一の手で若も十八の點に星下に打つて白十と同型に出たならば、白から右上隅に先鞭を着けられる事になる、本圖の様に黒から十一と打てば、十八と白に好點を奪はれる事になるのは一得一失實に止むを得ぬ次第である。  
其で對局者の意見の通り、黒十三を手抜すれば、白に(11)の要點を鎖されて黒の蒙る不利はヨシヤ少くないにもせよ、已に(12)と拓いてある以上は、本圖の様に十四、十六と煽られて此の方面に白に澎大な地形を造られる患はな

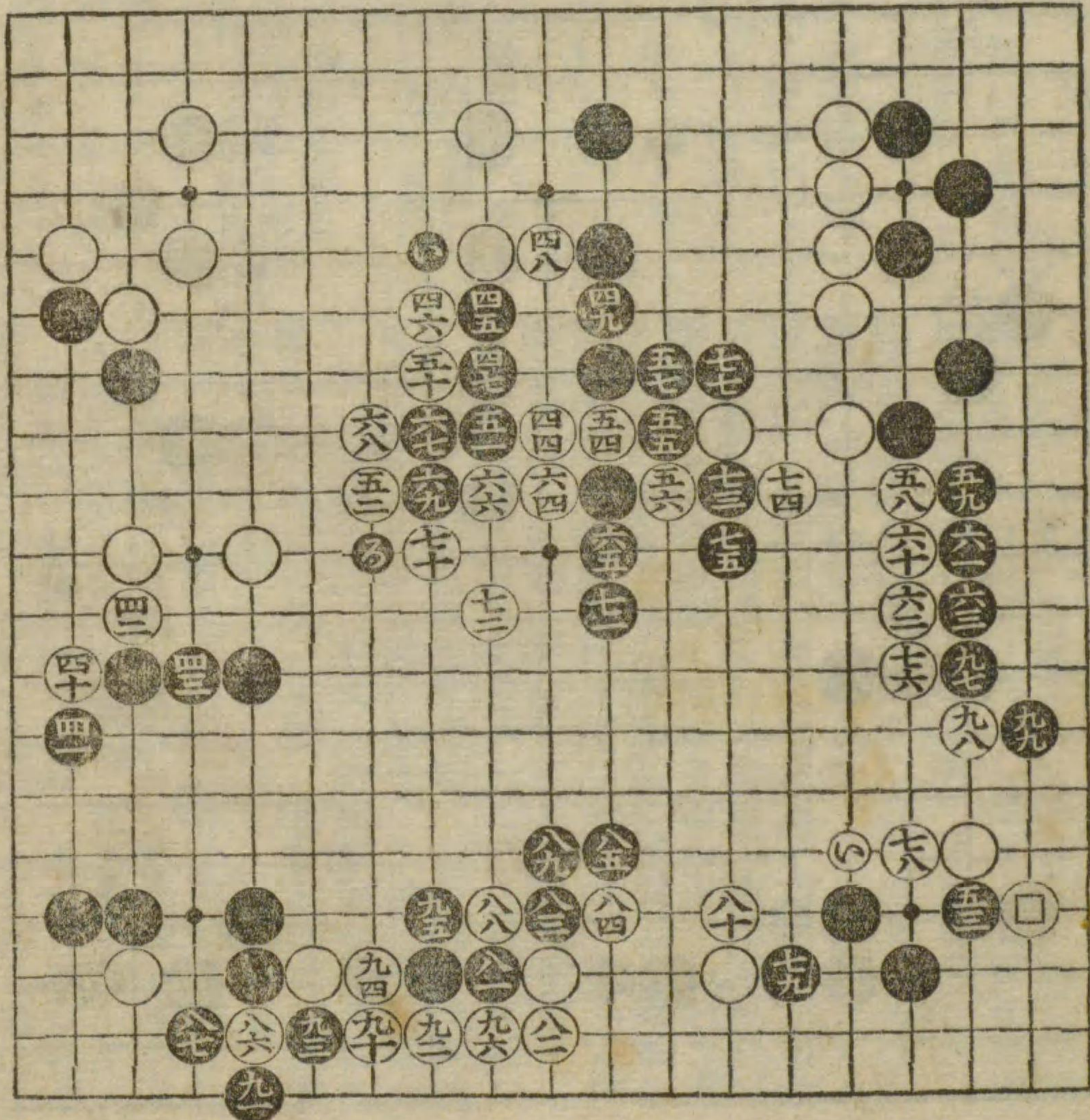
第一手より第三十九手迄



く、次下(13)と打つて白六を壓迫しておいて十八の好點に打着するといふ方が、本圖よりは解り易うて良かったかも知れぬ。  
白十八は前局十二の手と少し趣を殊にして居る、此の手は黒が(14)に詰めれば(15)に拓かう三十二から詰めれば三十四に拓かうという所謂見合の手であるから黒に取つても白から見ても火急を要する所ではないのである。  
黒三十七の手で(16)に衝き當るのは一舉兩得の手である、何故なれば白十八、三十四の間が二間といふ短距離であるから此の白が(17)と行びるのは勢力重複である、而して黒は三十三の勢力を加へておいて白三十六を(18)と壓碎するといふ手段は巧と言はねばならぬ。



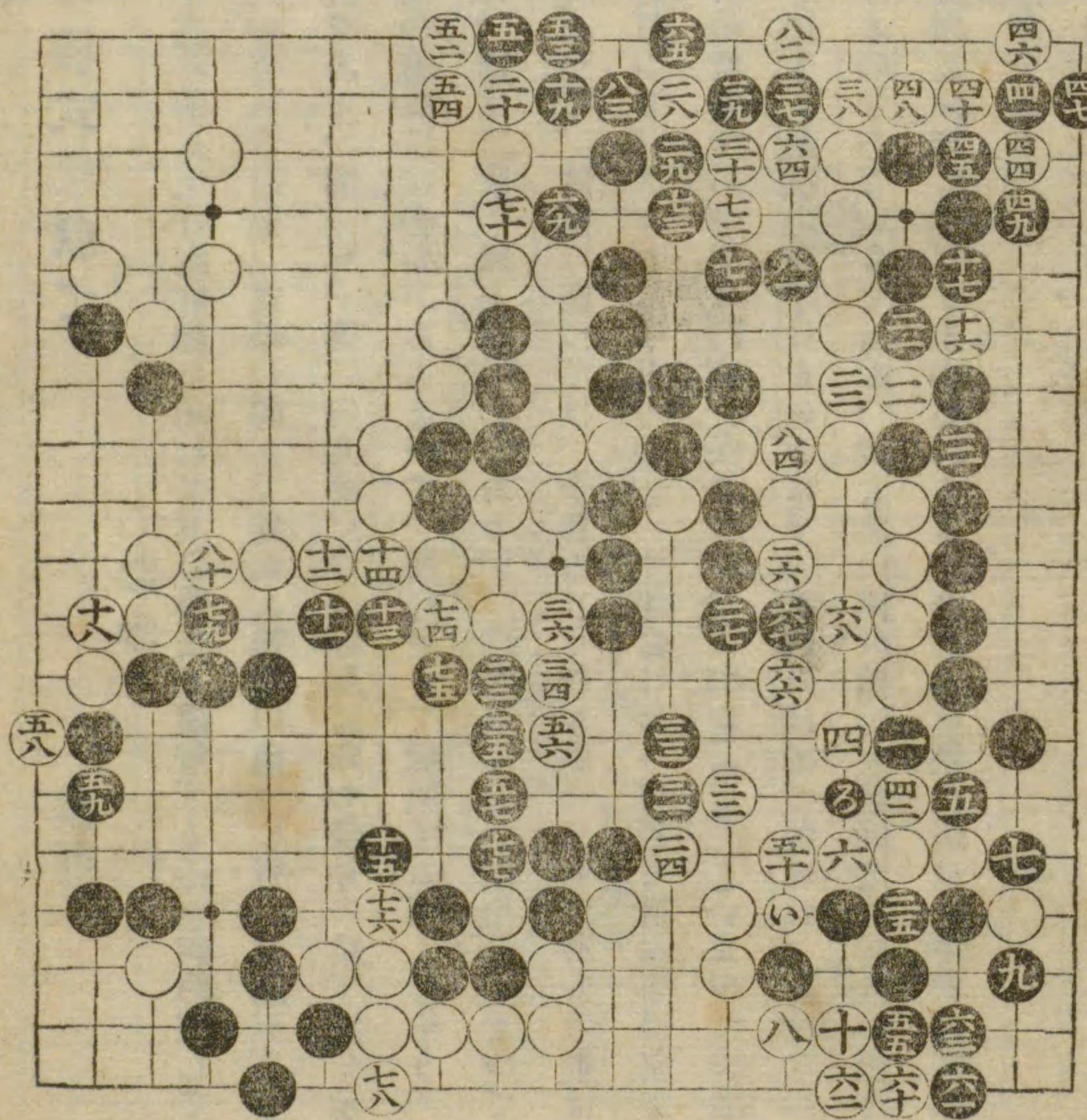
本評、黒五十一の手は⑦に打つて、白の封域を削るがよい、白に五十二と打たして其の大地域を完成せしむるに至つては、黒たるもの益々苦心慘憺の境に陥らねばならぬ、  
 黒五十五の手を六十四の點に打ち、白が五十六と掛粘いだ時、六十八に打ち、白が六十七に突截た時六十九と抑へておけば後に⑧の邊に截味が残つてよい、已に本圖の通り打つたとすれば黒は七十一の手で⑨の點を截り何とか趣向をせねば、尋常一様の打方では兎ても敗勢を挽回する事は出来ぬ、  
 黒八十五の二段綽は少し打過ぎである、此の手で八十九に行びておいたならば、白に八十六以下の侵害をせられる患がないか



第四十手より第百手迄

ら或は勝敗の容易に斷言出来ぬ細棋に終つたであらう、  
 白九十八の抑へはよろしくない單に⑩と押しておく所である、此の一着の破綻からして白必勝の基礎が再び動き初めた、  
 白百(口印)も同じく面白からぬ手である。(以上十四頁圖)

本評、黒九の手は最後の敗着である、此の手を以て十の點に押へ、白⑪にあてた時二十五に粘げば、次で黒より⑫に綽込む手が出来るから白は此の處何とか應じねばならぬ、乃で黒は先手を取る順になるから多少の勝は残る事になる、尤も黒は十と押へる手で單に二十五に粘でおいてもよいのである(以上十五頁)



第百一手より第百八十四手止



十番棋講解の様式に就て

(絶軒)

高等研究第一號豫告に於て「侵分(よせ)造り上げ迄詳細に示して其の得失を講解する様」御約束して置いた、勿論其ういふ計劃であつたのであるが彌々實地に臨んで見ると豫告の通りに行かぬ點がある本附録に掲げた第一局及第二局が其である、第一局、第二局共譜だけは終局迄即ち侵分の結了迄を示したが、造り上の一事は、高等研究の讀者には必要があるまいて、茲に更めて撤回する事としやう。次に講解の點は、當第一局の如きは、譜は二百手以上迄示してあるが、講解は二百手以内に止まつてゐる、要するに之は棋の出來具合であつて、策黨に在つては、十目も二十目も違つて居て勝敗の數は夙に決して居るに拘はらず、最後迄打つて、ヲマケに半石の劫を一生懸命に争うて居る様な事は毎々見受ける所であるが畢竟之は初心者之の常習であつて専門家に在つては常に棋の「出來」といふ事に着眼する、隨て講評は凡て勝敗の因つて決する最後の着手に止めをさす、其以外は措て問はぬ、なせなれば、勝敗が決すれば茲に棋の能事了るのであるからである、若も其の棋が殆んど最終迄も勝敗の數の分らぬ様の細局であつたならば、終局迄仔細に講解する必要がある、必要の有無に關はらず終局迄細論するといふことは徒勞である、愚擧である。

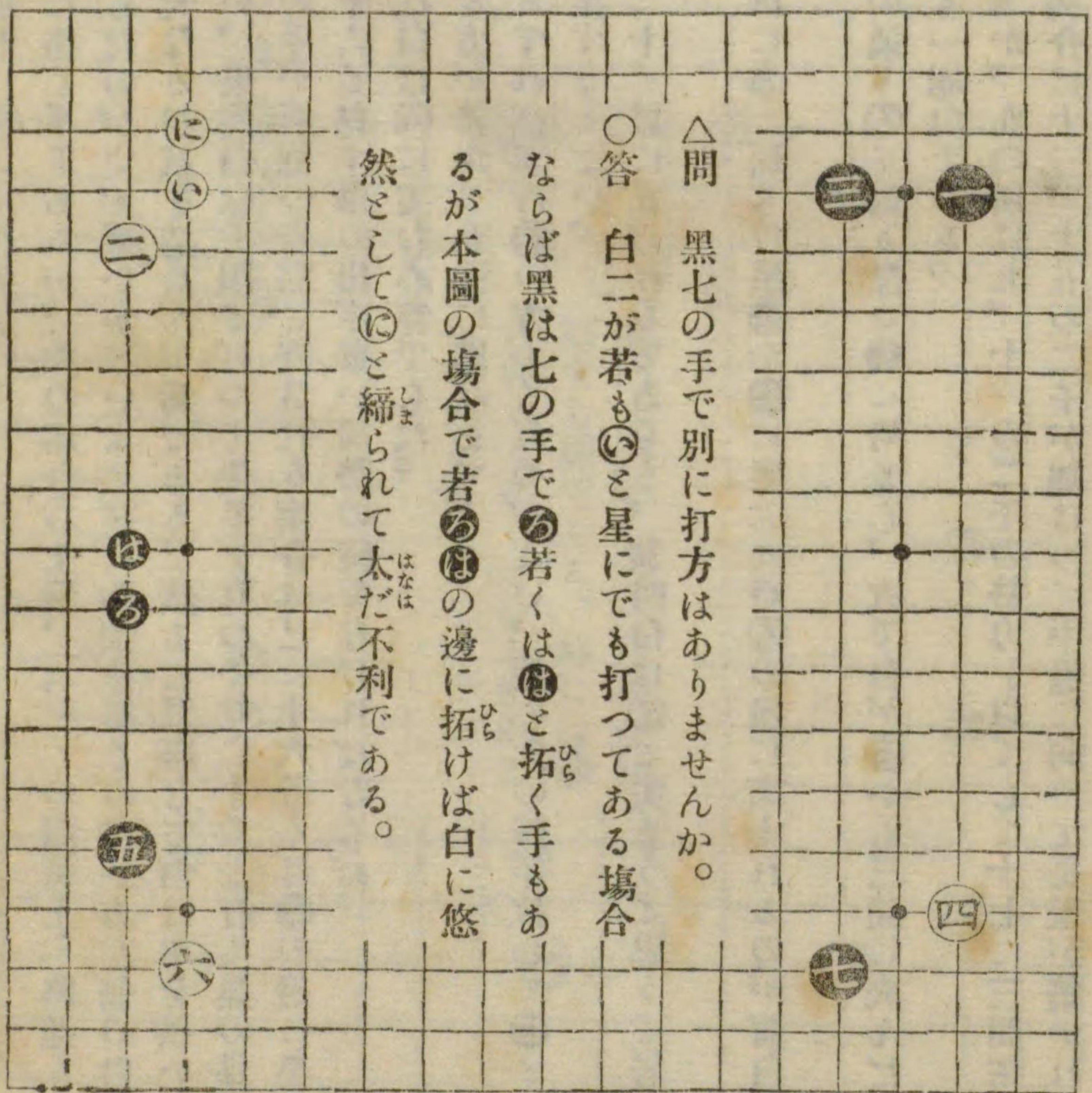
以上は師の説の大意を取意して茲に告白しておくのである。

第三局

中押勝 鈴木 爲次郎  
先 宮阪 宗二

「絶日」白二を目外に此く打つた趣向、次で黒が五の手を亦目外に打つた意味は從來布石法の講義を熟讀翫味せられた諸君に向つては詳解を施すの要もあるまい、黒三は此の場合此く一間高締に打つこのみには限らん小斜大斜の兩種の締に出やうとも或は他の兩明隅に着點を求めやうとも任意である、強て言へば右上の締及び他の明隅の先鞭を等閑にして白二に對して掛りを打つ等の手を慎めば可いといふ位の者であらう。

第一手より第七手迄



~~~~~(局三第棋番十)~~~~~



黒十三悪し、やはり十七の點か或は星下に㊦と打つがよい。

「註」黒十三普通は十七の點へ三間に拓く手であるが、此の場合右上隅、一、三との關係上一路進んで㊦と打つてもよい、十三と單關したのがナゼ悪いかといふと茲に胸壁を築くのは一方左側の白地を消すと同時に、上側一帯に尨大なる封域を造らんが爲である、然るに慧眼なる白は手を拱いて黒の爲すが儘にせしめる筈はない、果然白は十四と打つて先手を取つて茲に十六と打ち黒の謀を破るの舉に出た、其で此の十三の手が適應の着點と許される場合は已に十六若しくは㊦の邊に黒の布石があるか、若しくは次で白が十六と犯す事の出來難い局勢の時でなければならぬ。

○鈴曰、黒が十三の手で十七と打てば白は㊦に尖む心算でした。

●宮曰、十七の手で白四を二間夾した方が善かつた様に思ひます。

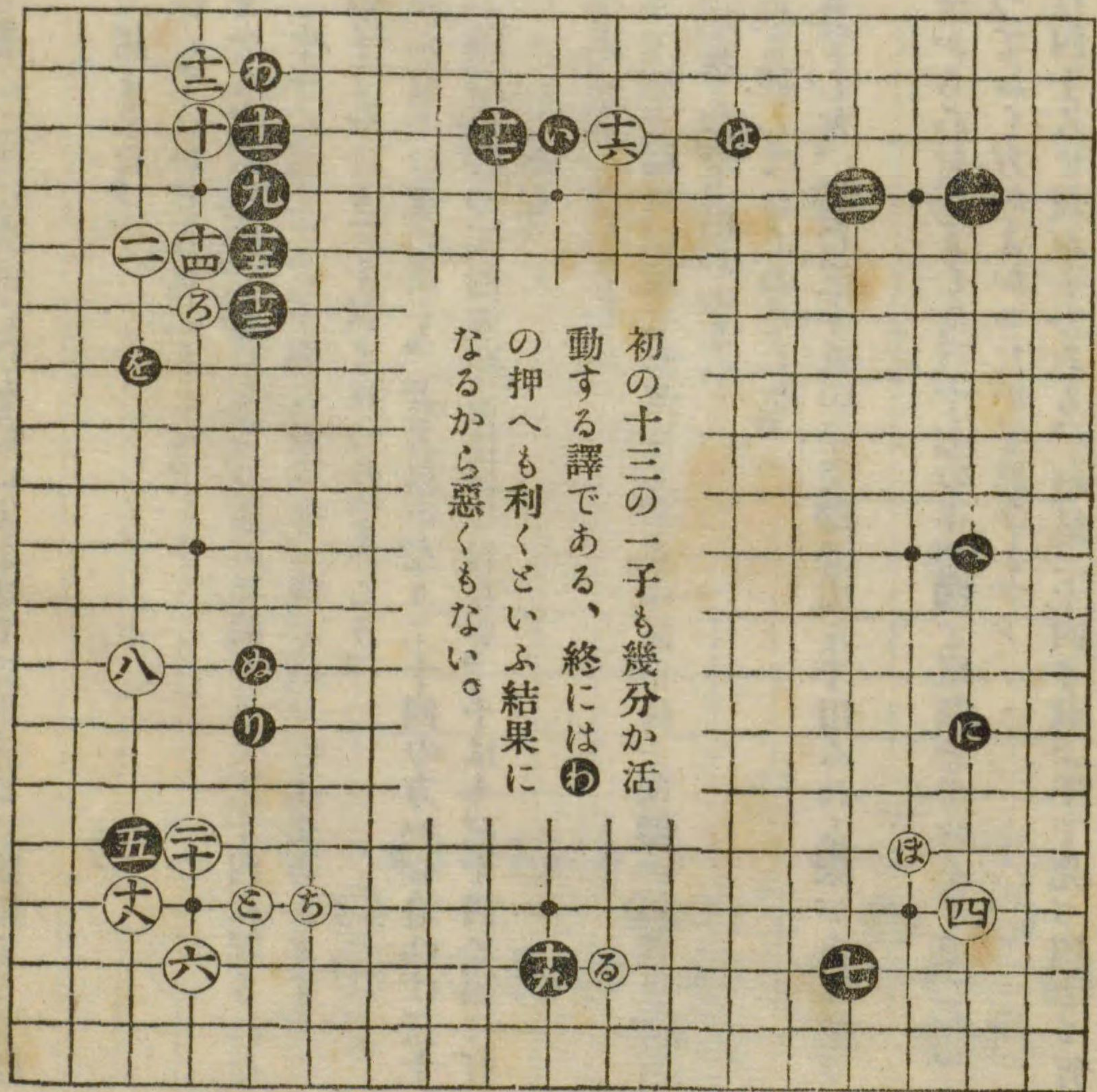
○鈴曰、白十八と尖頂けた時、必ず二十と黒に立たれるであらう、其時白は㊦と尖まうと思つて居ました。

●宮曰、若十九の手で二十と立てば白に㊦と煽られ黒㊦か㊦に應じた時㊦の邊に夾まれるのが面白くないと考へて手抜しました。

黒十九の手で二十と立ち、次で白例の通り㊦と煽り黒㊦に斜走し、次で白が㊦から三間に夾んだならば黒は㊦の邊から打つといふのも一趣向である。

「註」黒十七の手を何故凝形といふか、此の所は九、十一の二子の勢力を以てして十七に三間拓し得られる所である、然るに此の場合は十三、十五の二子が加はつて中邊に向つて長壁が築かれてある所であるから白の十六に應じて十七と打つのは勢力重複の嫌がある、且つ此の處白十二の

第一手より第二十手迄(七手迄再掲)



初の十三の一子も幾分か活動する譯である、終には㊦の押へも利くといふ結果になるから悪くもない。

下りに由つて据明となつて居るから、此くばかり勢力を費しながら黒の實利は殆んど無いのである、其の右上隅一、三が一間高縮のため之亦据明になつて居るから益々面白くない、乃では非茲を打たう考へば(一、三の姿勢上如何にも狭くて感心は出來ぬが寧ろ)㊦の方から攻めて打つ方がよいといふ説である、白十八の時黒二十と立ち、白に㊦と煽られ㊦と斜走し、次で白に㊦と夾まれる手は酷しい手の様ではあるが、然し㊦の距離も廣いから尙一着を費さねば完全な白の地も言へぬ處であつて多少餘地も存して居るといふ意味もあり、次で黒が㊦と打つて㊦の斜走と相俟つて白八の一子を攻め左側一帯を黒の利權内に收めるのは下側に白の威を恣にせしめた代償で、此くなれば當



黒二十一は甚だ事が小サイ、此の手で㊦と二間に夾返し白を㊧と尖ませて二十三と二間拓する手順である。

○鈴曰、△印白一子は初は捨てる考で居ました。

●宮曰、二十五の手は四十一に二間拓しやうかとも思ひました。

○鈴曰、然らば白は困つたかも知れませんが、其時白は㊨と尖頂け黒に手抜されて三十四に冠されたらイヤでした、さればと言つて黒二十一に應じて三十四に飛ぶのも氣が利かぬ様であります。

黒三十一の飛は頗る氣が利かぬ、此の手でやはり三十四と打つのであらう。

「註」白が右から三十三と迫れば黒は五十の邊に動く、若又白が左り二十四の方から迫れば三十三と曲つておく、何れにしても此の隅は見合つて居るから急場ではない、やはり三十四と冠に打つて上側を厚壯にしておく手であつたのである。

白三十二は悪手である、此手にて四十八と飛ぶ方がよい。

「註」白三十二は所謂一方利きの手で右下隅には感じを興へるが左の黒には一向響かぬ着手である。(右下隅は手抜きやうと思へは手抜しても活がある)

●宮曰、三十三と隅へ曲る手で三十六と押しておくのでした。

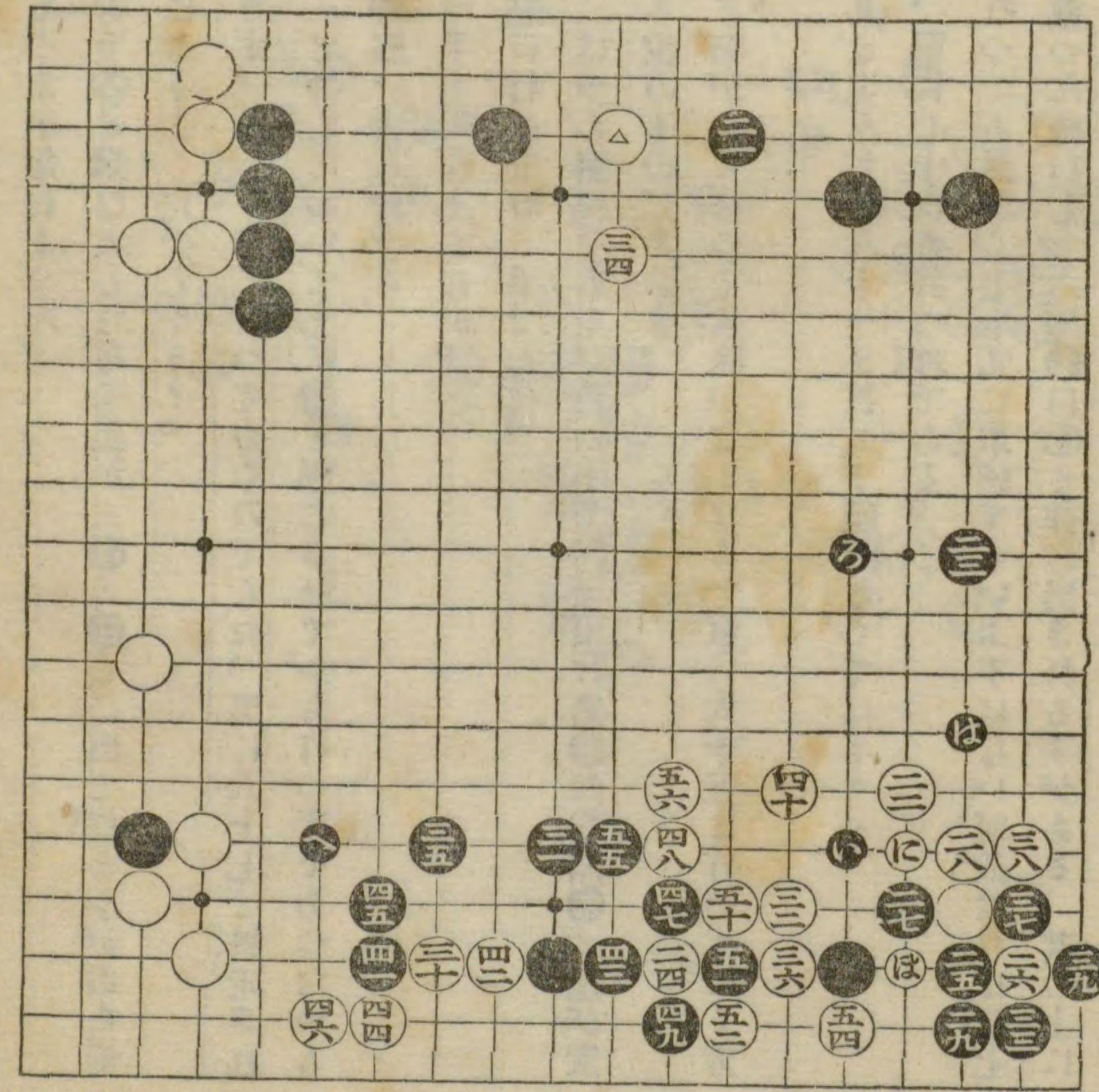
○鈴曰、其時白は五十と引いておく考でした、黒に三十五の手で㊩と尖んで出られる味がある様で頗る無氣味に感じました。

●宮曰、三十五は少し緩かつた様に後から心付きました三十七の手で㊪と單關しておく手でした。

○鈴曰、白は三十六の手で四十と打つておく方がよかつたかと思ひます。

黒若三十三の手で三十六と押せば白は四十八と飛ぶ手である、白は三十四と飛ぶ手で先づ四十と打つて置がよい黒に㊫と出られては白は應手に苦しまねばならぬ、要するに三十二の一着要點を失う

第二十一手より第五十六手迄 ㊬二十四を粘ぐ



~~~~~(局三第棋番十)~~~~~

てをる弊が何處迄も残つて居る  
黒三十五、四十一、四十三、四十五の數着極めて拙劣である、  
黒卅七は已に活きある石に此の一子添へて後手を取るは果して何の意たるや解らぬ、此の手で㊭と單關するがよい、  
黒四十三の衝當り無意味である若茲を打とすれば此手で㊮に飛がよい、(單に㊮と打つて他日四十六へ二段綽をする味を見て居るのが趣味津津たる處で四十五と引いて四十六と打たせては實も蓋もない譯である) 黒四十五はやはり㊯と打たねばならぬ、  
黒四十七の時もやはり㊰である以下の應接双方とも餘り譽めた手に非ず、殊に黒五十五は五十六とでも頂け可き手である。



○鈴曰、白六十の手は⑤と打つ手であつたか知れませんか。

●宮曰、其時黒が六十と抑へ、白が次で⑥と飛びましたなら黒から⑦と⑧とに出て截る手がある様ですが然かし運べは如何んな結果になりましたでしやう？。

○鈴曰、白六十二は少し重かつた様です、此手で⑨と打つておくのでした、黒に六十七と斜走されて困りました、白七十は先づ七十一と押しにおいて黒に⑩と應じさせてから打つ手であつたかも知れませんが何だか氣味がワルウ御座いました。

●宮曰、黒七十五は八十の方から打つ手でありましたか。

○鈴曰、白八十六は兎も角八十七の點に行びておく手でした。

白六十は無論④の方がよい、白六十二は少し無理である、此の手で⑤と頂け黒⑥白⑦黒⑧と運び爰に凌ぎをつけておいて⑨と二間飛する位のものであらう、

黒六十三の窺きは悪い（此く六十四と粘がして終つては味がなくなる）單に六十五と打つておく方がよい。

黒七十五は八十と飛んで、白が七十九と尖んだ時八十一と打つ手順でなくてはイケヌ、白は七十六と頂ける手は面白くない、單に七十八と打つ理である。

「註」白が七十六の手を七十八に打つても黒から七十九に頂越すといふ手はない何故なれば黒七十九に頂越しても白⑩黒八十三と截つた後白七十六黒⑪白⑫と押し出される手がある、其の上に一方から白に⑬と出られる缺點もあるからである。

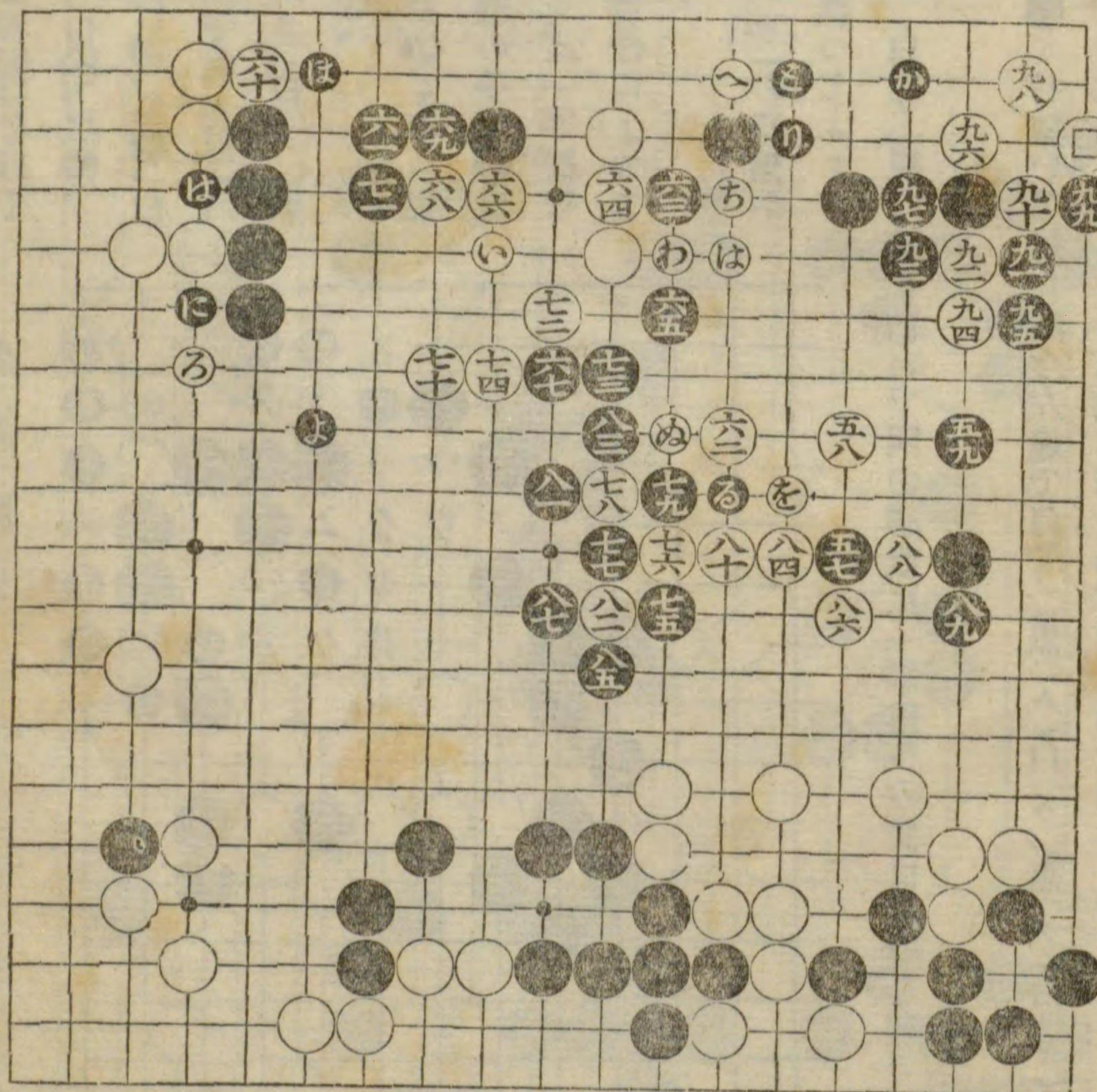
白八十六は無論八十七に行びねばならぬ、

白九十の頂は無理である、

黒九十九と綽る手で⑭と打てば無條件で提れてをる、之を却て速断して九十九と綽たのは輕卒の誅を免れる事は出来ぬ。

「註」謂ふに黒は中央で八十の一子を打抜いた、め大に樂觀した結果、隅の手所を見極はめなかつたのであらう、此の隅を確に提つておけば勝敗は孰の手に歸したか分らぬ又捕れる手所を見て居て、態と活を與へて先手を把り上側中邊の白を⑮邊から攻撃するの策に出たならば局勢は如何に面白く變化したかも知れぬ惜む可き事であつた。

第五十七手より第百手迄



~~~~~(局三第棋番十)~~~~~

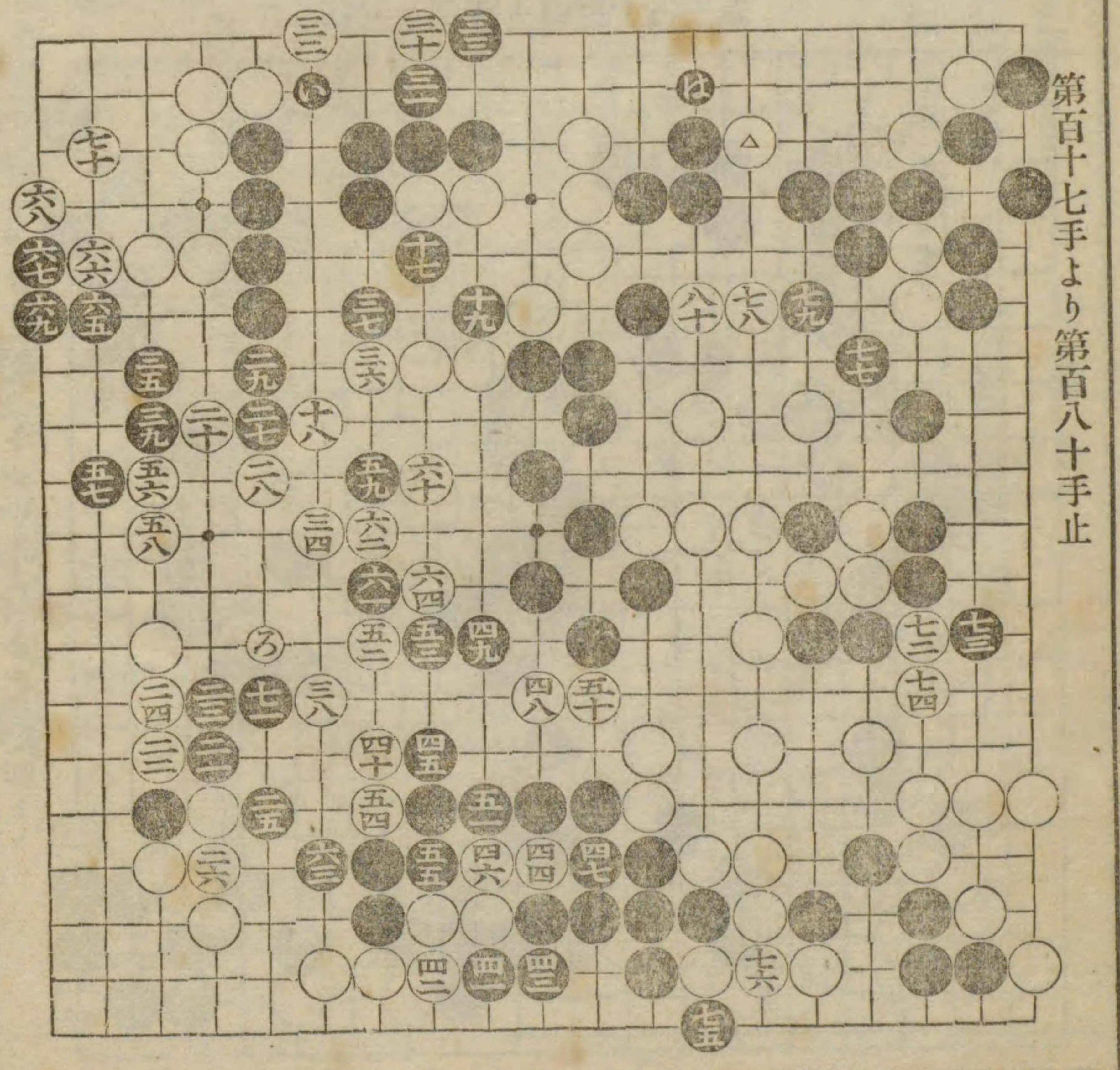






白は前圖八以下色々切立てする手で本圖二十の點に打ち黒が右上隅の劫を打抜いた時十八の點へ飛び、黒に●と手を引かせて○の邊に一子を下しておけば十分の勝であつたのである。

「註」要するに本局は右上隅に劫とならざる者を劫として其の代償に右下隅を失うたのは恰も無條件で敵に一城を割いた様な結果になつた、次で十七、十九と打つて中邊六子の白を擒にはしたが事頗る小で白に十八、二十と打たれるに至つて勝敗の數は全く動かす可らざるものとなつた、白が△印に頂けた時黒が●と下る機會を逸したの黒のため千秋の恨事であつた。



(百、十番棋)

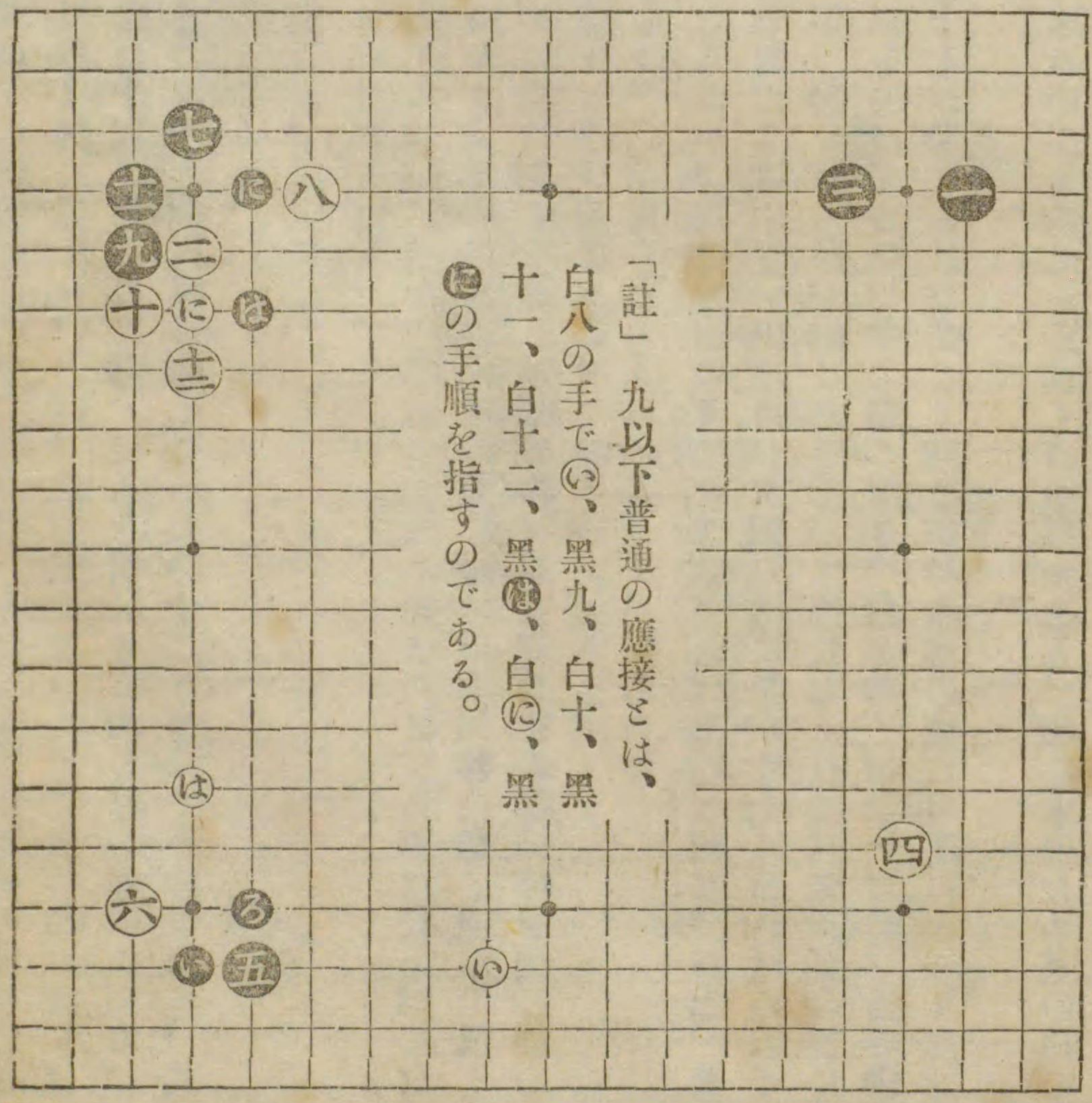
第四局

八目勝 鈴木 爲次郎  
先 宮阪 宗二

「註」黒五を●に打たずして此く目外の點を撰んだのは、白二に對する關係によるので次で白が六と掛り黒が七と左上隅目下に掛るものとして左上隅黒白普通の應接の結果左側星下邊の好點に白が子を配置するのを目外の五が制限して居るといふ理由は已に講修者の十分領得せらるゝ所であらう。

白八は○と三間夾にする方がよい、次で黒が九以下普通の應接に來た結果白は●の點に尖頂け黒五を●と立たして④と煽る姿勢が左上隅の勢力と相俟つて極めて佳良である。

第一手より第十二手迄



「註」九以下普通の應接とは、白八の手で○、黒九、白十、黒十一、白十二、黒●、白④、黒●の手順を指すのである。

(百一、十番棋)



前説白八の手で(イ)と三間夾した時、黒(ロ)と二間夾返しの手に来れば、白(ハ)、黒(ニ)、の普通の應接の後白八と掛け黒が九と頂けて来た時白は(イ)と押し黒十一、白(ハ)、黒十五となつて次で白は(ロ)と截り、黒が若も(イ)から来たならば手拍子で白は十四と押し黒に(ロ)と後手を引かせて(イ)と打つ趣向に出る、若又白が(ロ)と截つた時黒が(イ)と来れば白は十と抑へ黒が(ロ)と提つた時十二と掛粘ぐ手順である、其の何れにしても本圖の結果に優る事萬々である、

黒十三の手で(イ)の點に掛けておく方がよい、

黒十七の時でも尙(イ)の點に掛けを先きにするがよい、

「註」十三の時次で十七の時に至つても尙(イ)に掛を一手打つておくがよいと言ふ譯は左上隅に白十二迄の手順で勢力が加はつて居るから此場合黒からは(イ)の點に掛け白(イ)黒(ロ)白(ハ)と運んで低く白を這はして左側に大模様を造らせぬ様に制しておくのが急務である、又此の(イ)の掛を先に打つておけば次で十八の夾や廿二の出截りもないのである、

黒十七は一路進んで(イ)に打たねばならぬ、

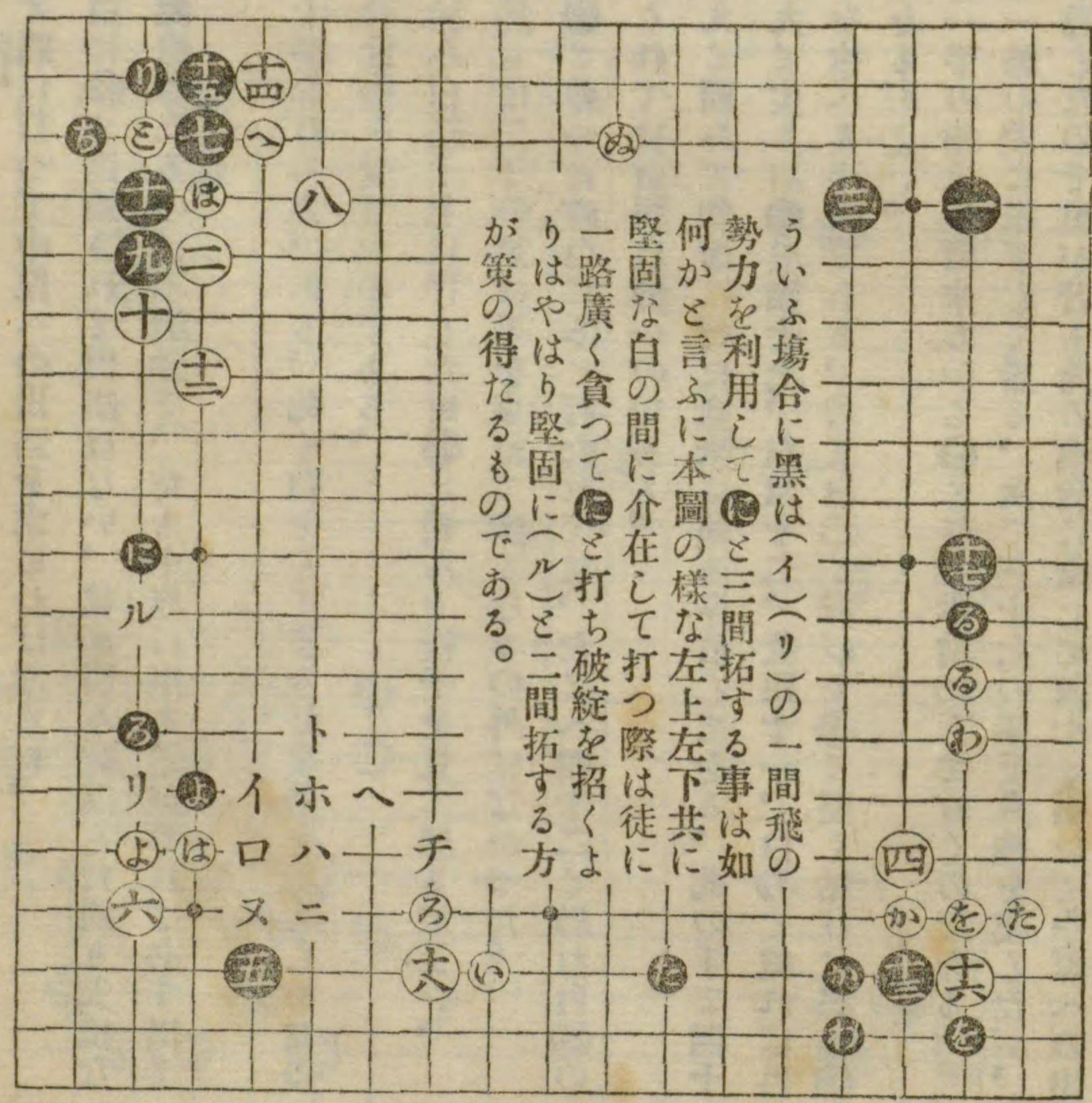
「註」黒十七を何故(イ)に打たねばならぬか、其時白が右下隅を手抜すれば黒(ロ)と縛ね、白(ハ)、黒(ニ)となつた時白は(イ)と打つ事は(如何にも狭くて)出来ぬ、本圖の様に黒が十七とあれば白(ロ)と適宜の拓が出来、又黒が十七の手で(イ)と打ち白が(ロ)と衝き當つて来たならば黒は先づ(イ)の點に掛け、白(イ)、黒(ロ)白(ハ)の普通の交換を遂げておいて次で(イ)と引き、白が(ロ)と掛粘いた時、黒亦(イ)と二間に拓く手順となる、其で黒十七が(イ)にあれば酷しく利くが、本圖の様に星下にあつては頗る緩慢であるといふ道理になる、

○本圖の様な場合に白が趣向として十八の手を(ロ)と一路高く打つ事がある、初心者のため其の白の意中と黒の應接を一通り述べておかう、是は黒に(イ)の點へ掛けさすまい、若掛ければ出截を打たう

(百二、十番棋)

第一手より第十八手迄(第十二手迄再掲)

といふ手である、其の時黒若掛ければ白の術中に陥る事になるから(イ)と二間に飛ぶがよい、其時白が普通の場合の様(イ)の點に拓けば初に打つた(ロ)の一子が利かぬ事になるから白は(ロ)と頂け黒が(ハ)と縛ねた時白は(イ)に引き、黒亦(ニ)と引き白(ホ)と截り黒(ヘ)とアテ白(ト)と行ひ黒(チ)に掛粘ぐ手順である、然し此の黒の應接も悪くはないが本圖の場合は右下隅の黒が手抜がしてあつて治つて居らぬに反し左上隅の白は十二の掛粘によつて十分勢力が出来て居るから此の場合では白の方が利益で黒は面白くない、乃で左側に白地を造らすまいと思へば五の一子を犠牲として黒(イ)白(ロ)の次に單に黒は(リ)と飛ぶのである其時白は(ヌ)と衝き當り黒は(ル)と二間拓する手順である、此



ういふ場合に黒は(イ)(リ)の一間飛の勢力を利用して(イ)と三間拓する事は如何かと言ふに本圖の様な左上左下共に堅固な白の間に介在して打つ際は徒に一路廣く貪つて(イ)と打ち破綻を招くよりはやはり堅固に(ル)と二間拓する方が策の得たるものである、



黒二十五は●と尖み白二十六の時●と間に打つて中原への出路を求めねばならぬ。

「註」本圖の場合で黒●と打てば白に④と遮断されて出路はない、從來屢々繰返した通り大抵な場合は一隅に閉塞されたり低地に壓迫されるのは不利益で、苟も中原に出る途があれば必ず出ておかねばならぬのである。

白三十四と拓き三十六と詰めた手は十分な打ち方である、此く白をして着々好姿勢を造らしめたのは全く當初△印黒を●に打たなかつた餘弊を受けたのである、

黒三十七大悪手である、四十の點に尖み白三十七に押した時●と飛んで様子を見て居るがよい、白三十八は四十と縛込む手である、然らば二子の黒は手を束ねて擒となるの外はなかつた。

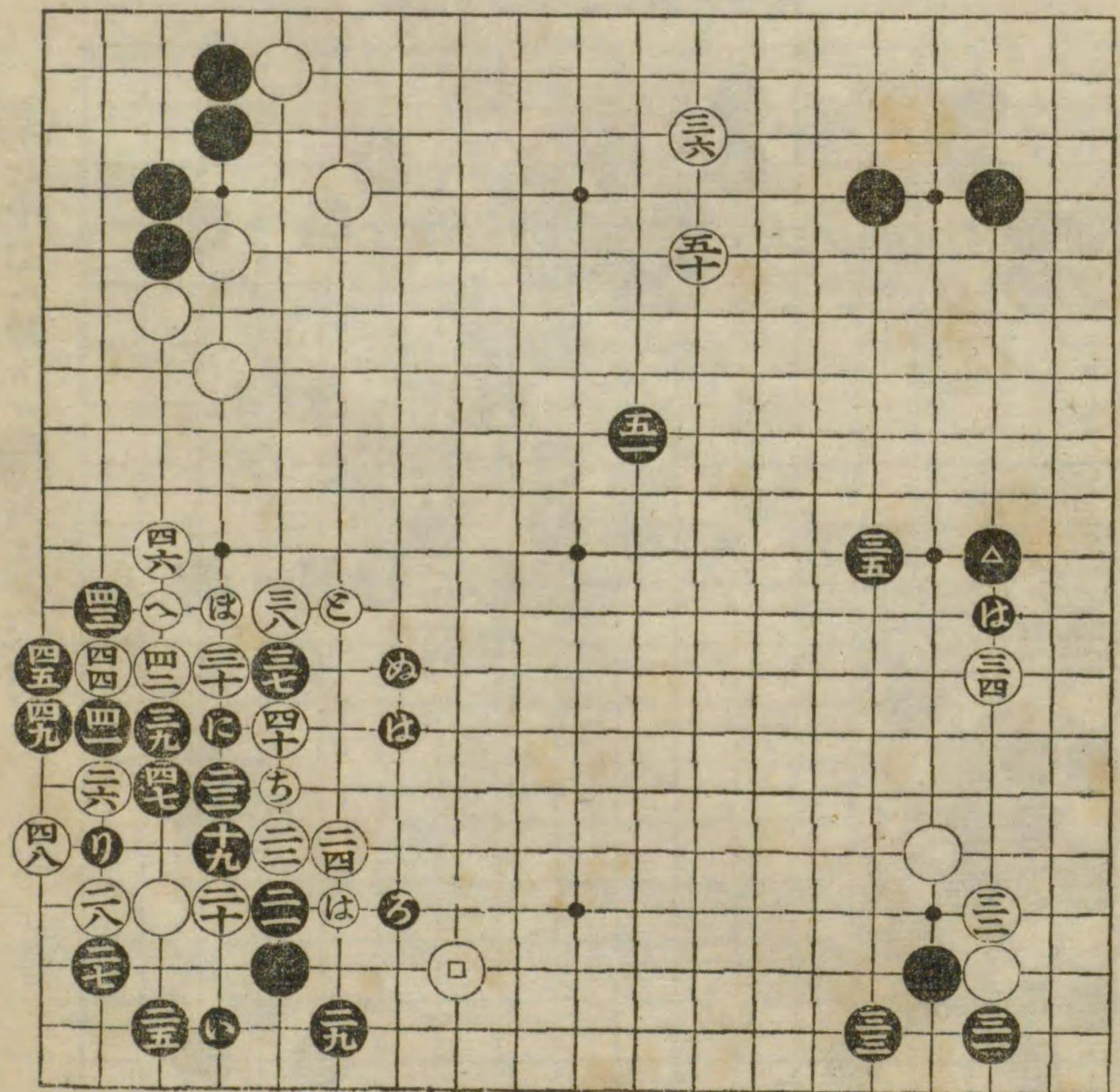
「註」黒三十七の時白四十、黒が●と截つた時白に⑤と打たれては、たとへ四十二と縛ね白③の時三十九と粘いでも白に⑥と抑へられては命脈は無いのである。

白三十八と外から縛ねた時黒が三十九と顧みて側面に行た意味は頗る矛盾してをる、此の手で四十と引き、白若●と行びたならば三十九と尖み白●黒四十七、白四十二、黒四十一、白④と截れば黒四十四白四十三と抑へ黒は●に一子を抱へる手順である、若又白⑥と行びず③と堅く粘げは黒は●と單關する、そして白の動靜を見てをるがよい。

白四十八の掛粘は宜しくない、後日一手の相違が出来るから●と堅く捧粘にしておくのである。

「註」本局の敗因は遠く△印黒の一路の差に根ざして居る、次で三十七の手で危機を犯したが、幸に白が四十と死命を制する手を逸したので黒が若も此の機會に乗じて四十と引いて中原への出路を求め□印及二十二、二十四の三子の白に迫つて利を計るか、或は餘り勢力を濫費せずして左下

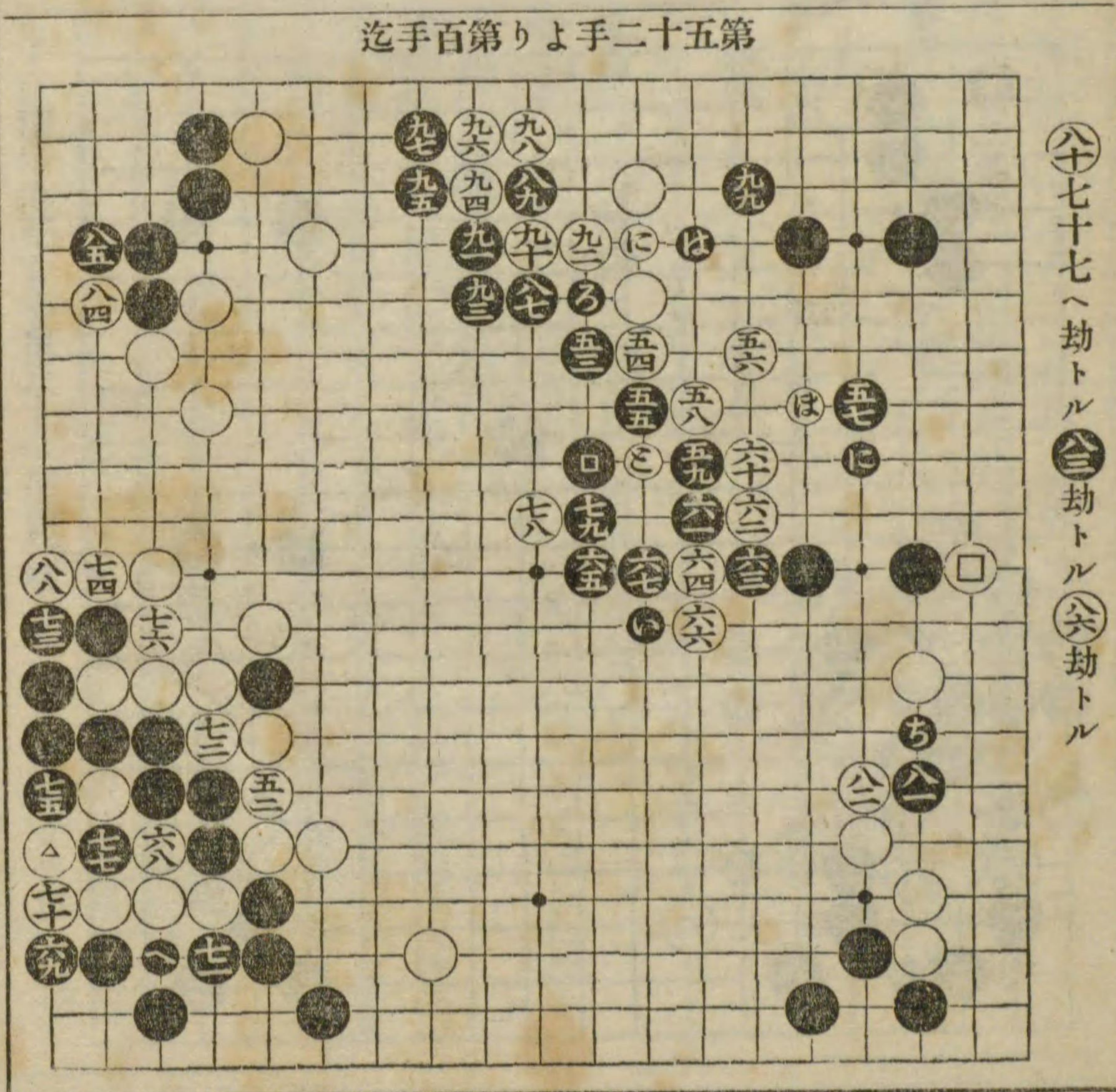
第十九手より第五十一手迄



隅數子の白を捕獲するの策を立てたならば必しも局勢悲運には傾かなんだであらう、然るに黒の策之に出なかつた爲め白に四十と中原への出路を遮断され、白をして五十と大規模の地を造らしめる局勢になつては極めて打ち難い棋となつたのである、即ち五十一の一子の如きは所謂「當の無い」子たるもので前途の勝算を確立して打つた子ではないのであるから、對局者の趣向は別問題として初學者の模倣す可らざる手である、何となれば右上の黒地もまだ治りが附いて居ないが尋常の手段では上側から中原へかけて白の造らんとして居る龍大の形勢を破る事が出来ぬ、即目途は立たぬが此く打つて見たといふ様な手である。



白五十二は六十二と打ち、黒が  
 斜に應じたならば更に其  
 の肩から③と壓して□印黒の歸  
 路を絶ち併せて右上側の黒地を  
 蹂躪する手に出るがよい。  
 黒六十七は九子手(セイモクデ)  
 に等しい愚手である、其の理由  
 は初め白が六十四と截つた時に  
 六十七と黒がアテたすれば、  
 次で④と押す手はあつても、後  
 に七十八と白に窺かれる缺點を  
 残して六十五と立つ様な事は出  
 来ぬ筈である然るに今六十五と  
 打つて次で六十七と打つたのは  
 此の愚劣を逆に行た迄である  
 宜しく此の手で⑤と押し白が九  
 十二と綽た時⑥の窺を白が九  
 に出ねばならぬ、飛ぶといふ打方  
 に八十四の劫立は味を残して悪  
 い⑦に打込むがよい、白を  
 黒八十五は手を抜いて⑧と白を  
 屠つて終ふがよい、次で白が八  
 十五の點に行びた時⑨と押し白  
 九十二と綽ね黒九十三と飛んで  
 絶えず上側から子を運んで左上  
 隅の味を見て打つがよい。  
 「註」左隅の味を見れば死であ  
 るが附近へ黒の勢力が來ては

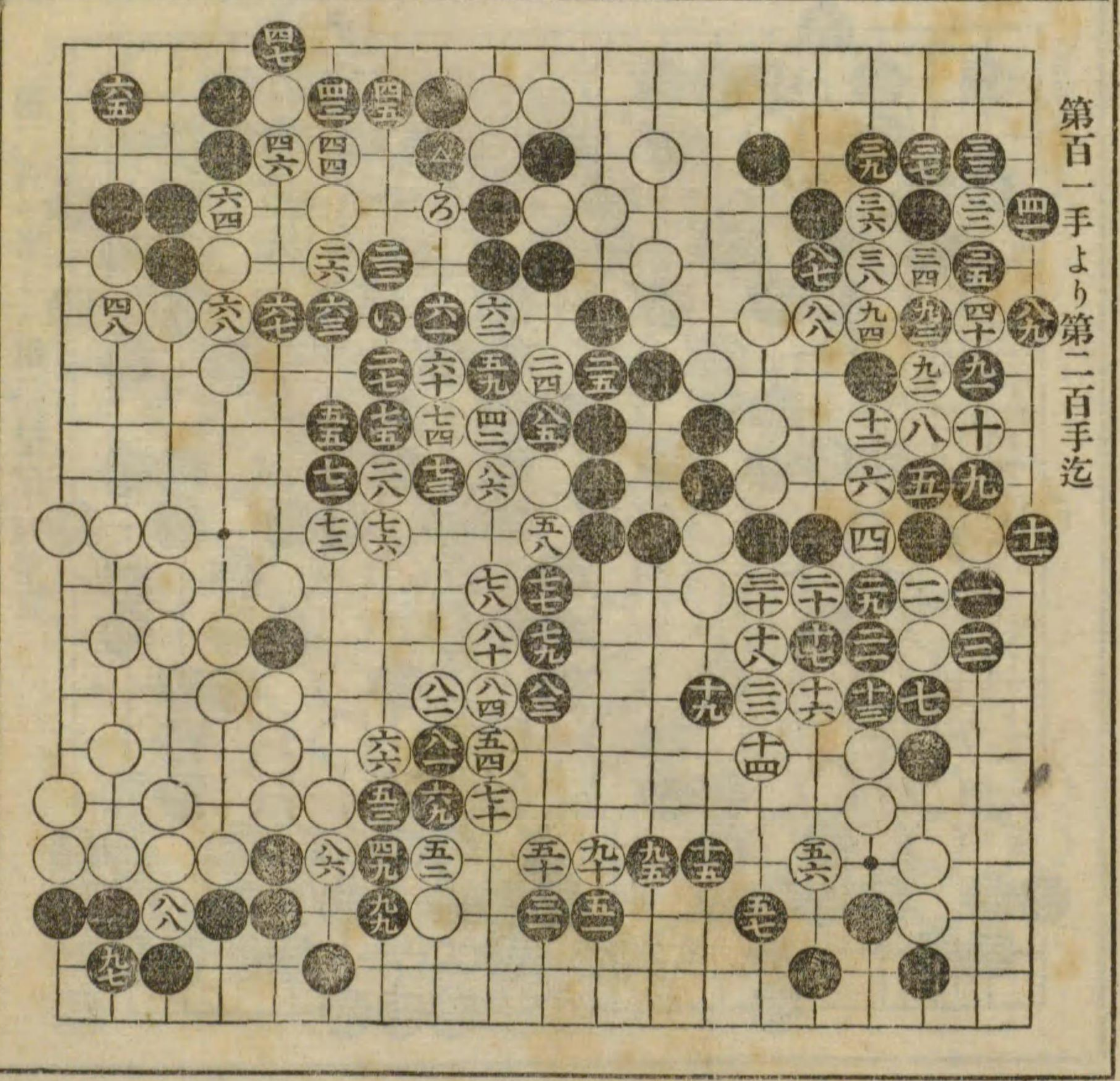


(百六、十番棋)

問題であつて白は安んじて居  
 れぬといふ牽制の手段に供す  
 るのである。  
 黒八十七の劫立は④がよい、  
 黒九十七は打たずして單に九十  
 九と尖んでおくがよい、  
 (以上第卅二分)

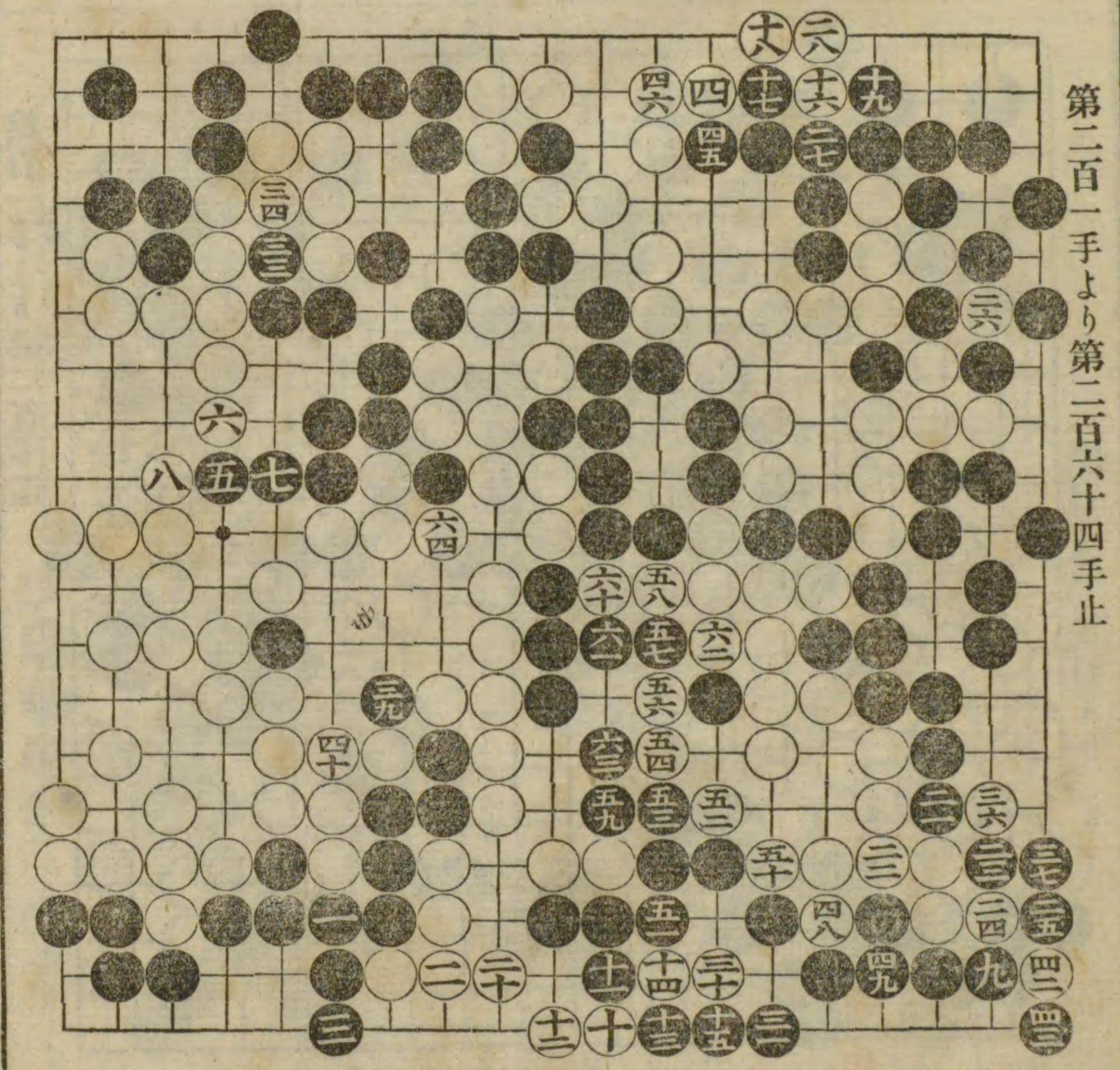
黒二十三は⑤に打つ方がよい、  
 黒四十三は良しくない四十八の  
 點に白の一子を截取る方が大き  
 い、黒五十九は七十一と押して  
 茲に⑥の截を拒いておく方が巧  
 妙である。

「註」前圖黒九十七を打たぬ  
 方がよいといふ説は即ち一子  
 棋が重くなるからである、單  
 に九十五即本圖△印黒だけな  
 ら截提られても輕いが已に二  
 子として見ると何處迄も⑦の  
 截られを顧慮して不自由を感  
 じねばならぬ、引いては四十  
 三以下の不利益な盤をして白  
 に四十四、四十六、四十八、  
 六十四と地を大キクさせて自  
 分は六十五と控へねばならぬ  
 不利に陥つたのである。





- ①劫トル
- ②劫トル
- ③劫トル
- ④劫トル
- ⑤劫トル
- ⑥劫トル
- ⑦劫トル
- ⑧劫トル
- ⑨劫トル
- ⑩劫トル
- ⑪劫トル
- ⑫劫トル
- ⑬劫トル
- ⑭劫トル
- ⑮劫トル
- ⑯劫トル
- ⑰劫トル
- ⑱劫トル
- ⑲劫トル
- ⑳劫トル
- ㉑劫トル
- ㉒劫トル
- ㉓劫トル
- ㉔劫トル
- ㉕劫トル
- ㉖劫トル
- ㉗劫トル
- ㉘劫トル
- ㉙劫トル
- ㉚劫トル
- ㉛劫トル
- ㉜劫トル
- ㉝劫トル
- ㉞劫トル
- ㉟劫トル
- ㊱劫トル
- ㊲劫トル
- ㊳劫トル
- ㊴劫トル
- ㊵劫トル
- ㊶劫トル
- ㊷劫トル
- ㊸劫トル
- ㊹劫トル
- ㊺劫トル
- ㊻劫トル
- ㊼劫トル
- ㊽劫トル
- ㊾劫トル
- ㊿劫トル
- ①劫粘ク

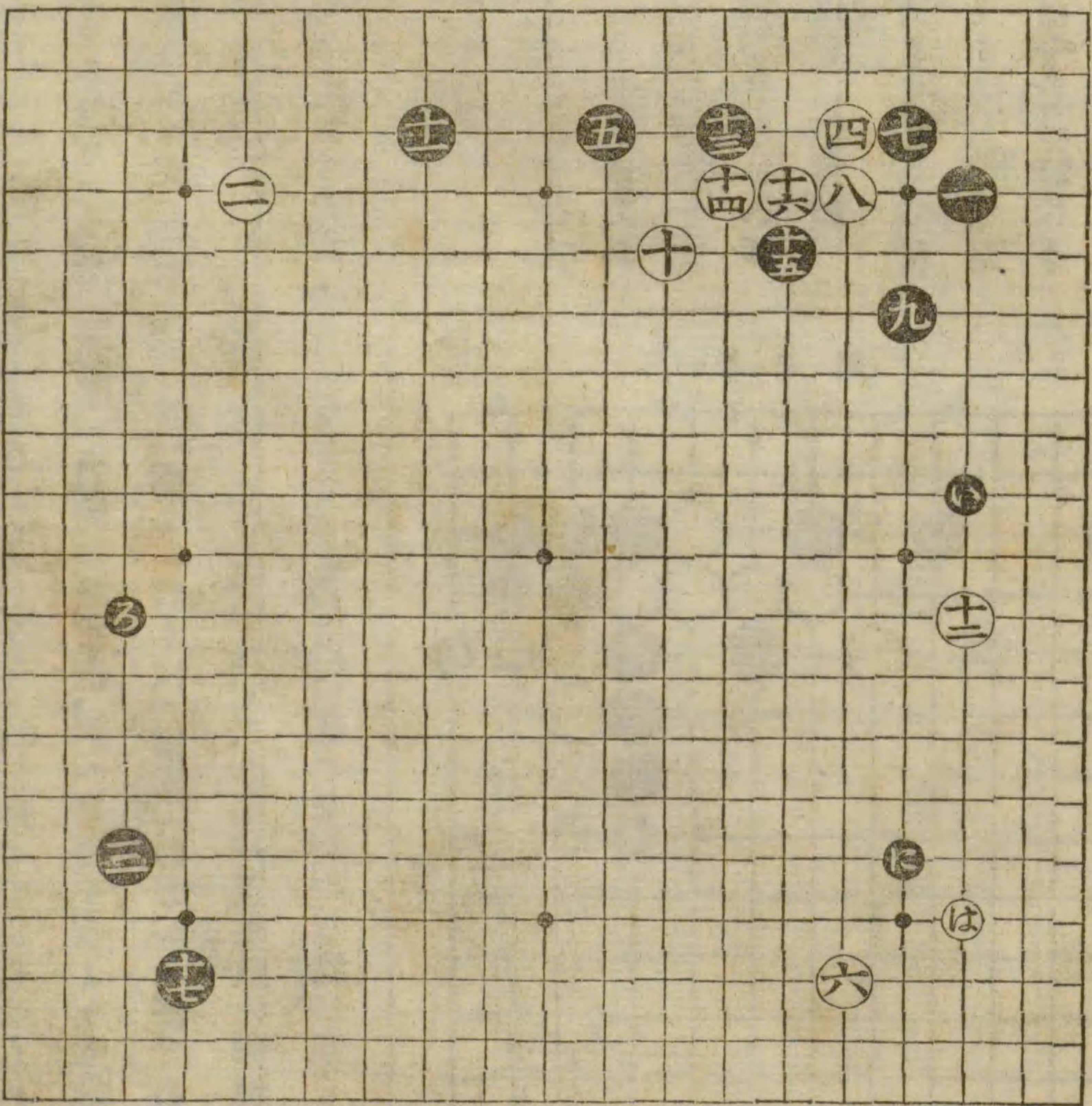


第二百一手より第二百六十四手止

第五局

中押勝 鈴木 爲次郎  
先 宮阪 宗二

○白十二の手は十七の點に掛るを佳しとす、  
黒十七は①と應せざる可らず、假に白十二の手を以て十七の點(即左下隅)へ掛りたりとし、黒之に應じて②と三間拓し、白亦③と打ちたるものと見て、偕白十二黒④二着の交換は白のため、無きを優れりとす、  
然るに今白先づ十二と打ち黒は必然の手として⑤に應じたりと假定し、次に白⑥と右下隅を締れば黒亦十七と左下隅を締る可く、此の締り合は到底白の不利たるを免かれず、さりとて白若⑦と右下隅を締らざれば黒に⑧と侵撃さるゝの不利を蒙る可し、之の理を推さば白十二の失着たるは勿論黒が十七の手拔の悪手たるを知るに足らん。



黒第十七手迄

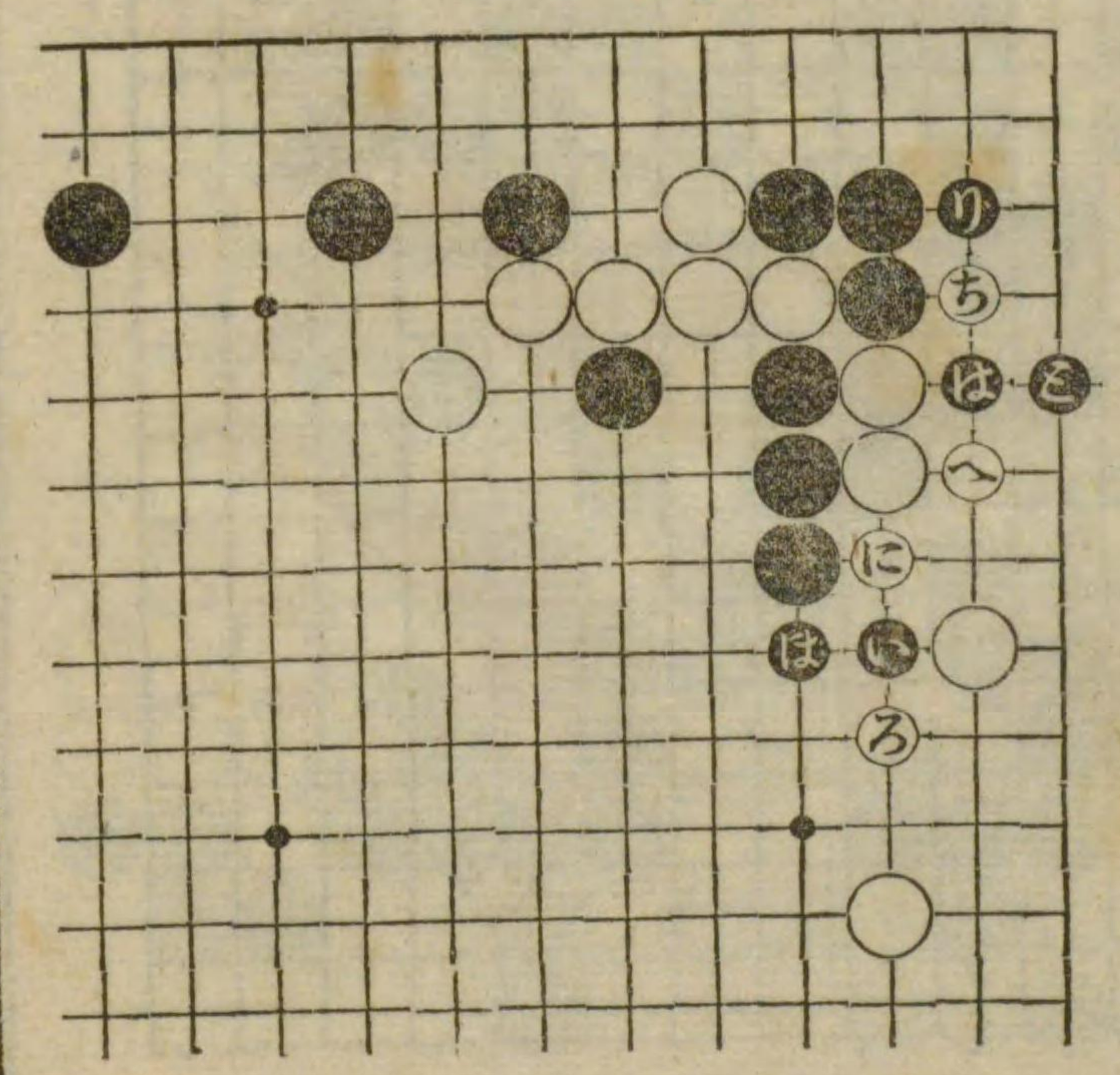


「註」 黒が十三と飛び、十五と窺いたのは、白の眼形を奪ひ且つ之をして凝形即勢力重複せしめる手段である、白十二と側邊へ着手するよりは（其の着手が自他の利害上、隅へ着手するよりも急且つ優れる様の特殊の場合に非る限りは）先づ隅に向つて「掛り」若くは「締り」の方が急務であるとは從來屢々研究録の示した所である、使ち茲で注意す可きは、此の白十二の手が黒全敗の動機となつては居るが、其は十二の着點が良かつた爲めではなくて、黒が之に應じなかつた過に基くといふの一事である。

○黒二十五悪し、四十五の點に尖頂く可し。

「註」 何故二十五と打つて活るのが悪いかといふと、二十五と打ち白に二十六と押へられ此の方面に白の勢力が加はるだけ上側黒地が其の影響を蒙るのである、即ち隅を活るために損をせなければならぬ、之を四十五の點に尖頂け以下（参考圖）の如く運べば白の地になる處へ侵入して活るのであるから其の利害損得の差は非常である、然し是れとても結局黒の方が不利である其は十七の時に手抜をした弊を何處迄も受けたので致し方はない。

(圖考參)

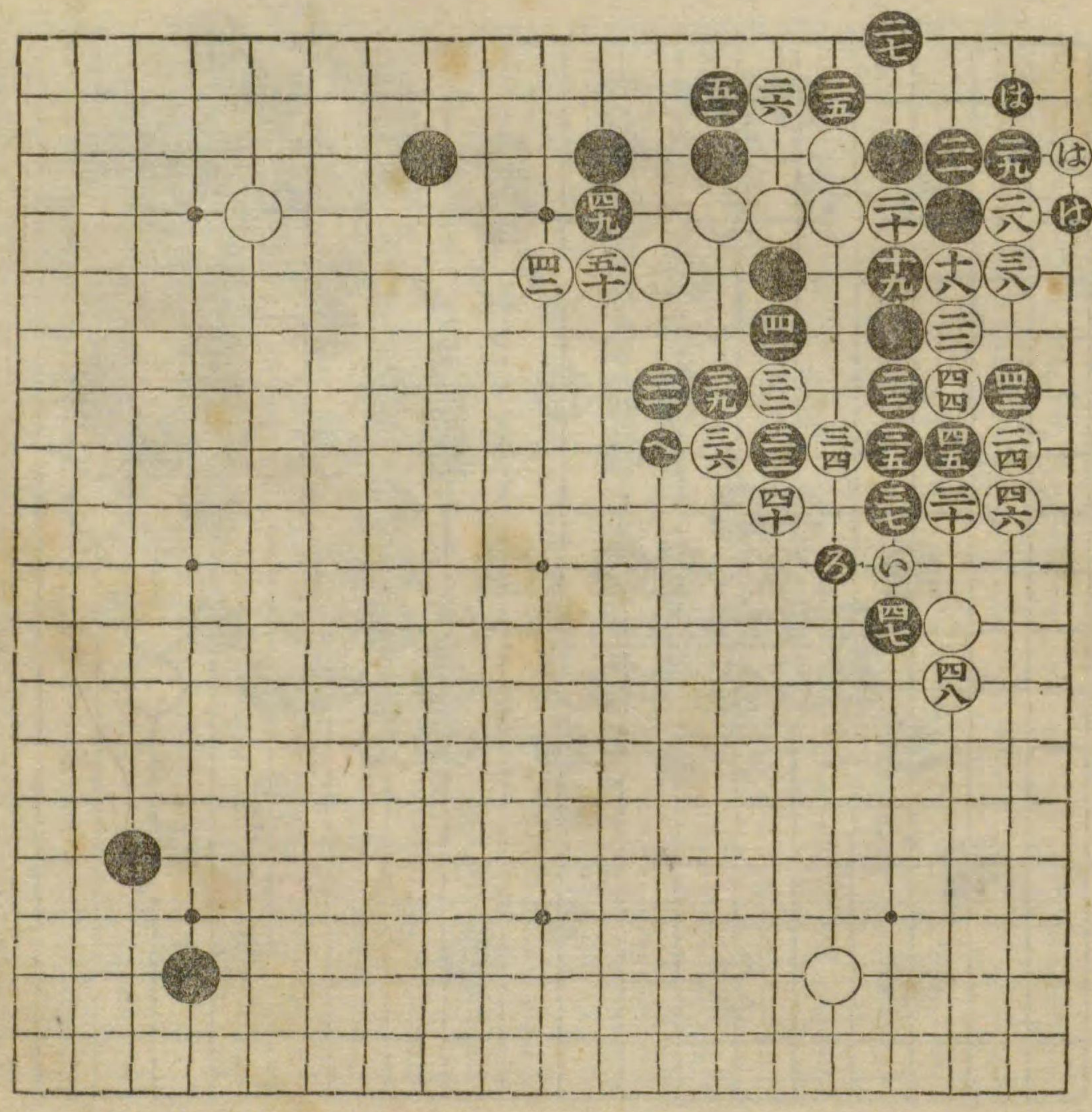


黒第五十一手迄

○黒三十一は四十の點に打つ可し、次で白若此の方面を手抜すれば三十一の點より迫る手順なり、黒三十一を四十の點に打ちたる時白若三十二に來らば、黒は三十七と頂け、白と綽ねたる時黒は直ちにと綽返して打つをよとす。

黒四十九及五十一の兩着は打つの要なし、宜しく四十九の手を以ての點に曲る可し

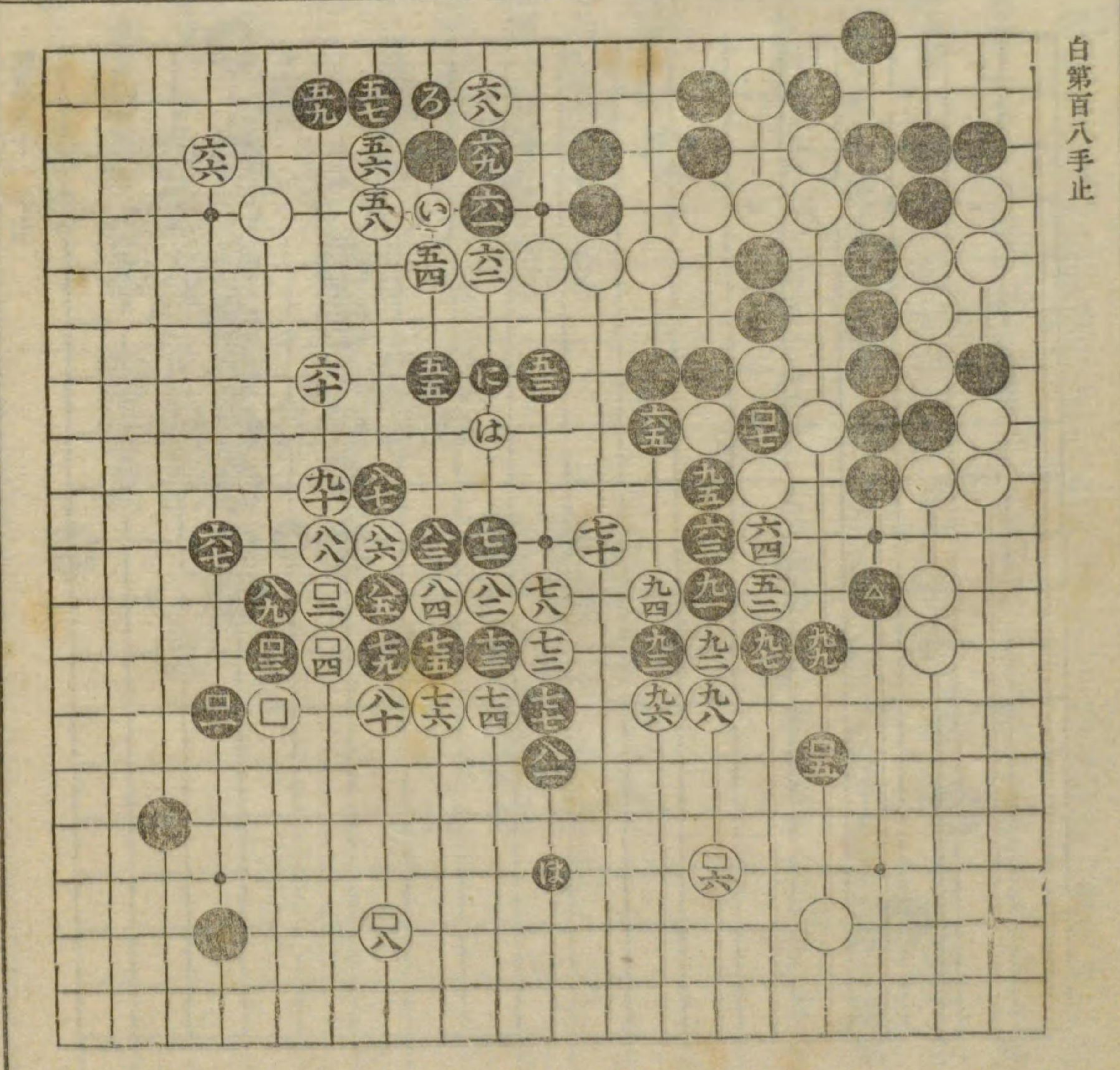
「註」 ①の綽ねが利いて居る限り隅の黒は活である、白若し五十一方面から盤を阻めて來たならば先手で②と綽ておく、後に白が③と打缺いで來た時は④と行びる常用の妙手に出る。



(棋番十戰實科考參)



○白六十は六十九の點に頂け、  
 黒六十八の時①とアテ黒を②と  
 粘がせて③と覗き、黒④と粘ぎ  
 たる後六十と打つをよじとす、  
 黒六十三の覗き悪し、(△印黒)  
 より進む路を自ら杜絶するに等  
 し打たざるをよじとす、  
 白六十六は不得要領の手なり、  
 宜しく⑤と覗き黒に⑥と粘がせ  
 て七十と打ち黒之に應じて七十  
 一と打たば八十七より迫る可  
 く、黒若し八十七へ走らば白は  
 九十、八十八と押して自然に左  
 側に大地域を造り得ん、  
 黒七十三の頂け面白からず、此  
 くては自然に白地を完成せしむ  
 る外なからん、  
 寧此の手を以て⑦と打ち、以て  
 白の應手を問ひ同じく破るゝと  
 も玉碎の快舉に出づ可きなり。  
 要するに黒は十七の手抜に敗因  
 を醸し、白に四十と中原の一子  
 を抜かれ四十二と飛ばるゝに至  
 つて大事已に去る、爾後又敢て  
 言ふの價値なきなり。



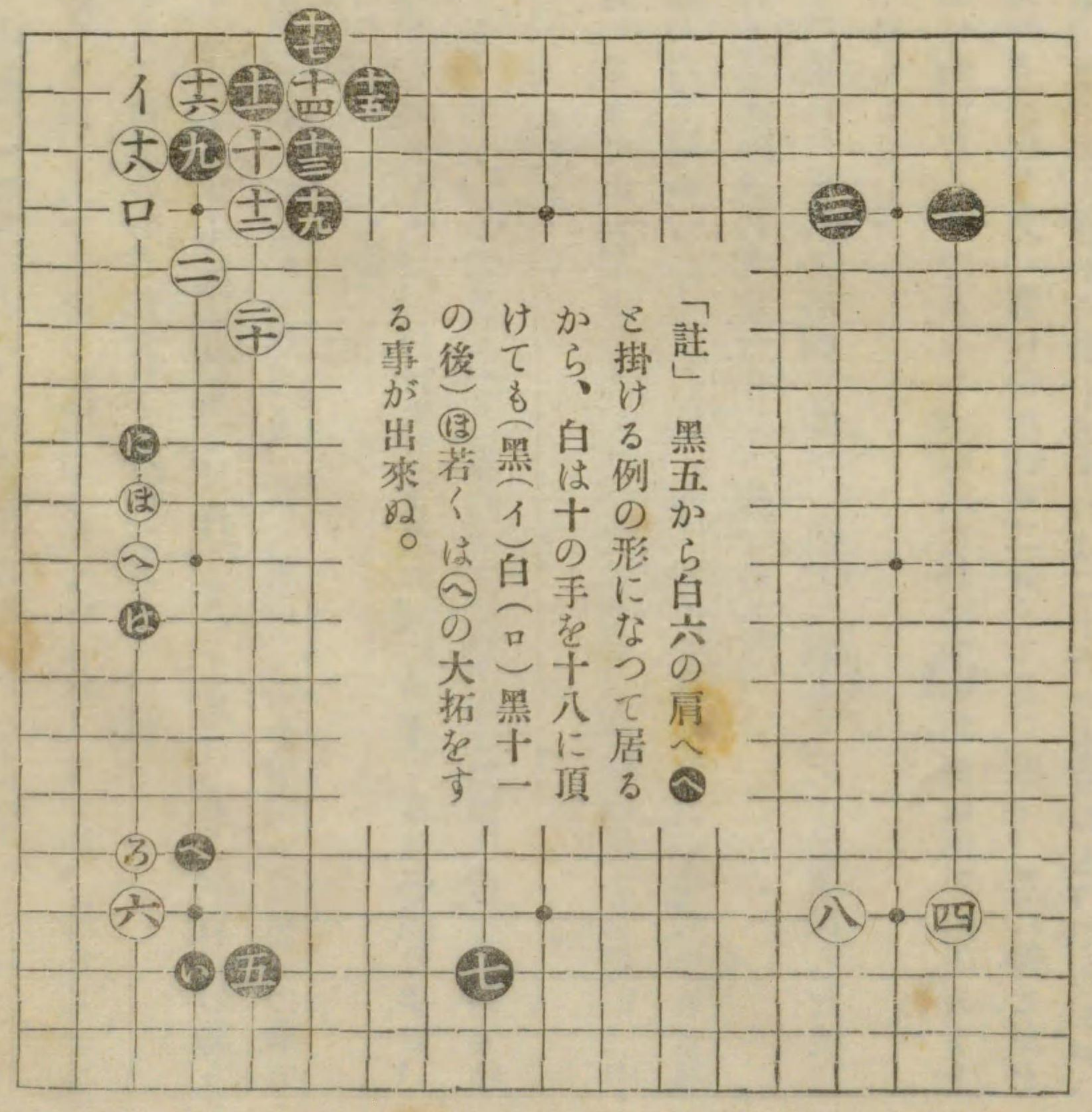
白第百八手止

第六局目

中押勝 鈴木 爲次郎  
 先 宮 阪 家 二

黒五の手を①の點(小目)に打ち  
 白が其に對して②と掛つた時、  
 ③と三間夾してもよい。

「註」 黒④の三間夾は、白二  
 の活動を多少制限して居る趣  
 もある、何故なれば、白二か  
 ら九の點に縮れば、黒は⑤と  
 二間拓して白二、九からの拓  
 きを妨げる、若又白が九と縮  
 らず⑥と拓けば黒は十八即三  
 々を犯して白地を空に歸せし  
 める手も出来る。  
 黒九の時白十を十八の點より頂  
 ければ、黒(イ)白(ロ)黒十一と  
 なつた後、白は左下隅布石の關  
 係上拓き場所に窮するから、乃  
 で外から十と頂けたのである。



「註」 黒五から白六の肩へ①  
 と掛ける例の形になつて居る  
 から、白は十の手を十八に頂  
 けても(黒(イ)白(ロ)黒十一  
 の後)③若くは④の大拓をす  
 る事が出来ぬ。



「註」 黒十九の手は必ず此く押さねばならぬ事もない、或は●と斜走してもよい、  
圖の通り十九と押した時、白亦必しも此く二十と應じねばならぬといふ事もないが、然し之を手  
抜して黒から二十の點へ掛けられると自他の勢力に大なる消長がある。

黒二十一は方針が違つて居る、此の手で二十二の點即右側星下に拓くといふ事は、右上隅自己の締り  
の姿勢から見ると、亦右下隅敵の拓きを妨げる上から見ても、共に要所である事は一見明了の事であらう、

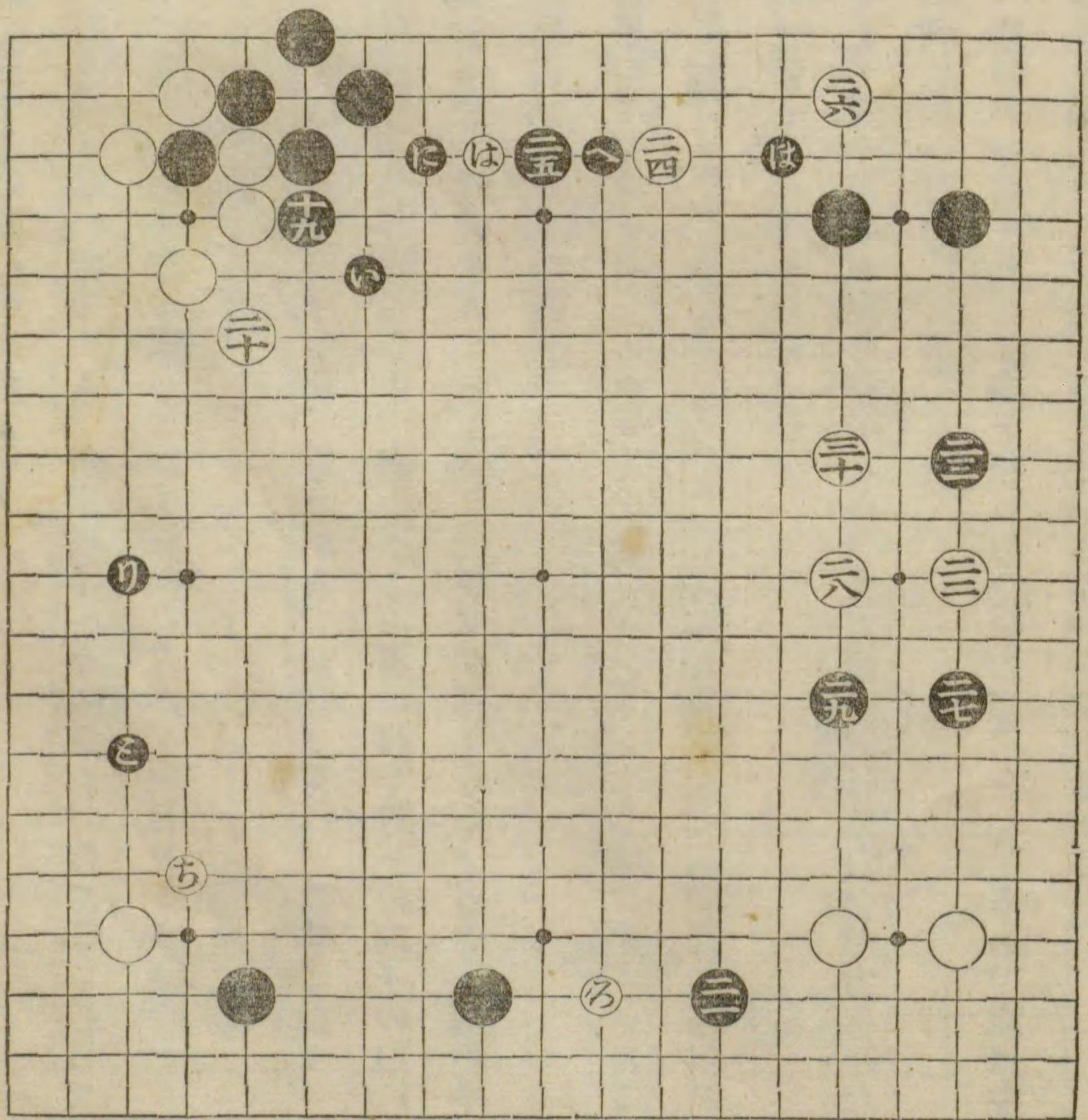
乃で黒二十一の手で二十二の點を占領したとすれば、白は○と下側大場に着手するは必然の手で、  
次で黒は●と左下隅を二間夾返しとし、白が○と尖んで應じた時、黒は●と二間拓に治る位のものであらう。

「註」 右側二十二の點が黒白双方にとりての天王山である事、及び下側三間拓の黒から更に二十  
一と三間拓するよりは、一間高縮の右上隅から二十二の點に拓く方が自然的好良の姿勢である事  
は、從來の布石詳解を熟讀せられた諸君の夙に首肯せらるゝ處であらう。

白二十六は不要の手である、此の手で單に二十八と右側に備へ、黒之に應じて三十と單關した後  
に二十六と右上を犯しても敢ておそくはあまい。

「註」 溯つて黒二十五と應じたのは如何なものであらう、何故なれば此の方面は黒眼形のある上  
に十九の押しまでしてあるから此かる堅固な方へ假に白が○と二間して見た處で、黒に●と應じ  
られては何の効果もない處である、其で若し白から動くとするれば二十六の走位のものであるが、

第三十手迄



~~~~(棋 番 十)~~~~

是とて黒からは●と尖んで防  
ぐといふ事も餘りに狹隘に失  
して打ち難い處である、寧ろ  
二十五の手で●と左下隅を夾  
返す手段に出たらば如何なも  
のか、此の消息を暗に洩した  
のが上述の第二十六手の説明  
である、即ち白に就て言へば  
黒が○の一手で左右の均衡を  
支持す可き、其の好點を二十  
四と打つて破壊したからは、  
黒が二十五と應じて呉れなく  
とも十分である、然るに黒が  
此く自己の堅固な方から二十  
五と應じて呉れたは意外の儲  
であるから、自たるもの軽く  
引あげて他の大場に轉じると  
いふ策戦が望ましい。



黒三十一は愚手である、此の手を以て三十七の點に飛ぶがよい。

「註」 茲を手拔しても白から別に打ち様もない處である、若黒三十一を手拔し、白が⑤と頂けて見た處で、黒が⑥と綽ね、白⑦と引いた時黒亦⑧と引くといふ結果になつて白はツマラヌ。

黒三十九は四十一の點に先鞭をつけるのが要點である、

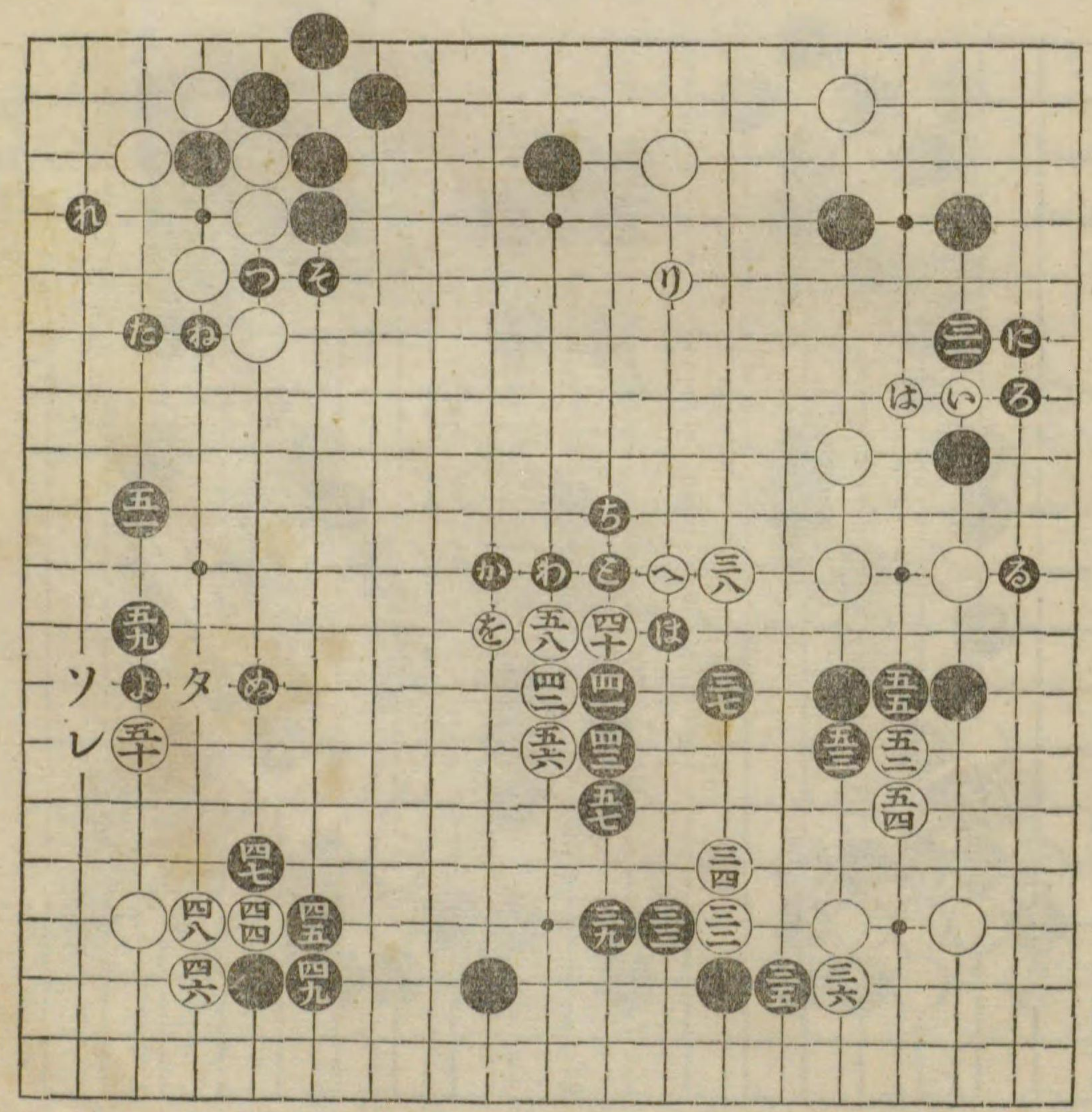
黒五十一は面白くない、本局敗因の一である、此の手を以て⑨と膨み、白⑩と抑へ、黒⑪と截り、白五十八と粘いだ時、黒⑫と立ち、白に⑬の邊に備へしめ、⑭の邊より遙に四十以下の四子の白に迫り中原に地域を造ると同時に左側の白地を侵略するといふ策に出なければならぬ、白五十六の手は無理である、先づ退いて五十八の點に粘ぎ己が缺點を補うてからの事である、

黒五十七は緩慢である、此の一片の黒は下方五十七への連絡と右側⑮の盤りと二ヶ處に凌ぎがあるから少しも恐れる要はない、直に白の缺點を衝いて五十八を截り白⑯を黒⑰口⑱黒⑲と運んだ後、白が五十七へ綽ねて連絡を絶つて來た時は⑳と盤つておけばよい、

黒は乘す可き此の機會を逸し、白をして五十八の要點を粘がしめ中央方面に於ける白の勢力を旺ならしめた爲め茲に形勢は頗る黒の不利に傾いた、

黒五十九の單關は不得要領である、此の手を以て⑳と頂けて以て白の應手を試るか、或は左上に向つて㉑と二間拓きして、㉒の走り㉓の行等を利かさうといふ手段を講じるがよい。

第五十九手迄



~~~~(棋 番 十)~~~~

「註」黒が五十九の手で㉑と頂けた時、白が(タ)と上から綽ねれば、黒は下から(レ)と綽ね返すがよい、又黒㉒の時、白が(ソ)と下から綽ねれば黒は(レ)と截つて白の應手を試みるがよい、

又黒五十九の手で㉑と二間拓した後、黒が⑳の點に行るのは⑳のアテ、㉒の截を覗ふ手であるが此の行が出来ると同時に中原に㉑の點へ頂け出して白を兩斷するの手も出来るのである。

何れにしても黒五十九は緩慢な着手との批難は免かれぬ。



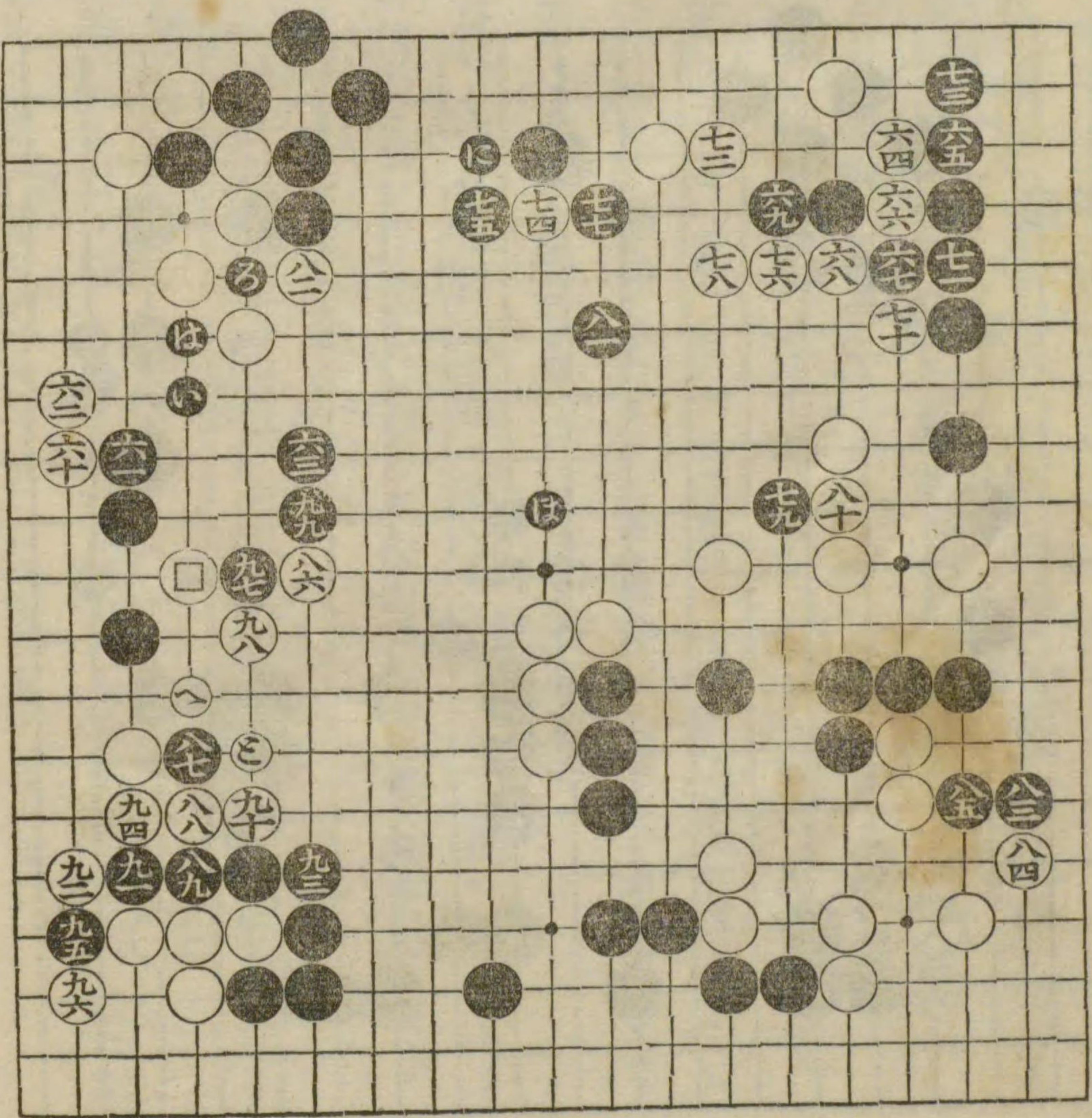
黒六十一の押は打たぬ方がよい  
 此の手で●と斜走して、飽迄八  
 十二の點に行出す手を利かさね  
 ばならぬ。

「註」 黒六十一と押し白に六  
 十二と行びられた爲め、今度  
 は黒が八十二へ行ても●とア  
 テ●と截る手がなくなつた。

白六十六の手は七十三に縛る方  
 が現在利である、

黒七十五は●と引くが本理であ  
 る（然らば二子の黒を捨てなく  
 とも済む）

黒八十五は緩い、●の邊から白  
 に迫り中央に地を造る手段を講

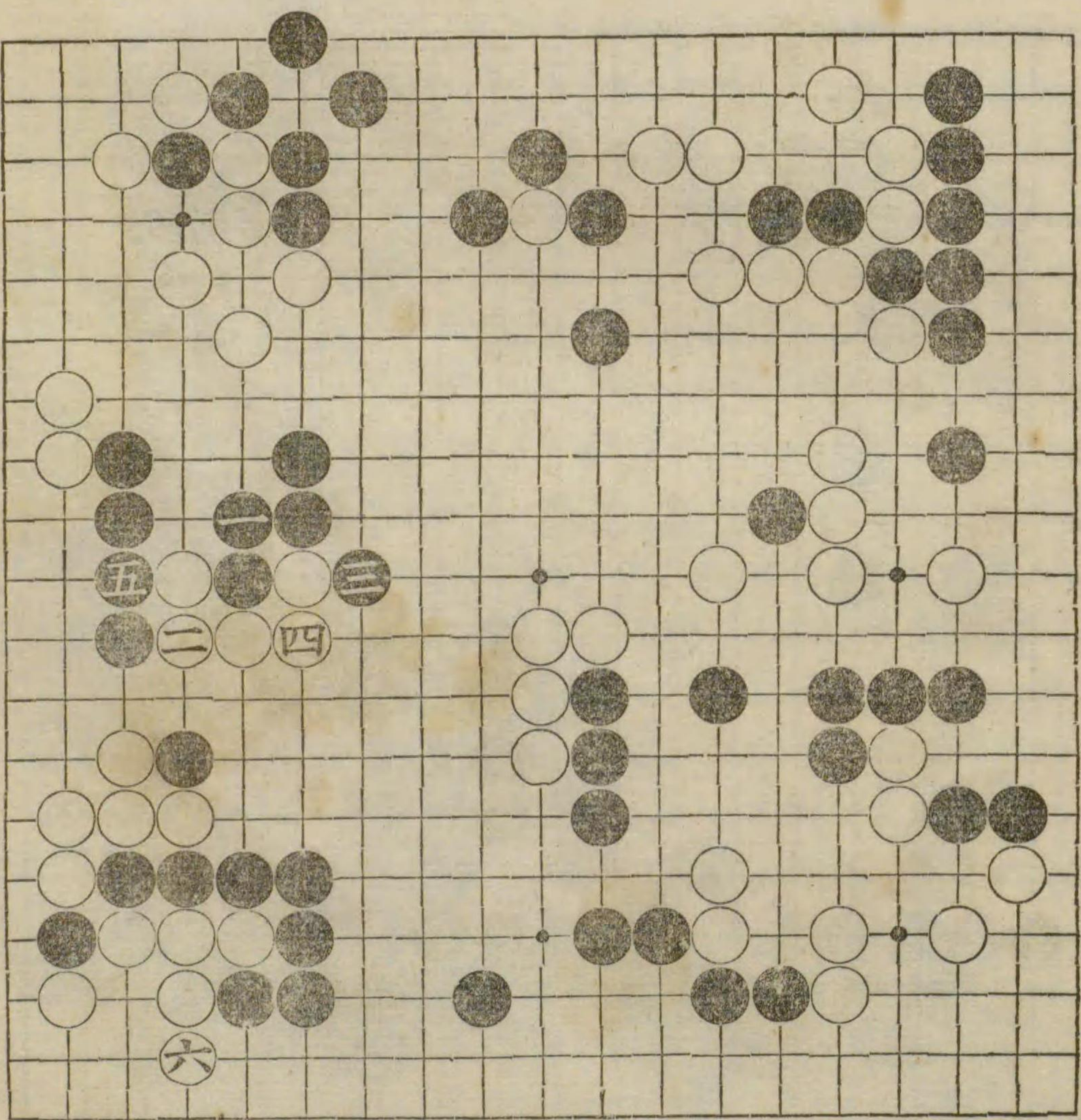


じねばならぬ、

黒八十七は九十八の點に一間飛  
 するがよい、已に八十七と頂け  
 た以上は白八十八の時、飽迄九  
 十と抑へ白●黒八十九、白●黒  
 九十一と打ち。白の應手によつ  
 て振替ることも敢て悪くはない、  
 （此く振替つても左側四子の黒  
 は容易に捕られはせぬ）

（以上第百五十頁講解）

前圖黒九十七以下盡く中原の沃  
 野を散地とし最後に白六と下り  
 を打たれては最早頽勢を挽回す  
 るの手段はない事となつた。





第七局

鈴木 爲次郎

中押勝 先二子番 宮阪 家二

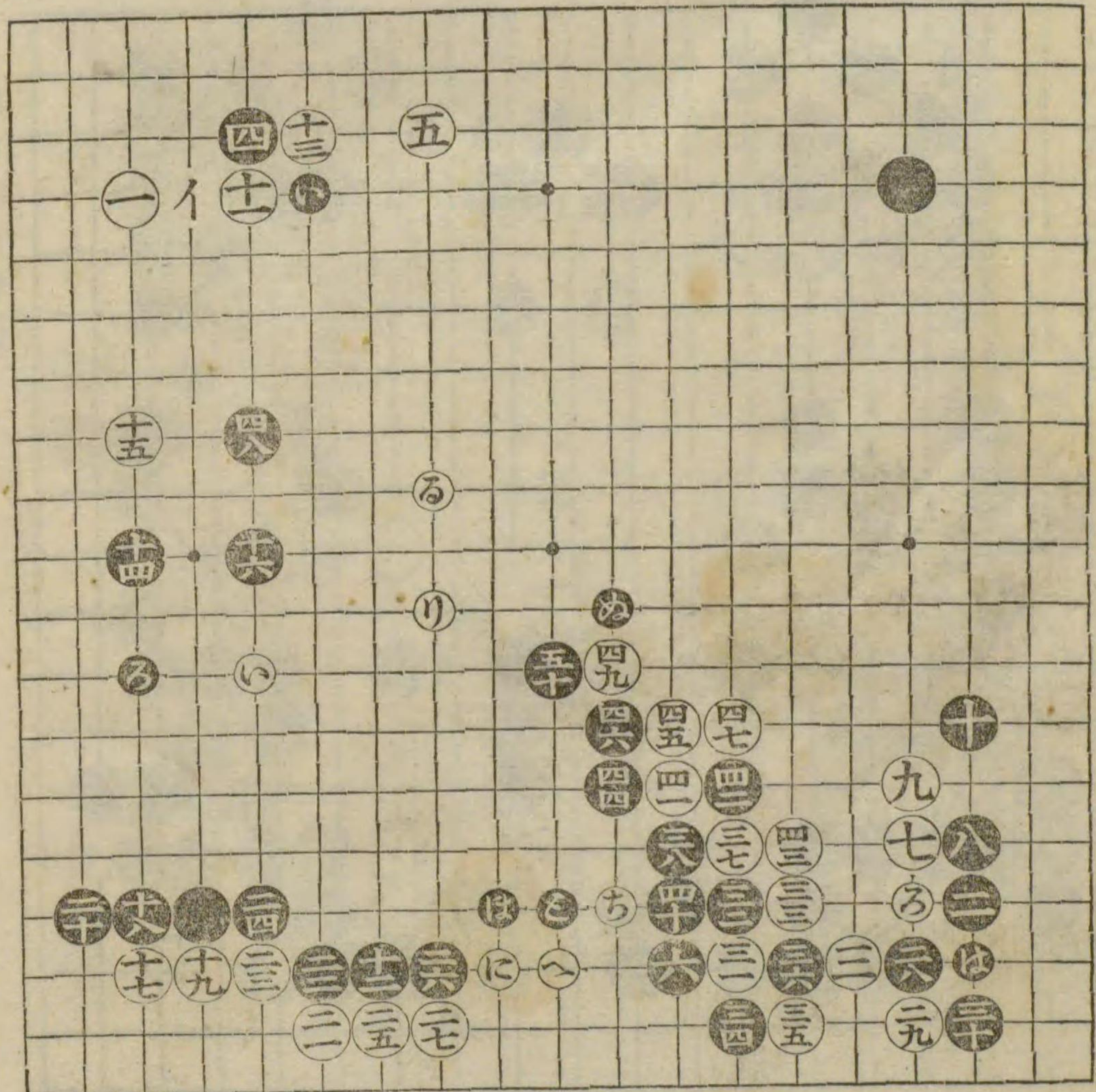
白十一と頂けた時、黒は①と綽出す例の定石（互先定石二間夾第六拾壹圖以下参照）に運んでもよい、此く十二と手抜きするのは、此の左上一局部としては確に不利である、然し本局は已に二子棋であるから此くても黒が打てぬといふ譯はない。

「註」白が七と掛け九と行びたのは左上隅で十一と頂け抑へようといふ趣向の準備である、已に七、九と白が打つた上は黒は十二の手で（イ）へ綽込

第五十手迄

白三十九は三十一へ切提る。

四十六



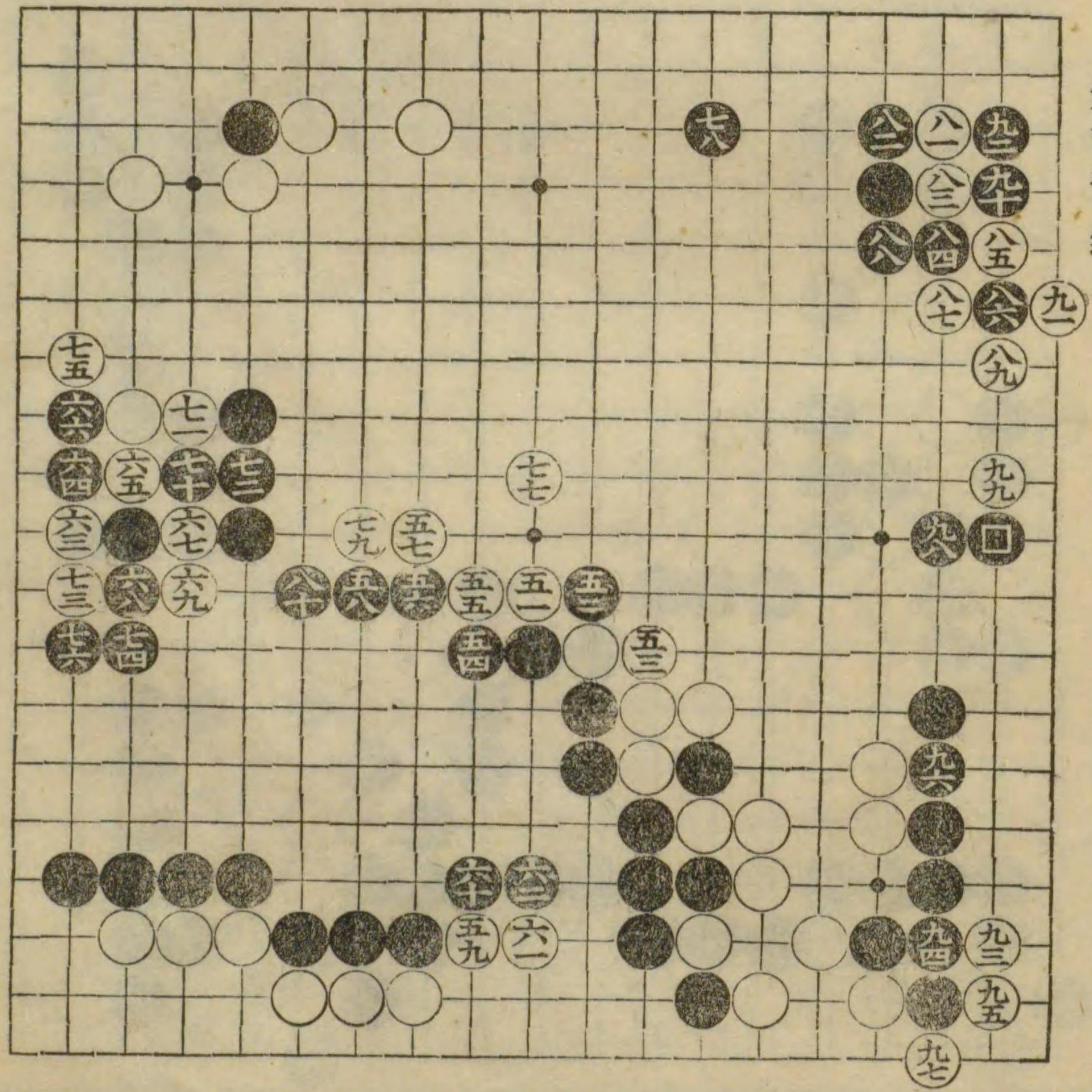
む手はない。

白十七の打込は時機が早い、先づ①と打ち黒に②と應せしめた上、手段を廻らすがい

白三十一は大悪手である、此の手で先づ③とアテ黒を④と粘がせ、轉じて⑤と綽ね、黒⑥白⑦の時黒が⑧と押さば⑨と綽ねて打つがい

黒三十二と綽る必要はない單に四十と立つがい、白四十九以下益々黒に調子を與へて地を造らす手となつて面白くない、此の手で⑩の點に打ち黒が⑪と飛んだ時白亦⑫と一間飛して出る様な手段であらう。

第百手迄



~~~~~(棋番十)~~~~~

四十七

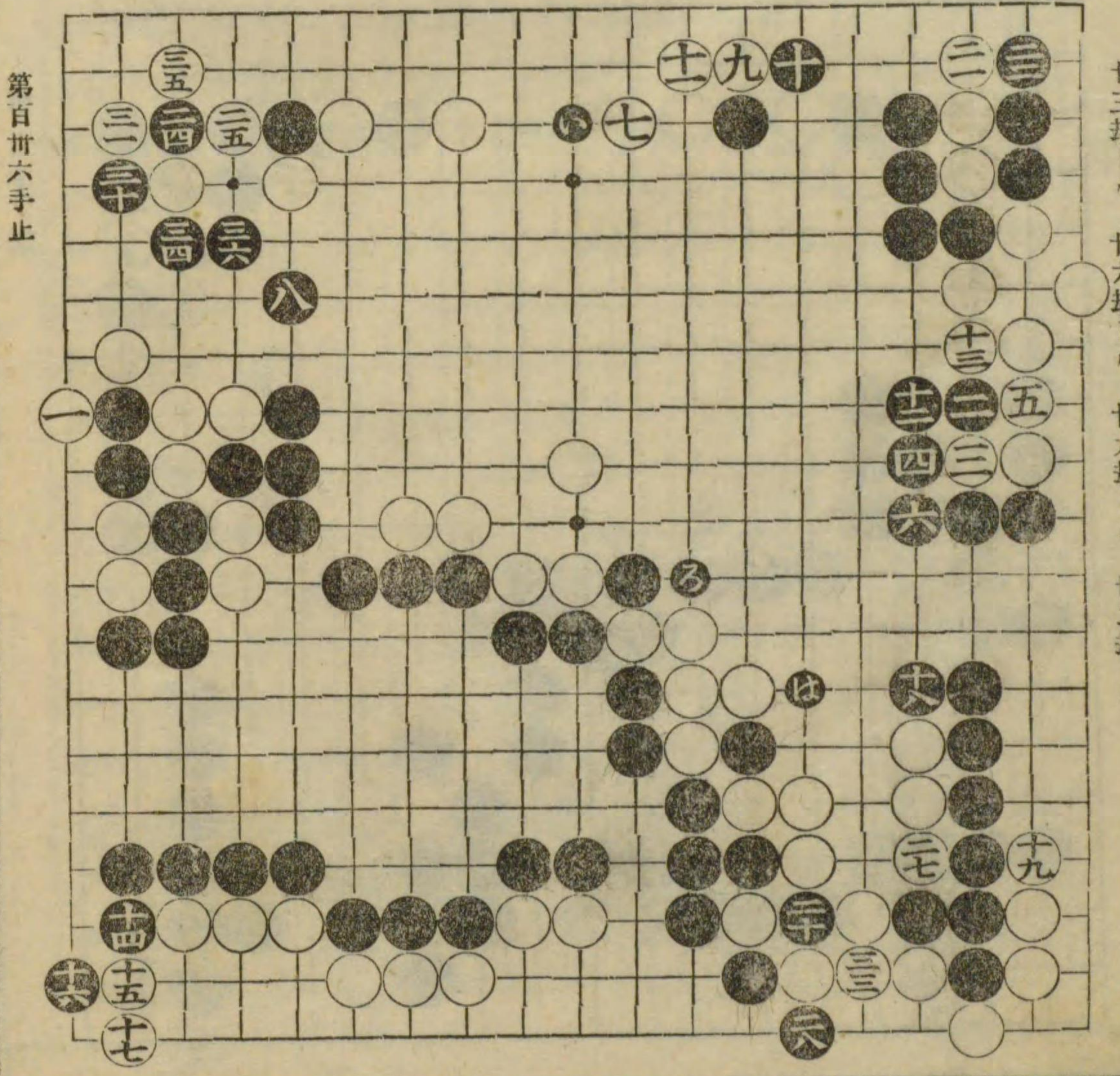


黒二は不要の手である、(二)と上側星下に二間拓きするがよい、黒十二は打たぬ方がよい、此の手で二十と劫を提り、白が二十七と應じた時(七)と押して(七)の手を見る位のものであらう、

「註」モ早勝敗の問題ではないが、單に着手として論じると、黒二の手で(二)と打つてあれ七、九、十一の白手もなわけ、後に(七)の味を一方で見、又外勢の模様によつては酷しく黒から十三と眼を刺して攻る手もあらう。

要するに本局は白三十一の悪手より四十九迄の勢を馴致して白の敗勢終に動かす可らざる事となつた。

宮阪君四番敗越して終に先二の手合となれり、好漢惜むらくは多病！切に加餐を祈る(絶)



廿三劫トル 廿六劫トル 廿九劫トル 卅二劫トル

第百卅六手止

第八局

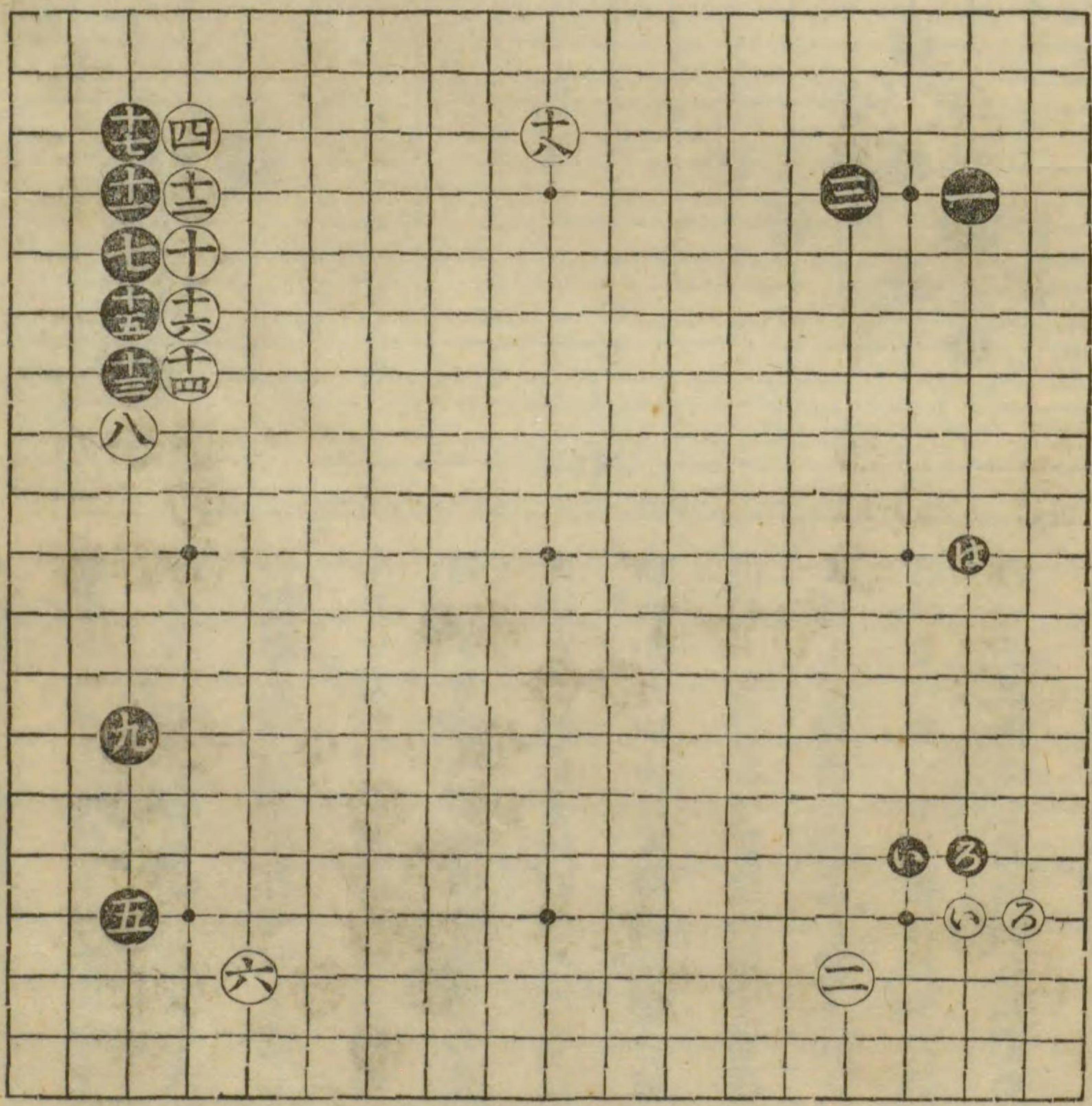
鈴木爲次郎(四段)  
二目勝 宮阪 案二(三段)  
先二子先番

名人本因坊秀哉講評

白八の手にて(八)と右下隅へ締るがよい。

「註」側の夾よりは隅の締の方が重大であるは高等研究布石の部に屢々繰返してある通りである。

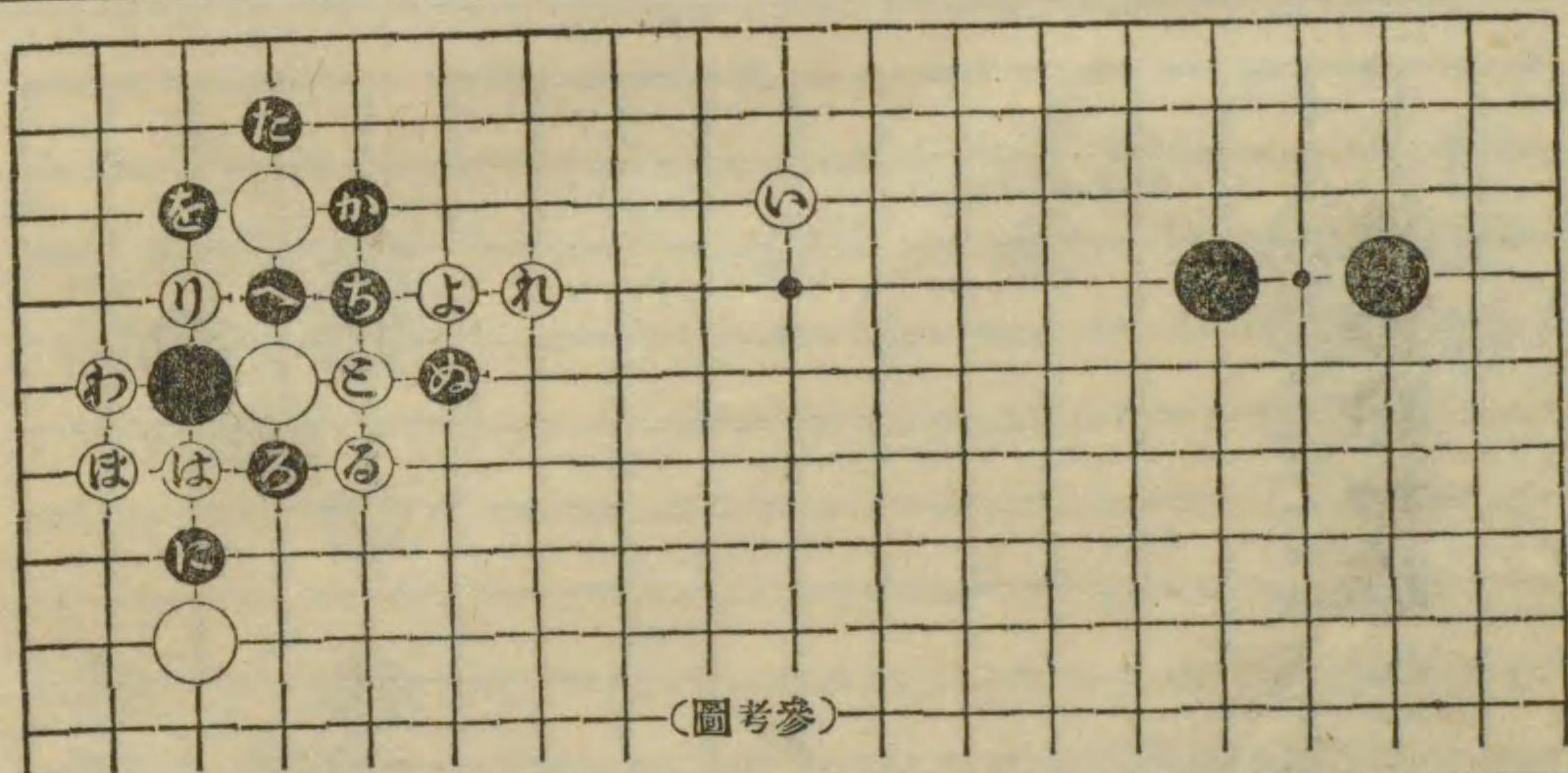
黒十一の手を以つて右下へ(十一)と高が(十一)に打ち、白(十二)黒(十三)白(十四)と交換を遂げたる後右側星下へ(十五)と大場の拓きを打ち、次に白が十五と左上の黒一子を捕とせば、其の時黒は上側星下十八の點に打つて宏壯な模様を形造る方、黒としては局面が解り易くして打ち易い。



~~~~~(棋 番 十)~~~~~

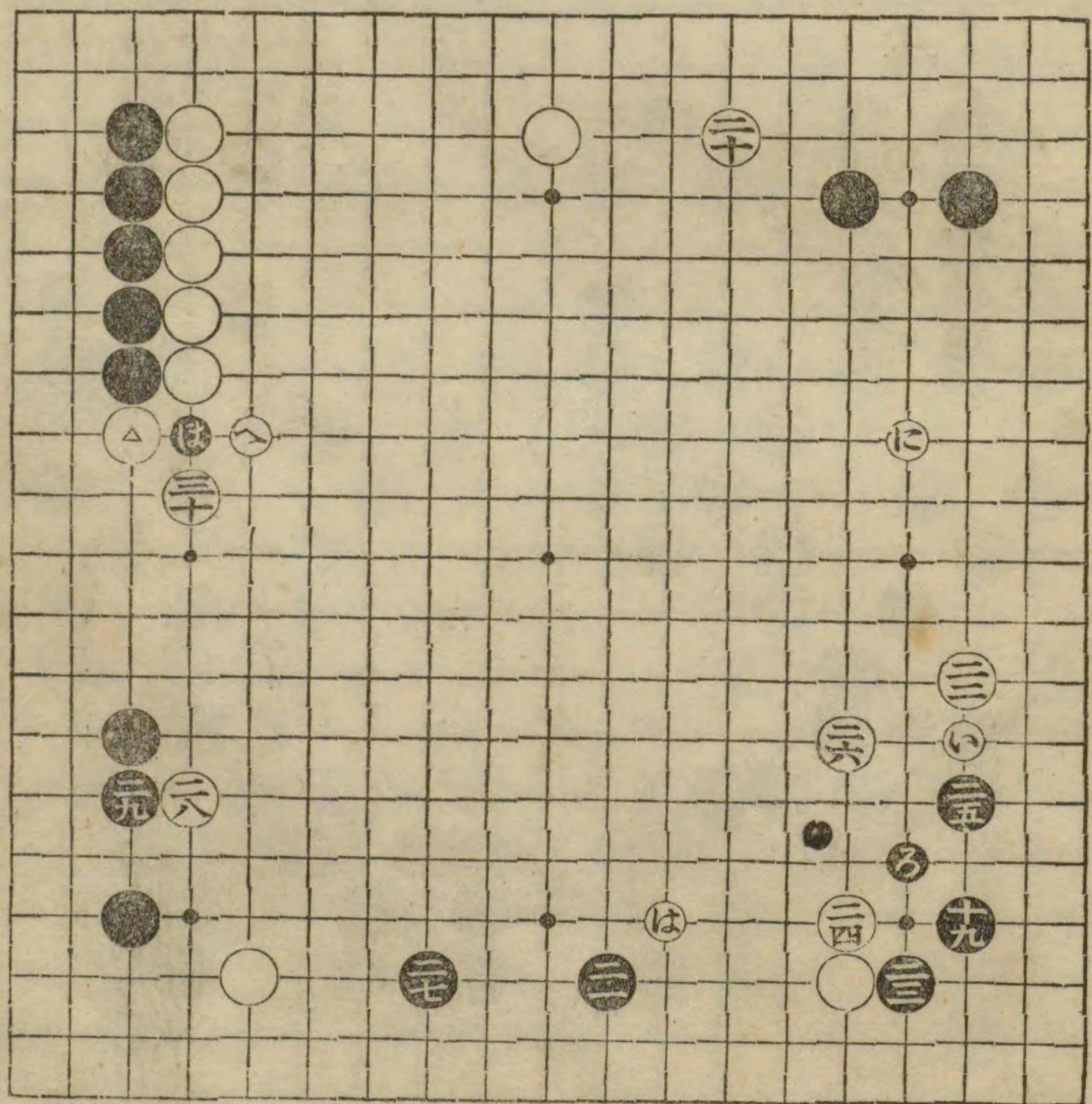


白二十二の一子緩慢なるため、黒をして勞せずして陣容を整へしむるの結果となつた、此の手を以つて㊦と二間夾とし黒をして㊧と尖ましめたる後㊨と黒二十一の肩側にて打つとか何とか趣向を廻らさねば、此く易々と全局の黒を安心せしめるは決して策の得たるものではない。白三十の掛粘も亦緩い、此手て㊩と右側に高く打つて地歩を占め右上の黒に迫るのが最も急務である。



▲(參考圖) 前頁黒十一の手の説明中「次に白が十五點に左上隅の黒一子を提らば、黒は十八の點即上側星下に打て」と記しておいたが、白が此く左上隅の黒一子を抱へず此の參考圖の様に㊦と上側星下に打つたならば如何かといふに其時黒は㊧と綽出し、白㊨以下符號の示す順序に運んで最後に白㊩と截り㊪と行びるに至つて、初に打つた㊦の一子は極めて面白からぬ姿勢を呈する事となる。

白若し三十の手で右側へ㊫と打ち次に黒が㊬と截つて來たならば、白は㊭の方からアテ、何處迄も押しさり上側より中原へ宏大なる地域を形造るがよい。  
 「註」△印白一子の截り提られも大きいには違ひはないが、已に左下隅には白二十八黒二十九の交換が遂げてあつて如何とも手の着け様のない堅固な黒が出来て居る處であるから此の堅固な位置低き黒に向つて左上の黒を連絡せしめるのは餘り惜しくもない。却つて其の代償として中原の大地域形が纏まる事となれば十分である。

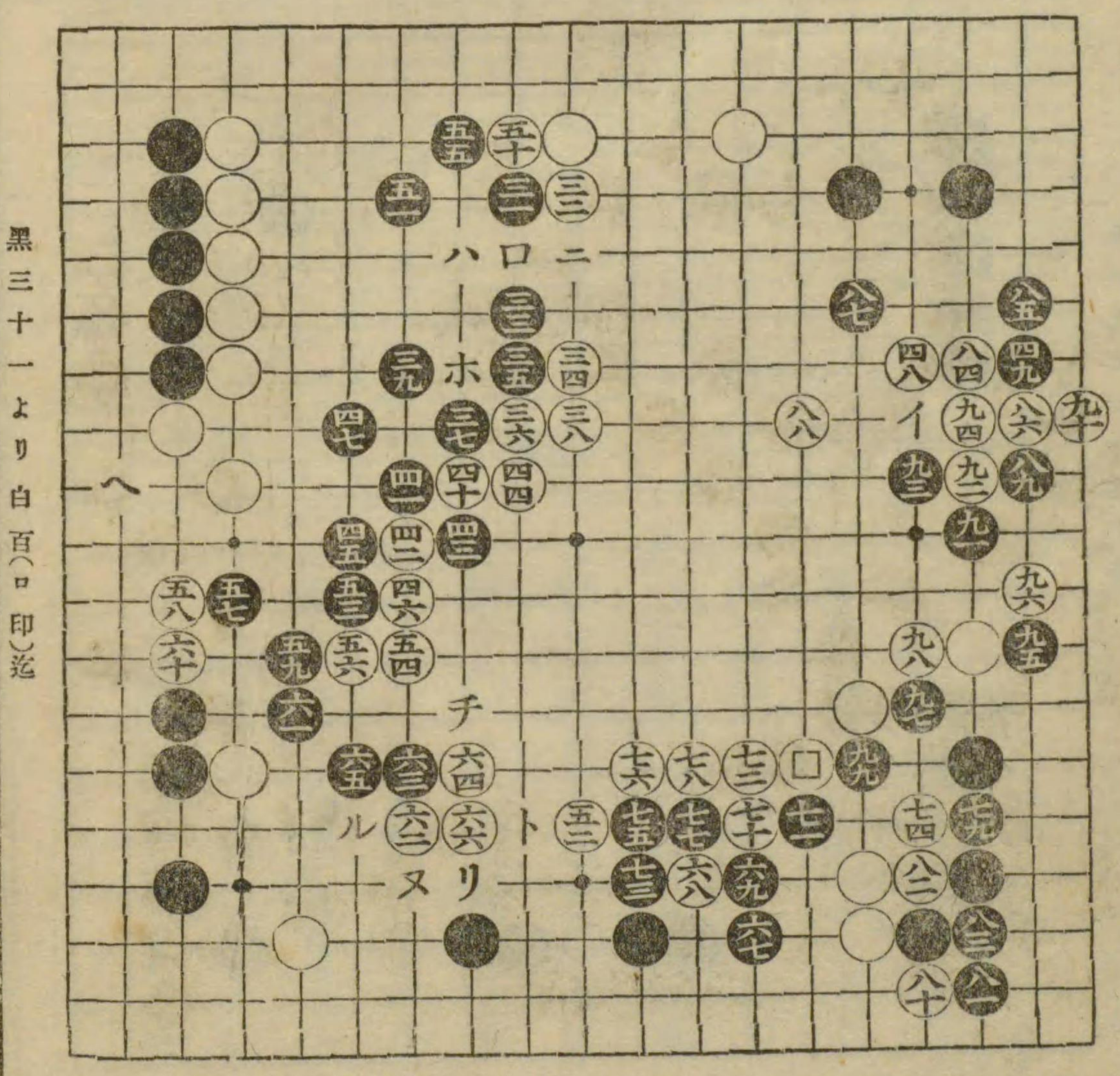


~~~~~(棋番十)~~~~~



前述三十の手の説明の理由より見て、黒は三十一の手で右側(イ)の點に打つがよい、同じく此の處即上側に着手するとしても三十一の點は少しく深過ぎるの憾がある、此の手を以つて(ロ)若くは三十三の點から軽く白地を削る方が穩當である。

白三十四の着點甚だ其の當を得ぬ。棋家の所謂「マアリ形」て勞多くして其の効少ない結果に終るの外はない、此の手で(ロ)と沖み黒(ハ)とアテ白(ニ)と粘いておく、次で黒が(ホ)の點に掛粘をするとしても、白は此の所



黒三十一より白百(ロ印)迄

を手抜して時機の熟するを待つて居る、といふのでなくては面白くない。

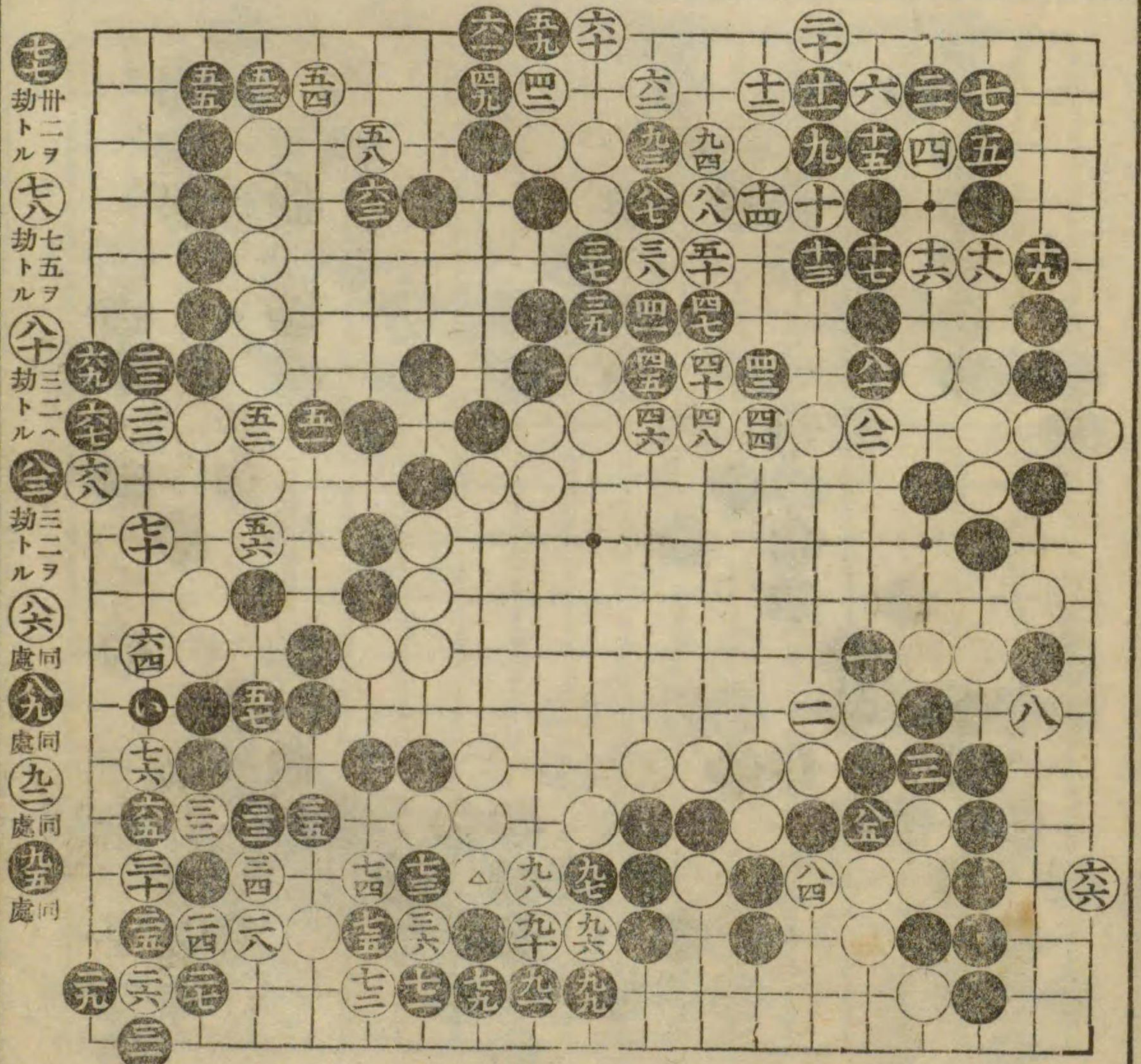
黒六十一の行の手で(ヘ)に置かば、白は殆んど應手に苦しむのであつたであらう。

白六十五の引きは大惡手である此の手で六十六の點に截り白が(ト)からアテれば(チ)から綽出す、若又白が(リ)からアテれば黒は(ヌ)とアテ白が(ト)と提つた時(ル)から包む、何れの手段にしても白は茲に一局抛了の外策はなかつたであらう。

(以上五十二頁分評)

黒六十五のアテは惡手である此の手で(ニ)と打ち白に七十と手を引かして七十一へ綽ね、白七十二に抑へた時七十三に綽込む手もあらうが單に七十九と粘いて於いて十分の勝である。

(以上五十三頁分評)

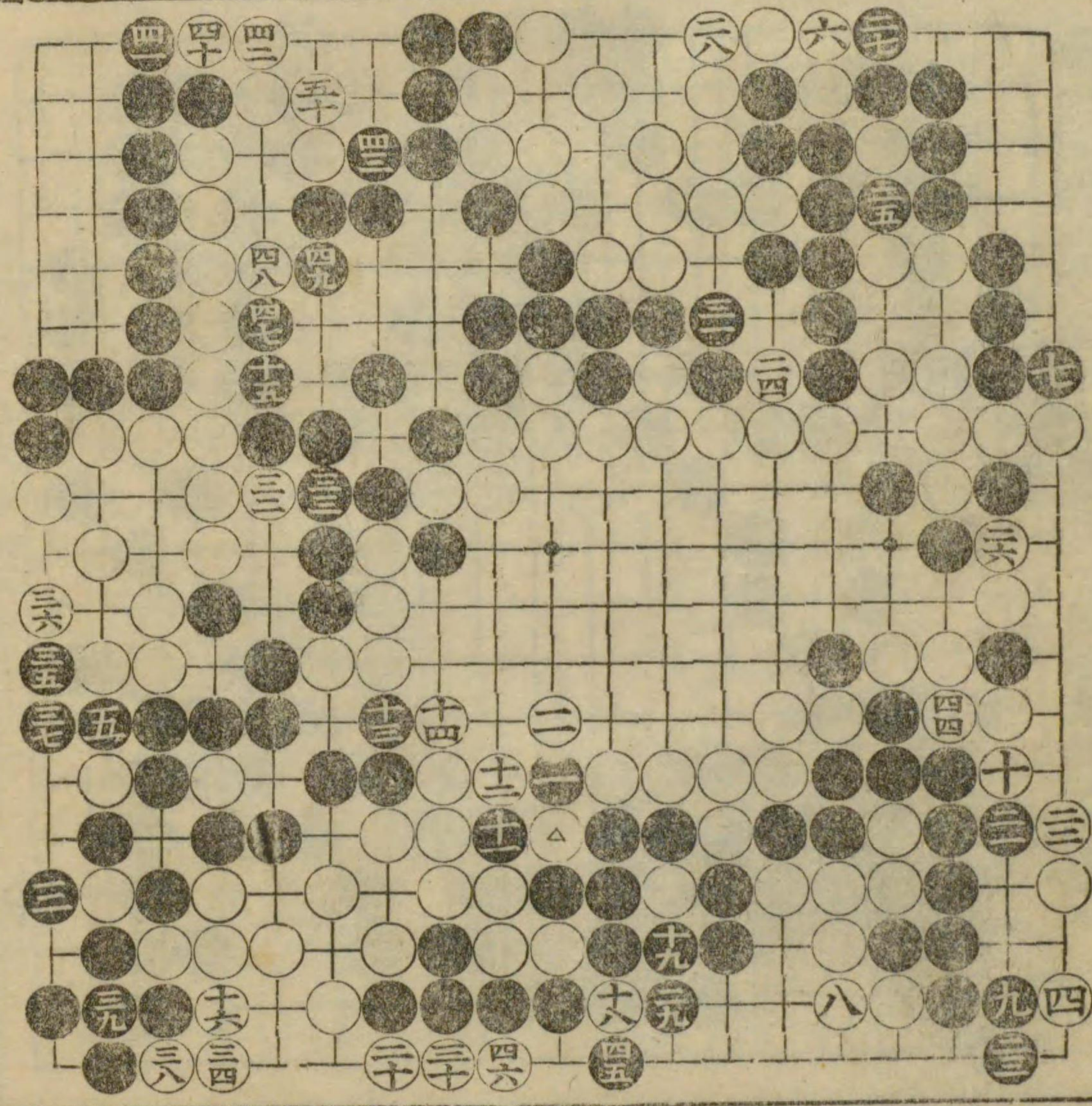




要するに本局は最初白二十二の緩着よりして、局勢の不利を醸し、更に三十四の一着其の方針を誤りしたため終に再び頹勢を挽回するの機会を獲得せざりしは又止むを得ざる次第である。

⊕

△印白ノ處粘ぐ



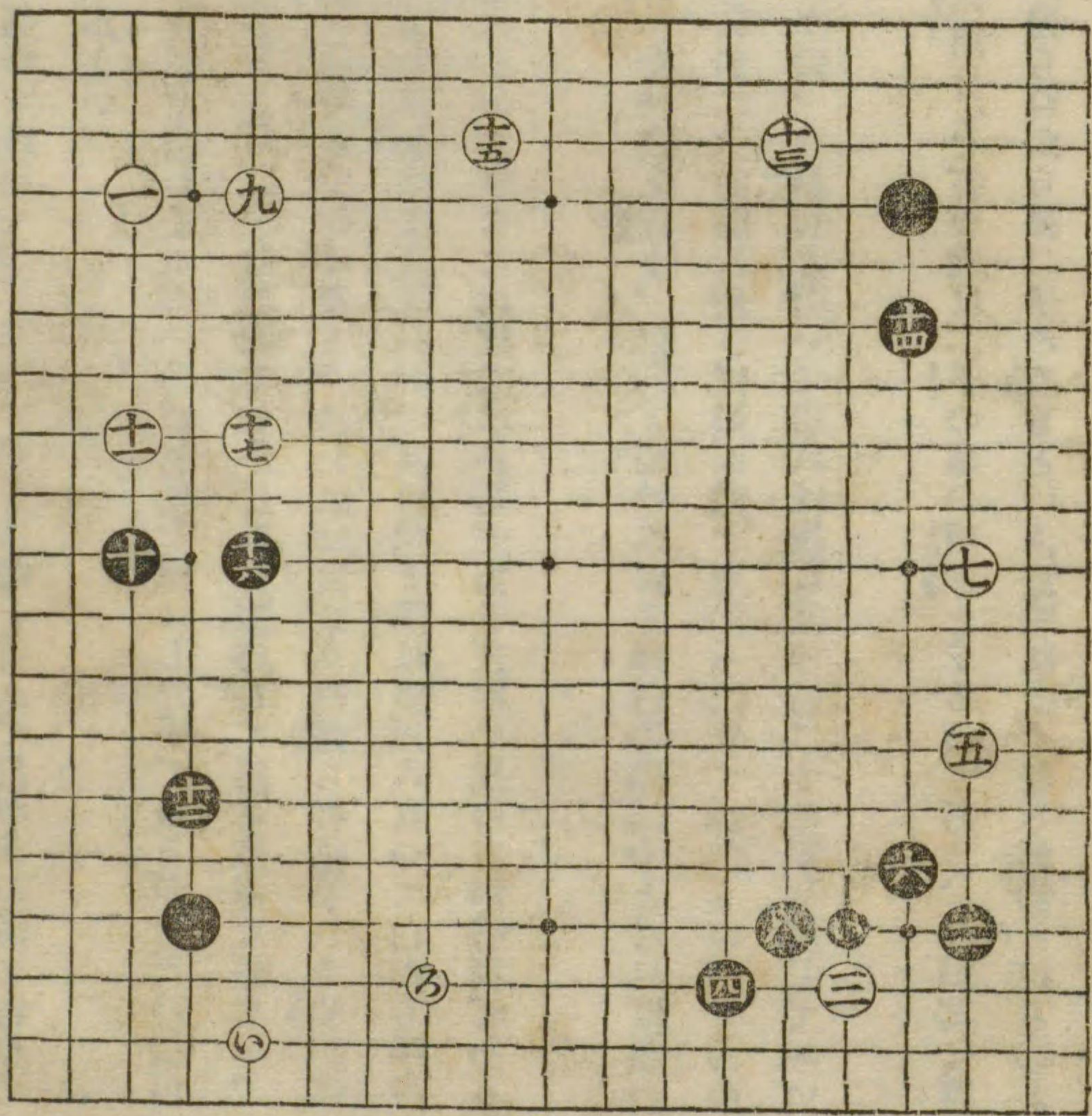
第九局

鈴木爲次郎(四段)  
先二子 二子番  
中押勝 宮阪 案二(三段)

白が五と二間夾返しをしたのは黒から三の頭へ⊕と頂けられるのを拒いだ手である。

「註」此の場合白は五と夾返すより外に手が無いといふ譯ではない、其は一問夾定石及び二子布石法を參看せられるがよい。

白十七は二子を置かした棋としては緩い、⊙若くは⊙の邊に打つて黒の大模様を削るの手段に出なければならぬ。



~~~~~(棋 番 十)~~~~~





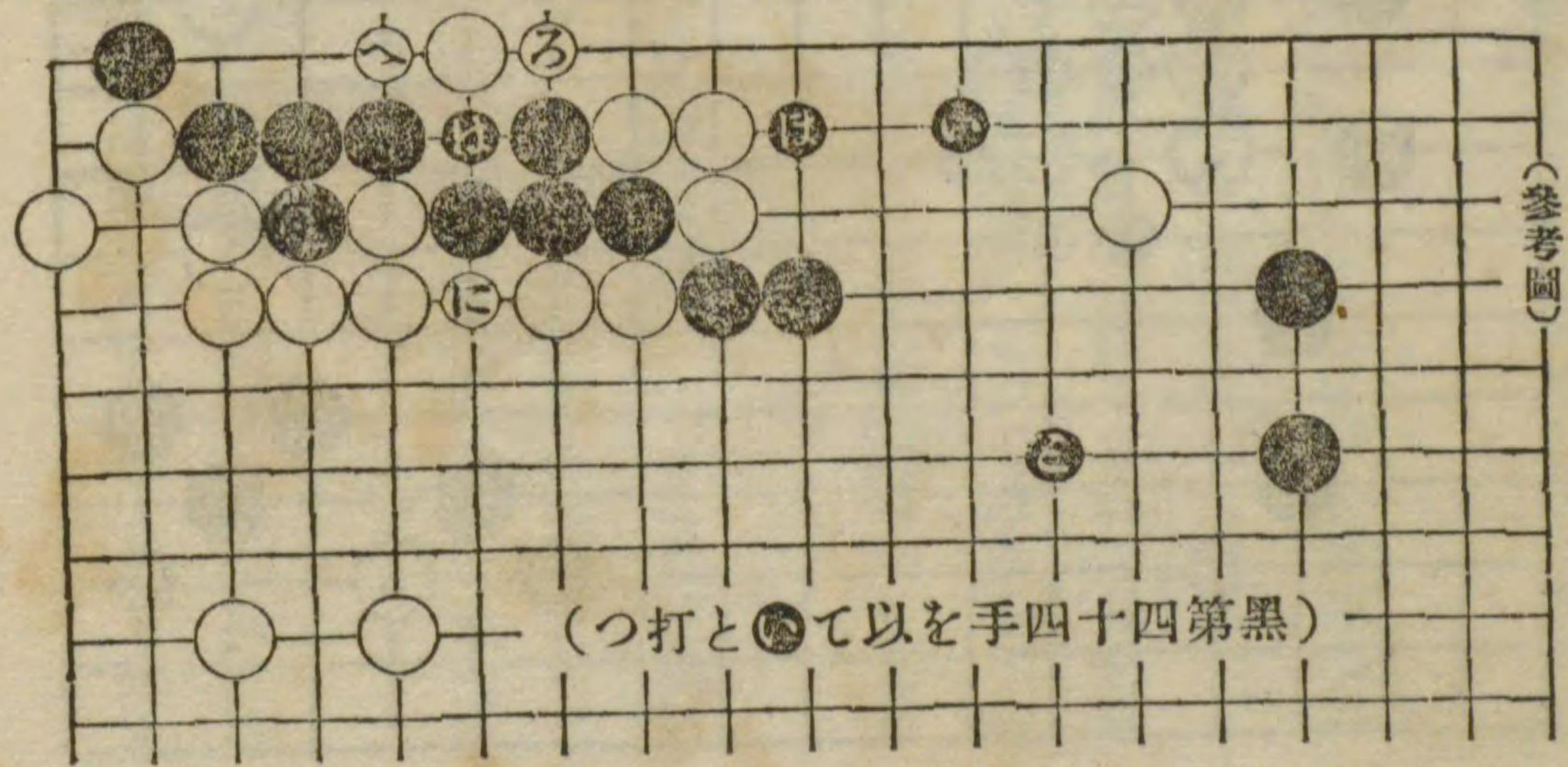


白二十七は四十六の點から抑へて、黒を一隅に封鎖する手段に出なければならぬ、白三十五の手は(35)と堅く粘ぐ方が良い、然らざれば後に劫となるの惧がある。

「註」 茲は後に白四十九となつた時局面に劫種があると見れば、黒は(36)と打込んで劫に行く白が之に應じて(37)と粘いだならば、黒も亦七十九の點を粘ぐからヤハリ劫である。

白四十四は(44)と打ち、次て白四十五、黒四十六、白四十七、黒四十八、白四十九となつた時、黒は五十の手で六十二の點に二間飛するがよい。

「註」 孰にしても此の處は黒から四十八七十八の點にダメをつめる處であるとして見ると此の四十四の一着は自分の地の中へ一手(瘤を造つた様な)ハタラカヌ石を下した道理になつて拙い、此の手で(44)と打つておけば△印白が隅へ振替らうとする時の豫防にもなる、而して手順を追うて六十二と二間飛に大圍ひをする事になれば申ぶんはない。



(参考圖)

黒五十は五十六の點から尖頂け隅の方から根據を奪うて攻立てるがよい。

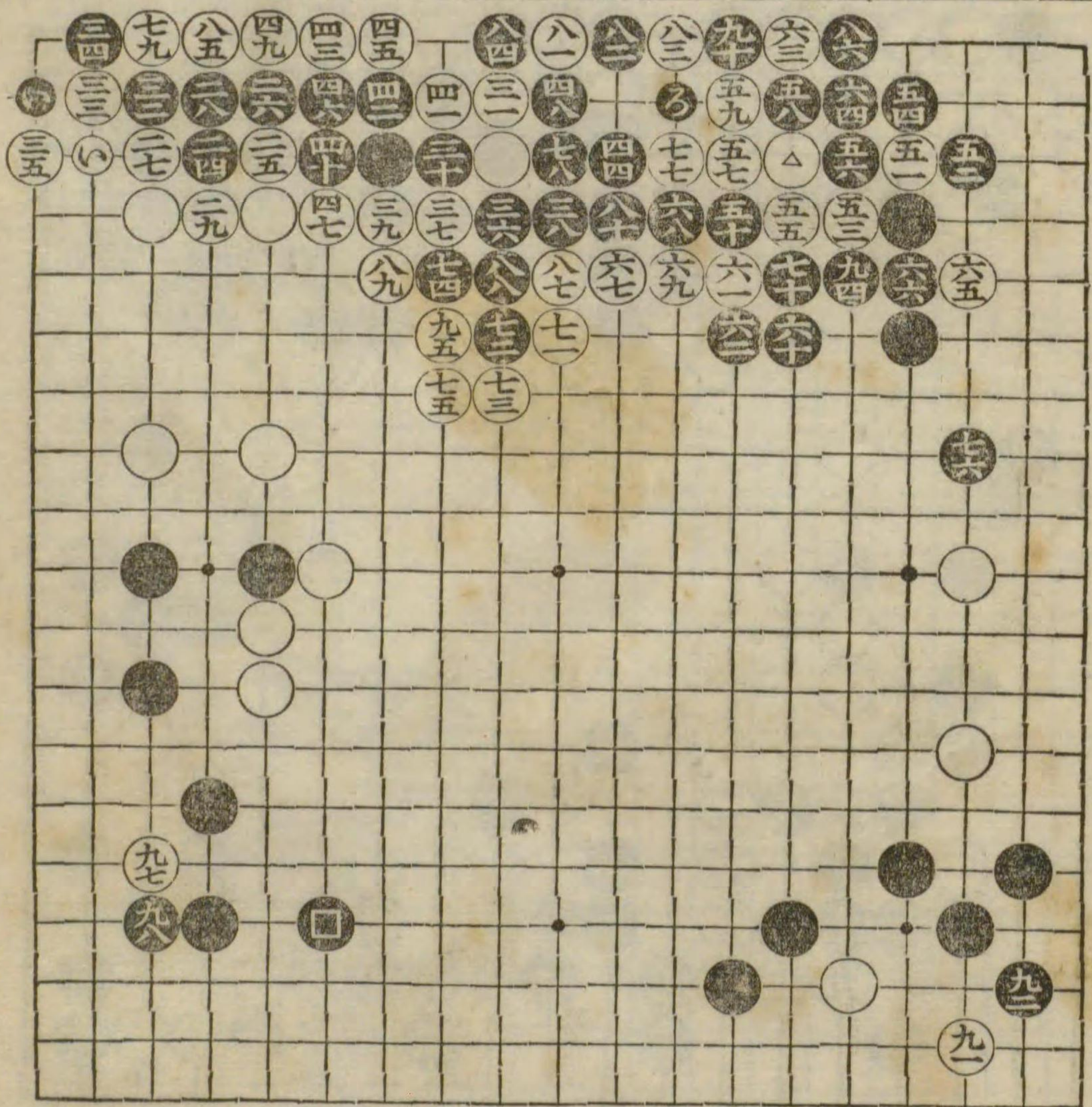
白五十七は無論六十四の點にアテ、打たねばならぬ、此の手を以つて敗着と見るの外はない、黒は七十四と膨んだのが甚だよろしくない、此の手を單に八十と粘いておけば劫にも何にもならなかつたのである。

(33)劫トル

(34)劫トル

(35)劫トル

(36)は第二百手



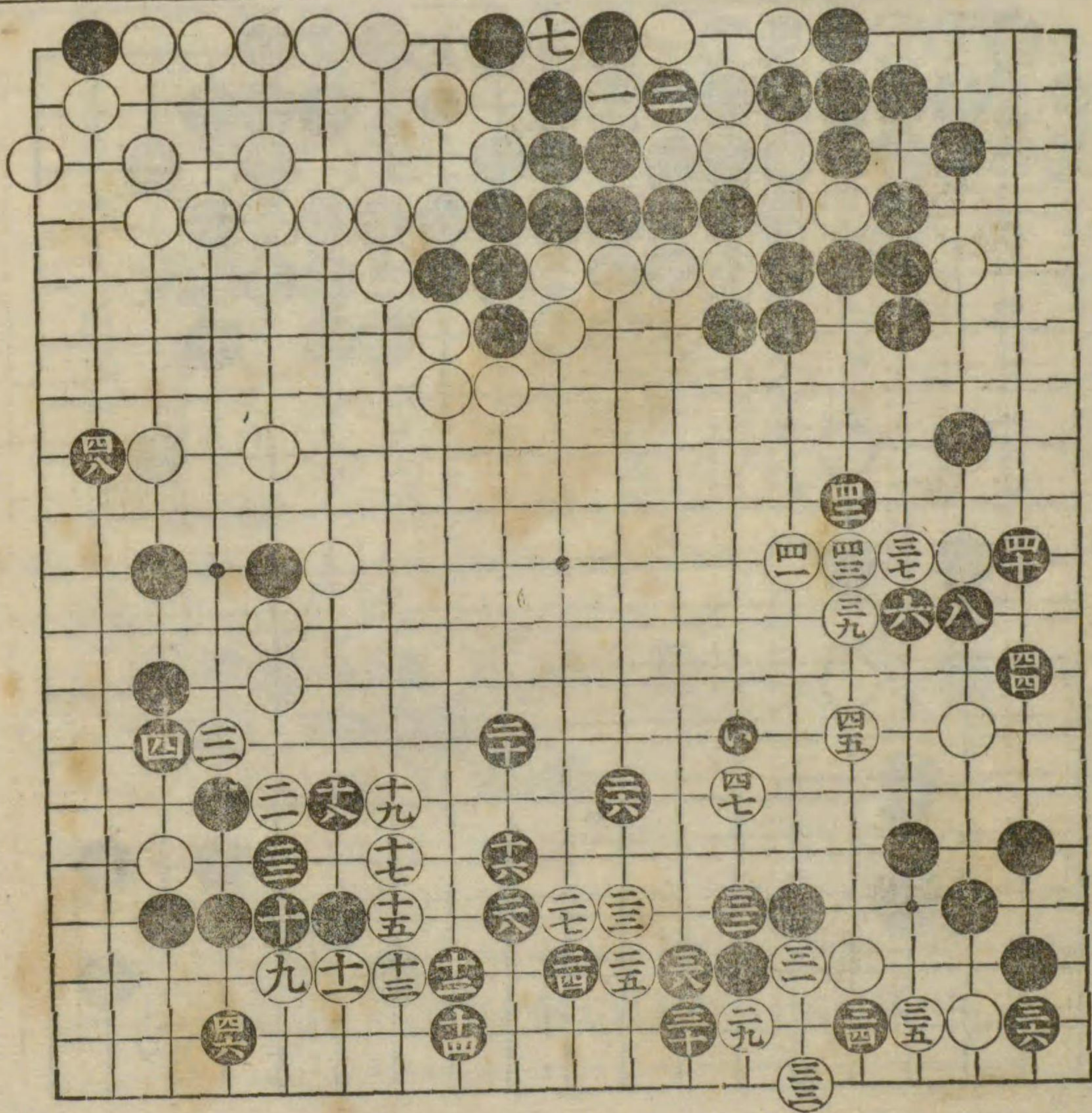
(棋番十)



「追加」是は勝敗の決した後の評  
 にはあるが、  
 黒二十二は不用の手である、此  
 の手で⑤の邊に一着を備へてお  
 けば白から二十三以下の様な種  
 々の策を弄して來られる患はな  
 いのであつた。

五 劫トル

定先より初まりて不幸四番負越  
 し終に先二の手合となりたる宮  
 阪氏も今又四番勝越（此の十番  
 棋以外の一局を加算す）の結果、  
 手合は定先に戻れり、  
 坊門のため其の健闘を望まざる  
 を得ず（絶）

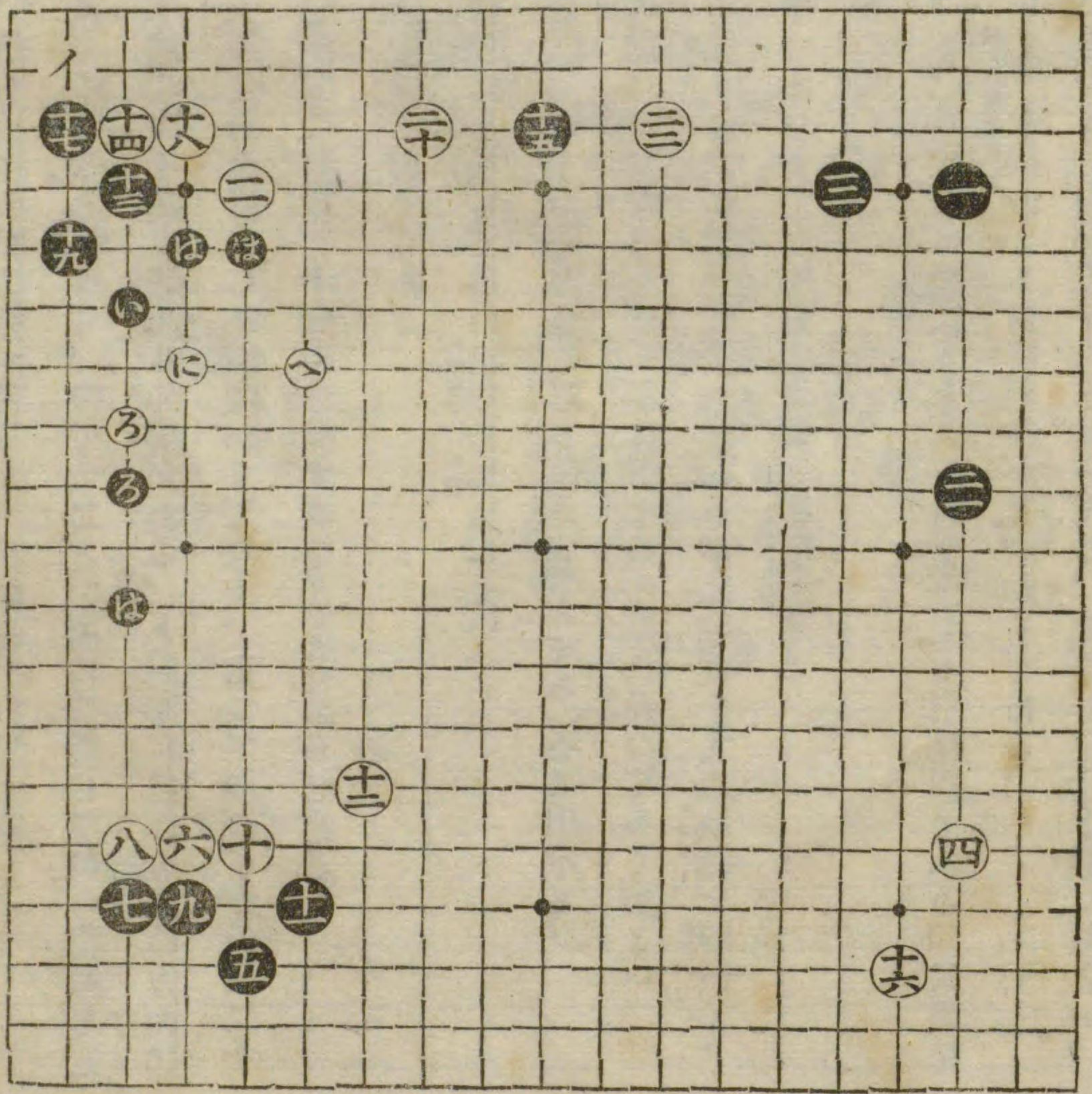


第拾局

二目勝 鈴木爲次郎(四段)  
 先 宮阪 栄二(三段)

黒十九は⑤と飛び、白隅より  
 (イ)と抑へなば、黒は⑥と二間  
 に拓く可く、若又白隅より抑へ  
 ずして左側より⑦と詰めなば、  
 黒は(イ)の點に下る可し。

黒二十一は⑧の點に打ち、白右  
 側二十一の點に來らば黒は左側  
 ⑨の點に打つ可し若又白⑩の點  
 に詰めなば黒は十一に打てよし  
 白二十二は⑪の點に迫り、黒を  
 ⑫と尖ませ、白⑬と尖み、黒⑭  
 の時、白は⑮と飛ぶ可く、然ら  
 ば左下十二の斜走と相待つて雄  
 大なる姿勢が出来る。



( 棋 番 十 )



黒二十九は此の場合に於ては小サイ。然らば何の點に打つ可きか、左側(九)が好點である。

「註」 何となれば左下方面に六、八、十と壁を築いて、次で十二と中原に飛躍した白の姿勢を完備せしむるが爲めには必らず左側中邊に白は兵を進めるの要がある、と同時に黒から此の方面に着手する事となれば、白をして雄大の姿勢を造らしめぬばかりでなく、由つて以つて左上に二十と打つて居る我が勢力と呼應して左側の覇權を十分に掌握する事となるからである。

白三十は前述の意味から見ても最も要領を得た着手である。

黒五十五は緩慢である、宜しく六十の點に接觸して白の眼形を奪ふがよい。

「註」 黒五十五を六十に打つておけば、七十六の點に截斷を試み(切とする)手も出来る。

黒五十五を六十に打ち、白が五十七の點に下つたならば、黒は五十六の點に曲つておくがよい。

「註」 黒五十五で六十、白五十七と運んで次に黒が五十六に曲る手は、九十九の缺點を覗いて、中央の黒の勢力を旺盛ならしむる手であつて、白は應手に窮する事となる。

白五十八の縛ねは無理である、(九)の邊に拓くがよい。

「註」 白自ら守る意味から言ふと、茲を手抜して黒に五十九と包まれても白は活である、又黒に迫る方から言ふと、此く堅固な黒の鋒を縛ねても何等の益がないからである。

黒六十五は悪手である、八十五の點に截つて、白が七十六と粘いだ時、先手で(イ)と打つがよい。

白六十八は六十九の點に縛ね、黒に一子を抜かして八十八と粘くがよい。

「註」 其の時黒八十五と截らば七十六と活きておけばよい

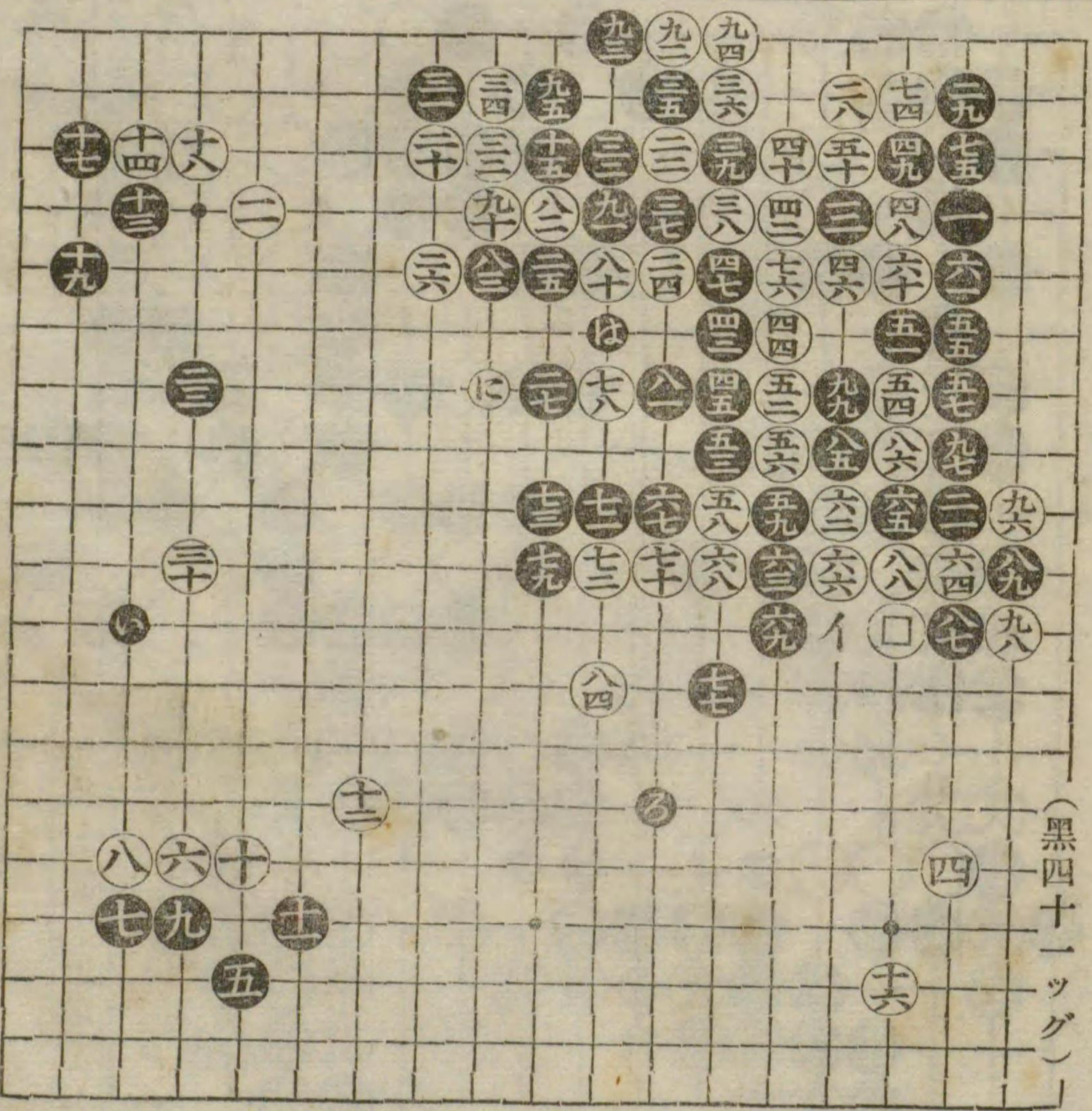
黒七十六は緩い、八十八の點に曲るがよい、其の際黒七十七に打たば白は八十四でよい。

白七十八は不用である、八十四と飛ぶがよい。

黒八十五は悪い(活のある石を截る要はない) (九)の點から中央の白を煽るがよい。

黒九十五は(九)と打つて白の二子を抱へておくがよい。

「註」 白に(九)の邊から色々牽制される惧がある。



(黒四十一ツグ)



202  
420

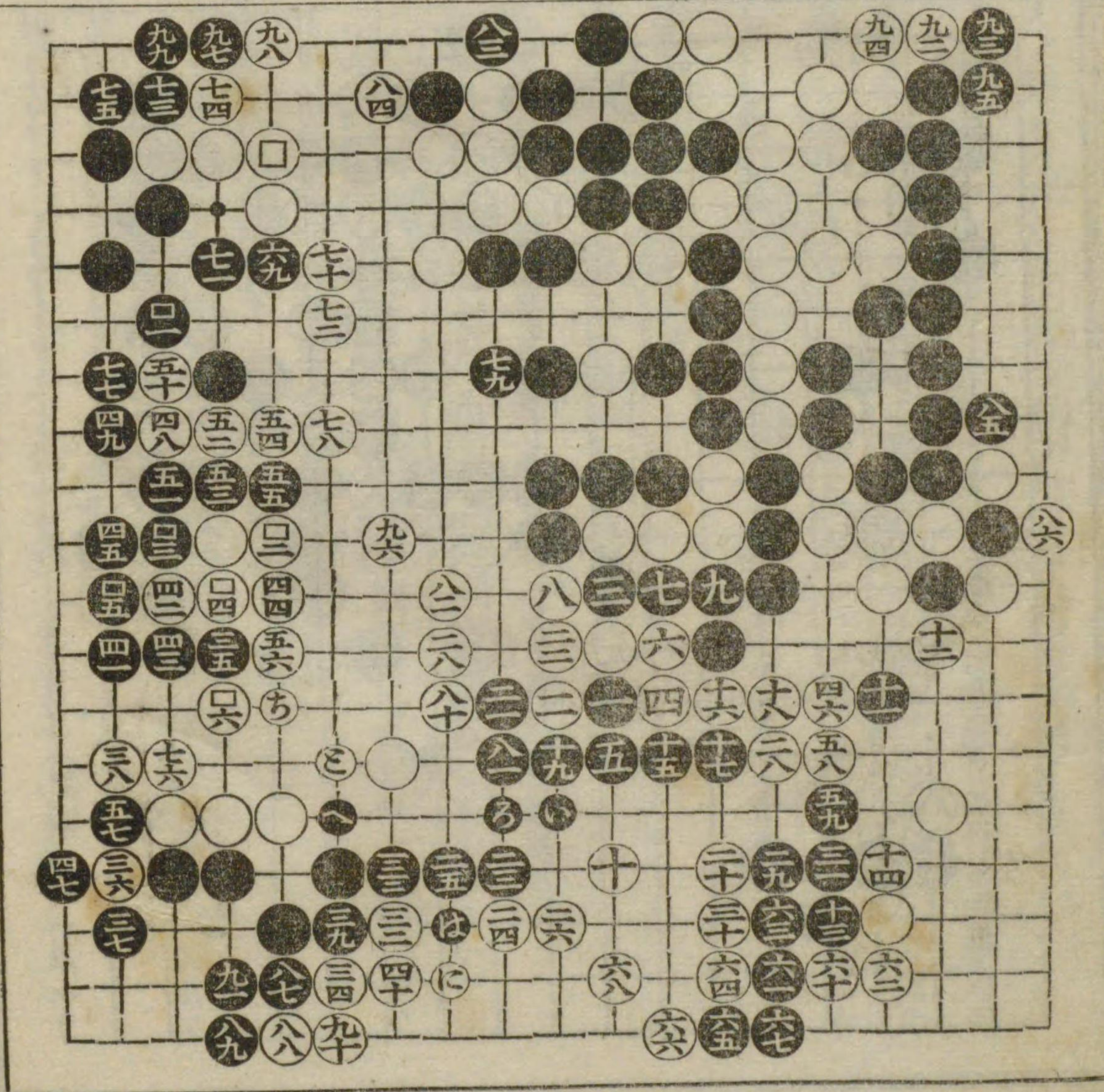
黒三と打ち白の四子を提つたのは甚だ悪い、單に四の點に引き、白が廿二に粘いだならば十九の點に縛ね、白八十一の時と下つてもと二段縛してもよい。

「註」 黒が三、七、九と打ち堅固な我が石に更に數目を加へるよりは、三の手で四と引き此の白を攻め立て、下側に利を計らば十分に勝算が立つたであらう。

黒八十九でと出、白に黒九十と打てば一目以上の利がある。

黒一の手でと出、白、黒六、白と運んだ後一と打てば二三目の利である。

大正四年夏 十番棋終





202  
420

央

中

會

會

精



